愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

土田遺跡

1987

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

正誤表

頁　行	誤	正
2　下6行	旧可道	旧河道
2　下2行	可道	河道
6　上5行	消平	削平
11上5行	旧可道	旧河道
13下11行	指適	指摘
22上1行	各時間	各時期
29上11行	14世期	14世紀
32上11行	～8）	～10）
40下9行	抑制済	抑制剤
46上5行	消略	省略
71注6）	春日市	春日井市
104 注8）	SX81	SX80
図版11	SZ01	SZ10

序　　文

名古屋環状２号線（一般国道302号）建設予定地に所在する土田遺跡は，昭和56年度から昭和61年度まで，６年間にわたって発掘調査を実施してまいりました。その結果特に中世期に関する重要な遺構・遺物が確認され，尾張平野における中世集落の基礎的資料を得ることができました。それは同時に五条川下流域にあたる当地の開発の嚆矢をなすものであり，私たちの祖先の事業・足跡を垣間見ることができたのであります。これらの歴史的遺産を今日に受け継いでゆくことは，私たちに課せられた重要な任務といえるのでありまして，本書は，その一助となることを主要な目的とするものであります。

発掘調査につきましては，各方面の方々に御配慮を賜わり，関係機関及び関係者の御指導と御協力をいただいたことに対し，厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和62年３月

財団法人愛知県埋蔵文化センター理事長

小　金　　潔

例　　言

1　本書は愛知県西春日井郡清洲町大字土田に所在する土田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は名古屋環状２号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として実施し，愛知県教育委員会を通じての委託事業として，昭和56年４月～60年３月までを財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が，昭和60年４月～61年５月までを財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。

3　調査に当たっては，次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課，愛知県清洲貝殻山貝塚資料館，清洲町教育委員会，建設省愛知国道工事事務所，日本道路公団名古屋建設局

4　報告書をまとめるにあたり次の方がたに御教示・御協力を賜った。
加藤安信，柴垣勇夫，岩野見司，宮石宗弘，藤澤良祐、中野晴久、江崎武，高橋信明，赤羽一郎，遠藤才文，斎藤孝正（敬称略）

5　注は各章ごとにまとめて章末に記載した。ただし第Ⅴ章は原則として各節末にまとめた。

6　本書は第Ⅴ章３を永金千佳，第Ⅴ章４を赤塚美智代が，その他は赤塚次郎が分担執筆した。

7　遺物整理は赤塚美智代，永金千佳，亀井けい子（以上調査補助員），及び牛田長子，小島洋子，柴山英子，杉山美智子，戸川真理，田中由紀子の諸氏の協力を得た。

8　編集は赤塚が担当した。

目　　次

第１章　調査概要 …… 1

第II章　層位と遺構 …… 6

第III章　遺　　物 …… 22

第IV章　自然科学的分析 …… 33

1　土器胎土重鉱物分析 …… 33

2　珪藻分析 …… 37

3　リン・カルシウム分析 …… 40

4　小　結 …… 42

第Ｖ章　考　　察 …… 44

1　土師器 …… 44

2　灰釉系陶器 …… 50

3　墨書陶器 …… 72

4　加工円盤 …… 77

5　遺構の変遷 …… 92

6　方形土壙 …… 98

7　まとめにかえて …… 106

別　表 …… 111

図 版 目 次

1 主要遺構と周辺地図
2 遺構図 (1)
3 遺構図 (2)
4 遺構図 (3)
5 遺構図 (4)
6 実測図 (1) 弥生土器
7 実測図 (2) 弥生土器
8 実測図 (3) 弥生土器
9 実測図 (4) 弥生土器
10 実測図 (5) 弥生土器
11 実測図 (6) 須恵器他
12 実測図 (7) SK05 SE07
13 実測図 (8) SE01 SE02 SE03
14 実測図 (9) SE05 SE14 SE08
15 実測図 (10) SE11
16 実測図 (11) SK24
17 実測図 (12) SD55 SD61
18 実測図 (13) SE16 SK45
19 実測図 (14) SE20
20 実測図 (15) SE12 SB01 SK75 SX81 SX85 SK44
21 実測図 (16) SE10
22 実測図 (17) SK31 SK67 SD64 SD68 SK63
23 実測図 (18) SD64 SE21
24 実測図 (19) SD27
25 実測図 (20) SD27
26 実測図 (21) SD41
27 実測図 (22) SD41
28 実測図 (23) SD42
29 実測図 (24) SD42
30 実測図 (25) SX80 SX55 SX06 SX21 SX159 SX90 SX44
31 土田遺跡基本器種の変遷
32 61調査区
33 60C・60E区
34 59A区
35 59BC区
36 59E区
37 59F区
38 59D・59HⅠ・59K区
39 墳丘墓
40 井戸
41 方形土壙
42 弥生土器 (1)
43 弥生土器 (2)
44 弥生土器 (3)
45 須恵器・灰釉系陶器
46 灰釉系陶器 (1)
47 灰釉系陶器 (2)
48 灰釉系陶器 (3) 土師器
49 灰釉系陶器 (4)
50 灰釉系陶器 (5) 施釉陶器
51 製作技法
52 墨書陶器
53 加工円盤 (1)
54 加工円盤 (2)
55 加工円盤 (3)
56 加工円盤 (4) その他の遺物

挿 図 目 次

第１図　調査区位置図……３
第２図　地形復原図……４
第３図　土層図……６
第４図　墳丘墓配置図……８
第５図　SD42断面図……11
第６図　井戸実測図１……14
第７図　井戸実測図２……15
第８図　SK63断面図……16
第９図　SX49・50実測図……18
第10図　SX41断面図……18
第11図　Ｂ期主要遺構配置図……19
第12図　土器分類（Ａ期）……23
第13図　土器出土地点……25
第14図　土器の種類……26
第15図　陶器の種類……27
第16図　瓦・銭貨等出土地点……31
第17図　銭貨拓影……31
第18図　瓦・土錘・碁石……31
第19図　重鉱物組成……35
第20図　方形土壙試料
　　リン・カルシウム含量……41
第21図　土器実測図……48
第22図　土器変遷図……49
第23図　椀・皿の変化……54・55
第24図　法量別形態の比率（第Ⅰ期）……57
第25図　法量別形態の比率（第Ⅱ期）……58
第26図　法量別形態の比率（第Ⅲ期）……59
第27図　法量別形態の比率（第Ⅳ期）……61
第28図　器種別比率……62
第29図　椀・皿の法量……63
第30図　椀・皿底部拓影……67
第31図　数字を表わす墨書陶器……72
第32図　墨書陶器出土地点……73
第33図　文字・その他を表わす
　　墨書陶器……73
第34図　加工円盤法量（前期）……78
第35図　加工円盤法量（後期）……78
第36図　加工円盤分布図（前期）……79
第37図　加工円盤(1)……83
第38図　加工円盤(2)……85
第39図　加工円盤(3)……87
第40図　加工円盤(4)……89
第41図　加工円盤(5)・陶丸……91
第42図　Ａ期遺構変遷図……93
等43図　Ｂ期遺構変遷図……96
第44図　長軸の方位……99
第45図　規模分布と分類……100
第46図　土壙分布……105

表　目　次

第１表　調査進行表……1
第２表　主要遺構時期区分……21
第３表　重鉱物組成……34
第４表　胎土分析試料……36
第５表　珪藻分析結果……38
第６表　珪藻化石群集変遷……39
第７表　リン・カルシウム分析結果……41
第８表　鍋Ａ分類……45
第９表　計測値……45
第10表　皿の法量……47
第11表　皿の分類……47
第12表　編年対比……51
第13表　椀・皿個体数とその比率……63
第14表　釜の分類……67
第15表　鉢の分類……68
第16表　壺の分類……68
第17表　時期・内容別出土数……73
第18表　分類別変化……81
第19表　加工円盤一覧表(1)……82
第20表　加工円盤一覧表(2)……84
第21表　加工円盤一覧表(3)……86
第22表　加工円盤一覧表(4)……88
第23表　加工円盤・陶丸一覧表(5)……90
第24表　主要遺構存続期間……94
第25表　土壙の重複関係（重複区）……102
第26表　方形土壙出土遺物……103
第27表　器種構成表……107

調　査　体　制

職名等は当時のものを用いた。

昭和56年度

(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長	丹羽　功								
庶務補佐	水谷　良夫								
発掘調査所長	高澤　茂樹								
主　査	松原　広治								
主　事	松田　定次	菅沼真四郎		榊原　芳久		樅山　昌宏		中村　美規	
	田中　信夫	服部　良夫		竹島　真澄		片山　正己		石黒　立人	
	赤塚　次郎								

〈調査指導委員〉澄田　正一（愛知学院大学教授）　井関弘太郎（名古屋大学教授）
大参　義一（信州大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）
〈特別指導員〉立松　彰（東海市平洲記念館学芸員）

昭和57年度

㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長　丹羽　功
庶務補佐　水谷　良夫
発掘調査所長　高澤　茂樹
主　査　松原　広治
主　事　松田　定次　菅沼真四郎　遠藤　才文　中村　美規　田中　信夫
服部　良夫　竹島　真澄　片山　正己　福岡　晃彦　石黒　立人
赤塚　次郎
〈調査指導委員〉澄田　正一（愛知学院大学教授）　井関弘太郎（名古屋大学教授）
大参　義一（信州大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）
〈特別指導員〉立松　彰（東海市平洲記念館学芸員）

昭和58年度

㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長　中林　茂
庶務補佐　水谷　良夫
発掘調査所長　高澤　茂樹
主　査　稲垣　隆一
主　事　松田　定次　伊藤　義幸　遠藤　才文　中村　美規　田中　信夫
服部　良夫　金原　宏　上部　肇　福岡　晃彦　石黒　立人
赤塚　次郎
〈調査指導委員〉澄田　正一（愛知学院大学教授）　井関弘太郎（名古屋大学教授）
大参　義一（信州大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）
〈特別指導員〉立松　彰（東海市平洲記念館学芸員）

昭和59年度

㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長　中林　茂
調査所長　橋本　雅司
主　事　遠藤　才文　竹内　尚武　清水雷太郎　福岡　晃彦　金原　宏
上部　肇　梅村　清春　梅本　博志　佐藤　公保　石黒　立人
赤塚　次郎
嘱　託　小澤　一弘　丹羽　博　服部　哲也　安藤　義弘　宮腰　健司
長島　広
〈調査指導委員〉澄田　正一（愛知学院大学教授）　井関弘太郎（名古屋大学教授）
大参　義一（信州大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）
〈特別指導員〉立松　彰（東海市平洲記念館学芸員）
管理課長　斎藤　樹三
主　査　稲垣　隆一
主　事　伊藤　義幸　森　信孔

昭和60年度

㈶愛知県埋蔵文化財センター

〈理 事 長〉奥田　信之（県教育長）

〈常務理事〉中林　　茂（兼事務局長）

〈理　　事〉井関弘太郎（名古屋大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）

大参　義一（信州大学教授）　坪井　清足（奈良国立文化財研究所長）

楢崎　彰一（名古屋大学教授）　三浦　小春（光陵女子短期大学教授）

花木　蔦雄（都市教育長協議会会長）　伊藤　　芳（町村教育長協議会会長）

大橋　雄六（県土木部長）　小島　俊夫（県教育委員会社会教育部長）

林　　正治（清洲貝殻山貝塚資料館長）　鈴木　睦美（県陶磁資料館副館長）

〈監　　事〉本田　辰郎（県出納事務局次長）　田中　隆三（県教育委員会総務課長）

〈専門委員〉考古学　楢崎　彰一（名古屋大学教授）　文献史学　早川　庄八（名古屋大学教授）

地理学　井関弘太郎（名古屋大学教授）　建築史学　浅野　　清（愛知工業大学教授）

動・植物学　渡辺　　誠（名古屋大学助教授）形質人類学　池田　次郎（京都大学教授）

保存科学　江本　義理（東京国立文化財研究所保存科学部長）

〈調査課〉	課　長	橋本　雅司	課長兼主査補佐	遠藤　才文	主　事	鷲野　勉
	主　事	佐藤　公保	嘱　託	丹羽　博	嘱　託	安藤　義弘
	主　査	金原　宏	主　事	石黒　立人	主　査	竹内　尚武
	主　事	小澤　一弘	主　事	梅本　博志	嘱　託	松原　隆治
	嘱　託	長島　広	課長兼主査補佐	清水雷太郎	主　事	平野　清
	主　事	細野　正俊	主　事	赤塚　次郎		
	嘱　託	松田　訓（10月1日採用）		服部　哲也（9月17日退職）		
	主　査	梅村　清春	主　事	山田　耕治	主　事	宮腰　健司
	主　事	池本　正明				
	嘱　託	中野　良法（10月1日採用）		竹内　宇哲（9月17日退職）		
	主　査	上部　肇	主　事	浅井　和宏	主　事	酒井　俊彦
〈管理課〉	課　長	斎藤　樹三	主　査	稲垣　隆一	主　事	伊藤　義幸
	主　事	森　信孔	主　事	小倉　晴美		

昭和61年度

㈶愛知県埋蔵文化財センター

〈理 事 長〉小金　　潔（県教育長）

〈常務理事〉中林　　茂（兼事務局長）

〈理　　事〉井関弘太郎（名古屋大学教授）　伊藤　秋男（南山大学教授）

大参　義一（信州大学教授）　坪井　清足（㈶大阪文化財センター理事長）

楢崎　彰一（名古屋大学教授）　三浦　小春（中日新聞嘱託）

花木　蔦雄（都市教育長協議会会長）

伊藤　　芳（町村教育長協議会会長）6月30日辞任

栗木　茂一（町村教育長協議会会長）7月1日就任・11月30日辞任

大溪　紀雄（町村教育長協議会会長）12月1日就任

大橋　雄六（県土木部長）　中神　秀雄（県教育委員会社会教育部長）

林　　正治（清洲貝殻山貝塚資料館長）　日下　英之（県陶磁資料館館長）

〈監　　事〉石原　坂男（県出納事務局次長）　田中　隆三（県教育委員会総務課長）

〈専門委員〉考古学　楢崎　彰一（名古屋大学教授）　文献史学　早川　庄八（名古屋大学教授）
地理学　井関弘太郎（名古屋大学教授）　建築史学　浅野　清（愛知工業大学教授）
動・植物学　渡辺　誠（名古屋大学助教授）木材組織学　木方　洋二（名古屋大学教授）
形質人類学　池田　次郎（岡山理科大学教授）
保存科学　江本　義理（東京国立文化財研究所保存科学部長）
岩石学　諏訪　兼位（名古屋大学教授）

〈調査課〉	課長	橋本　雅司	課長兼主査	竹内　尚武	主事	浅井　和宏
	嘱託	菅沼　良則	主査	梅本　博志	主事	小澤　一弘
	主事	水谷　朋和	主事	細野　正俊	嘱託	中野　良法
	主査	山田　耕治	主事	平田　睦美	主事	酒井　俊彦
	主事	池本　正明	嘱託	長島　広	課長補佐兼主査	清水雷太郎
	主事	赤塚　次郎	嘱託	松原　隆治	主査	鷲野　勉
	主事	土屋　利男	主事	石黒　立人	主事	佐藤　公保
	嘱託	丹羽　博	主査	梅村　清春	主事	平野　清
	主事	宮腰　健司	嘱託	松田　訓		
〈管理課〉	課長	斎藤　樹三	主査	青山　光一	主事	森　信孔
	主事	田上　堅三	主事	小倉　晴美		

土田遺跡　調査区別担当者

年度	調査区	担当者	年度	調査区	担当者
56	A	中村美規・竹島真澄・石黒立人・赤塚次郎	59	A	石黒立人・安藤義弘
	B	田中信夫・赤塚次郎		B・C	赤塚次郎
	C	石黒立人・竹島真澄		D	上部　肇
	D	石黒立人		E	上部　肇
	E	田中信夫・赤塚次郎		F	上部　肇
	F	石黒立人		G	小澤一弘・丹羽　博
	G	石黒立人		H・I	服部哲也・佐藤公保
57	A	遠藤才文・服部良夫・片山正巳		J	金原　宏
	B	遠藤才文・服部良夫・片山正巳		K(M・N)	丹羽　博・小澤一弘
	C	遠藤才文・服部良夫・片山正巳		L	佐藤公保・服部哲也
	D	遠藤才文・服部良夫・片山正巳		O	竹内尚武・清水雷太郎
58	A	遠藤才文・服部良夫・金原　宏		P	竹内尚武・清水雷太郎
	B	遠藤才文・服部良夫・金原　宏	60	C	清水雷太郎・服部哲也
	C	遠藤才文・服部良夫・金原　宏		D	竹内尚武・平野　清
	D	遠藤才文・服部良夫・金原　宏		E	金原　宏
	E	遠藤才文	61		山田耕治・平田睦美・池本正明

参考文献

「土田遺跡」『環状2号線関係発掘調査中間概報』　㈶愛知県教育サービスセンター　1982
『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団　1982
『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団　1983
「土田遺跡」『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』　㈶愛知県教育サービスセンター　1984
「土田遺跡II」『埋蔵文化財発掘調査年報III』　㈶愛知県教育サービスセンター　1985
『土田遺跡範囲確認試掘調査』　土田遺跡等試掘調査会　1986
「土田・廻間遺跡」『年報昭和60年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター　1986

土田遺跡位置図　1／100,000

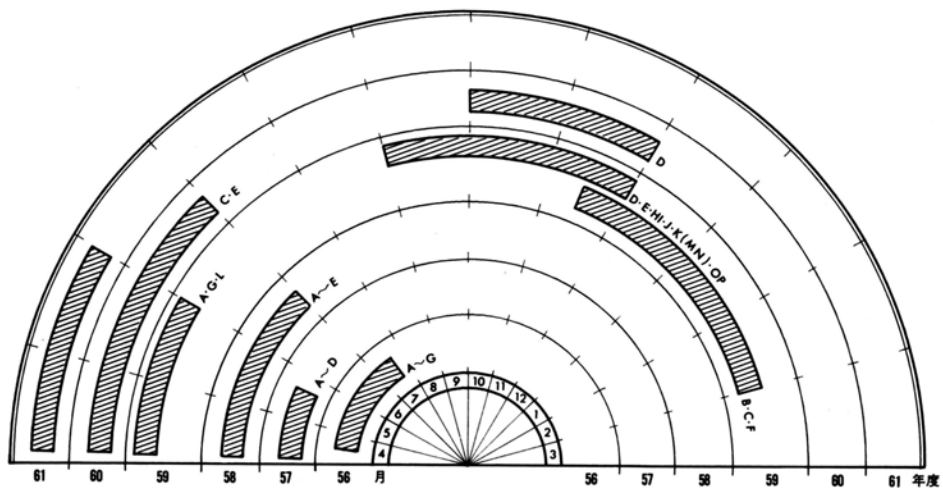
第Ⅰ章　調　査　概　要

経　　緯

土田遺跡は（遺跡番号21005[1]北緯35°13′　東経136°50′）愛知県西春日井郡清洲町大字土田字九反田，小松野，角田，五反地，江之相，丁長にかけて存在する。昭和56年度，中世陶器の散布地としてその存在が確認され，同時に名古屋環状２号線建設に伴う事前調査として発掘調査が開始された。昭和56年度より昭和59年度までは財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部により土田遺跡の発掘調査が実施されたが，昭和60年度にいたり，これらの事業が財団法人愛知県埋蔵文化財センターに継承され，昭和61年度の調査をもって建設予定地内の全調査が終了した。その間，朝日遺跡群発掘調査団[2]，土田遺跡等試掘調査会[3]による発掘調査が進み，その成果を加えることができた。現在土田遺跡の性格とその範囲をほぼ確定しえる状況に致っている。

なお発掘調査の進行に伴い，逐次現地説明会・展示会を開催し，作業員，地元住民に調査への御理解と御協力をお願いするとともに，埋蔵文化財保護の啓発・普及に努めた。

第１表　調査進行表



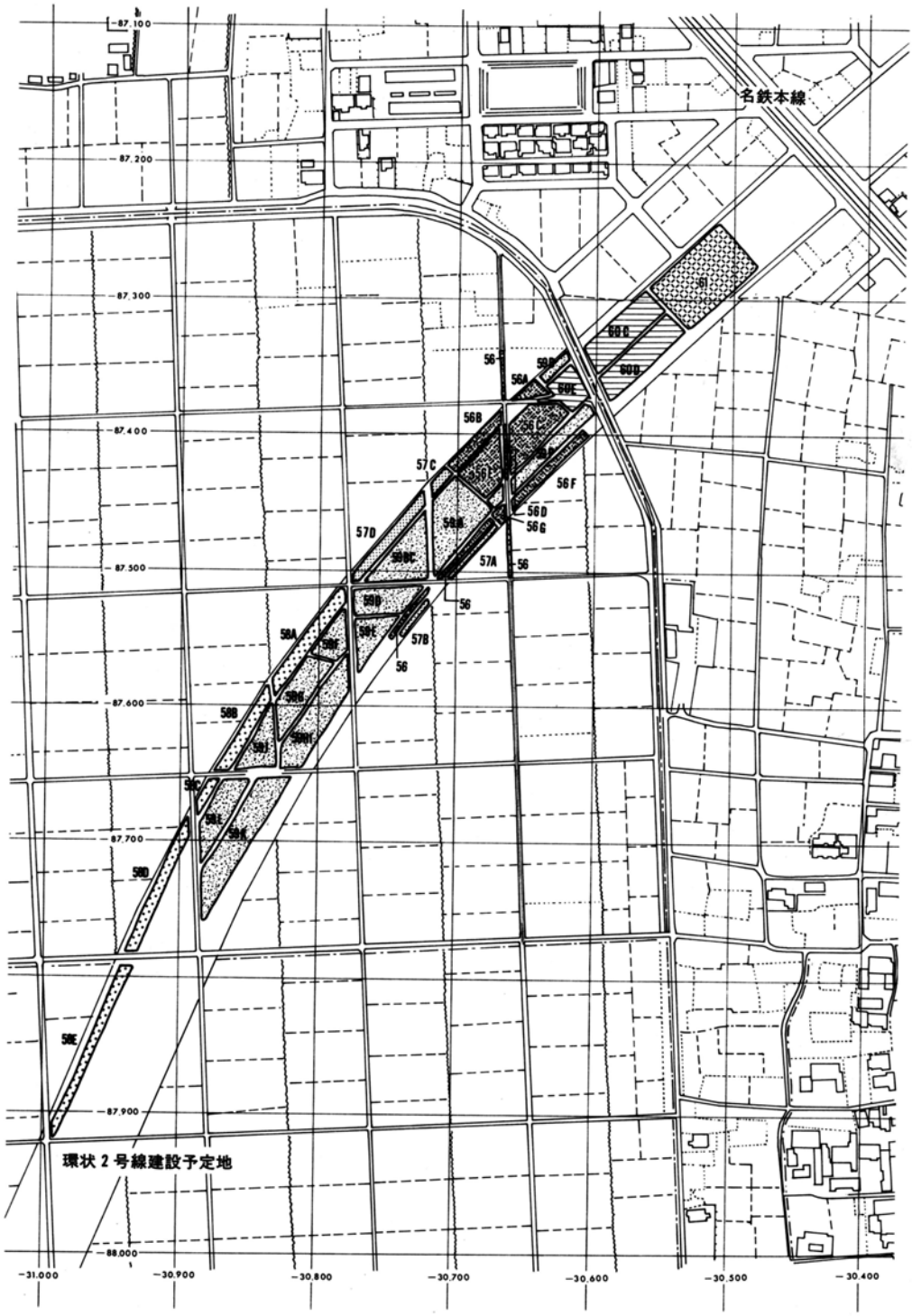
調 査 の 概 略

6年間にわたる土田遺跡の調査成果は，すでに㈶愛知県教育サービスセンター中間概報[4]，年報II[5]，III[6]で各々の調査区についての概要は報告されている。また各調査団（会）の概報[7]も同様に公表されており，土田遺跡の概略はこれらにより把握することができる。これらを綜合すると土田遺跡とは弥生時代末～古墳時代にかけての墳丘墓を中核とする「墓域」形成期と，平安時代末～室町時代にかけての中世期を中心とする集落遺跡とに区分される内容をもち，特に後者の遺構，遺物が主体的な位置を占める。発掘調査は56年度7調査区，57年度4調査区，58年度5調査区，59年度10調査区，60年度4調査区，61年度1調査区を設定し，特に59年度の調査によってほぼ土田遺跡の全体像を把握する基礎的な資料を得ることができた。

遺跡の周辺は現在海抜3・4mの水田耕作地となっており，耕作の関係から調査は4・5月と10月以降に集中して行うことになった。また当地は「旧空港跡地」でその建設のおり包含層を含めて「島畑」状の高まりは大きく削平をうけている。したがって，遺構の残存状況は悪く，検出しえた遺構のほとんどが溝，井戸といったものに限定される。加えて検出面が砂層あるいはシルト層といった軟弱層であり，かつ湧水対策とあいまって56，57年度の調査は遺構検出作業に不安定な部分が認られた。しかし当初予想もつかなかった弥生時代の墳丘墓の発見は，その後土田遺跡の性格と大きくかかわりをもつとともに，遺跡としての広がりを問題としていく中で「廻間遺跡」[8]の発見に連続していったのである。

環　　境

土田遺跡は現在海抜3・4mの濃尾平野低湿地に所属し，五条川下流域の自然提防帯に展開する微高地上に立地している。第2図は古墳時代初頭における周辺地形を発掘調査の成果及び地籍図を基に復原した旧地形であり，これに基づけば五条川は現在よりさらに西側を南流し，その東には湿地帯を形成していたものと思われる。五条川西側では自然提防状の高まりが東西方向に展開し，やや複雑な地形を形成していたものと推測できる。土田遺跡は流路のさだまらない五条川，あるいはその支流の旧可道及びその微高地上に立地しており，現状では第2図のごとく南北に細長い微高地上に存在する。その周辺には弥生時代末～古墳時代前期の集落遺跡である廻間遺跡が存在するが，当遺跡とは湿地帯をはさんで対峙する関係となる。廻間遺跡の北には東西にのびる埋積浅谷が存在し，これにより大きく分断され可道をはさんで北側には弥生時代中期の集落遺跡と考えられる松の木遺跡が立地する微高地が東西に展開している。古代末期になると微高地以外の部分が水没し，帯

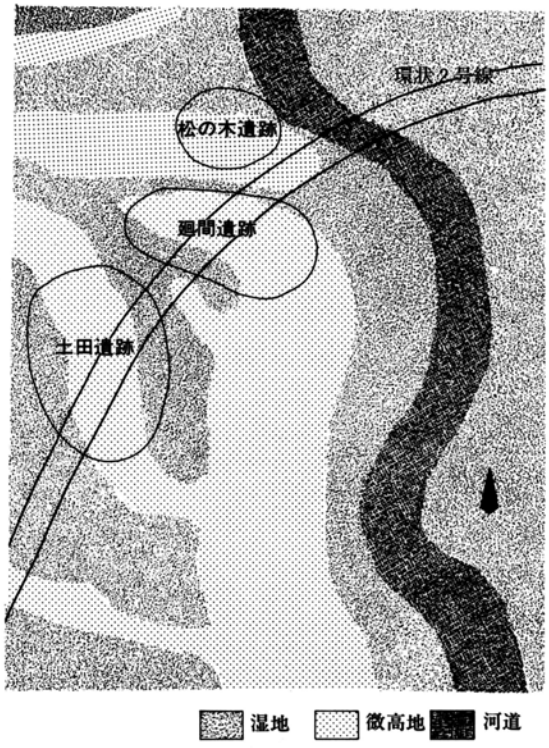

名鉄本線
環状２号線建設予定地
-87,100
-87,200
-87,300
-87,400
-87,500
-87,600
-87,700
-87,900
-88,000
-31,000
-30,900
-30,800
-30,700
-30,600
-30,500
-30,400
56
57
58
59
60
61

第１図　調査区位置図

水が長く続く状況が出現した。そして粘土が安定して堆積する止水的環境下の基で土田遺跡東西の湿地帯がしだいに埋めたてられてゆく。こうした中で凹凸した当地の環境がほぼ現在の地形的状況に近づくとともに，土田遺跡と廻間遺跡の間の窪地が完全に埋没する。

古代末期の堆積環境の変化は，同時に五条川水系での大規模な自然提防の発達をもたらしている。例えば五条川本流の東への移動とともに東側の自然提防の形成もさかんに行われ，その一端を朝日西遺跡の調査で確認することができた[9]。また五条川西岸の微高地は安定した陸路として開発され，古代末～中世期にかけての主要道路として発達していったものと推定できる[10]。

土田遺跡は16世紀をまたず消失している。それはおそらく当地での大規模再開発「清洲城下町」形成と大きくかかわりをもつものと推定され，遺跡の北西端はまさに清洲城外郭と近接する。この激動する戦国時代を経て当調査区は田畑化が進行した。そして近代の「空港」建設の後，現在の水田地帯と変貌していったのである。



第2図　地形復原図（古墳時代）

［注］

1）『愛知県遺跡分布図(1)尾張地区』愛知県教育委員会1986

2）『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団1982
『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団1983

3）『土田遺跡範囲確認試掘調査』土田遺跡等試掘調査会1986

4）「土田遺跡」（『環状２号線関係発掘調査中間概報Ⅰ』財団法人愛知県教育サービスセンター1982）

5）「土田遺跡」（『環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』財団法人愛知県教育サービスセンター1984）

6）「土田遺跡II」（『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター1985）

7）注(2)・(3)に同じ

8）「土田・廻間遺跡」（『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化センター1986）

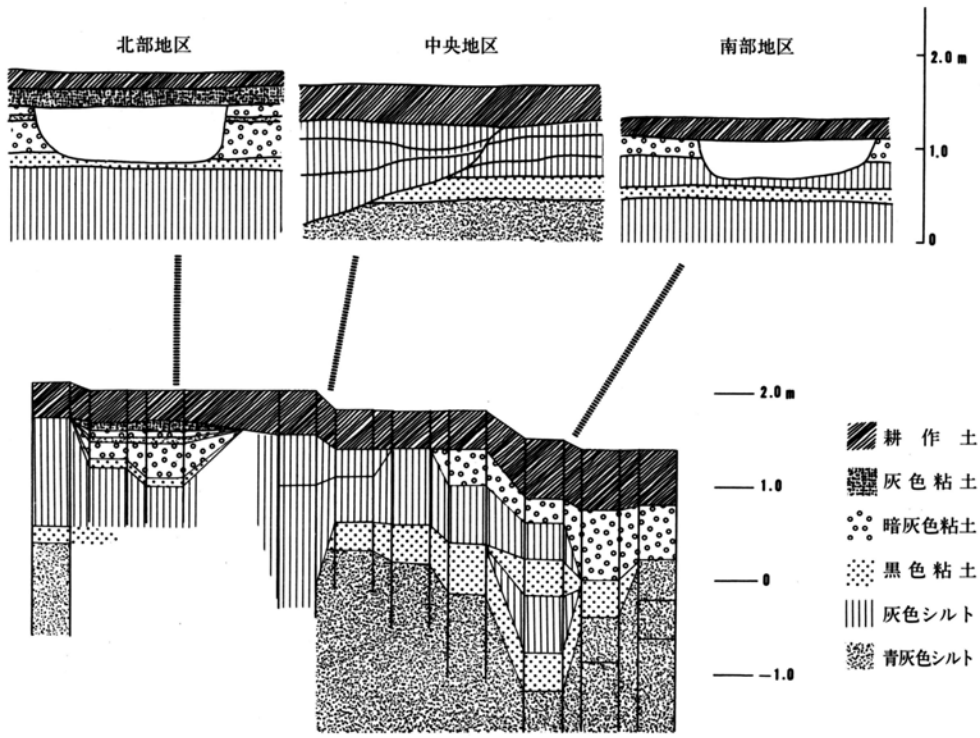
9）「朝日西遺跡II」（『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター1985）

10）所謂「鎌倉街道」については，中世期には萱津から「土田村」八幡社が立地する微高地上を経由し国府に至る陸路を推定できよう。

第II章　層位と遺構

層　　位

調査当時の地表は，61年度調査区（第１図）標高2.0～1.8m，59K区で1.2～1.0mを測り，現状では南にわずかに傾斜する地形が認められる。土壌堆積は低湿地における河川氾濫原特有の不連続な状況が見られ、当地では基盤層の起伏に加えて旧河道が複雑に錯綜しており、安定し連続する水平堆積層が見い出しにくい。したがって検出面の土壌は地点によりまったく異なっている。また前述のごとく後世の消平により包含層が消失し，現在の耕作土・床土の下位が基本的な遺構検出面となる。調査区は旧地形復原に基づき、凡そ３つの地区に区別しうる。61年度調査区及び60年度Ｃ，Ｄ，Ｅ区さらに56年度Ａ，Ｃ，Ｄ区を中心とする北部地区。56年度Ｅ区，59年度Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ区の中央地区。59年度Ｆ区以南の南部地区と３分割し，以下各々についての層位を概説する。



第３図　土　層　図

北部地区　基本層序は上位から第Ⅰ層耕土層，第Ⅱ層灰色粘土層，第Ⅲ層淡褐色粘土層，第Ⅳ層暗褐色粘質土層，第Ⅴ層暗灰色粘土層，第Ⅵ層黒色粘土層，第Ⅶ層青灰色シルト層と堆積する。第Ⅰ層は現代の耕作土で近世後半期の遺物も出土し，江戸時代から現代にいたる土層と考えられる。第Ⅱ層は中世期の遺物が包含され，遺構はこの層内より掘削される。第Ⅲ層～第Ⅴ層は基本的に遺物・遺構が認められないが近接する廻間遺跡の状況から第Ⅵ層は奈良，平安時代の層と確認しえる。同様に第Ⅵ層の黒色粘土層は弥生時代末～古墳時代前半の堆積と推測できる。北部地区は前述のごとく廻間遺跡と土田遺跡の間に存在する窪地状の地形であり，その窪地を埋めるごとく止水的環境下で粘土層が古代を通じ堆積していったことが想定でき，その間一時湿原あるいは干潟状の環境が出現し，それが第Ⅵ層を形成したものと考える。中世期にはこの窪地がほぼ埋めつくされ，その後遺構（主に土壙）が掘削されたことが観察できる。

中央地区　基本層序は上位から第Ⅰ層耕土層，第Ⅱ層砂層あるいは砂質の強いシルト層が堆積する。中央地区は前述のごとき微高地上に立地し，その後削平が進行したため，砂層に掘削された遺構として弥生時代末期の墳丘墓と，中世期の溝，井戸が同一検出面で捉えられる状況となっている。第３図上位中央の断面図から微高地が旧河道と大きく関係があり，その形成が河道及びその西側に氾濫した砂質層により産み出された高まりであることが推察される。複雑に錯綜する砂層・シルト層の下部は灰色粘土（第Ⅳ層），黒色粘土（第Ⅴ層），青灰色シルト（第Ⅵ層）が堆積する。灰色粘土（第Ⅳ層）より弥生後期の遺物が出土し，第Ⅴ層の堆積は弥生中期を中心とするものと考えられる。したがって微高地を形成した旧河道の埋没は弥生時代中期末～後期を中心とし，弥生時代末期にはその上部に墳丘墓が造営されたことになる。

南部地区　基本的には第Ⅰ層耕土層，第Ⅱ層淡黄灰色シルト層，第Ⅲ層灰色シルト層，第Ⅳ層黒色粘土層と堆積する。第Ⅱ・Ⅲ層は河川の氾濫による砂混入シルト層で中世期の遺構は第Ⅱ層上位から掘削されている。

以上まとめてみると中央地区下部の弥生時代中･後期の基盤層（上部砂層[1)]）の起伏に河道が形成され，その大規模な氾濫と砂層の堆積が中央地区の微高地を形成すると同時に東・西の窪地あるいは湿地帯を形作っていったものと推定できる。

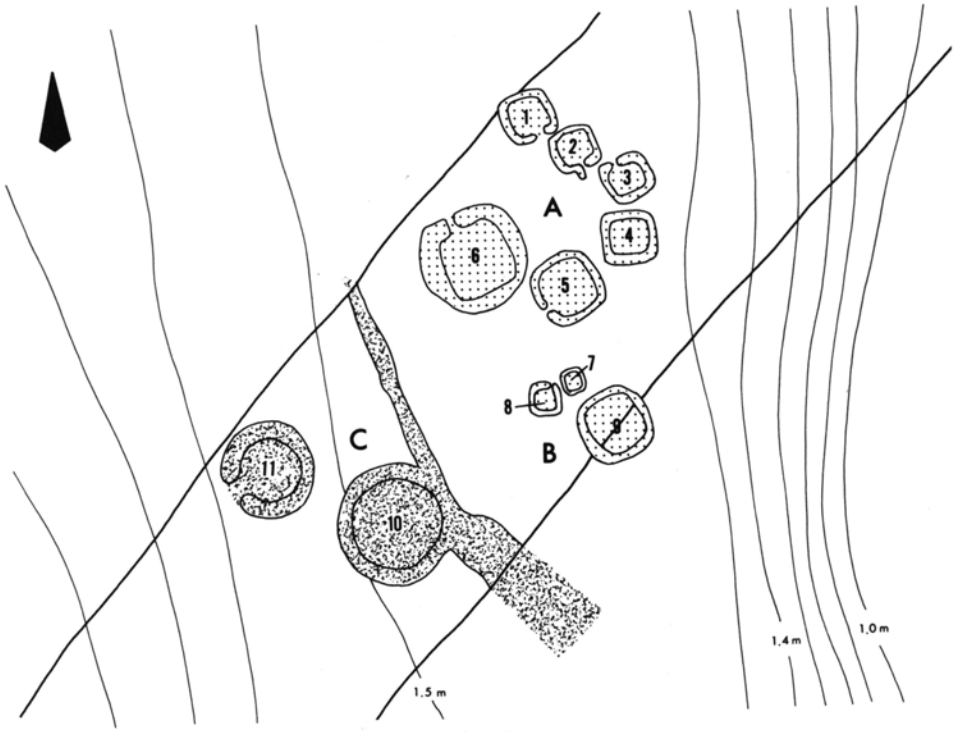
遺　　構

土田遺跡より検出しえた遺構は大きく２つの時期に区分することができる。一つは弥生時代末期～古墳時代，今一つは平安時代後期～室町時代である。前者はＡ期，後者をＢ期として以下記述する。その他の遺構として奈良・平安時代及び江戸時代以降のものが認められるが，これらは後に一括して略述する。

ここでは各主要遺構を各々記述することに留め，時期別の変遷等は第Ⅴ章で改めて後述する。

弥生時代末期～古墳時代（Ａ期）

中央地区微高地上で検出できた遺構群で，墳丘墓（ＳＺ）を中心とし，墓域を形成している。これらは後世の開墾，耕作により著しく削平をうけ，周溝のみしか検出できえていない。墳丘墓群はＡ・Ｂ・Ｃの３つのブロックに区分できる。（第４図）Ａ・Ｂ群は「欠山期」（弥生時代末期），Ｃ群は６世紀中葉を中心とする築造であり，２つの時期に細分できる。墳丘墓11墓，土坑４基，溝１条が所属する。



第４図　墳丘墓配置図

SZ01　56B区中央で検出。9×10m，溝幅1.3～1.6m，深0.15～0.2mを測る。南溝のほぼ中央に開口部を持つ。壺2点（4，7）溝内（西・東溝）より出土。

SZ02　56E区。9.5×9mの方形部から南に西溝が複雑に屈曲し，2mほど伸び開口部を意識する。溝幅0.9～1.4m，深0.2mを測る。南西隅より壺1点（14），南溝より壺2点（10，12）出土。

SZ03　56E・56D区。方9m（推定），溝幅1.5m，深0.15～0.2mを測る。北溝のほぼ中央に開口部を想定。南西隅より壺3点（5，6，17）出土。

SZ04　56E・C・D区に広がる。方11m（推定），溝幅1.9m，深0.5mを測る。北溝より壺1点（25），南溝より壺1点（16），西溝隅（推定）より壺2点，甕1点（9，13，23）出土。

SZ05　56E区，13×13.5m，溝幅2m，深0.2mを測る。西溝中央南よりに開口部が存在する。北溝より壺1点（2），北西隅より壺・高杯（26）各々1点，南溝より壺底部片出土。

SZ06　56E，57C，59A区に広がる。13×14m，溝幅2～5m，深0.2～0.3mを測る。北溝中央に開口部が存在し，溝幅若干拡張する。西溝より赤彩の施された広口壺片，北隅より壺1点（3），器台1点（27）出土。

SZ07　59A区南。3.6×3.6m，溝幅1～0.5m，深0.1mを測る。南西隅で壺1点（28）出土。

SZ08　59A区南。5×4m，溝幅0.5～1.2m，深0.15mを測る。北東隅に開口部が存在する。東溝より壺1点（8），南溝より壺1点（24）出土。

SZ09　56G区。方9m（推定），溝幅1.5～1.8m，深0.1～0.15mを測る。南側1/2を調査区外に置く。北溝より壺1点（11）出土。

SZ10　59A・B・C区。径18.5mの円形を呈し，溝幅1.5～3m，深0.1～0.6mを測る。東側でSD30と重複する。東側溝内より須恵器壺3点（29～31），西側で土師器甕（33），石製紡錘車（32）各1点出土。

SZ11　59B・C・57D区。径18mの円形を呈し，溝幅2.5～3m，深0.2mを測る。西側で開口部が存在する。北備溝内より須恵器杯身1点(35)出土。

その他土坑SK11，SK14，SK71，SK72（図版３）が存在し，その内SK11，14，72はA群中央部に集中し各々壺（SK14はさらに高杯１点）の出土が認められた。（１，15，21，22）SD30は調査区を南北に縦断する大溝（幅３m，深0.2m）で南端で流路を拡散する。古墳時代後期の遺物が若干出土している。

平安時代末期～室町時代（B期）

平安時代後期～室町時代にわたっての遺構（B期）は溝77条，土坑74基，井戸21基，土壙179基を数え，以下その主要な遺構について記述する。なお時期については第III章に準ずる。

溝

SD20（図版３）　56C区で検出された南北溝で，南端でL字状に屈曲し，３m西へ伸び終息する。SD27と平行し一つの区画を形成する。少量ではあるが12世紀の遺物の出土が見られる。南北36m，溝幅0.5～0.8m，深0.1mを測る。N－6°－W

SD27（図版３）　56B・E区。L字状に大きく屈曲する溝で，南北溝はさらに北側，調査区外に延張するが，東西溝は調査区西端で漸移的に終息する。屈曲部を中心に多くの遺物（図版24・25）が出土するとともに区画内西側に井戸が集中し，一つの居住基本単位が推定できる。12～13世紀を中心とする遺物が出土する。東西30m，溝幅1.2～1.6m，深0.4mを測り、２段掘りの掘形をもち溝内には暗褐色粘質土が堆積する。

SD35（図版４）　59B・C区。南北に伸びる溝であるが調査区内で完結する。途中２回大きく屈曲し，溝南端で西に90°屈曲気味に終息する。第II期（13世紀）の遺物を若干出土し，ほぼ同時期の溝SD34より早く埋没する。溝幅0.5m，深0.1mで茶褐色粘質土が堆積する。屈曲部を堺に北14m（SD34まで）南13.5mを測り，ほぼ２分する状況が認められる。

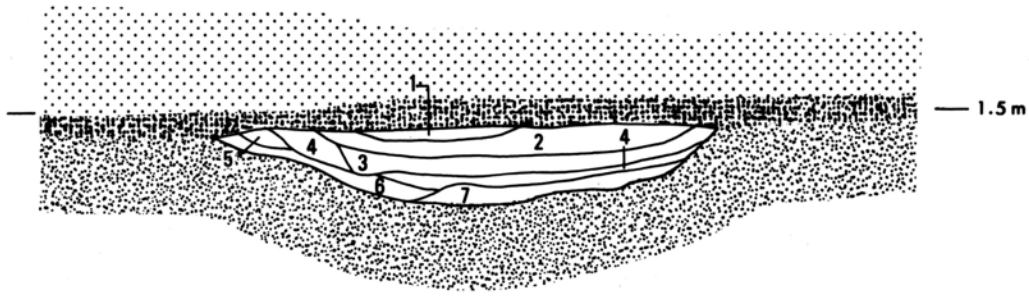
SD41・42（図版４）　59B・C区を中心として検出されたL字状に大きく屈曲した大溝。SD41は南北溝で主軸をほぼ真北方向に置き，中央部に（SD41以降）存在するSX83付近がやや深く，遺物も集中して出土している。溝幅1.5～1.8m，深0.4mを測り，SD34とSD42に挟まれた部分で53

mを測る。

SD42 は東西溝で，SD43 が北側に平行して存在する。SD41 と SD42 の接点は溝深が浅くなるとともに（屈曲部）SD43，SK74 が複雑に重複し，かつ土壙群が集中する。SD42 は大きく蛇行する溝であり，ほぼ旧可道の上部に位置し，自然発生的に整えられた溝の可能性が強い。溝幅2.8～3.2m，深0.5mで茶褐色粘質土・暗灰色粘土が堆積する。（第５図）なお SD42 は調査区外さらに東へ50m延長することが確認されており[2)]，土田遺跡中央部に位置する重要な施設と考えることができる。SD42 は広範囲にわたり第II期～III期（13～14世紀）の遺物が多量に出土し，SD41（第I～II期）が埋没した後にも，長く存続していたことが理解できる。

SD54・55・62
（図版４）

59E区で検出できた一つの区画を形成する溝群である。SD54 は東西溝で，西端で屈曲を意識して終息。溝幅1.3m，深0.3mを測る。SD55 は南北溝で長さ33m，溝幅1.8～2.0m，深0.3～0.4mを測り，南端で幅を拡張（2.7m）すると同時に深さを増し（0.9m），土壙状の施設をもつ。SD62 は SD55 の中央より東西に伸びる溝で，長さ11m，幅1.8～1.9m，深0.4mで調査区内で完結する。３条とも第II期の遺物の出土が見られ，特に SD55 南側で集中している。



1．灰褐色砂質土　　2．淡茶褐色土（灰釉系陶器含）
3．茶褐色粘質土（灰釉系陶器含）　　4．暗褐色粘質土
5．暗褐色粘質土　　6．灰色粘土（砂混合）　　7．暗灰色粘土（砂をブロック状に含）

第５図　SD42 断面図　1/50

SD56・59
60・61
（図版４）　59E区で検出した溝群で，SD59 はL字状に屈曲する溝で，南北４m，東西12m，溝幅1.3～1.5m，深0.3mを測る。近接して南北溝SD60 が掘削される。長さ4.2m，溝幅1.6m，深0.6m。SD61 は鈍角に屈曲する溝で東西溝は若干北側に彎曲する。溝幅0.7～1.6m，深0.6mを測る。南端はSD64 により破壊。SD61 東西溝に連続する形でSD56 が存在しゆるやかに彎曲しながら調査区外に伸びる。溝幅1.1m，深0.2m。出土遺物より第III期を中心とする時期の存続が考えられる。

SD64（図版４）　南北溝 SD68 と連続すると考えられる東西溝で接続部はSK62 が重複。第IV期の遺物が出土。（図版23）溝幅1.6～1.7m，深0.3～0.4mを測り調査区外に至る。

SD68（図版４）　南北溝で北端でL字状に３m屈曲し消滅。溝幅1.9～2.0m，深0.4～0.5mで，調査区内で南北52mを測る。

井　　戸

調査区内で20基，調査区外で１基を確認。土坑との差違性を明確にするため，以下の２つの条件を基本に井戸の認定を行なった。内部構造物が残存するもの。ある一定の平面規格と掘形を持ち，勇水層まで確実に掘削されているもの。以上確認しえた井戸の全てが素掘りの井戸で，平面形と掘形の状況から２つに大別できる。A類とは長軸と短軸の差が大きい不整円（方）形状のプランをもち，掘形はゆるやかな傾斜面をもつSE05・06・07・12をその典型とするもの。B類とは，長軸・短軸の差が少なく，比較的小規模なプランをもち，掘形は垂直に近い状況を呈するもの。SE02，10 に代表される。時間的にはA類からB類への変化が窺える。その他第Ⅰ～II期（12～13世紀）に所属する井戸には必ずといってよいほど，井戸機能消失後上層に一定の遺物廃棄及び炭化物を多量に含む土層が存在し注目される。（以下「廃棄層」と呼ぶ）

SE01（図版３）　56A・60E区に重複し検出した井戸で，検出面で径2.4m，深１mを測り，内部構造物は認められなかったが，上層に廃棄層が見られる。（第６図）第Ⅰ期の遺物がその廃棄層より出土。（図版13）

SE02（図版３）　59P区。径1.6m，深１mでB類の井戸。廃絶に伴う土層は認められない。第III期の遺物が出土。（図版13）

SE05（図版３）　56B区にて検出でき，北側の一部を調査区外に置く。4.0×3.4mで深0.8mを測る。（A類）３段の堀形をもち，下段では径0.8m。内部には曲物１段と井戸枠の一部と思われる板材を確認。（第６図）上層

に廃棄層が認められ，第Ⅰ期の遺物が出土している。（図版14）

SE06（図版３）　56E区。3.0×2.5mで不整円形，深1.5m。（A類）内部構造が良好な状況で残存した唯一の例であり，長方形板の横組３段の井戸枠(仕口を枘組にして保持)がみられ，その内部に曲物７段を確認。（第６図）第Ⅰ期に所属。

SE10（図版３）　59A区。平面形状は2.5m×2.2mの不整円形で，２段(下段径1.4m)の掘形をもち，比較的垂直に近く掘削する。（B類）深1.2mで曲物２段が残存する。(第６図)曲物内基底部に土器片，丸石が配置され，湧水による砂の吹き上げを防止する工夫が認められる。第Ⅲ期の遺物が出土する。（図版21）

SE11（図版３）　59A区，SD30に重複する井戸で，5.3m×4.0mの楕円形状の掘形をもち，深0.7mを測る。(A類)下部に径２～３cm，長さ５～15cmの数本の竹を確認し，上層には廃棄層が認められ，第Ⅱ期に所属する多量の遺物が出土している。（図版15）

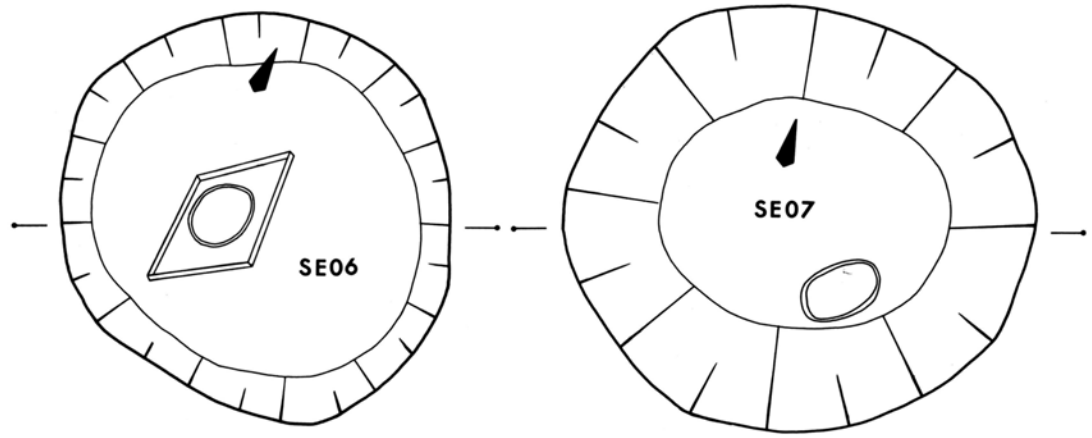
その他調査区外ではあるが木組方形横桟型井側（１辺0.5cm）をもつSE21（図版４）の存在を確認している[5]。

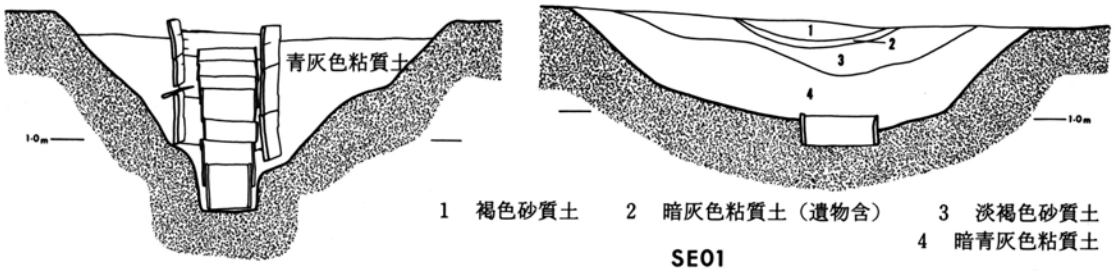
土　　坑

土坑として確認しえたものは74基である。形状等の差において数種のまとまりを指適でき，その内特色のある２つの種類（A・B）を特に取り上げておく。

土坑A　　掘形の径が1.5～2.0mで深0.4mのほぼ円形の土坑で，埋土は均一な褐色粘質土が堆積し，内より若干の遺物の出土が認められる。また土坑Aは，複数，近接して設けられる傾向が見られるとともに，井戸に近接して築かれることが多い。例えばSK05とSE05，SK57とSE17，SK49とSE16。各々近接する場合としてはSK46・45，SK15・16，SK49・53等が存在する。

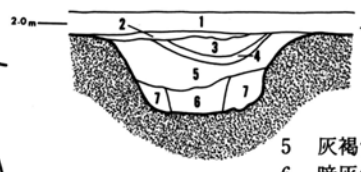
土坑B　　不整形の大型土坑で，土坑内には２～３層の層位堆積が認められるもの。深さは0.6～1.0mと比較的深く，掘形はゆるやかな傾斜をもち掘削されている。SK61・62・63の３基が存在する。他の遺構との重複関係から第Ⅳ期，土田遺跡終末期に所属するものと考えられる。



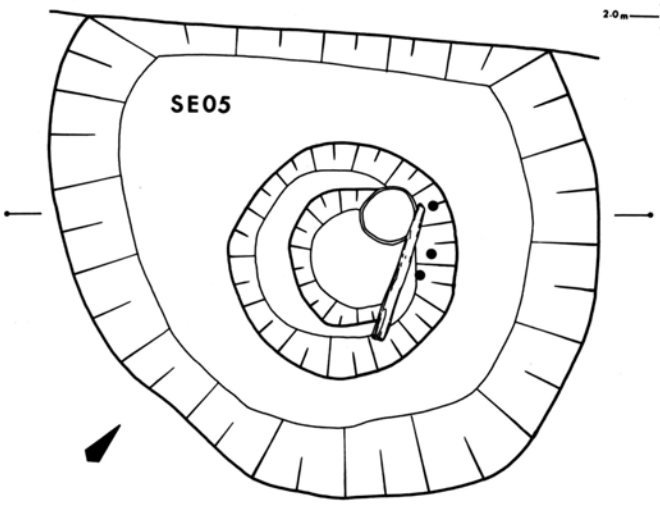


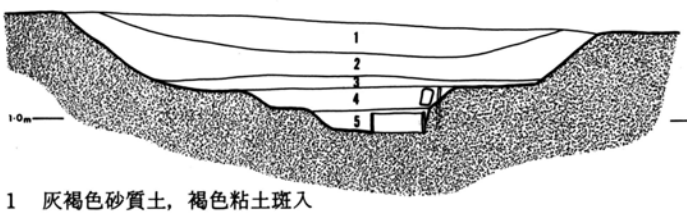
1　褐色砂質土　　2　暗灰色粘質土（遺物含）　　3　淡褐色砂質土
4　暗青灰色粘質土

SE01

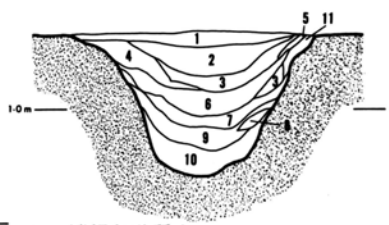


1　耕作土
2　灰色粘土
3　暗灰褐色土
4　暗灰色粘質土（遺物含）
5　灰褐色砂質土
6　暗灰色粘質土
7　暗灰色粘質土，砂混



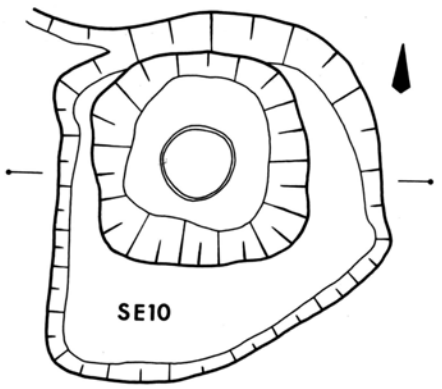


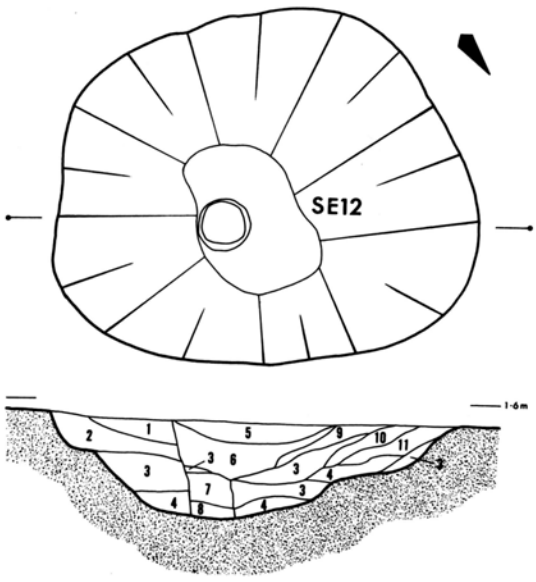
1　灰褐色砂質土，褐色粘土斑入
2　灰褐色砂質土
3　暗灰色粘質土
4　灰色粘質土
5　暗灰褐色粘質土，砂混



1　淡褐色砂質土
2　褐色砂質土
3　茶褐色砂質土
4　暗茶褐色砂質土
5　灰茶褐色砂質土
6　淡茶褐色粘質土
7　褐色粘質土
8　灰色粘質土
9　暗灰白色砂質土
10　灰白色砂質土
11　暗褐色砂質土

第6図　井戸実測図1　1/50

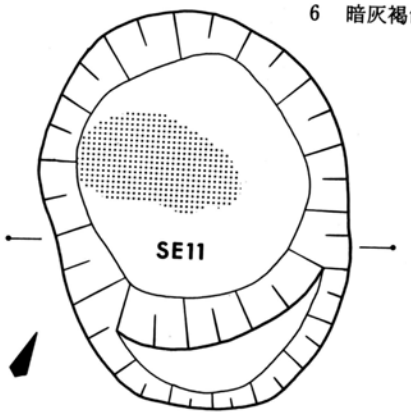


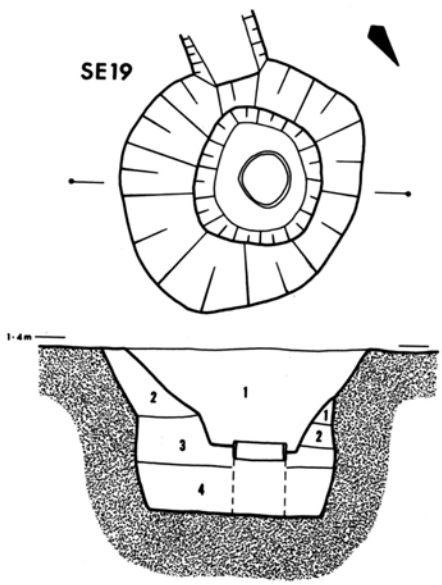


1 灰褐色土
2 暗灰褐色土，黄色土斑入
3 暗灰褐色粘質土
4 暗灰褐色土
5 暗灰褐色粘質土
6 暗灰褐色粘土

1 灰褐色土
2 灰褐色土，黄色砂斑入
3 黄灰色砂，褐色粘土含
4 黄灰色砂
5 暗灰褐色土

6 褐色粘土
7 褐色砂
8 暗灰色粘土
9 暗灰褐色砂
10 褐色粘土
11 灰色粘土





1 暗灰褐色砂質土
2 暗灰褐色土
3 暗灰褐色土，灰色砂含
（網点は遺物集積）

4 暗灰褐色粘質土
5 暗灰色粘土，灰色砂含
6 暗灰色粘土
7 暗灰色粘土，灰色砂含

1 褐色土
2 褐色砂質土
3 青灰色砂質土
4 灰色粘質土

第7図 井戸実測図2 1/50

SK05（図版３）　56B区 SE05 の南に位置し掘形は径2.4mの円形で，深0.47mを測り，若干傾斜をもち掘削されている。（土坑A）淡茶褐色粘質土が堆積し，第Ⅰ期の遺物が出土している。（図版12）

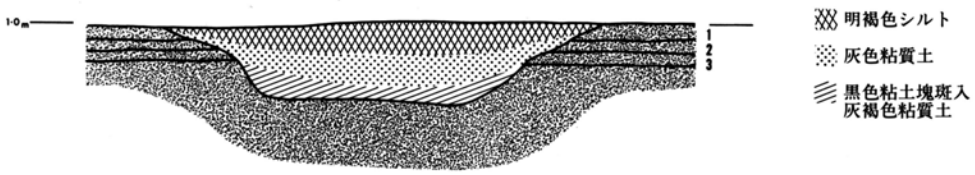
SK24（図版３）　SZ06 北溝内にこれを破壊する形で築かれた土坑で，径0.7mの正円形を呈し，深さ0.5mを測る。内部には炭化物が充満し，灰釉系陶器（羽釜・椀）河原石が出土している。その内羽釜型陶器（図版16）は３個体で，いずれも体部下位を欠損し，井戸枠として使用していた可能性が高く，井戸廃絶後土坑内に一括投棄されたものと考えられる。

SK61（図版４）　SZ11に近接し，その南に掘削された大型の不整形土坑。長軸9.6m，短軸5.5mで深さ0.7mを測り，坑内には３層の堆積が見られた。（土坑B）上から茶褐色粘質土・灰白色粘質土・褐色粘質土で，茶褐色粘質土下位には炭化物が堆積し，若干の灰釉系陶器片が出土している。

SK62（図版４）　SD68 と SD64 が接続する位置に，これらを破壊する形で掘削された不整形土坑。（土坑B）長軸8.0m，短軸4.0mで深さ0.6mを測る。上より明褐色シルト・黒色及び青灰色粘土塊斑入灰色粘質土・黒色粘土塊斑入明褐色シルトが堆積する。第Ⅳ期に所属する遺物が少量出土する。

SK63（図版４）　SK62 の南に近接して築かれた不整形土坑。（土坑B）6.2×5.5m，深1.0mを測り，上から明褐色シルト・灰色粘質土・黒色粘土塊斑入灰褐色粘質土が堆積する。第Ⅳ期の遺物が出土。（図版22）

SK74図版４）　SD44・42に重複する形で掘削された大型の不整形な溝状を呈する土坑。掘形の掘削はゆるやかな傾斜面をもち，長軸24m，短軸３m，深0.57mを測る。坑内には灰色粘土・褐色粘質土塊及び砂が混入する暗灰色粘質土が見られ人為的な埋戻しが想定できる。多量の細片化した遺物（中世～近世）が出土する。



1．灰褐色粘質土　2．灰色シルト　3．灰色砂

第８図　SK63 断面図　1/100

方形土壙

調査区内でその状況・形状において一つのまとまりのある特色ある遺構を摘出することができる。これらの遺構は特に調査区北・南端で集中して存在する。今これら一群のものを方形土壙（SX）として綜合する。

まず所属時期であるが，第1に土層図により明らかなごとく（第10図）中世遺物を包含する灰色粘土層より掘削されており，それ以降（近世～現代）の可能性は考えられない。第2にSX06・55・21・90・159より伴出した遺物は前述のB期（平安末～室町時代）に所属する。第3にB期の溝・井戸の配置と密接な関係をもつ（後述）。以上から遺物がほとんど出土しないこれらの遺構はすべて土田遺跡B期，おおむね中世期に所属するものと考えることができよう。

次にその特色をまとめて述べておく。1．方向性を保有し，南北・東西付近に主軸を置く。2．層位堆積をもたず，斑土が充塡され人為的埋戻し作業が想定できる。3．掘削場所がある特定の原則に基づいており，結果的に群集する傾向をもつ。4．円形プランをもたない。掘形上面では第9図のごとく隅丸長方形が一般的で，ほぼ垂直に近い状態で掘削し，基底部は舟底状を呈する場合が多い。なお詳細は改めて後述する。

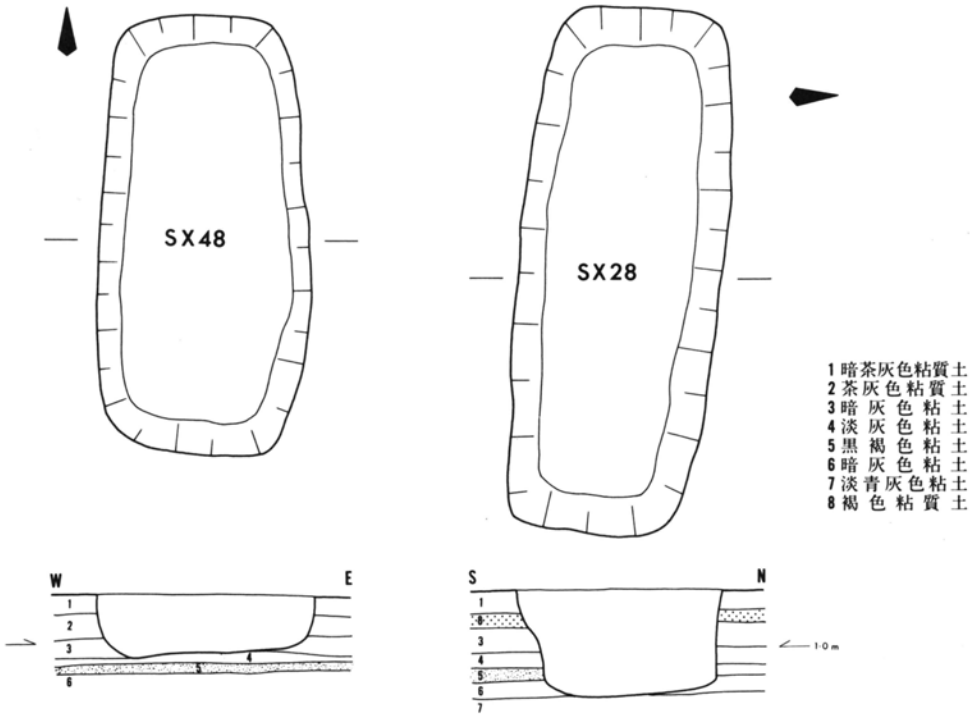
SX55（図版3）　60E区で検出した長大な土壙，長軸8.9m，短軸1.6m，深さ0.77mで重複関係は見い出しえない。明灰色粘質土・暗灰褐色粘質土・黒色粘土塊斑入灰褐色粘質土が埋まり，下位から椀と皿が（図版30）各1点重ねた状況で出土している。（図版41—18）

SX80（図版3）　SD27に平行し，これに先行する形で掘削された土壙で，北端を調査区外に置く。現状では長軸9.0m，短軸1.7mを測るが，深さ0.7～0.9mと段を持つ。2～3基が重複するものと推定でき，その基底部に遺物と石の集積が点在した形で検出されている。（図版30・41）

建物・柵列

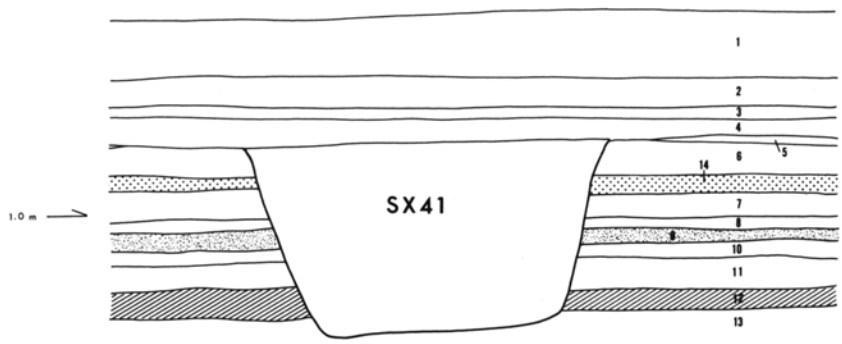
SB01（図版3）　SD20により区画された空間内部で検出された掘立柱建物（2×1間）。南東隅柱穴は検出できえていない。柱間南北2.6—2.4m，東西3.6m。西柱穴列北より第1・2柱穴から遺物が出土し，第II期に所属する。（図版20）

SA01（図版3）　SD19　と　SD17　の間を仕切る形で6ヶ所の柱穴群を確認した。SD17・19，SX70以後に設けられ，柱間不揃いで，西から1.1—0.8—1.5—0.7—2.0—1.4m。（計7.5m）

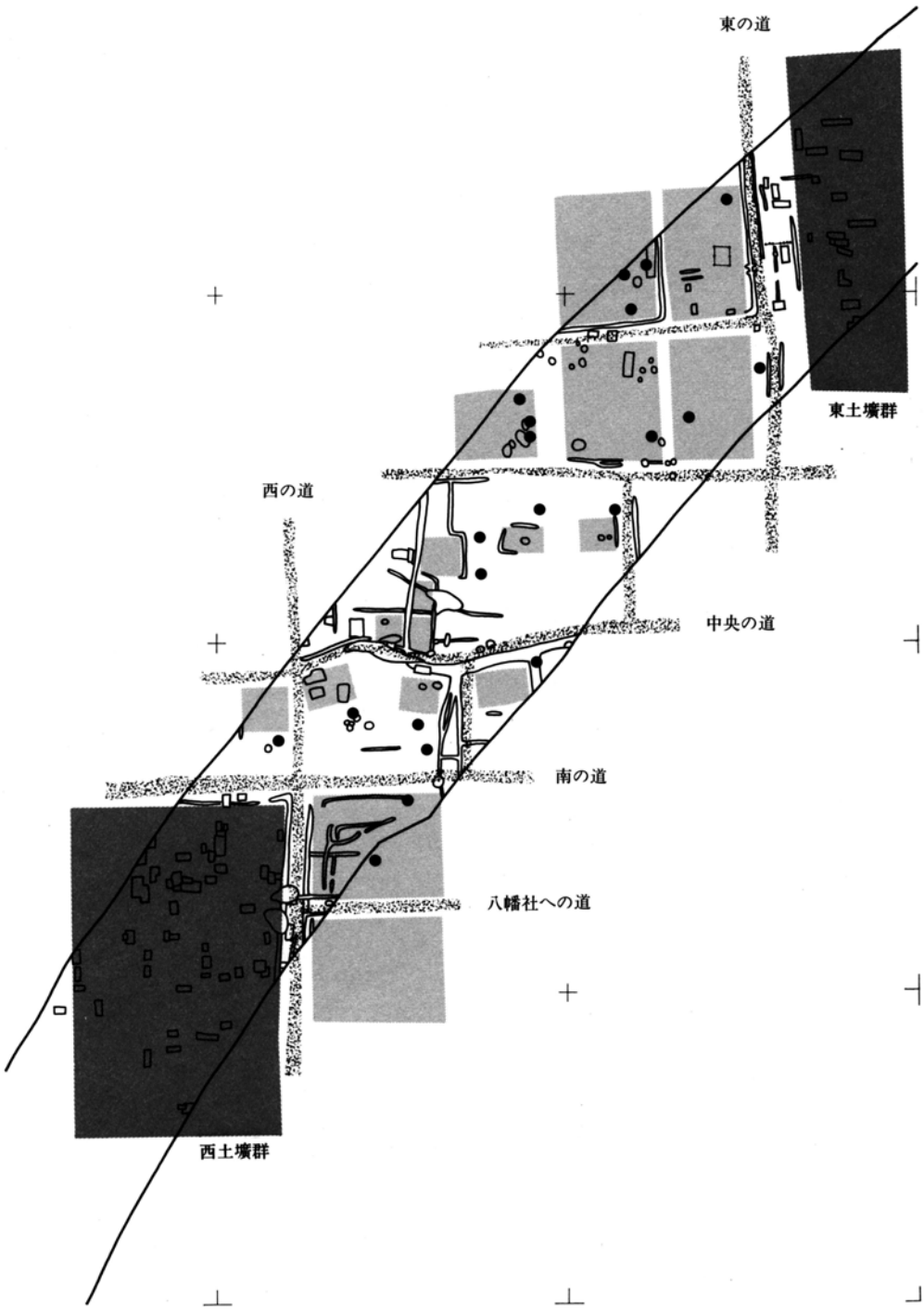


第9図　SX28・48 実測図　1/50

1. 盛　土
2. 耕作土
3. 黄褐色土
4. 茶灰色土
5. 褐色土
6. 暗茶灰色粘質土
7. 暗灰色粘土
8. 淡灰色粘土
9. 黒褐色粘土
10. 暗灰色粘土
11. 淡青灰色粘土
12. 黒色粘土
13. 灰色粘土
14. 褐色粘質土



第10図　SX41 断面図　1/50



第11図　B期主要遺構配置図（黒点は井戸・網点10%は屋敷地・建物）

その他の時代

耕土・包含層より少量の奈良・平安時代の遺物が出土しているが，遺構に伴う形ではほとんど存在していない。ただ遺物の比較的集中するのは微高地西・東端。また江戸以降の遺物も若干みられ，旧福田川の河道跡が58D南端で確認されている[6]。

59A南端，SD30 におおむね重複する状況で奈良・平安時代の須恵器片が出土する窪地（あるいは自然流路）が存在する。

SK34（図版３）　56D区 SE03 の南で検出された不整形の土坑で深さ0.15と浅く，須恵器杯身１点（44）が出土している。

〔注〕

1）井関弘太郎「弥生時代以降の環境」（岩波講座『日本考古学』２　1985）

2）『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団1982

3）『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団1983

4）井戸出土遺物の多くはこの廃棄層より出土し，14世紀以降はこの層堆積はみられない。SE07 出土底部穿孔（焼成後）椀（59）の出土が象徴的な遺物出土状況といえよう。

5）注３）に同じ

6）「土田遺跡」（『環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』財団法人愛知県教育サービスセンター1984）

第2表　主要遺構時期区分

第2表　主要遺構時期区分

時期		墳丘墓	土坑	その他
A	I	SZ01　SZ08 SZ02　SZ09 SZ03 SZ04 SZ05 SZ06 SZ07	SK11 SK14 SK71 SK72	
	II	SZ10 SZ11	SK33	SD30

時期		溝	井戸	土坑	その他
B	I	SD55 SD62	SE07 SE01 SE03 SE05 SE14 SE12	SK05 SK24 SK18	SX80 SX85
	II	SD35 SD38 SD51	SE01 SE11 SE16	SK45 SK75 SK44 SK15 SK16	SB01 SX81 SX90
	III	SD61 SD65	SE02 SE08 SE20 SE10	SK31 SK67	SX55 SX06 SX155
	IV	SD68 SD64	SE21	SK61 SK62 SK63	SX44 SX21

第Ⅲ章　遺　　物

調査により出土した遺物は，各時間にわたり散見できる。しかし遺構に伴出し，かつあるまとまりをもつ遺物群として取り上げられるものは，前述したA・B期とした2時期に限定でき，特に後者である平安時代末～室町時代（B期）に所属するものが大多数を占める。ここでは遺構伴出資料を中心に記述し，遺物の分析は第Ⅴ章で行う。

弥生時代末期～古墳時代（A期）

墳丘墓出土遺物を中心に，弥生時代末期の土器と古墳時代後期の遺物に大別できる。A－Ⅰ期とA－Ⅱ期とする。

Ⅰ期

出土した遺物は壺形土器を中心に数10点と限られた量である。そのほとんどが「欠山期」に所属するものと考えられる。

1）器　種

壺　　広口壺，短頸壺，直口壺の3つの形式に分類でき，各々諸特色によりさらに細分する。

〈広口壺〉　　体部から広く比較的短い頸部と，大きく外反する口縁部を有する壺。ここでは装飾性を重視し，3つに区分する。

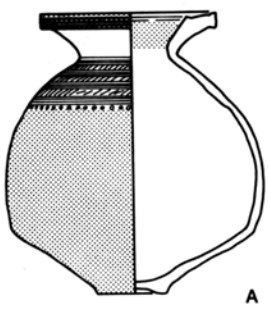
A　口縁端部に数条の凹線文をもち，口縁内面に幅広い文様面が見られる。体部はその上半に直線文と刺突文を組合せた文様帯を構成する。また赤彩がある原則に基づき施される。

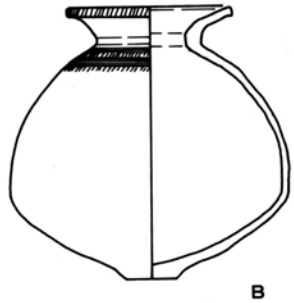
B　口縁端部に刺突文，体部上半に直線文と刺突文を組合せるが，赤彩は見られない。

C　体部から強く外反あるいは外傾する口頸部をもつ一般的な広口壺の一群。施文は見られない。

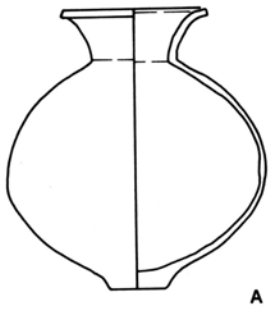
〈短頸壺〉　　体部から短く，やや直口ぎみに口頸部を有する壺。3種ある。

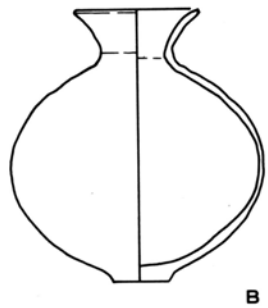
広口壺

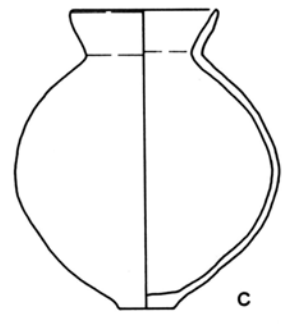




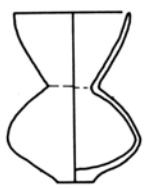
短頸壺



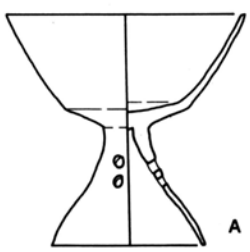


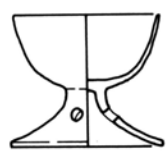


直口壺



高杯





広口壺	A	1．2
	B	3．4．8
	C	12．13．14．15．16
短頸壺	A	9．10．11
	B	5．7
	C	6
直口壺	A	21．24．28
	B	25

（番号は図版と同じ）

第12図　土器分類（A期）

A　体部上半と頸部に明瞭なくびれが見られ，口縁端部はつまみ上げ状となる。

B　体部から頸部はゆるやかに移行し，口縁端部は比較的丸くおさめる。

C　内彎する口頸部をもち，端部は丸く整える。

〈直口壺〉　体部から大きく直口する口頸部をもつ壺で2種ある。

A　口頸部は大きく，口縁端部付近は内彎し端部は面を持つ。

B　口頸部は短く，内彎し，端部付近では外反し，斜面を持つ。

〈高　杯〉　A　大きく広く外傾する杯部に，内彎円錐状の脚部を持つもの。

B　短く半球状の杯部をもつもの。

その他受口状口縁台付甕（23）と口縁部に凹線文をもつ器台（27）が認められる。

2）状　況

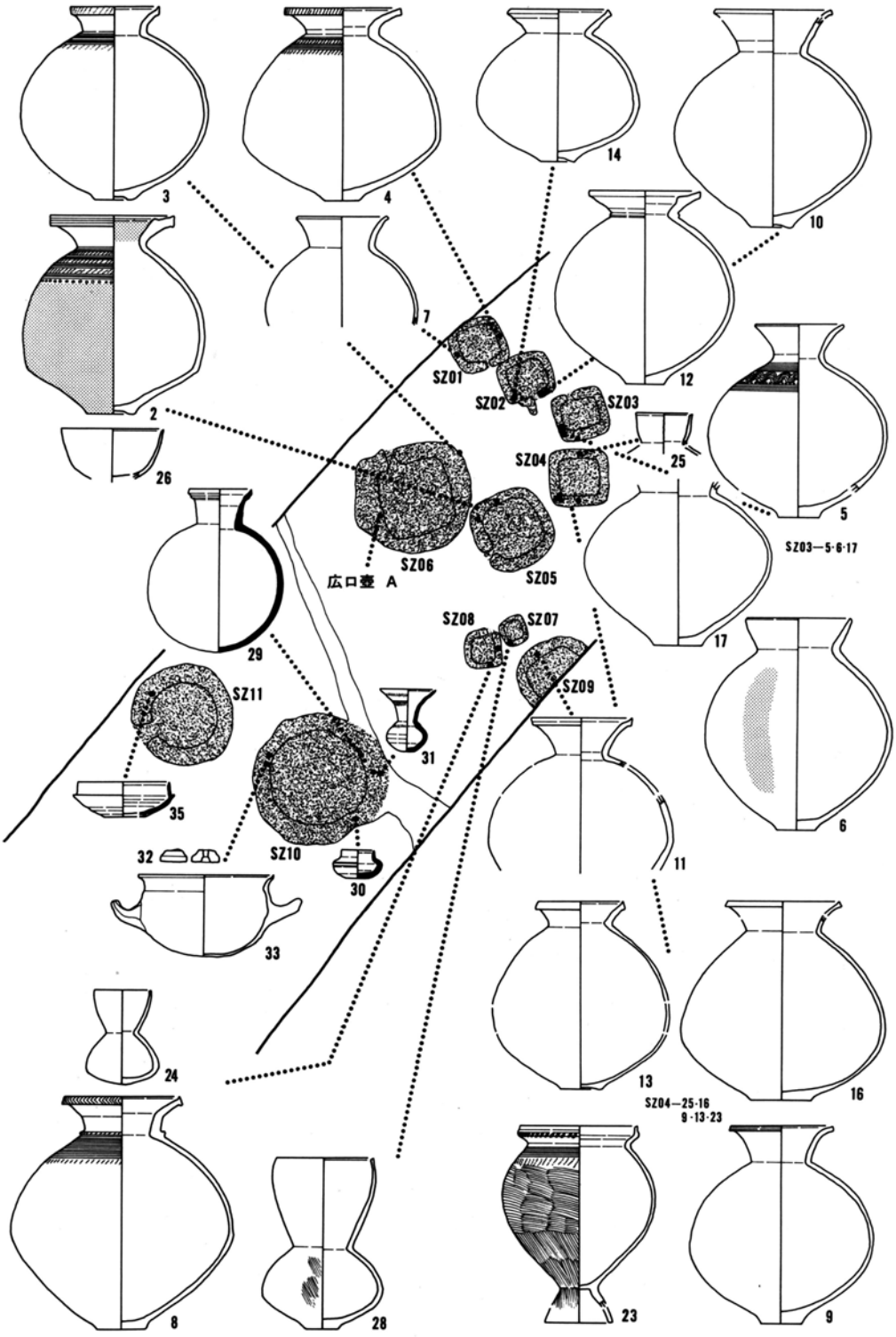
出土地点については第13図のごとくであり，遺物の出土は墳丘墓9基と土坑3基に限定できる。墳丘墓ではSZ04の受口状口縁台付甕（23）とSZ06の器台（27）を除いて，総て壺に限られる。その内の多くは広口壺と短頸壺であり，直口壺の墳丘墓からの出土はB群に限定され，広口壺AはSZ05及び測図はできないがSZ06西溝より出土しており，A群，特にその内でもより大型の墓に限定できる使用状況を見せている。

II期

SZ10・11を中心に須恵器の出土が見られる。おおむね田辺編年MT15・TK10型式に併行するものと考えられる。

〈須恵器〉　（29～31）はSZ10より出土し，（29）は大型の提瓶で口縁は有段状に稜を持つ。（30）は小型の短頸壺で，（31）は小型の甕であるが，底部の状況より装飾壺の一部である可能性が高い。（34～38）は杯身で，（34）・（35）・（38）は底部に明瞭な平担面を持つ。（39）は有蓋高杯，（40）は台付短頸壺の蓋と思われる。

〈その他〉　（32・33）はSZ10より近接して出土し，（32）は滑石製紡錘車で，側面及び底に刻線の鋸歯文が施され，外面及び孔には使用痕が著しい。（33）は把手付土師器甕で，内外面ハケメ，つまみ上げ状の口縁部が見られる。その他埴輪片が数点出土している[1)]。


3
4
14
10
7
SZ01
SZ02
SZ03
12
2
25
SZ04
5
26
SZ03—5·6·17
広口壺 A
SZ06
SZ05
29
SZ08
SZ07
17
SZ09
SZ11
31
6
35
11
32
SZ10
30
33
24
13
16
SZ04—25·16
9·13·23
8
28
23
9

第13図　土 器 出 土 地 点

平安時代末期～室町時代（B期）

1　土器と陶磁器

種類と器種

種類としては土器（土師器）と陶磁器があり，後者は灰釉陶器から連続する灰釉系陶器。灰釉陶器を継承し，釉薬を施す施釉陶器。そして中国製陶磁器。と3区分する。

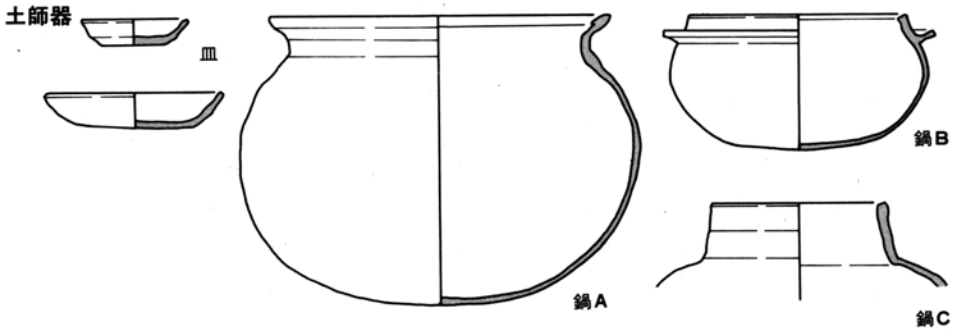
器種は基本的に第14･15図のように分類し，名称は通例に従い，椀・皿・壺・鉢・釜・鍋等を用いる。なお灰釉系陶器椀は，所謂「山茶椀」の範疇に属し，特に改めて記述しない限り無釉椀を意味する。各器種の分類は第Ⅴ章に基づく。

遺構内出土遺物

平安時代末期から室町時代にかけての遺物の内，大多数を占めるのは灰釉系陶器であり，これらの分析は第Ⅴ章に譲り，ここでは主要遺構内出土遺物の概説を行なう。

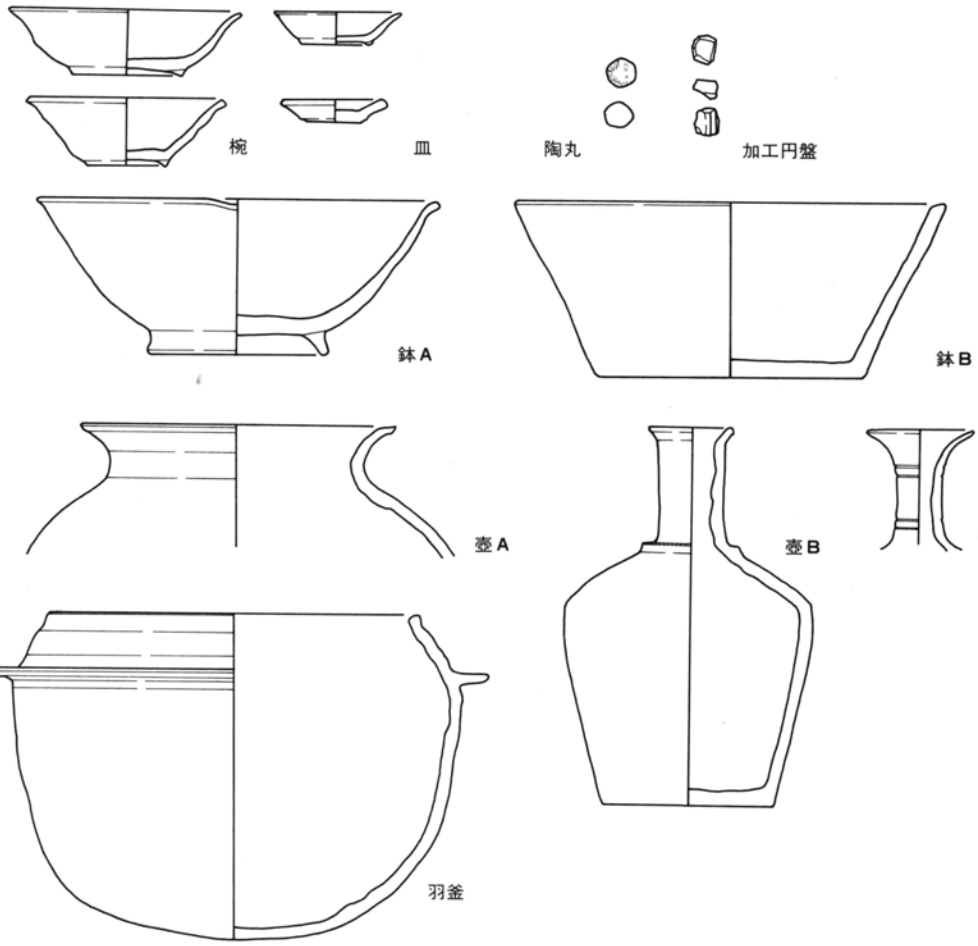
SK05（図版12—48～54）　灰釉系陶器椀・皿の（第Ⅰ期）の組合せが見られるもので，皿はすべて高台が製作されている。椀は器高が低く，椀（48）のような口縁部を大きくヨコナデし外反する特色ある器形が見られる。その他図示できないが土師器鍋Aの口縁部細片（分類B）が共伴している。

SE07（図版12～55～72）　土田遺跡第Ⅰ期の遺物組成を示す一括資料であり，井戸廃棄層より出土している。椀（59）は底部が大きく穿孔（焼成後）されており，廃棄における目的的な使用を表示する。(61)は口縁端内部に一条の沈線が見られ，端部は丸く厚く整えられる。皿はすべて高台を有する。椀・皿類は常滑窯産と考えられるが，口縁端部がわずかに外反する鉢（69）は常滑地区における鉢の様相と若干異なる。(70)は鍋Aの口縁部（分類B）で，(72)は砂岩製砥石。砥石は斜面に特に使用痕が著しい。(71)

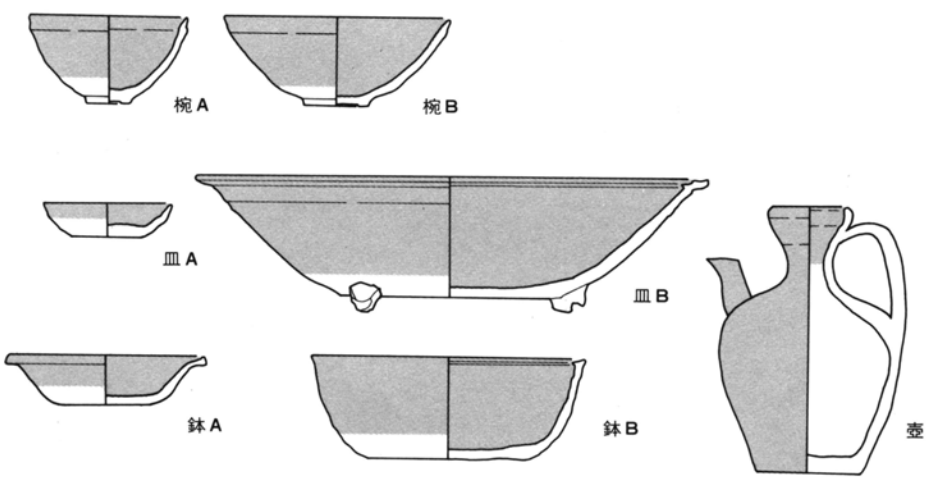


第14図　土　器　の　種　類

灰釉系陶器



施釉陶器



第15図　陶　器　の　種　類

は椀高台部を利用した加工円盤（分類 A_1）。

SE01（図版13—73～90）　椀は（73）・（75）・（78）のように口縁部を大きくヨコナデし，外反するものの他，（79)のように口縁端部外面に面を持つものが見られる。皿は高台の有無が見られる。（88･89）は土師器鍋A（分類B）で，口縁部は短く外反する。端部は幅狭く肥厚し面を形成する。（90）は玉縁口縁をもつ中国製陶磁器椀。

SE05（図版14—104～118）　土田遺跡第Ⅰ期の遺物が出土し，椀はすべて口縁端部が鋭利に整えられる。皿は高台が作製されるものに限定される。（113）は土師器皿（皿D）で底部は突出し糸切が見られる。赤褐色を呈する。（109）は玉縁口縁をもつ中国製陶磁器椀。（114)は小壺で糸切底。（115)は砂岩製砥石で，一面が欠損する。（116～118）は椀高台部を利用した加工円盤。

SE11（図版15—131～157）　土田遺跡第II期の良好な資料で，椀は口縁端部に面，あるいは面を意識する形状のものが主体を占める。高台は大きく潰れるものがあり，籾痕が著しい。底部は糸切痕を残すものが多い。皿は高台が欠損するも器高は比較的高いものが多く，底径は小さいものが多数を占める。底部はナデ調整が見られ，（142）はケズリが施されている。（152～154）は羽釜型陶器で，（152）は口縁端部がヨコナデにより丸く整えられ，（152）（154）は体部の器壁が薄い。（153）は口縁端部に面取りを施し，器壁は比較的厚手。（155～158）は椀高台部利用の加工円盤（A_1類）。出土遺物はすべて常滑窯産である。

SK24（図版16—158～161）　（158～160）は常滑窯産の羽釜型陶器で，いずれも底部欠損する。（158･159）は同一手法で製作されたものと考えられ，口縁端部はヨコナデにより若干つまみ上げ状に直立する。形態は球形状を呈し，内面は板ナデを施す。（160)は他に比べ器壁が厚く，口縁端部に幅広い面をもつ。体部の形状は直立し，球形を消失している。体部内面はヘラケズリ。

SD61（図版17—172～188）　土田遺跡第III期に所属し，椀は口縁端部が肥厚する形状のものが主体を占める。底部は底径が小さく，糸切はナデ消す。瀬戸窯産で，藤澤編年第6型式に相当する。皿は（182）が精製品で，他は口縁部が肥厚し，大きく面を持つものが多く見られる。（183・184）は羽釜型陶器で SD61 上層より出土。（185・186）は壺Aの大小であり，端部は面を構成し，ややつまみ上げ状になる。（187）は土師器で糸切底，ロクロ整形痕が表面に残る。（188）は椀高台部利用の加工円盤。

SE16（図版18—189～210）　椀は口縁端部に面を持つものが主体を占め，（198）は底部外面に「五」の墨書が見られる。皿は高台が見られないが，口縁端部はヨコナデで整え，器台が比較的高い。（209）は短頸壺で，外面に釉の痕跡が認められる。（210）は壺Aで，口縁端部は斜面を持つ。（204・205）は椀高台部利用の加工円盤。全体に常滑窯産と考えられ，中野編年 KN2～FS33 に比定できる。

SE20（図版19—216～251）　椀は口縁端部が肥厚するものが主体を占める。（226～229）は精製品で，（228）と（229）は椀の大・小を表示している。これらの精製品は田口編年第III期のもので美濃窯「均質手山茶椀」。（220）は底部高台が剝落し瀬戸窯産，藤澤編年第8型式に所属。皿は（244・250・251）が精製品。（231）は壺Aで口縁端部は上下に拡張し，幅広い面を構成，体部には押印が見られる。常滑窯赤羽編年第III期後半に位置づけられ，14世期代のものである。（233）は鉢Aで口縁端部は肥厚し，ナデる。（230）は重量感のある小壺で体部中位に一条の沈線を施し，下半は手動のヘラケズリが見られる。（232）は土師器鍋Aで，口縁端部は折り返す。（分類 D_1）（231）の壺及び土師器以外は美濃・瀬戸窯と考えられる。

SE10（図版21—279～298）　土田遺跡第III期でも新しい様相を見せるもので，椀の（279・280）及び皿の（289）という精製品を含み，椀（281）は高台が剝落し，口縁部にはヨコナデが見られず，工具による整形痕が端部まで明瞭に残る。（291）は瀬戸産鉢Aで口縁端部は外方へ拡張し，その上部に一条の沈線が施されている。（292）は鉢Bで口縁部は外傾し，端部には鋭い面取りが見られる。（293）は施釉陶器水注の口頸部で一部に把手の痕跡が残る，古瀬戸前期。（297・298）は常滑産壺Aで同一個体の可能性が高いもので，口縁はN字状に屈曲し，第IV期前半。（294）は陶丸で（295・296）は加工円盤。

SD64（図版23—327～344）　土田遺跡第IV期の遺物が出土した。椀（327～332）は器高が4㎝前後，口径12㎝のもので精製品，美濃窯第IV期に所属する。皿（333・334）はきわめて器壁が薄く，糸切の回転が強い精製品。（335～341，343・344）は施釉陶器で，古瀬戸中期末～後期初にかけてのものである。（335～337）は椀Aで所謂「天目茶椀」。（335）はケズリ出し高台で糸切痕が残る。（338）は底部に「七」の墨書が見られ，（339）は底内面に「オロシ目」を施す。

SD27（図版24・25—350～413）　椀では口縁端部に面を持つ形状のものが主体を占め，（362）は体部に「上」の墨書が2ヶ所認められる。皿は高台をもつ（374・375）から（369）のような精製品まで含んでいる。しかし（370～373）のような口縁部が肥厚しない形状のものが多くを占める。（383）（402）は常滑窯壺Bで頸部と体部との接点に刻目をもつ凸帯が見られる。（398～400）は同じく常滑窯壺Aで，口縁端部は面取りを施す。

土師器では（377）・（403）の皿類，（384）・（401）の鍋類が見られる。（377）は糸切底が見られる皿C。（384）は鍋Bで小型の粗製品。（401）は鍋Aで折返し口縁が見られる。（378～382）（404～413）は加工円盤で，多くは椀を利用して製作している。

SD41（図版26・27—414～458）　　椀は底径が大きく，器高が低い形状のものが多い。その内やや形態の異なる（414）は瀬戸窯産で，また（423）はSD41最下部より出土している。

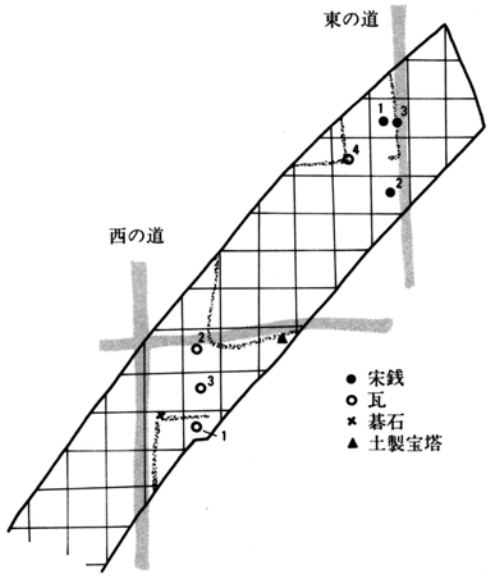
皿は高台の有無が認められるものの，器高が高い。（452）は短頸壺。（453・454）は羽釜型陶器で，（454）は厚手で，体部の形状は垂直に近い。（455）は壺Bの口縁部で，（456～458）は加工円盤。

SD42（図版28・29—459～536）　　椀は口縁端部に面を持つもの，肥厚するものが多く見られる。その内（486・487）は精製品。皿は高台が欠損し，さらに口縁端部が肥厚し，幅広い面を持つものも含まれている。（527）は底部に数字を表示する墨書が見られ，（528）は底部糸切，法量が他のものと大きく異なる，（508・509）は精製品。（488）は中国製陶磁器椀底部。（532）は短頸壺で，施釉。（533）は羽釜型陶器，（534・535）は鉢Aで，口縁部は肥厚する。（536）は鉢Aの底部であるが，各破面に使用痕が認められ，研磨具として転用している。（529～531）は土師器で，（529）は折り返し口縁を持つ鍋A。（531）は鍋Bで精製品。

2　その他の遺物

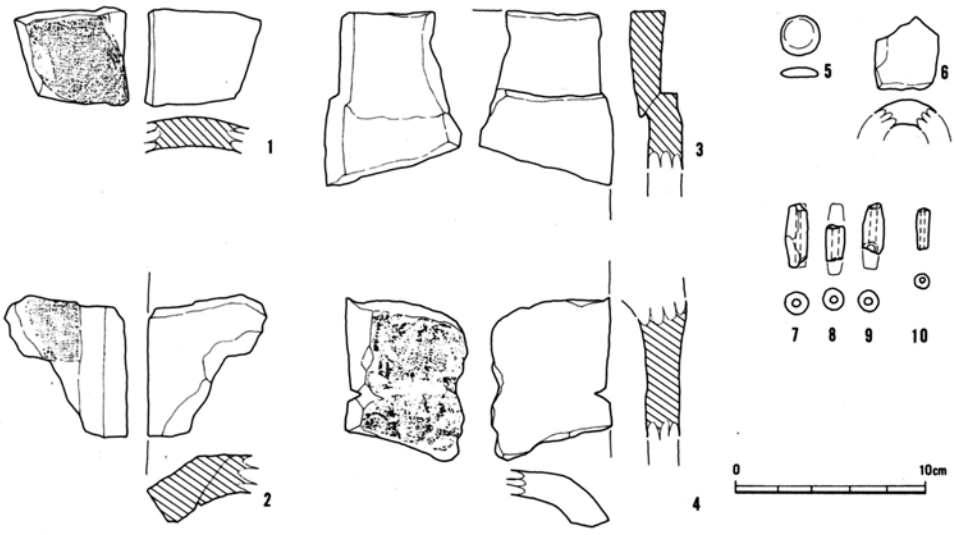
瓦（第18図，1～4）　　4点出土しており全て丸瓦の破片と考えられる。（4）はやや軟質で，凸面はヘラナデ調整でナワタタキの痕跡がわずかに残る。瓦当に接合された丸瓦部と思われる。（1～3）は灰白色硬質の丸瓦で，凸面ヘラナデ。（2）は粘土板接合痕が見られる。その内（3）は玉縁付丸瓦で，玉縁部との接合部は刻線を入れ補強している。（1～3）は12世紀代猿投窯産の可能性が強く，（4）は清洲城下町遺跡出土品と酷以し，16世紀の作品と思われる。第16図のごとく，（1～3）は出土位置が近接し，「土製宝塔」の出土から特殊な建物の存在が推定できよう。

土製宝塔[2]　　屋蓋部で（16.9×16.3cm，高さ5cm），平面形は正方形を呈し，椎は型作りで造り出している。SD42とSD50が接合する地点より出土している。



第16図
瓦・銭貨等出土地点

第17図　銭貨拓影



第18図　瓦・土錘・碁石

砥石　　SE07（図版12—72）及びSE05（図版14—115）より砂岩製の砥石が出土し，遺構からの砥石の伴出は土田遺跡第Ⅰ期に限定できる。特にSE07，SE05では廃棄層より見つかっており，その関係が興味深い。両者は岩質が酷以し，（72）は台形で両斜面を特に研磨面とする。（115）は立方体を呈し，一面が大きく剝離しているが，一側面を除き研磨面としている。

銭貨（第17図　1～3）　　調査区内より3点出土しているが，いずれも遺構に伴っていない。第17図の（1）は元豊通宝（宋・鋳造年代1078），（2）は熙寧元宝（宋・1068），（3）は宣和通宝（宋・1119）で，11世紀後半～12世紀前半にかけての宋銭である。第16図からその出土が「東の道」添いに集中することが認められる。

その他　　第18図（6～10）は土錘。（6）は大型品で（7～8）は小型品。（5）は黒色を呈する偏平な石で，碁石の可能性が高い。また馬歯が59P区・SD27・SD41より出土している。

その他の時期（図版11）

奈良・平安時代の遺物も若干出土しているが，遺構に共伴しているものは（44）の須恵器杯（SK34）のみである。その他（41～43）の土師器甕口縁部と，（45～47）の須恵器杯が見られる。（45）・（47）は底部に糸切底を残すが，（46）はヘラケズリ。なお（45）は底部に「万」の墨書が見られる。

［注］

1）埴輪片は8点出土しており，全て軟質窖窯焼成で淡青灰色を呈するものである。円筒形埴輪片と思われ，内外面はヨコハケを施す。当地域特有の埴輪で6世紀前半のものと考えられる。
「土田遺跡」（『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』財団法人愛知県教育サービスセンター1984）50頁。
「土田遺跡II」（『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター1985）88頁。

2）『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団1983。

第Ⅳ章　自然科学的分析

土田遺跡に関連して試料の微化石分析を，パリノ，サーヴェイ株式会社に依頼し，実施した。ここではその結果を受けて，土器胎土重鉱物分析，珪藻分析，リン・カルシウム分析の順に以下報告する。各々の報告は上記の依頼報告書に基づいたが，一部組替・変更を行い第4節を加筆した。その責はすべて編者にある。

1　土器胎土重鉱物分析

試料　　土田遺跡B期（平安時代末～室町時代）に所属する土器（鍋A，鍋B，皿）及びそれに関連して，周辺の遺跡出土遺物を対象にした。試料名及び表面観察の結果は第4表に示す。

分析方法　　土器片約10ｇを粉砕し，水を加え超音波洗浄装置により分散#250の分析篩を用いて水洗，粒径1／16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別に得られた径1／4～1／8mmの粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離，重鉱物のプレパラート作製，偏光顕微鏡下にて同定した。不透明鉱物については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA，それ以外をBとした。表中の「その他」は変質等で同定不能の粒である。

同定鉱物粒数は250個を目標としたが，プレパラート全面でも100個に満ないものがあり，これらの試料の組成は，正しい値を示しているとはいえないが，参考としてグラフに載せた。「他の角閃石」としたものは，光学的性質からカミングトン角閃石である。

胎土の分類　　土器中に含まれる重鉱物斑晶の組成を手掛かりとして土器胎土の分類を行う。まず重鉱物組成の類似から，試料のグループ分けを試みた。

Aグループ（No.7，3，42，43，11，17，4，12）黒雲母の量比が多いことで特徴づけられる。

Bグループ（No.6，15，16，22）斜方輝石の量比が多いことで特徴づけられる。斜方輝石の他に角閃石が20%前後，単斜輝石が10%前後含まれる。

Cグループ（No.1，19，20，21）不透明鉱物A・B合わせて80%以上を占める。他に斜方輝石，角閃石，ジルコンを少量含む。ただし

試料No.19は不透明鉱物のAを含まず，また粉砕前の色調も他の試料が淡褐色，にぶい橙色であるのに対し，灰白色を示す。

Dグループ（No.5，8，18）不透明鉱物が最も多く，次に角閃石が多い。他に少量の斜方輝石，単斜輝石，黒雲母，ジルコン，ザクロ石等を含む。No.18はカンラン石を含む。

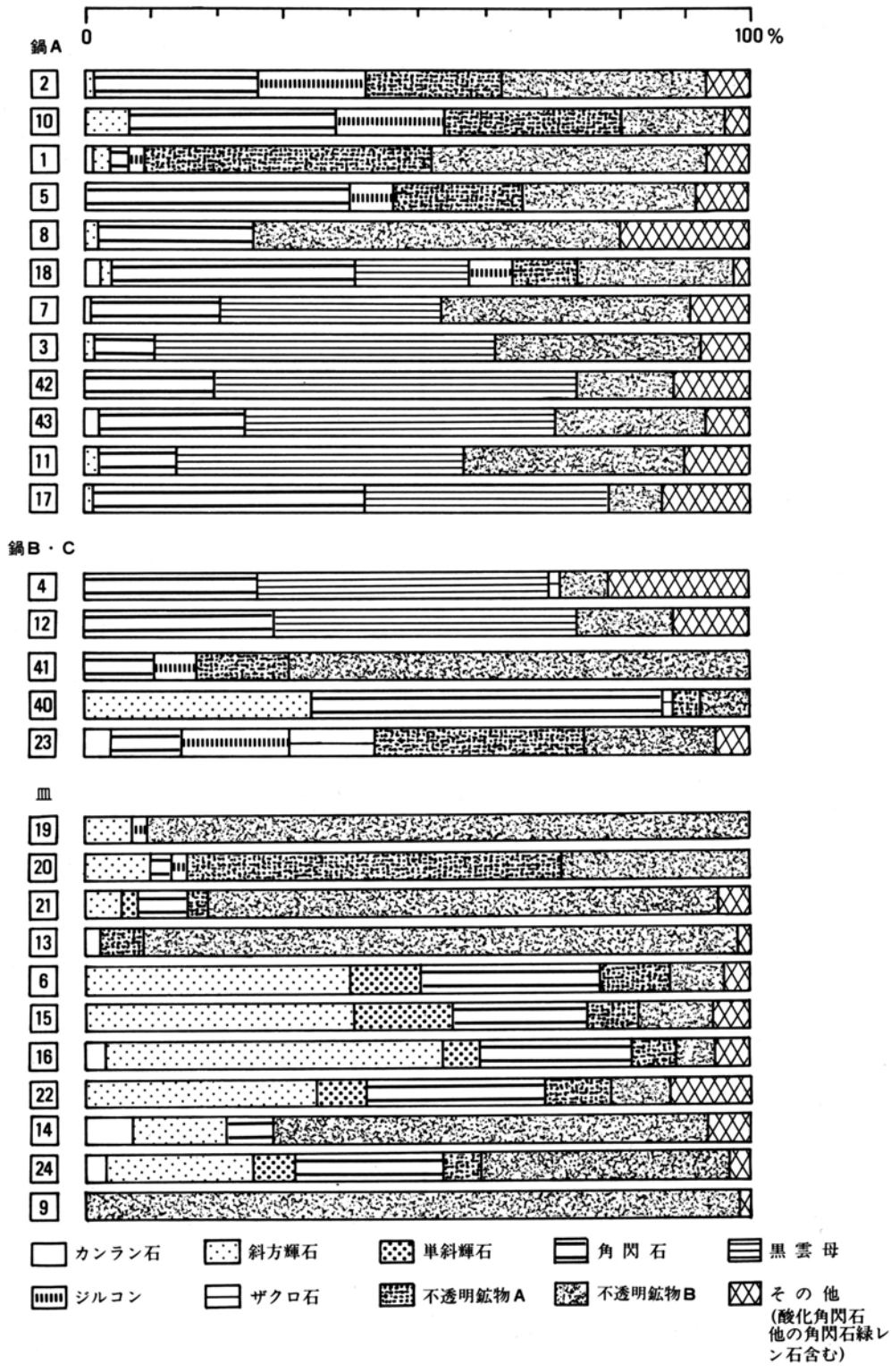
Eグループ（No.2，10）ジルコンの量比が比較的多いことで特徴づけられる。

Fグループ（No.40）角閃石と斜方輝石の量比が他のグループには見られない。単斜輝石が非常に少ない。

同定鉱物粒数が100個にみたなかった試料については，重鉱物組成から見た試料の特徴を表わしていないものであり，グループ分けから除いた。今回の分析は，土器中に含まれている径1／4～1／8mmの重鉱物組成という胎土に関する情報の一部によるグループ分けであるが，同一グループ内の試料の粉砕前の色調及び表面の様子などは，ほぼ類似の傾向を示すことから，胎土全体の違いによるグループ分けを表わしていると考えられる。

第3表 重鉱物組成

試料番号	重鉱物組成													同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母	緑レン石	ジルコン	ザクロ石	不透明鉱物		その他	
				緑石	褐色							A	B		
2		3		66					4	43	1	54	82	15	268
10		9		42						22		35	21	5	134
1	2	4		5			4		1	4		72	67	6	165
5		2		107					5	17		54	71	18	274
8	1	4	2	60	3				4	1			153	49	277
18	7	4		90	6			44	2	16		27	60	5	261
7	2			51	2			86	1	4		4	99	23	272
3		3	1	22	1			129					78	19	253
42		1		48				136	1		1	1	37	28	253
43		3	2	56				118		1	1	1	57	16	255
11		1	4	28	2			106		2			79	25	247
17	1	2	1	108			1	94		1	1	2	18	34	263
4			2	59	2		3	104	6	1	2	1	16	43	239
12		2	1	70	2			116	1		1	3	36	30	262
41				7						4		9	45		65
40	1	84	1	132						1	3	10	20	1	253
23	2			6					1	9	7	17	11	2	55
19		14		2						3			188	1	208
20	1	22		8						6		137	68	2	244
21		16	6	18								7	198	13	258
13	1											3	41	1	46
6		73	19	45	2					1		19	15	8	182
15		108	39	47	3	1					1	17	30	15	261
16	7	114	13	47	3					1	1	12	15	13	226
22	1	54	11	42		1						14	14	19	156
14	1	2			1								9	1	14
24	1	7	2	7								2	12	1	32
9					1	3							255		259


0
100 %
鍋A
2
10
1
5
8
18
7
3
42
43
11
17
鍋B・C
4
12
41
40
23
皿
19
20
21
13
6
15
16
22
14
24
9
カンラン石
斜方輝石
単斜輝石
角閃石
黒雲母
ジルコン
ザクロ石
不透明鉱物A
不透明鉱物B
その他
(酸化角閃石
他の角閃石緑レ
ン石含む)

第19図　重　鉱　物　組　成

第4表 胎土分析試料

鍋A

試料番号	出土地点	色調(表・裏)	表面観察
2	土田中央区西 SE005	明褐灰・同	φ1㎜の長石多し、石英混じる。
10	朝日西 59E SD01	明褐・灰褐	φ0.2～0.5㎜の石英多し，黒色斑晶少量あり。
1	土田 M7	淡褐・灰褐	φ0.5～1㎜の石英・長石粒多し，チャート少量混じる。
5	土田北区 SD001	灰褐・同	φ0.5～1㎜の石英・長石含む。
8	土田 59A SD01	灰褐・同	φ0.5～1㎜の長石・石英多し。
18	朝日西 SD09北	明灰褐・同	φ0.2㎜の石英・長石非常に多し。
7	土田 59B・C 粗堀	灰白・同	φ0.5㎜の長石含む。黒色斑晶微量あり。
3	土田 59A・SK13	灰褐・同	φ0.5㎜の長石・石英多し，チャート少料あり、雲母片微量あり。
42	阿弥陀寺 61 SD03	灰褐・同	φ0.5～1㎜の石英・長石・岩片多し。
43	阿弥陀寺 61 SD03	灰褐・同	φ0.1㎜の長石・石英多し，雲母少量あり。
11	朝日西 59E SD01	灰褐・暗褐灰	φ0.5～1㎜の長石・石英含む。
17	朝日西 SD09上	灰褐・同	φ0.5～1㎜の長石・石英多し，チャート斑晶あり，バブルウォール型火山ガラスふくむ。

鍋B・C

4	土田北区 SD001	灰褐・同	φ0.5～1㎜の長石・石英多し，チャートの円礫あり。
12	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5～1㎜の長石・石英多し，雲母少量含む。
41	土田 M7	灰白・同	φ0.5㎜の長石・石英・チャート少量あり。
40	土田 60C SK03	褐灰・同	極細粒の雲母片多し。
23	清洲城下町 60F SD03	褐灰・同	φ0.5～1㎜の石英・長石少量あり。

皿

19	朝日西 SD09北下	灰白・同	φ0.5㎜の石英微量あり。
20	朝日西 SD09中	にぶい橙・同	φ0.2～0.5㎜の長石・石英多し。
21	朝日西 SD09中	灰褐・褐灰	砂粒ほとんど見られず。
13	朝日西 59E SD01	灰白・同	φ0.2㎜の石英少量あり。
6	土田北区 SD001	灰白・同	φ0.5㎜の長石・石英少量あり。
15	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5㎜の長石・石英多し，雲母少量含む。
16	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5～1㎜の長石・石英多し，チャート含む，雲母微量あり。
22	清洲町下町60F, SD03	灰褐・褐灰	φ0.5㎜の石英微量あり。
14	朝日西 59E SD01	灰白・同	砂礫はほとんど見られず。
24	清洲城下町60F, SD03	灰白・同	φ0.5㎜の石英少量あり。
9	土田 82 M7	にぶい橙・同	φ0.5㎜の長石少量あり。

2 珪 藻 分 析

試料　古墳時代前期に所属すると考えられる小溝群の内，SD13（試料No.1），14（試料No.3）溝内試料及びその間の基礎土壌（試料No.2）の3点について実施。（図版2）

分析方法　珪藻化石の抽出は以下に示す方法で行なった。秤量(10～15g秤量)→過酸化水素水処理→粘土分の除去→L字形管分離→散布→封入→検鏡。検鏡は，①珪藻殻の算定は，Xカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ任意に出現する。珪藻200個体以上になるまで行なう(尚，珪藻の非常に少ない試料はこの限りでない)。②半分以上破損したものや溶解したものは1個体として数えなかった。また，細長い針状形の珪藻は先端が2個検出された時，1個体として数えた。またハイフォンで結んだ分類群は双方の区別が明確でないものである。

分析結果　各試料から検出された珪藻は，塩分濃度に対する適応性（Halobion rate）を基準として真塩性（海水生），半塩性（＝汽水生），貧塩性（淡水生）に分類し，貧塩性についてはさらに，塩分・水素イオン濃度（pH），水の流動性（Current rate）の各生態区分も行ない第6表にまとめた。

産出頻度の高い種については，全体を基数とする比率の珪藻化石群集変遷を第6表に示した（図中の帯グラフの内，最初に書かれた海水・海水～汽水・汽水・淡水の比率は全体基数，最後に書かれた淡水生種の各生態性の比率は，淡水生種の合計を基数としている。なお，両帯グラフは100個体以上検出された試料について記るしてある)。

No.1・3試料　No.1，No.3の珪藻群集は酷似しており，流水に対する適応性は，流水にも止水にも普通に出現する流水不定種と，流水に特徴的に出現する好流水種によって占められ，池沼などの止水域に多い好止水種は少なかった。また，水素イオン濃度(pH)に対する適応性は，pH 7.0付近で最もよく生育するpH不定種と，pH 7.0付近及びそれ以上で最もよく生育する好アルカリ性種がほぼ同率で，pH 7.0及びそれ以下で生育する好酸性種は少なかった。

多産種は，貧塩不定・pH不定・流水不定の，Navicula mutica, Diploneis ovalis, Cymbella minuta, Gomphonema sumatorense, Hantzschia amphioxys, 貧塩不定・好アルカリ性・流水不定のCocconeis placentula, C. placentula var. englypta, C. placetula var. lineata 及び，好流水性の Gomphonema parvulum, Cymbella turgidula var. nipponica, Achnanthes convergens, Gomphonema clevei, Navicula elginensis などである。

第5表 珪藻分析結果

Species Name	Ecology			土田 61 (小鼻 SD13, 14)		
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3
Dimerogramma minor (Greg.)Ralfs	Euh			-	1	-
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	5	26	2
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	3	-
Achnanthes inflata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	1	1
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-unk	unk	r-ph	7	11	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	9	4	-
Achnanthes laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Achnanthes lineariformis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	7	7	1
Achnanthes linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	1	3	-
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	3	6	-
Achnanthes cf. saxonica Krasske	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	1	5	1
Achnanthes suchlandtii Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-
Achnanthes tropica Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	2	1
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	4	1	-
Amphora ovalis var. pediculus Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	-
Amphora perpusilla Grunow	Ogh-ind	unk	ind	-	1	-
Anomoeoneis serians var. brachysira (Breb.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	1	-
Aulacosira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	2	1	-
Aulacosira granulata (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-
Caloneis bacillaris (Greg.) Cleve	Ogh-ind	al-il	unk	1	-	1
Caloneis kyaiina Hustedt	Ogh-ind	ind	unk	-	2	-
Caloneis schroederi Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	3	-	-
Caloneis schumanniana var. biconstricta Grunow	Ogh-ind	ind	unk	-	1	-
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	4	-
Ceratoneis vaucheriae var. intermedia (Grun.) H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	3	1
Cocconeis diminuta Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	4	7	7
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	5	1	4
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	5	9	4
Cymbella gracilis (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	-	9	-
Cymbella japonica Reich	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-
Cymbella leptoceros (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	1
Cymbella minuta Hilse ex Kabh.	Ogh-ind	ind	ind	15	26	4
Cymbella perpusilla A.Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	-	2	1
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	4	7	1
Cymbella sinuata fo. ovata Hustedt	Ogh-ind	ind	l-bi	-	1	-
Cymbella tumida (Breb.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	4	-
Cymbella tumida var. gracilis Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	1
Cymbella turgida (Greg.) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi	2	4	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzov	Ogh-ind	al-il	r-bi	6	27	5
Diatoma hiemale var. mesodon (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	5	7	1
Diatomella balfouriana (W.Smith) Greville	Ogh-ind	ind	unk	1	-	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	15	-	7
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	2	-	-
Eunotia praerupta var. inflata Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	2	-	1
Eunotia cf.rabenhorstii Cleve & Grunow	Ogh-hob	ac-il	unk	5	2	2
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Fragilaria construens var. venter (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	2	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	2	-	-
Gomphonena acuminatum var. coronata (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	l-ph	-	1	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-il	r-ph	4	5	3
Gomphonema clevei var. inaequilongum H.Kobayashi	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	5	4
Gomphonema intricatum var. pumila Grunov	Ogh-ind	al-il	l-ph	3	5	1
Gomphonema lanceolatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1
Gomphonema quadripunctatum (Oestr.)Wisl.	Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	2	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	11	7	4

Species Nane	Ecology			土田 61 (小鼻 SD13, 14)		
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3
Gomphonema parvulum var. micropus (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	ind	15	21	4
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	11	2
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	9	-	5
Navicula cocconeiformis Gregory	Ogh-hob	ac-il	r-ph	1	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	4	1	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	2
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	unk	7	-	2
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-
Navicula cryptocephala var. veneta (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	6	-	3
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	-	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	37	9	20
Navicula mutica var. cohnii (Hilse) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	15	6	1
Navicula perpusilla Grunow	Ogh-ind	ind	unk	2	-	-
Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	1	1	-
Navicula pupula var. rectangularis (Greg.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-
Navicula sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	5	3	2
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-
Neidium affine var. longiceps (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-
Neidium herrmannii Hustedt	Ogh-ind	unk	ind	2	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1
Nitzschia cf. frustulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	2	-	-
Nitzschia ignorata Krasske	Ogh-hil	al-il	unk	2	-	-
Nitzschia parvula Lewis	Ogh-ind	ind	ind	4	-	-
Pinnularia biceps Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	1	-	2
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	4	-	-
Pinnularia brebissonii var. diminuta Grunow	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-
Pinnularia graciloides Hustedt	Ogh-unk	ac-il	unk	1	-	-
Pinnularia intermedia (Largerst.) Cleve	Ogh-ind	ind	unk	2	-	-
Pinnularia japonica H.Kobayashi	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-
Pinnularia leptosoma Grunow	Ogh-hob	ind	unk	2	1	3
Pinnularia molaris Grunow	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	3	-	1
Rhoicosphenia curvata (Kuetz.) Grunov	Ogh-hil	al-il	ind	5	8	1
Rhoicosphesnia sp.	Ogh-unk	unk	unk	2	-	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	2	-	4
Stauroneis agrestris var. inflata H.Kob. and K.And.	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-
Synedra rumpens var. familiaris (Kuetz.)Grunow	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1	3	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	2	-
Marine Water Species				0	1	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0
Fresh Water Species				300	298	117
Total Number of Diatoms				300	299	117

Legend

H.R : Halobion rate

Euh : Euhalobous (Marine water)

Euh-Meh : Euhalobous to Mesohalobous (Marine to Brackish water)

Ogh-hil : Oligohalobous halophilous forms

Ogh-ind : Oligohalobous indifferent forms

Obh-hob : Oligohalobous halophobous forms

Ogh-unk : Oligohalobous unknovn

pH : potential of Hydrogen

ac-bi : Acidobiontic forms

ac-il : Acidophilous forms

ind : Indifferent forms

al-bi : Alkalibiontic forms

al-il : Alkaliphilous forms

unk : Unknown

C.R. : Current rate

l-bi : Limnobiontic forms

l-ph : Limnophilous forms

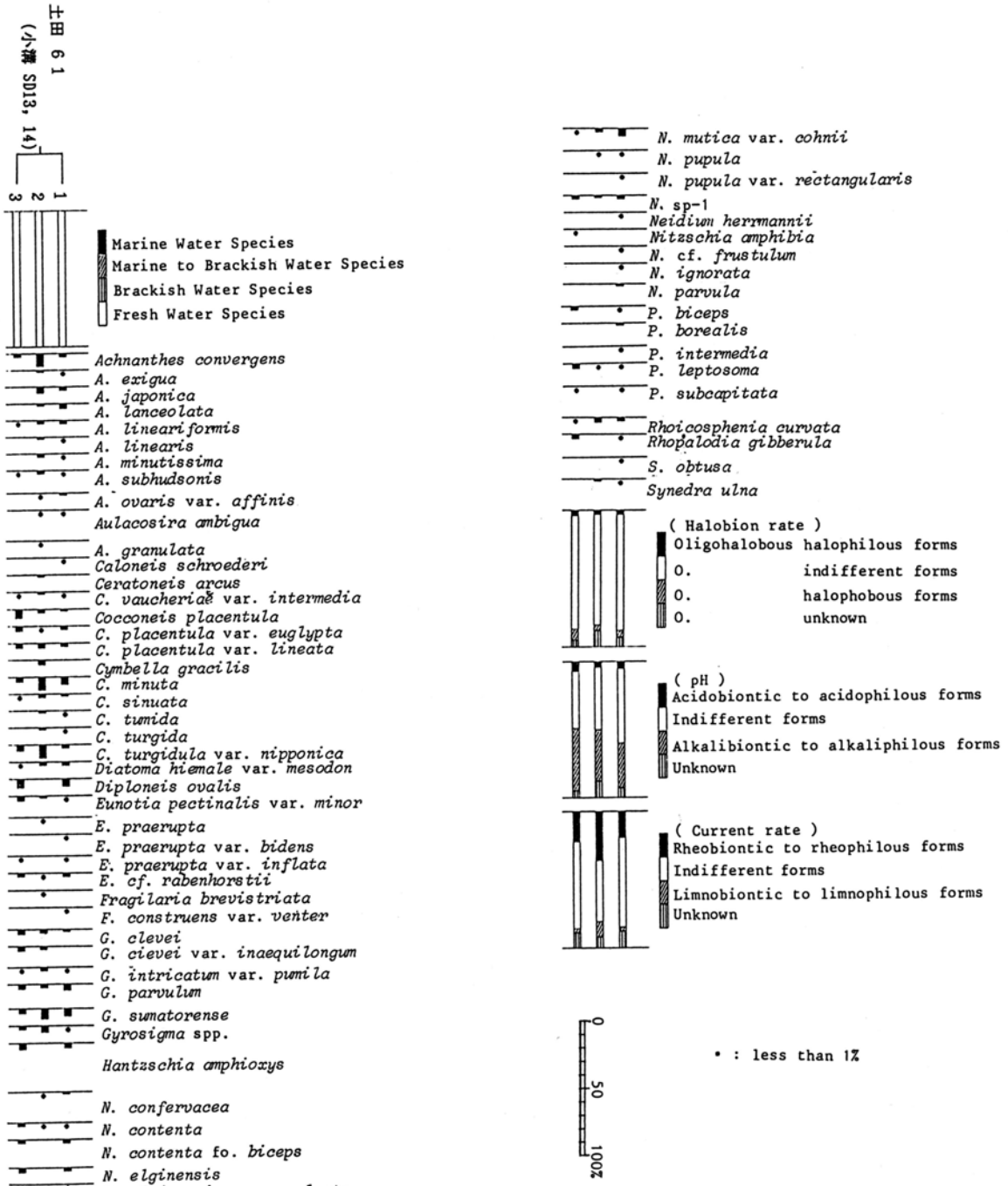
ind : Indifferent forms

r-bi : Rheobiontic forms

r-ph Rheophilous : forms

unk : Unkonvn

第6表 珪藻化石群集変遷



したがって，No. 1 (SD13)，No. 3 (SD14)，の小溝試料は，流水の影響が推定され，水質的には中性～弱アルカリ性を呈していたと考えられる。

No. 2 試料　　流水に対する適応性は，前述の小溝試料に比較して，好流水種の割合が増加しているが，pH に対しては変わらない。また，好止水種も僅かに増加する。

多産種は，好流水性の Achnanthes convergens, Cymbella turgidula var. nipponica, 流水不定種の Cymbella minuta, Gomphonema sumatorense であり，Achnanthes japonica Gomphonema clevei, G. clevei var. inacquilongum, Diatoma hiemale var. mesodon, Gomphonema parvulum などの好流水種や，Cocconeis placentula var. lineata, Rhoicosphenia curvata, Cymbella sinuata などの流水不定種，Cymbella gracilis, C. tumida, C. turgida などの好止水種を伴なう。

したがって，No. 2 試料は，No. 1・3 と同様，流水の影響が推定され，水質的には中性～弱アルカリ性であったと考えられる。

小溝内試料 No. 1，No. 3 はともに流水の環境が推定され，当時は水の流れる小川のような環境であったと考えられる。しかしこのような環境は，溝以外の No. 2 試料においても認められ，溝及び周囲の環境を問わず，広範囲に流水の影響を受けた水域の環境であったと考えられる。

3　リン，カルシウム分析

試料　　土田遺跡 SX23（図版 2）と大渕遺跡60L区 SK11[1]の方形土壙（中世期に所属）内・外から採取した試料の分析を実施した。

分析方法　　①試料は風乾して0.5mmの篩を全通させて供試した。②水分は過熱減量法により測定。③一定量（0.5g）を採取し，はじめに HNO_3 により，つぎに $HClO_4$ により過熱分解。④分解液の一定量を採取し，発色液を加えて比色法により全リン酸を測定。⑤別に分解液の一定量を採取し，干渉抑制済を加えた後，原子吸光光度法によりカルシウムを測定した。

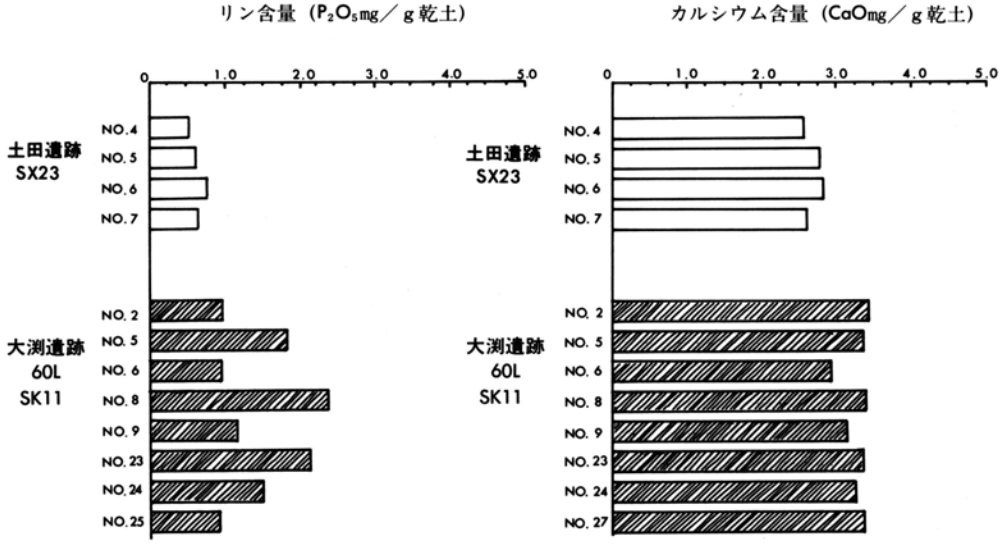
篩別した試料は，過塩酸分解を行った後，リンについてはバナドモリブデン酸法により全リン酸（T—p_2O_5）を，また原子吸光光度法により全カルシウム（T—CaO）をそれぞれ測定した。

分析結果　　土田遺跡 SX23（試料 No. 4，5，6）は土壙内より採取したもので，No. 7 は掘形基盤層から採取したものである。結果は各試料ともにリン，カルシウム含量はきわめて低く近似した値を示している。

大渕遺跡60L区 SK11（試料 No. 2，5，6，8，9，23，24，27）はすべて土壙内より

第7表　リン・カルシウム分析結果
注：リン・カルシウム含量は乾土1gあたりのmgで表わす。

土　壌	試料番号	T－P_2O_5mg	T－CaOmg
土田遺跡 SX23	4	0.53	2.57
	5	0.63	2.79
	6	0.78	2.84
	7	0.66	2.62
大渕遺跡 60L区 SK11	2	0.98	3.45
	5	1.83	3.38
	6	0.96	2.94
	8	2.37	3.40
	9	1.17	3.14
	23	2.14	3.37
	24	1.51	3.28
	27	0.93	3.39



第20図　方形土壙試料リン・カルシウム含量

採取したもので，SX23 No.7のような標準的試料はない。結果はNo.2，6，27，できわめて低いリン含量を示しているのに対して，No.8，23では若干高い傾向が認められる。カルシウム含量については，各試料とも高い含量とはいえないが，SX23より若干高い傾向が認められる。また，試料間では近似した値を示している。

以上の結果から土田遺跡SX23と大渕遺跡SK11とでは，リン，カルシウム含量に差が認められ，両土壙の内容物による区別ができる。土田遺跡SX23は標準試料No.7と他の試料とに差が見られず，近似した低い値を示していることから土壙内での内容物による影響は考えにくい。大渕遺跡SK11はリン含量をみる限り内容物の影響が考えられるものの，

標準試料による比較がない限り断定できない。また両試料に内容物の影響があるにしても目的とする内容物の影響によるリン，カルシウム含量とは考えにくい。したがって両土壙についても墓壙の可能性は低いと言える。

4　小　　結

ここでは特に土器胎土分析について，その結果を踏まえて類推できる所をまとめてみる。土器胎土重鉱分析は中世期を中心とする鍋，皿について実施したが，分析試料の絶対量不足は否定できないため，きわめて概観的な問題にのみ言及することになる。

鍋A　　分析結果を基にすると，２つに試料を大別することが可能である。すなわち試料番号(2)，(10)，(1)，(58)，(18)のまとまり（Ⅰ類）と，(7)，(3)，(42)，(43)，(11)，(17)のまとまり（II類）である。後者は分析のAグループに全て所属し，その特色は黒雲母の比率にある。前者は分析のD・Eグループになり，凡そジルコンと角閃石の比率が目立つことになろう。鍋A（伊勢型鍋）の分類（第Ⅴ章）でいくと，B～D類がⅠ類に所属し，E類はII類に限定できる。鍋Aの胎土変化は，口縁部分類でのE類の中で開始されることになる。E類はB～D類に比べ器壁がきわめて薄く「器壁の薄化」と「胎土変化」は相関関係を持つことが推測されよう。土田遺跡ではSE10（試料No.３）出土品（図版21—290）がここで言うII類に含まれ，この時期を堺に胎土変化（黒雲母の比率の増大）が推定できる。またSE07（試料No.２）出土品（図版12—70）は胎土分析のEグループに所属し，ジルコンの比量が最も多く，ジルコンの比量が時期的な変化と同一歩調をとる可能性が考えられる。また産地同定の目安ともなろう。

鍋B・C　　鍋B（所謂鍔付土釜・羽釜）は２群に分けられる。まず試料番号(4)(12)と(41)(23)である。前者は胎土分析のAグループに所属し，すなわち黒雲母の比率によって特色づけられる一群である。後者は鉱物の粒数が少ないという共通性があり，つまり胎土に含まれる砂粒がほとんど見られない精製品と言えよう。前者と後者では砂粒の絶対量に大きな差があり，粗製，精製品の区別と重複する。土田遺跡では試料No.４はSD27（図版24—384）出土品で粗製の小型品。No.41はSD42（図版29—531）出土品で精製の「土釜」である。ここで注目すべきは鍋AのII類と鍋Bの「前者」とした粗製品が黒雲母の比量に特色される同一のグループである点にある。

試料No.40は鍋CでSX44（図版30—560）出土品であり，分析結果からも特異な比率（輝石と角閃石が多く）を示す。したがって鍋Cは胎土分析結果より，鍋A・Bという伊勢型鍋・鍔付土釜の胎土変化とは，まったく異質な系統で生み出されてきた可能性が類推できる。

皿　　2大別できる。一つは試料番号(19)(20)(21)(13)と今一つは(6)(15)(16)(22)(14)(24)である。前者は胎土分析のCグループに所属し，不透明鉱物が多くを占める一群になる。後者は同様に，Bグループに所属し，輝石の量比が多く，続いて角閃石が多くを占めるという特色が見られる。すなわち輝石と角閃石の量比により時期差を想定[2]でき，胎土変化を設定できよう。

以上まとめてみると，鍋AとB(伊勢型鍋と鍔付土釜)の胎土変化は基本的に同調する動きと考えることができる。すなわち黒雲母の量比が多くなる時期をもって一つの画期を考えることができよう。鍋AのIとII類の胎土変化がこれに相当する。また鍋Bでみてきた粗製，精製の変化を加味すると，鍋の胎土変化に3つの段階を推定することが可能である。

第1段階　　ジルコンの量比が目立ち，不透明鉱物が多い。

第2段階　　黒雲母の量比が圧倒的に多い。

第3段階　　緻密，鉱物量が激減。

次に皿で見てみると，やはり，不透明鉱物が多い一群から一変して輝石，角閃石の量比が多くを占める一群に大きく変化している。これらの変化は，鍋でみた第1段階と第2段階の変化とほぼ同調する動きと考えてよい。すると第2段階の変化とはきわめて大きな意味をもってくるのであり，一つの画期を設定できる。土田遺跡では第2段階の鍋の変化は第III期に相当する。すなわち13世期末～14世期での画期を胎土変化から類推できることになる。なお第3段階の変化は粗製から精製品への変化であり，これらの変化が14世紀末～15世期にかけて実施されてゆくことが理解される。加えて鍋Cのような新型器種が，単線的な鍋類の変化の中では把握できないことが，異質な胎土を保有する点からも推察できる。

その他胎土分析から，鍋と皿は同一，類似する胎土を使用するのではないという点が明確になり，各々異質の混合物をもつ。これは土師器生産に言及できる一つの手掛りを提供したことにもなろう。土師器鍋，皿は各々の消費地独自の産物という観点では理解しがたく，一つの流通過程を経て一定の範囲に拡散するモノ[3]である可能性が強く指摘できる。そしてそれは13世紀末～14世紀にいたり大きくその枠組が変動していくことが，胎土分析より想定されるのである。

〔注〕

1）愛知県海部郡甚目寺町大渕に所在する弥生時代と古代～中世期にかけての集落遺跡。大渕遺跡の概要は財団法人愛知県教育サービスセンター年報II・IIIに記載。

2）試料番号(19)(20)は朝日西遺跡（西春日井郡清洲町，年報II・III）SD09出土品で(15)(16)は同じく朝日西遺跡SD01出土品。前者から後者へは灰釉系陶器の編年から土田遺跡第II期とIII期にほぼ相当し（第V章），輝石，角閃石が多いSD01出土品から，土田第III期に胎土変化を推定できる。

3）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』1982）

第Ⅴ章　考　　察

1　土　師　器

土田遺跡における平安時代末期～室町時代にわたる「土師器」の出土量は，同時期の灰釉系陶器に比べ比較にならないほど少ない。凡そ皿と鍋類の２つの形態が見られる。

1）　鍋

本調査区では鍋類はＡ～Ｃの３つの形（第Ⅲ章）が認められた。その内鍋Ａとした「伊勢型鍋」が量的にも多くを占め，また変化を把握する状況が認められるため以下鍋Ａを中心に記述する。

鍋Ａ

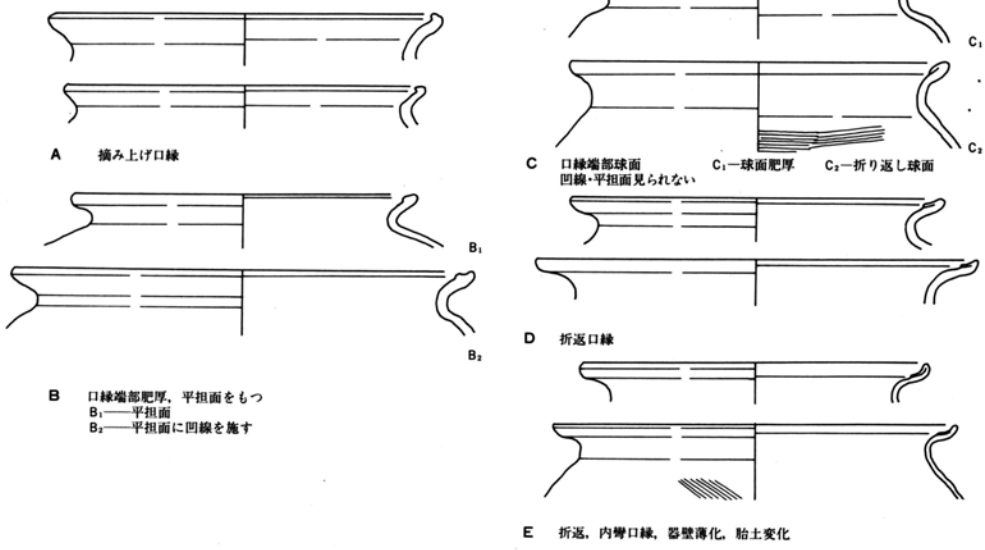
鍋Ａとしたものは所謂「伊勢型鍋[1]」の範疇に含まれるものであり，その独特な形状から容易に識別が可能である。鍋Ａを規定する最大の要素は，口縁部の特色と考えられ，その変化をもって時間の流れを推測することができる[2]。

分類　　第８表のようにＡ～Ｅ類に区分できる。これらの分類は，全体の形状について言及できる資料をもちあわせていないため，口縁部の分類を基軸とし，計測値，胎土等の特色を加えることにより実施した。Ａ類は新田分類１，２類，Ｂ・Ｃ類は３，４類，Ｄ類は５類，Ｅ類は６類にほぼ相当するものと思われる。

計測値　　口縁部を中心に，特色ある部分の数値を，上記の分類を基にまとめたものが，第９表である。

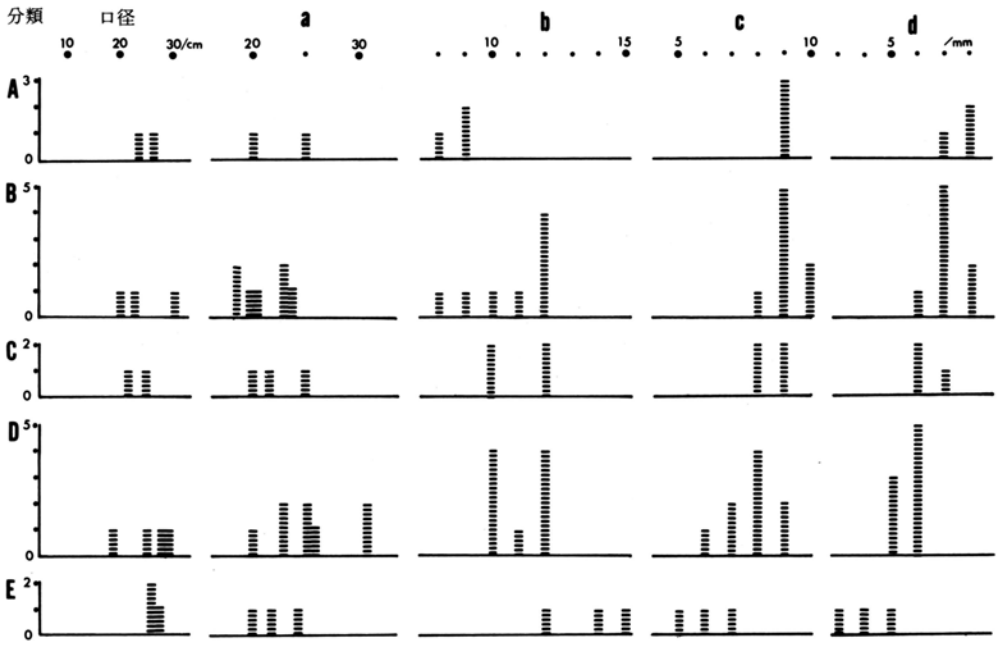
まず口径は24～28cmに集中し，伊勢地方で見られる大，中，小の法量分化は当地では見られず，中型品に限定される[3]。口縁部の長はほぼ一定であるがＤ類の段階にのみ３cmを超すものが出現する。端部の把厚，折返し幅はＡ・B_1類が８～９mm，B_2～Ｄ類までが10～12mm，Ｅ類は12mm以上となり，変化の一つの目安となる。厚さはＥ類以降急速に薄化が進むことが窺える。なお胎土は同様にＥ類以降0.5～１mmの大粒子を含むものがほとんど見られなくなり，雲母の量比が増加（第Ⅳ章小結）する。

第8表　鍋A分類



第9表　計測値

縦軸は個体数を表わす。



変化の3段階　A類においては土田遺跡で共伴関係は見られず，例えば尾張国府跡SK131[4]出土品のように灰釉椀と共伴していることが知られている。B類ではSE07（図版12—70）出土品からB_2類が高台を有する皿と共伴し，SE01（図版13—88，89）の在り方を加えれば，皿の高台製作の消略とB類からの脱却はほぼ同調する動きと考えられよう。C類についてはSK75（図版20—259）SX80（図版30—544）からB_2類と重複しつつ，SK75のように，折返し口縁に明確に移行した段階ではむしろD類と共伴すのものと考えられる。D類の折返し口縁の明確化・視覚化は，B_2類の肥厚口縁における凹線の拡大と，C類の折り返し手法の積極的な表現との融合において出現してゆくものと推測される。E類はSE10（図版21—290）の資料より，精製椀，皿類の共伴に特色づけられる。D類からE類への変化の中で口縁折返しと，端部のつまみ上げ手法と器壁の均一化が加速される。以上を綜合すると，3つの段階を設定することができる。

第1段階　肥厚口縁をもつB類の出現。高台付皿と共伴

第2段階　折返し口縁をもつD類の出現。

第3段階　胎土変化と薄化をともなうE類の登場，灰釉系陶器精製椀，皿との共伴

鍋B～D

鍋Bは所謂「鍔付土釜，羽釜」類であり，厚手粗製品Aと薄手精製品Bに大別できる。鍋Cは口縁部が直口する茶釜型「土釜」で，すべて精製品。第21図（20・21）のように2つの形状が見られる。その他第21図（19）のような口縁部が著しく把厚し，上方へ突出する形態が見られる。これらは「清郷型[5]」鍋（鍋D）の範疇に含まれるものであり，各地の状況から鍋AのA類と主体的に共伴するものと考えられよう[6]。

2）　皿

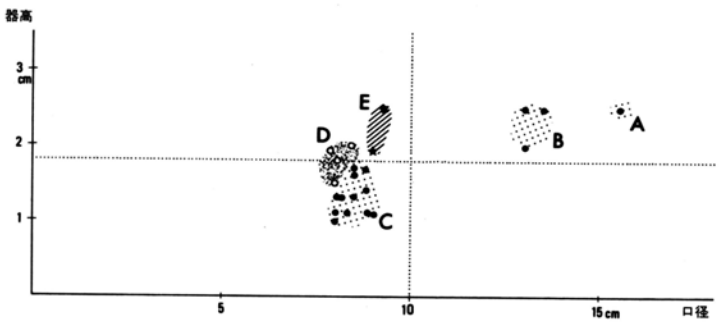
口縁部の形態，技法，法量により5類に分類する。A～C類は内型成形，D・E類はロクロ成型品である。

分類　Aは口径15.5cm，器高2.2cmで器壁が厚く，緻密の大皿。Bは口径13cm，器高2～2.5cm。Cは口径8～9cmで器高1～2cmの小皿で，口縁は丸く仕上げ，ヨコナデにより稜を持つものと，指頭圧痕を明確に留める（第21図—3・4）ものとがある。Dは口径8cm前後で，器高1.5～2cm，Eは口径9cm，器高1.8～2.5cmで底径が小さく，器

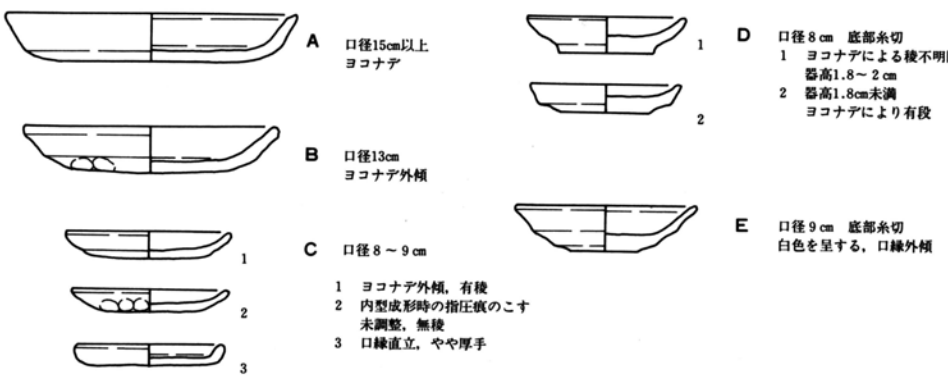
高が高く，白色を呈する土器。

関係　　皿D類はSE05（図版14—113）出土品の組成から鍋Aの第1段階とほぼ重複すると考えられる。その内（113）のような口縁ヨコナデで明確な稜をもたず，底部が突出し，底径の小さい形状のものと，第21図（13）のように有段化の体部と底径の大きい形状とが見られ，前者から後者へ漸次移行してゆくものと思われるが，後者はSX81（図版20—265）より高台の欠損する皿との共伴が推測され，鍋でいう第2段階まで残存する可能性が高い。皿D及びEというロクロ成形品は，鍋の第3段階には確実に共伴関係が認められず，第2段階の中で消滅し，その後は内型成形品のみが見られる状況が推定できよう。第2段階以降の皿はほぼ大・小という2つの法量に分化した形状が存在し，本調査区では第3段階以降，基本的には小型品（皿C）が唯一の器形としてわずかに存続するものと考えられる。なおこれら口径8～9cmという皿Cは口径の定量化に比べ器高のみが変化してゆくことが第10表から窺われる[7]。

第10表
皿の法量



第11表　皿分類

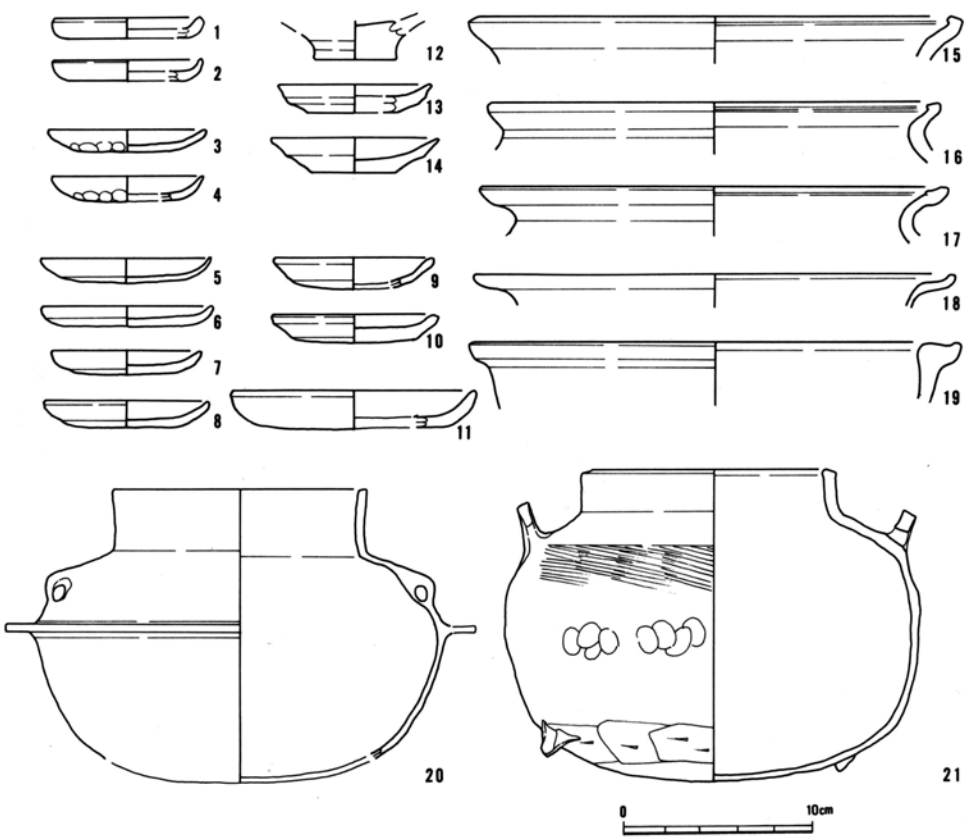


3） 土田第Ⅰ～Ⅳ期の設定

鍋Aでみた第１～３段階の変化を基軸に，皿の変化を重ね合せることにより，土師器における器種，技法，法量の変化をⅠ～Ⅳ期に区分し捉え直すことができる。

第Ⅰ期は鍋AのB類の出現。すなわち「伊勢型鍋」肥厚口縁を主体とし，皿ではD類としたロクロ成形品が見られる。第Ⅱ期は鍋AのD類，つまり折返し口縁が視覚化し，皿ではD類が器高底化と，体部有段化，底径は拡大する。現状では皿Eは第Ⅱ期に限って認められる。第Ⅲ期は鍋AではE類への移行，それに伴い器壁の薄化と胎土変化（第Ⅳ章）が見られる。また鍋Bが登場し，皿ではロクロ成形品がほとんど姿を消す。皿B，Cが主体を占める。第Ⅳ期は鍋Aが見られなくなり，鍋Bは粗製から精製へ変化する。

また鍋Cという新しい器種が加わってくる。以上まとめてみると，第Ⅰ～Ⅱ期へは，鍋Aを中心に，ロクロ成形品皿類を加えた時代。第Ⅲ～Ⅳ期へは鍋類の胎土変化と新しい煮沸具の登場，そしてやがて粗製から精製品へと大きく変わってゆく時代。以上２つの時代に大別できるのであり，その変換期である第Ⅲ期に土器の最大の画期を求めることができる。



第21図　土器実測図

〔注〕

1）新田洋「伊勢型鍋に関する若干の覚書」(『三重考古学研究』1　1985)。

2）注1）に同じ。

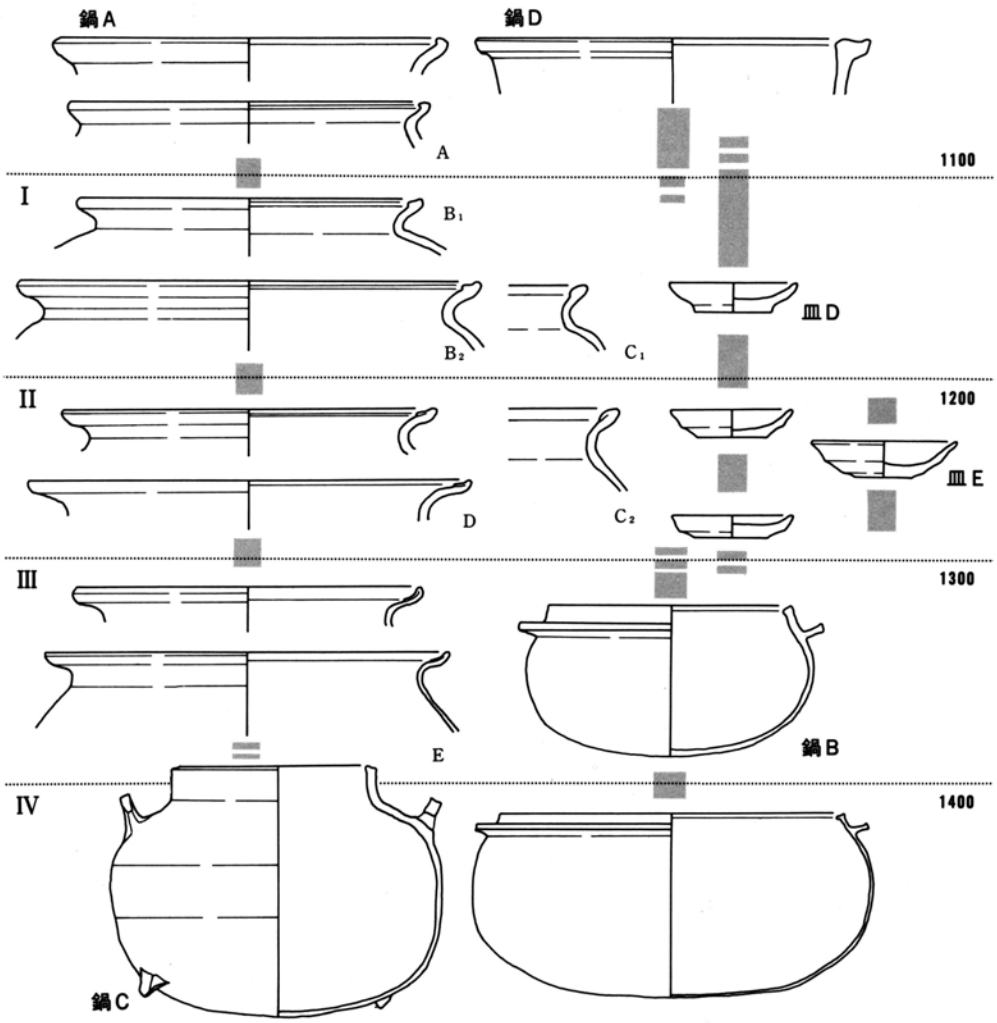
3）尾張地域では，管見による所中型品が多く認められ大型品，小型品は現状では搬入されていないようである。また新田分類7類以降の器形は当地域へ流入されていない。

4）稲沢市文化財調査報告XVIII『尾張国府跡発掘調査報告書』V1983。

5）岩野見司，大参義一「清郷遺跡」(『新編一宮市史』資料編4　1974）21—34頁。

6）「清郷型」鍋（D）は広義の折戸53号窯式の灰釉椀と共伴することが知られており，現状では猿投窯編年VI期に主体的に存在する煮沸具といえよう。

7）「皿C」についての用途を表示するものは見つかっていない。燈明皿としての使用痕は認められなかった。



第22図　土器変遷図

2　灰釉系陶器

灰釉系陶器は出土遺物の中で，最も多量に出土し，その変化をたどりえることができる資料である。そこでここでの目的を第1に器種の変化と共伴資料による様式の設定。第2に特に椀・皿の個体数の算出とその動態を把握することにおく。その方法としてまず口縁部に注目し，その変化と分類を手掛りにする。個体数の算出は口縁部計測法[1]を採用した。対象とする資料は遺構内資料を重視し，包含層遺物については第1義的に排除する方向で整理を実施した。なお本調査での椀・皿類口縁部破片総数は8335点であり，底部破片総数は7003点となる。

1）　灰釉系陶器とは

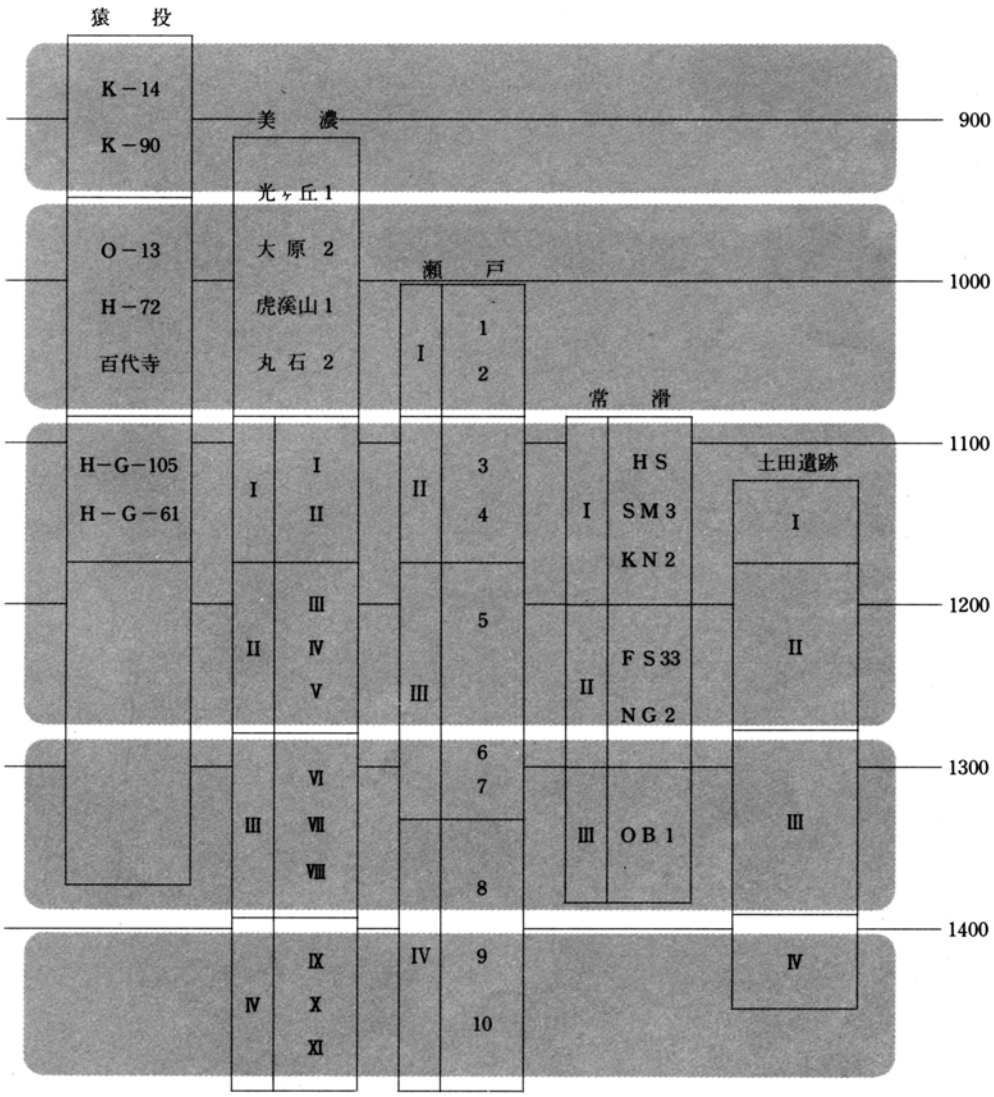
東海地域に古代～中世にかけて特色ある陶器生産が行なわれてきた。「灰釉椀」あるいはその生産から抜け出し独特な変化をたどってきた「山茶椀」と呼称される一群の焼物を中心とする陶器類。この時代の主要な器種としての椀・皿は「灰釉椀」から「山茶椀」へと変化し，その変遷は，藤澤[2]や前川[3]が見通したように「灰釉椀」の継起的な変化の中で創出されてきたのである。

ここではこれらの研究成果を踏まえて，「灰釉陶器」及びその延長上に位置づけられてきた無釉の陶器類をも含めて，とりあえず「灰釉系陶器」と総称しておくことにする。灰釉系陶器についてはすでに生産地を中心に編年作業が進められ一定の方向が確立している。そこでここではこれらの研究を基に斎藤論文[4]で明らかとなった法量分化及び変化を中心に大づかみな変遷をとりあえず確認すれば良い。すなわち基本器種「椀」を基軸にK—14・K—90段階では椀は，大・中・小の3つの器種が存在する。ところが0—53段階になると中型品を中心に法量が集中し，H—72・百代寺段階ではさらに細分化・複雑化という混沌とした状況が生じてくる。その中で「小型品」が新たに登場してくるという新たな動きもみられる。そして次のH—G—105段階では「大型」・「小型」の椀に明確に分化し，以降その延長の中で，各々器高・口径の一定の関係が生まれ，一つの方向（一定の原則に基づき）に法量が各々変化してゆく。（後述）そしてやがて一定の原則を基に法量が変化してきた関係が崩れ，やや混沌とした段階を経て新たな「椀」？の法量が規定される。この段階は精製椀の中で生まれてくる変化であり，田口編年[5]第Ⅳ期以降の器形がそれに相当するものと考え，基本的に「ミズビキ」技法と，この法量変化を同調させて考えることができる。（後述）

以上「法量」の分化及び変化の傾向により灰釉系陶器を5つに区分できるのである。す

なわち第Ⅰ期は椀の大・中・小による各々の法量変化を見るK—14・K—90段階。第Ⅱ期は法量変化の傾向が大きく崩れ，なお研究の余地が残るも比較的集中した法量が認められる0—53・百代寺段階。そしてこの混沌とした時期を経て椀の「大」・「小」が規格化する第Ⅲ期が出現する。この第Ⅲ期をもって「灰釉椀」から「無釉椀」へ100%移行する。土田遺跡で見られる椀の変化は第Ⅲ期～Ⅴ期にかけてであり，以下その変遷を具体的に記述することになる。

第12表　編年対比



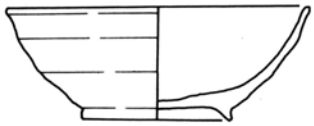
2） 椀・皿

分　　類

体部から口縁部に至る形状を基本に分類を行った。

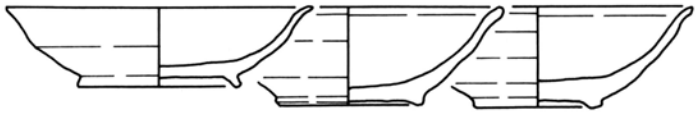
椀

A



A類
体部内彎，薄手
端部丸く整える。

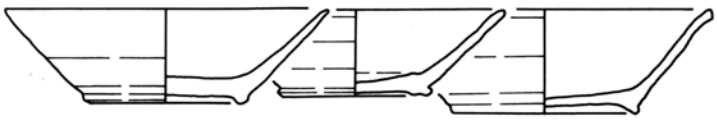
B



B₁ 口縁端部細く鋭利　B₂ 口縁端部丸く整える　B₃ 口縁端部面取り

B類
体部内彎し，口縁部外反

C



C₁ 口縁端部細く鋭利　C₂ 口縁端部丸く整える　C₃ 口縁端部面取り

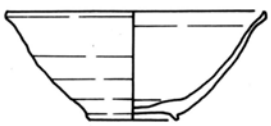
C類
体部、口縁にいたるも
変化なく外傾。

D

D₁ 体部内彎傾向　D₂ 体部外傾

D類
体部外面の凹凸が著しい
口縁端部肥厚
底径小さい。

E



E類
体部薄く，器高指数45～
40と最も高い。器形の深
い椀。
精製品

F

F₁ 体部外傾　F₂ 体部内彎

F類
器壁は均一化した精製品
体部は大きくひらき，口
縁端部は小さく面取る。

皿

A

A_1
体部内彎し，口縁部外反
口縁端部は細く鋭利

A_2
体部は口縁に向って外傾
あるいは外反

A類
高台を有する

B

B_1
底径が小さく，やや突出する

B_2
体部外傾，外反

B_3
体部内彎傾向

B類
高台を欠損するも，器高は比較的高い。
ヨコナデにより体部が2段構成になるものが多い。

C

C_1
口縁外反

C_2
口縁内彎

C類
口縁端部に面取，幅広い面をもつ
器壁は均一化

D

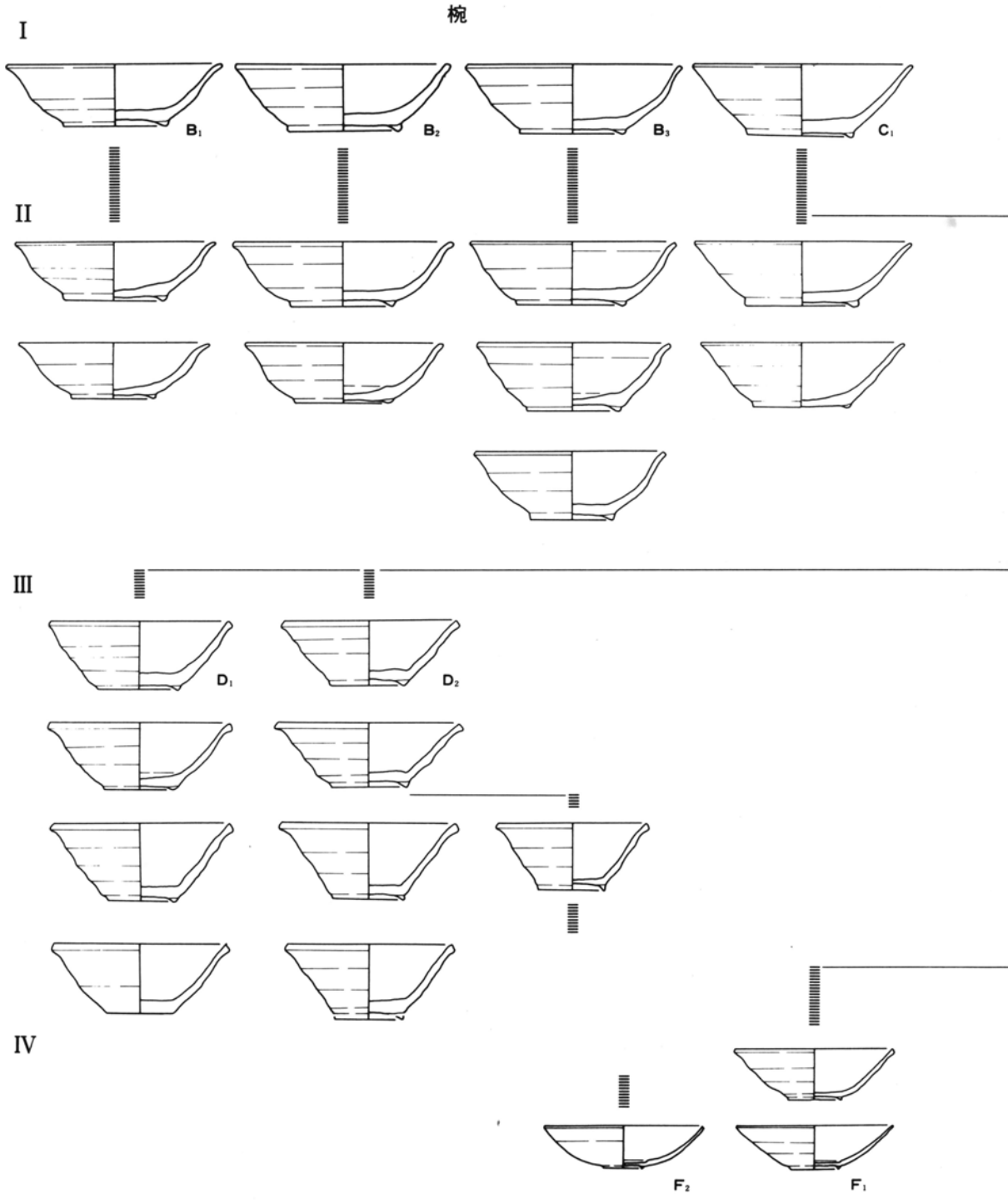
D_1
口縁外反

D_2
口縁内彎

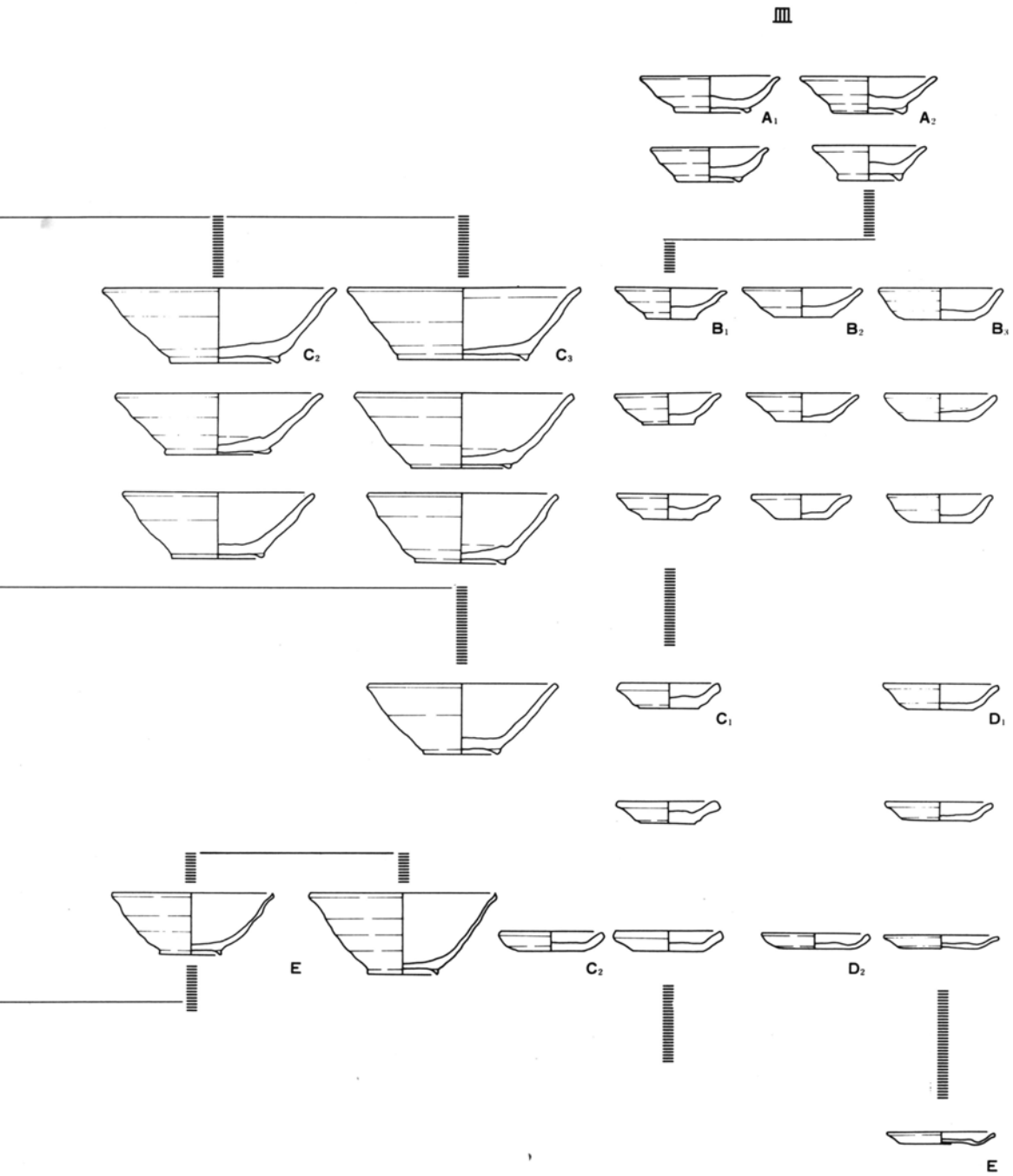
D類
E類に比べ器壁が若干厚い，精製品

E

E類
器壁が著しく薄い
精製品
器高1cm以下



第23図　椀・皿の変化


Ⅲ
A1
A2
B1
B2
B3
C2
C3
C1
D1
E
C2
D2
E

時期区分と法量

前記した土師器による時期区分を基に，遺構の重複関係を加えながら本遺跡の遺構内出土遺物を第Ⅰ～Ⅳ期に区分する。その代表的資料は，第Ⅰ期 SK05・SE05・SE07，第Ⅱ期 SE11・SE16，第Ⅲ期 SD61，SD65・SK67・SE10・SE20，第Ⅳ期 SD24・SE21 出土遺物である。以下これらの資料を中心に話を進める。

第Ⅰ期　SK05・SE05・SE07 出土遺物の椀については，第24図のごとく，口径17cm，器高 5 cm，底径 8 cmに中心を置き，口縁の分類では B_1類（29%）と C_1類（43%）が主体を占めることが理解できる。その内でも B_1類が口径18・17cmであるのに比べ，C_1類が18～16cmとなり，C_2類での16cmを考慮に入れると，C類に口径の縮小化が窺える。

皿はA類に限定でき，A_2類の比率が78%と高い。口径 9 ～10cm，器高 3 cm，底径 5 cmに中心を置くが，その内 A_2類は口径 9 cmを中心とする。A_1から A_2類への変化を口径の縮小化から類推でき，同様のことが底径の変化からも窺い知れる。

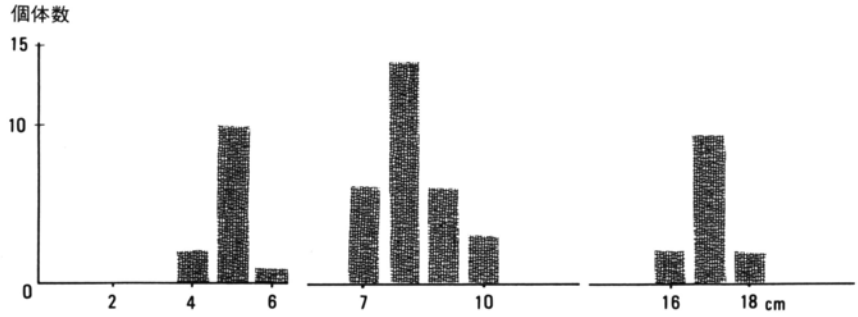
第Ⅱ期　SE01・SE16 出土椀類は，口径15～16cm，器高 5 cm，底径 7 ～ 8 cmに中心を置く。第Ⅰ期と異なり，B_3類・C_3類という口縁端部に面を持つタイプの椀が主体を占め（各々40%）基本的な形態となる。また B_3類 C_3類には器高の増加，C_3類では底径の縮小化が見られる。

皿はA類にかわって高台が存在しないB類に限定される。その内 B_1類とした底径の比較的小さいものが全体の50%を占める。口径 8 cm，器高 2 cm，底径 4 ～ 5 cm。底径では B_2・B_3類が 5 cmに集中するのに比べて，B_1類は 4 cmと小さく一定の大きさを保有する。口径は B_1類に多様化ばらつきが見られ，縮小化が B_1類を中心に始まっていることが推測される。

第Ⅲ期　SD65・SK67・SD61・SE10・SE20 出土の椀をみてみると，口径14 cm，器高 5 ～ 6 cm，底径 6 cmの数値に中心が認められる。B・C類がほぼ姿を消すが，C_3類のみ残存する。（21%）D類が58%と大多数を占め，口縁肥厚が基本的な形態といえよう。また新たにE類が登場する。口径では全体に縮小化が見られ，特にE類で顕著となる。器高は D_2・E類に増大傾向が見られ，底径は変ってD・E類に縮小化が認められる。

皿は口径 8 cm，器高 1 ～ 2 cm，底径 4 ～ 5 cmとなり，特に口径は 8

椀



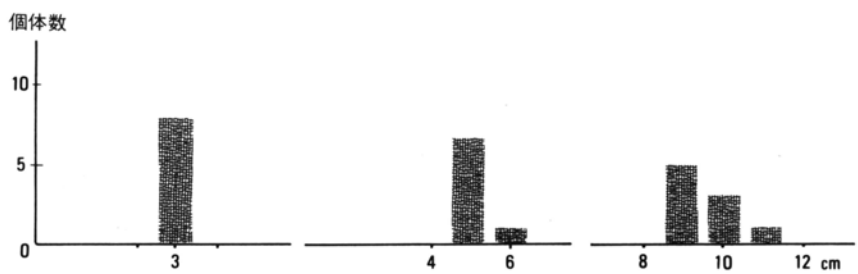
器高 cm / 分類	4	5	6	7
A		10		
B_1		30		
B_2		10		
B_3			100	
C_1	100	40		
C_2		10		
計	15	77	8	

底径	6	7	8	9	10
A					
B_1			40		
B_2				25	
B_3			10		
C_1			40	75	
C_2			10		
計			67	33	

口径	15	16	17	18	19
A			10		
B_1			30	50	
B_2			10		
B_3			10		
C_1		50	40	50	
C_2		50			
計		14	72	14	

合計
7
29
7
7
43
7

皿



cm / 分類	1	2	3	4
A_1			25	
A_2			75	
計			100	

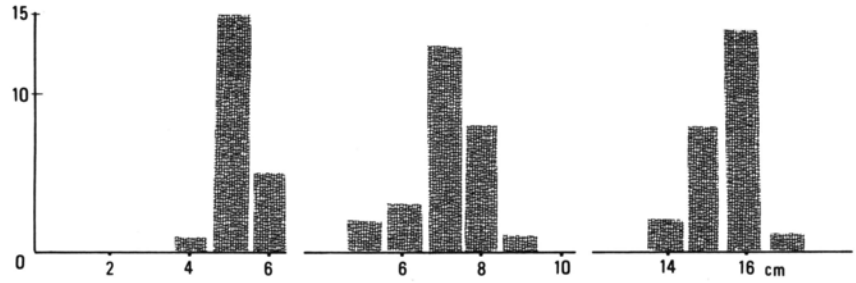
4	5	6	7	8
	14	100		
	86			
	90	10		

8	9	10	11	12
		33	100	
	100	67		
	56	33	11	

22
78

第24図　法量別形態の比率（第Ⅰ期）

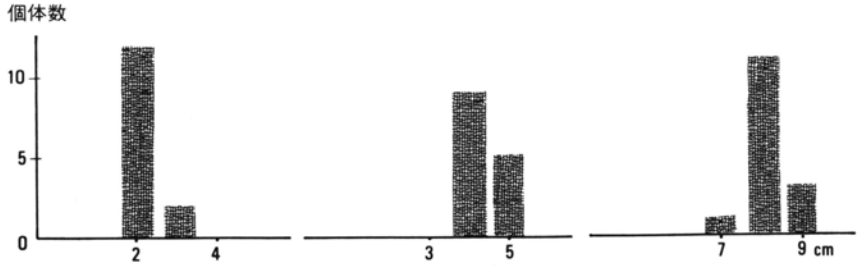
個体数　椀



分類 cm	器高 4	5	6	7	底径 5	6	7	8	9	口径 13	14	15	16	17	合計
B_1	100						10					13			4
B_2		13						33					14		8
B_3		47	40				50	50	100			62	38		40
C_1															
C_2		13			50		10						14		8
C_3		27	60		50	100	30	17			100	25	38	100	40
計	5	71	24		10	10	48	29	3		8	32	56	4	

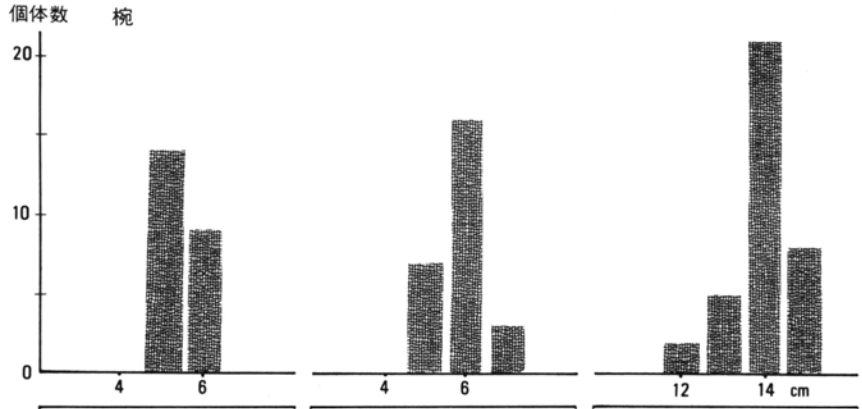
皿

個体数



分類 cm	0	1	2	3	2	3	4	5	6	6	7	8	9	10	
B_1			50	50			70				100	45	50		50
B_2			42				30	50				45			36
B_3			8	50				50				10	50		14
計			86	14			71	29			7	79	14		

第25図　法量別形態の比率（第II期）

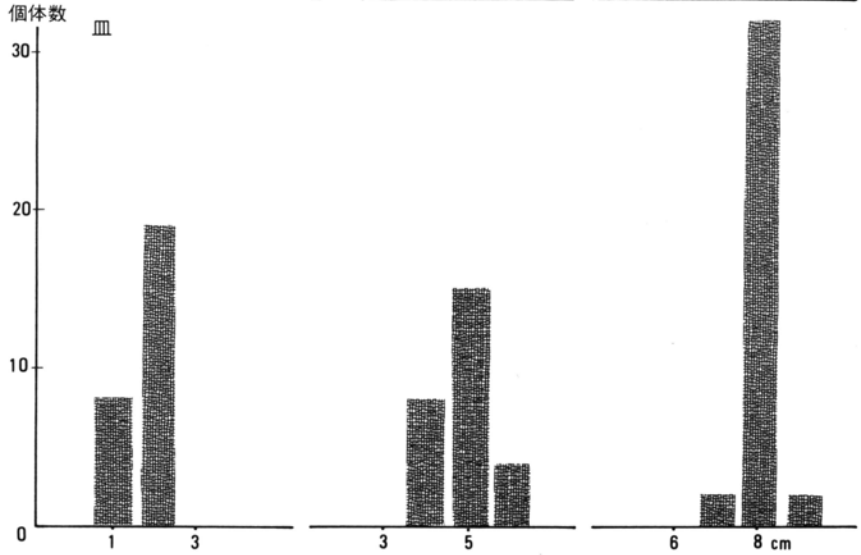


器高 分類 cm	3	4	5	6
C_3			14	10
D_1			43	
D_2			29	45
E			14	45
計			60	40

底径	3	4	5	6	7
				18	
			14	29	
			28	40	
			58	13	
			29	71	

口径	12	13	14	15	16
		40	10	40	
			53	10	
		60	21	25	
	100		16	25	
	5	11	59	25	

合計
21
29
29
21



分類 cm	1	2	3	4
B_1	13	14		
B_2		6		
B_3		6		
C_1	50	58		
C_2				
D_1	37	10		
D_2		6		
計	30	70		

	3	4	5	6	7
		37	6		
		13			
			6		
		25	76	50	
		25	6	50	
			6		
		30	56	14	

	5	6	7	8	9
			50	12	
				4	
				8	
			50	60	
				12	100
				4	
			7	86	7

14
4
5
55
17
5

第26図　法量別形態の比率（第III期）

cmに限定してよいほどの規格化が進む。器種はC類が５０％を占め，その他D_1類（17％）・B_1類（14％）が続く。器高はC・D類に縮小化が著しく，底径は逆にC・D類に拡大化が見られる。

椀と皿の底径が近似する大きさまでに接近する。

第IV期　SD64・SE21出土遺物での椀・皿類は，個体数が少なく一つの傾向を示すに留まる。

椀はF類に限定され，他の器種はすでに消滅したものと考えられる。口径12cm，器高４cm，底径４cm。F_2類は各計測値にばらつきが見られ，器高・底径に縮小化が認められることにより，変化を内包した器種（次期へ発展）である可能性が考えられる。

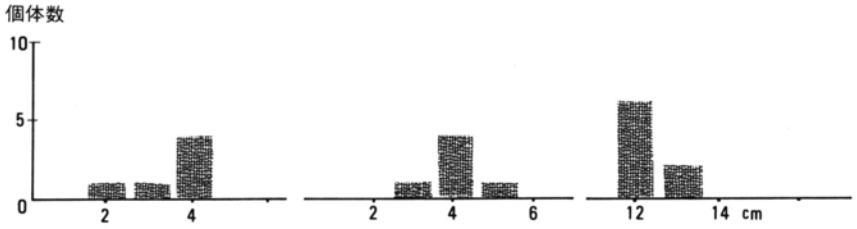
皿はほとんど，それ自体が消滅する傾向にあり，わずかにE類が見られるにすぎない。口径８cmとIII期から変化しないが，器壁は薄くなり，器高は１cm未満となる。底径５～６cm。底径における大きさで椀と皿が逆転する。

比率

第Ⅰ～IV期までの椀・皿分類の構成をまとめたものが第28図である。第Ⅰ期は椀B_1・C_1類が主体を占め，皿はA類との組合せ。第II期はB_3・C_3類が主体を占め，皿ではB_1・B_2類。第III期になるとD類が多く見られ，これにE類が加わる。皿ではC類が中心でD類が加わる。第IV期になるとほとんどの器種が消失し椀F・皿E類に限定される。

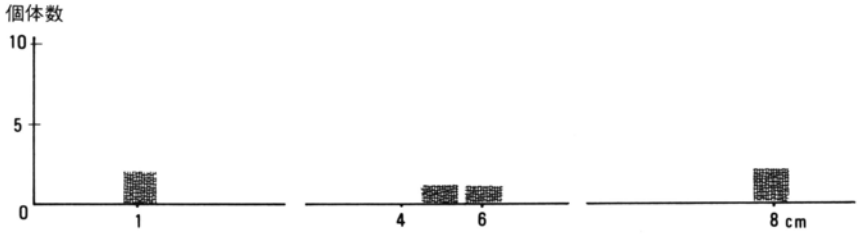
以上の基本器種の変遷を基に，法量の変化を見てみると，法量が変化する器種は各時期ある特定のものに限定でき，その変化から次の時期を代表する器種が見い出されていく傾向が認められる。例えば椀ではD類に見られる口縁部の肥厚は，C_3類においてその指向が窺える。皿ではC類に見られる口縁の面取りはB_1類の内に見い出されるのであり，B_1類の法量変化からC類が産みだされてゆく過程が推測されよう。しかしこれらの変遷に非連続性が見い出させる場合もある。例えば椀E・F類，皿D・E類の登場である。これについては生産地との関係を重視しなくてはならない。

椀



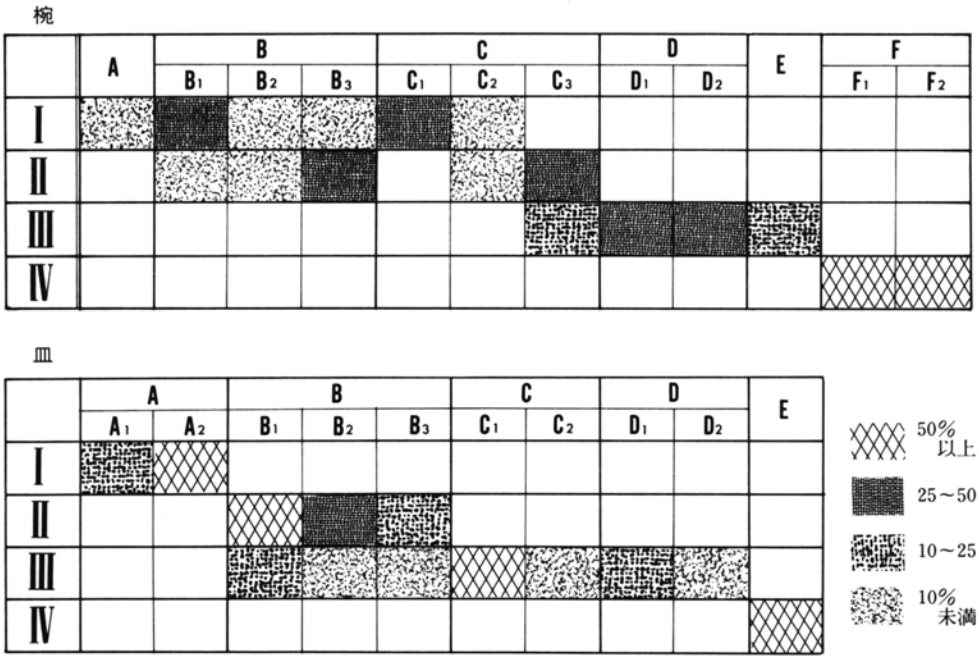
分類 \ cm	器高 1	2	3	4	底径 1	2	3	4	5	口径 11	12	13	14	15	合計
F1			100	75				100			67				50
F2		100		25			100		100		33	100			50
計		17	17	66			17	66	17		75	25			

皿



分類 \ cm	1	2	3	4	2	3	4	5	6	5	6	7	8	9	
E	100							100	100				100		100
計	100							50	50				100		

第27図　法量別形態の比率（第IV期）



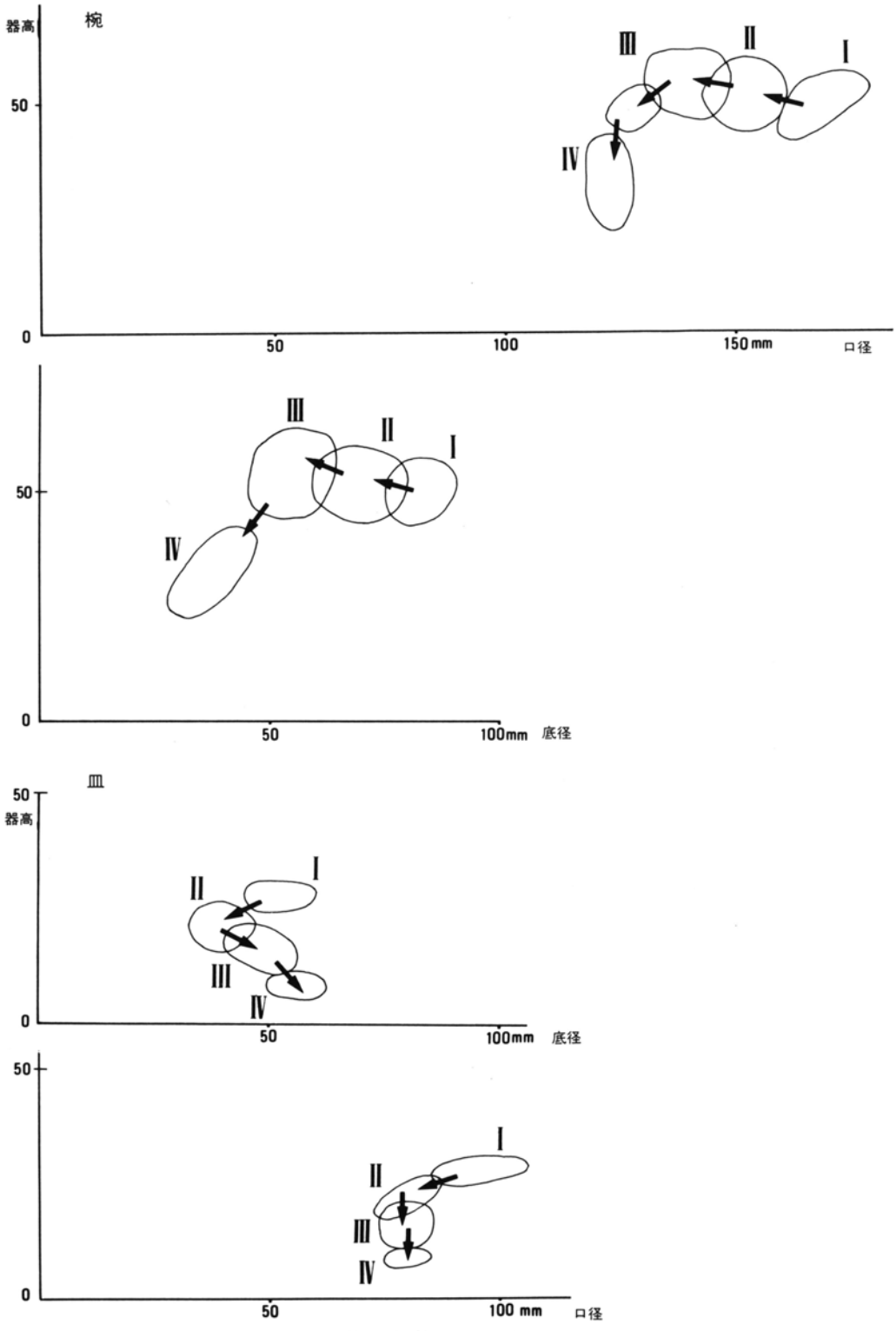
第28図　器種別比率

法量の傾向変化

第29図は椀・皿の器高・口径及び器高・底径の時期別推移グラフである。まず椀では器高・口径でⅠ～Ⅲ期とⅣ期の間に大きな変化が認められる。Ⅰ～Ⅲ期では口径は一定の割合で縮小し器高はむしろ一定の割合で増大している。そしてⅢ期で最大となり，Ⅲ期内部で器高の縮小と口径の縮小が進む。Ⅳ期になると口径が一定化し，器高だけが一定の割合で低下している。第Ⅲ期の口径・器高の同時縮小化現象に法量変化の一つの法則が隠されているように思われる。底径はⅠ～Ⅳ期一定の割合で縮少しているのであり，そこに何らの変化は認められない。つまり「底径」の「大きさ」が一つの時期決定の目安となることが読みとれるのである。

皿では第Ⅰ～Ⅱ期の間に変化を見い出しえる。すなわちⅠ期では一定の割合で口径の縮小化，器高の縮小化が進み，それが第Ⅱ期に受け継がれ，その内部で一定の口径の大きさが規格化される。したがってⅡ～Ⅳ期へは器高のみが一定の割合で減少するのみという傾向が見い出される。底径も同様にⅠ～Ⅱ期の間に画期が見られ，Ⅰ期では底径が一定の割合で減少し，Ⅱ期内で底径が最小になり，それ以後逆に一定の割合で拡大する傾向が確立する。

以上を綜合すると，椀ではⅢ～Ⅳ期に，皿ではⅠ～Ⅱ期に一つの法量変化での画期を，設定できる。前者を「椀の傾向変化」，後者を「皿の傾向変化」とする。


椀
器高
50
0
50
100
150 mm
口径
Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅳ
50
100mm
底径
皿
50
器高
0
50
100mm
底径
50
0
50
100 mm
口径

第29図　椀・皿の法量

法量分化的現象

第29図から明らかなように基本的に，椀・皿とも法量分化が見られない。ある時期一定の数値を保有する形状のみが生産されたにすぎない。しかし一見強固に見えるこの法量の規格化は，詳細に見てゆくことにより一つの異様な現象が浮びあがってくる。それは椀の器高・口径の表の中に表われた第III期内での変化に見られる。具体的に見てゆく。椀D_1類のSK67（図版22）（304）と（307）の関係。あるいは椀E類のSE20（図版19）の（228）と（229）の関係である。椀の「大」・「小」の関係が存在する。まさに法量分化的な現象である。椀E類の在り方は生産地においても同一の窯内[6]で発見されるのであり，ある時期椀の「大」・「小」が併存することは確実である。ところがこの椀の大・小はそれ以降・明確な形で存続することは全く認められないのであり，きわめて単発的な，特異な現象といわざるをえない。そこでこの現象をさきほどの「椀の傾向変化」という視点より捉え直すと，この法量分化的現象は，以下のように理解される。すなわち第III期内において一定の割合で口径の縮少と器高の増大が進み，一つの到達点を迎えると，その後そのカタチを相以的に縮少する方向において，新しい法量変化の傾向を見い出そうとした軌跡と考えられる。一見法量分化的な現象を産み出すことにより，新しいカタチを創出する手段と理解しえる。同様なことが皿においても見い出せるのであり，Ⅰ～II期の「皿の傾向変化」も，法量的には，法量分化的，相以変化において新しい形，B類を出現させたものと考えられる。この点においては皿のA類とB類との間で「小椀」から「皿」へ呼称を変更させることに同意できる[7]

椀・皿ともに法量分化的現象を一つの契機として新しいカタチを創出した。

椀と皿の関係

本調査区において，椀・皿がどのような比率で使用されていたのかを考えてみる必要がある。第13表は前述した第Ⅰ～IVの基準資料に，多くの遺物が出土した溝状遺構の資料を加えたもので，口縁部計測法により算出した個体数である。話を進める前に第IV期の資料は除外することをことわっておく。理由は，第1に個体数が著しく少ない。第2に「皿」自体の消滅という特色的な現象が見られる点にあり，したがって有効性がないと判断するからである。

第Ⅰ～III期の総個体数を算出し，椀を1とした時の皿の比率を算出すことを主眼におく。第13表の結果より，まず基準資料においては椀1に対し皿0.9・溝では椀1に対し皿は0.9あるいは0.99という数値を得た。合計椀1に対し皿0.92となり，椀は10個に対し皿9個の組合せが推測される。統計処理上の誤差，遺構の在り方を加味し，単純化を恐れず提示すれば椀1に対し皿1が対応することになる。

第13表　椀・皿個体数とその比率

椀

時期＼分類	A	B	C	D	E	F	合計
I	0.13	3.92	2.45				6.50
II		8.16	4.59				12.75
III			2.17	9.96	4.00		16.13
IV						1.84	1.84
SD41	0.67	8.96	3.34				12.97
SD42		0.96	2.29	3.62	0.42		7.29
SD27		1.37	6.05	1.17			8.59
合　計	0.80	23.37	20.89	14.75	4.42	1.84	66.07

皿

時期＼分類	A	B	C	D	E	合計
I	5.83					5.83
II		10.62				10.62
III		3.17	8.67	3.54		15.38
IV					0.21	0.21
SD41	1.29	4.33				5.62
SD42		5.79	6.63	0.58		13.00
SD27	0.46	4.42	2.67	0.96		8.51
合　計	7.58	28.33	17.97	5.08	0.21	59.17

	椀	皿	比率
I～III	35.38	31.83	1：0.90
SD41・42	20.26	18.62	1：0.92
SD27	8.59	8.51	1：0.99
合　計	64.23	58.96	1：0.92

土田遺跡においては椀・皿の用途問題を排除しても，１：１の組合せが一般的な関係であったと推定する。

技法と道具

椀の製作技法について大きく２種ある。技法Ａは，基本的に須恵器技法を踏襲する，粘土紐積み上げ，ロクロ回転整形の手法を持つもので，技法Ｂは，ロクロミズビキ技法を意味する。本調査区出土遺物の大半は技法Ａに基づく製作であることは，各部所で確認される粘土紐の痕跡から明白である。この点はすでに中野[8]が指摘している。

そこで技法Ａについて今少し詳細に見てゆく必要がある。この成形技法は第１～３工程に大別され，第１工程は粘土紐積み上げ[9]後手動による整形という素形作り工程。第２工程はロクロの回転力を使用した整形工程で，形状の再生を意味し，製作者のイメージがカタチとしての特色を志向する段階であり，同時に道具を使用し鋭利さを追求する。(工具整形) その後口縁部を調整（多くはヨコナデ手法）し，ロクロ上部の粘土塊からの切断を行う。（糸切技法）第３工程は糸切により単独化した個体を改めて整える段階で，一定の小乾燥を必要とする。底部の調整と高台製作，そして高台製作に伴う体部下半外面のミダレ[11]を調整（外面調整）し終了する。第１～第３工程後乾燥工程へと連続する。

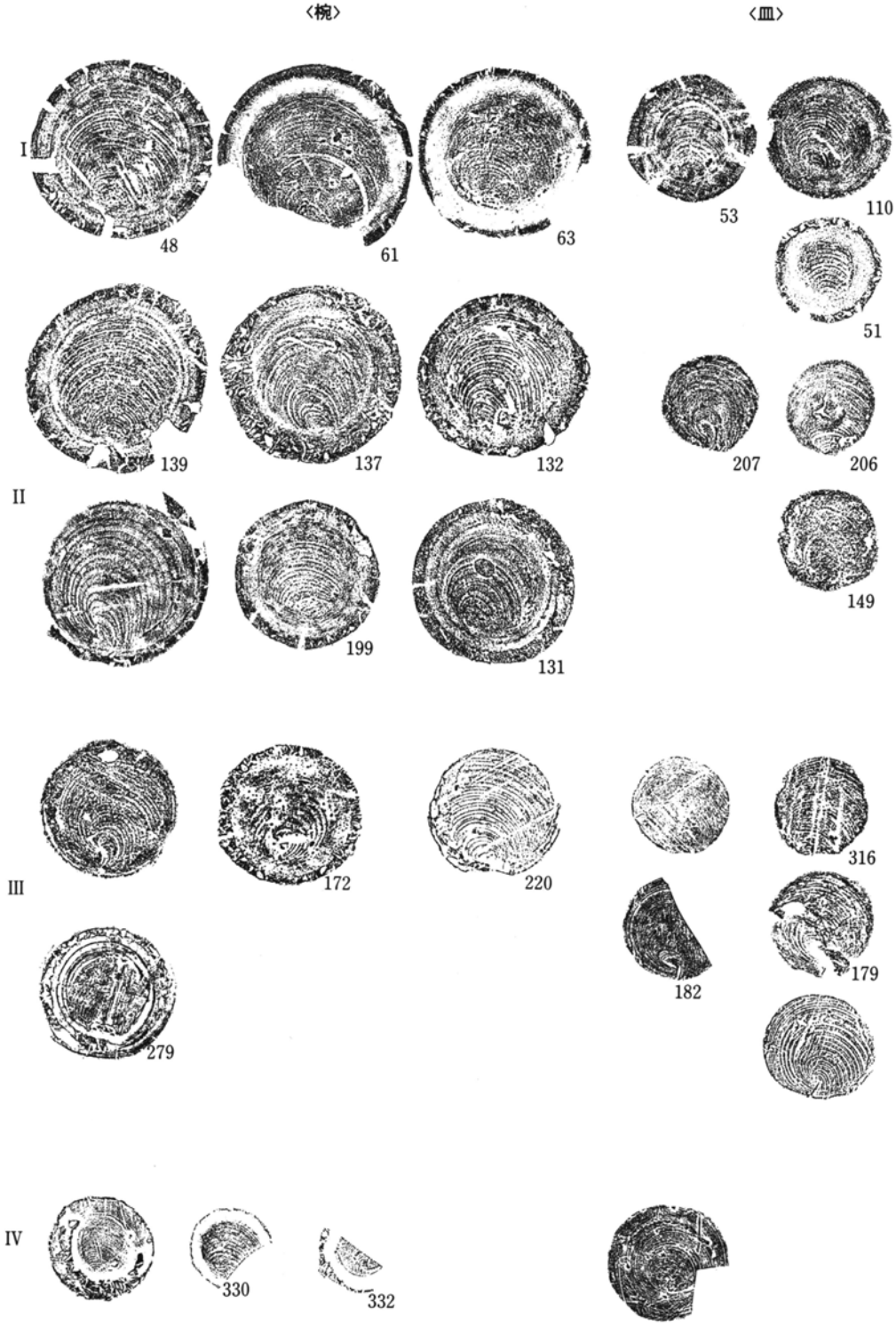
さて第１～第３工程内には各々様々な手順が見られる。これらの手順の変化が各時期の器形の特色を導き出している。そこで次に手順を単純化し，第Ⅰ～Ⅳ期の製作に言及する。

手順――Ａ　第２工程において，工具整形がきわめて入念に実施され，したがって体部から口縁部へ向けて器壁の薄さと，平滑さを表現する。第３工程の高台製作と外面調整は同様に実施される。

手順――Ｂ　第２工程において，工具整形が体部と底部に分離し，しだいに底部での整形が粗雑化する。と同時に底部内面中央に出現した工具離脱痕を指で調整（指頭調整）することが多く見られる。やがて指頭調整に別の意味が付加され独立する[12]。第３工程の外面調整は早くも省略し，外面に泥漿化が目立つ。

手順――Ｃ　第２工程での工具整形が特に体部を中心にのみ施され，その後口縁部の調整（ヨコナデ）も消略される。第３工程はほとんど意味をなくし[13]，最終的には消略される。

ロクロ回転惰力の利用と，工具整形による素形変化という２つの観点から手順Ａ～Ｃを捉え直してみると，以下の３つの点が注目される。１，第Ⅰ期～第Ⅲ期への器形変化の中で体部の彎曲から直線化への動きが認められる。２，第30図から明らかなように，底部糸切痕に見られる回転惰力利用が減少する。３，体部の泥漿化が著しくなる。以上の諸点を



第30図　椀・皿底部拓影　1/3

綜合すると，粘土紐積み上げ技法による，直接的な素形が，すなわち椀の「カタチ」であるという方向に進んでいることが認められよう。つまり手順Aでのカタチの「再生」は徐徐に後退し，手順B～Cへは素形そのものが椀の形として理解され，ロクロ使用は単に回転台としての役割へ転化していったものと推測される。無釉椀は各種の手順を省略しやがて第3工程をも省略しようとした手順Cにおいてカタチとしての限界が決定的となっていたのである

第Ⅰ期の椀は手順Aが主体をなし，第Ⅱ期になると手順Bが多く使用され，第Ⅲ期後半にいたると手順Cが登場してくる。

ところで第30図の糸切痕の拓影から興味深い変化が見られる。すなわち第Ⅳ期にいたるとロクロ回転が再び圧到的に強くなる点である。これは第Ⅰ～Ⅲ期へのロクロ回転惰力の消極的使用方向とはまるで異なる状況といえる。第Ⅳ期といえば，椀は「傾向変化」が成功した段階に相当し，F類の登場が見られた。F類は器高が底く，器壁の薄化，均一化が見られるのであり，ロクロ回転力の積極的使用を加味すれば，技法Bによる成形を推定できるものと考える。すなわちロクロミズビキ技法の採用である。するとF類とは技法自体に大きな画期を設定できるのであり，椀は基本的にA～E類の技法Aと，F類の技法Bに大別され，そこに非連続的状況を想定する。「椀の傾向変化」とはこの間の断絶に至る道程と位置づけられよう。

年　　代

前川論文[14]の中で広義の折戸53号窯式を10世紀～11世紀末に位置づけている。灰釉椀から転化した無釉椀は平安京白河北殿北辺 SE25 において瓦器（橋本編年Ⅰ$_{-3}$期）と共伴[15]し，土師器では平安京Ⅲ期新と共伴することが指摘され，11世紀末（瓦器Ⅰ期の中で）には出現していることが確認されている。また同じ平安京で瓦器Ⅲ期[16]に共伴するものは，本調査区でのB・C類の3段階の器形にほぼ相当するものと考えられる。ところで皿のA～B類への変化については，皿A類と平安京Ⅳ期古段階の土師器とが共伴し，12世紀前半代まではA類が主体であると推測できよう。藤澤[17]，中野[18]も高台付皿の欠損を12世紀後半の中においており，皿の高台の消失については各方面でほとんど一致を見ているものと思われる。上記した平安京での在り方に東大寺旧境内[19]の状況を考え合わせると，土田遺跡第Ⅱ期～第Ⅲ期への移行を13世紀末に位置づけられるものと推定する。以上まとめてみると土田第Ⅰ期は12世紀前半を中心とし，第Ⅱ期は12世紀末～13世紀，第Ⅲ期は13世紀末～14世紀に比定できる。また第Ⅳ期は SD64 出土遺物に見られるように，古瀬戸後期及び美濃窯第Ⅳ期に所属するものが出土していることにより，15世紀前半に中心をおくものと思われる。

3） 鉢・壺・釜

鉢

鉢の形態は大きくA・Bの2者が認められる。その内比較的量が多いA形態について言及し，第Ⅰ～Ⅳ期との対応を考える。

口縁部による分類では第15表のようにA～Dの4類に区分できる。A類はSE07（図版12—69）において第Ⅰ期に所属し，B類はSE20（図版19—233）。SD42（図版29—534・535）の状況から口縁端が著しく肥厚するB_2類が第Ⅲ期に伴うことが理解できる。C類はSE10（図版21—291）より出土し，第Ⅲ期後半に位置づけられよう。D類はSE21（図版23—345）から第Ⅳ期に所属する。当調査区では鉢類は基本的にB～D類は瀬戸窯産と考えられ，第Ⅲ期以降鉢・椀とも瀬戸窯を中心に搬入されて行くことが推測される。なお椀及び鉢の口縁肥厚は同調する動きであり，したがってB_1類[20]は第Ⅱ期に含めて考えることができる。なお鉢B形式は土田第Ⅲ期より出現してくる。

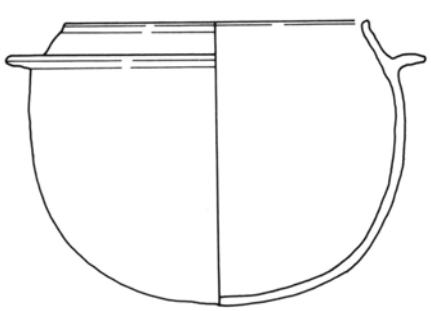
壺

壺Aは常滑窯産であり口縁部の分類から第15表のように3つに分けて考える。遺構での共伴から凡そA類は第Ⅰ～Ⅱ期にかけて，B類は第Ⅱ～Ⅲ期にかけて，C類はⅢ期後半には確実に出現しているものと考えられる。常滑窯赤羽編年[21]ではC類，すなわち面からN字口縁への移行を常滑窯Ⅲ～Ⅵ期の変化に置き，14世紀前半には登場するとしている。土田遺跡第Ⅲ期（13世紀末～14世紀）の中でN字口縁が共伴する点において一致を見る。

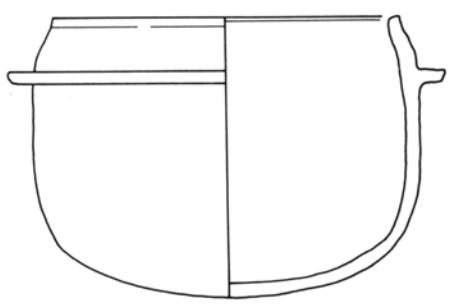
釜

常滑窯産の羽釜型陶器は本調査区では土田第Ⅱ～Ⅲ期にかけて出土し，特に第Ⅱ期に集中する傾向が見られる。SE11（図版15—152～154）の状況（A類に限定）よりB類の出現を第Ⅱ～Ⅲ期に移行する段階と推定できよう[22]。

第14表 釜 の 分 類



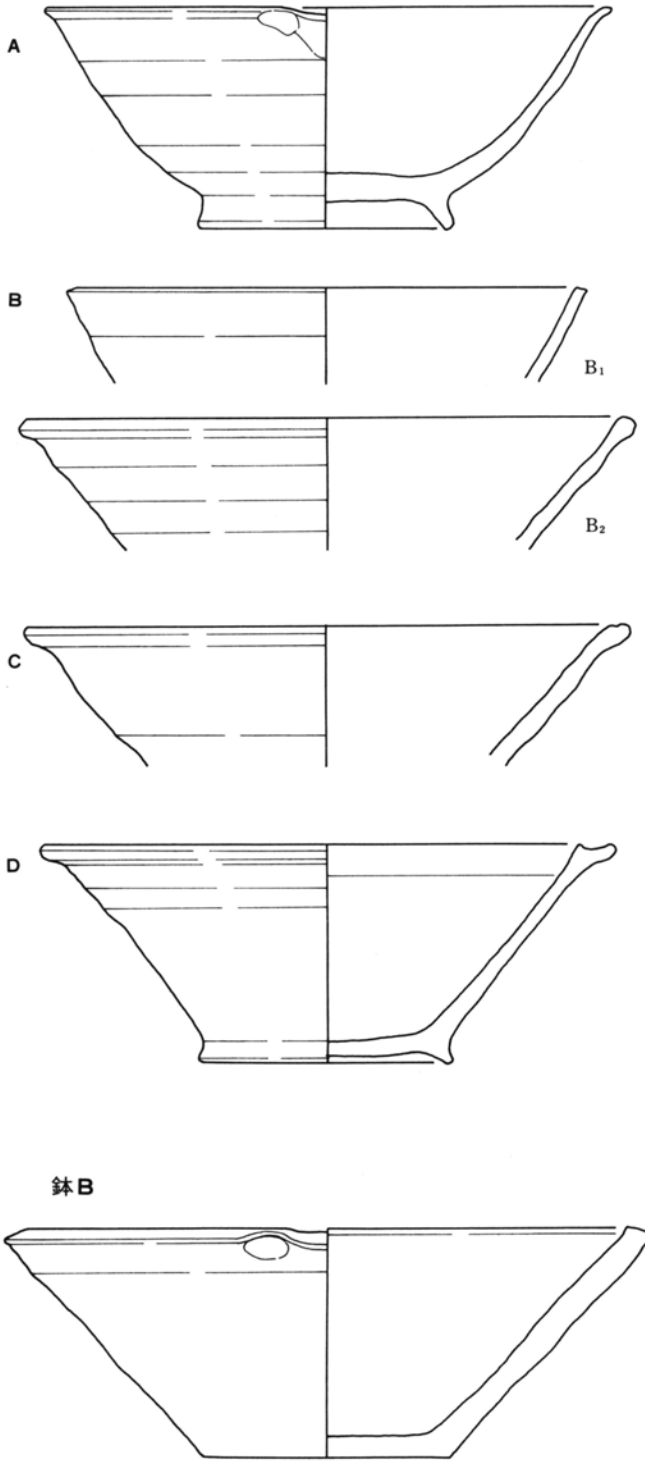
A 体部球形，器壁薄く内面ヨコヘケズリが多く見られる。
端部ヨコナデ，丸く整えるもの，凹線を施すもの，面取りを施すものあり。



B 体部U字形，器壁厚く、内面ナデル。
端部は幅広の面取りを施す。

第15表　鉢の形式と分類

鉢A



鉢B

鉢A

A類　体部内彎，端部外反
細く鋭利

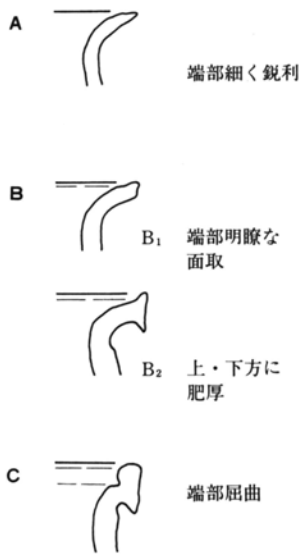
B類　体部外傾
B_1　口縁端部面取
B_2　口縁端部肥厚

C類　体部外傾
端部外方へ若干突出
上面に沈線

D類　端部外方へ大きく突出
し凹面を構成

第16表　壺Aの分類

壺A



〔注〕

1）宇野隆夫「考察の方法」（『京都大学埋蔵文化財調査報告一白河北殿北辺の調査一』II 京都大学埋蔵文化財研究センター1981）61—62頁。

2）藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『研究紀要』Ⅰ瀬戸歴史民俗資料1982）。

3）前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」（『研究紀要』III瀬戸市歴史民俗資料館1984）。

4）斎藤孝正「灰釉陶器の研究Ⅰ」（『名古屋大学文学部研究論集』XCV1986）。

5）田口昭二「山茶椀」（『美濃焼』考古学ライブザリー17，1983）。

6）例えば春日市内津1号窯（『春日井市遺跡発掘調査報告』第7集春日井市教育委員会1981）。

7）注2）に同じ。

8）中野晴久「知多古窯址群における山茶椀の研究」（『研究紀要』Ⅰ常滑市民俗資料館1983）14頁。

9）古墳時代の須恵器成形技法との異差はロクロ盤上におかれる粘土塊の存在であろう。糸切技法から類推して粘土塊上部に足掛かり的な部分を製作し，その後粘土紐を積み上げるものと推定する。この手法は奈良時代まで溯るかもしれない。

10）粘土紐積み上げによる素形が，椀の形状と一致するのでなく，この素形を基本にロクロ回転惰力を利用し，器形を形作るものを意味する。灰釉椀はすべてこの技法によるものであろう。

11）高台製作は体部下半に（貼り付け位置は時期が新しくなると底部に移行）粘土紐を貼り付けることにより開始されるが，その調整のための付近が泥漿化する。特に手からの水滴のためか体部下半に目立つ。これを再調整する必要があった。

12）「亀裂防止のための見込みの指圧痕」（注2））として一般的に理解されているもの。

13）最終的に高台を製作しないものになるが，第3工程にいたる小乾燥がいちはやく消略，あるいは簡略される方向にあった。

14）注3）に同じ。

15）注1）に同じ。

16）注1）によると SD11 上，中層よりそれぞれIII_{-1}，III_{-2}の瓦器と共伴し，13世紀前～中葉の年代を与えられている。その他東大寺旧境内 SK02（「東大寺旧境内発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』1981）より13世紀後半～14世紀の瓦器椀と土田第III期の法量をもつ椀が共伴する。

17）注2）に同じ。

18）注8）に同じ。

19）注16）に同じ。

20）B_1類は他の共伴遺物とともに見つかっていないが瀬戸窯で同様な手法が確認され，おおむね藤澤のいう小椀から皿へ移行した段階に認められる。

21）赤羽一郎「常滑窯」（『常滑焼』考古学ライブラリー23　1984）

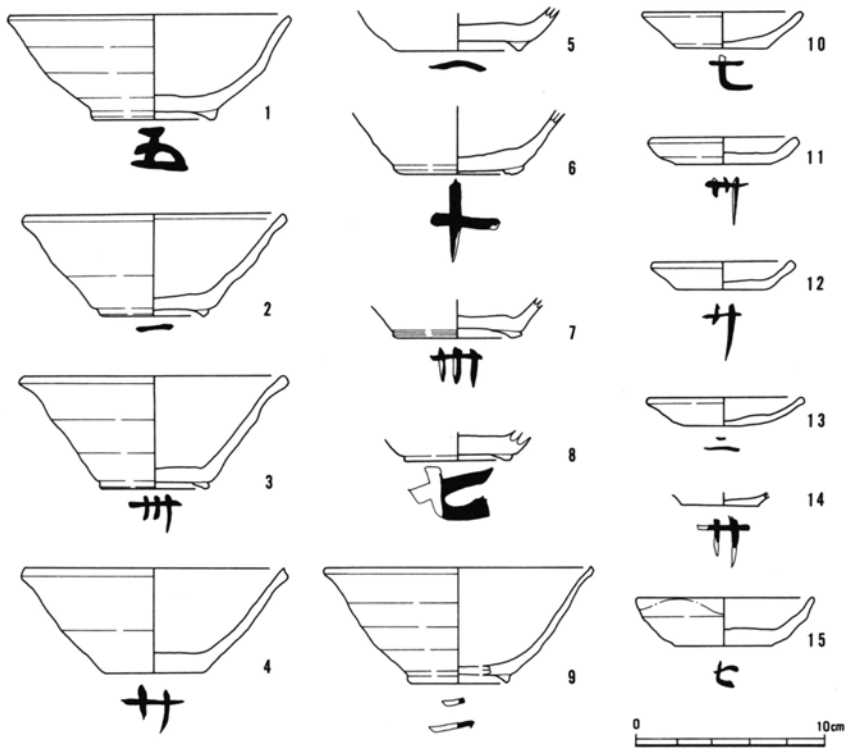
22）常滑窯では羽釜は「12世紀代に集中的に生産された器種」（中野晴久「鎗場，御林古窯址群の編年的研究」『知多古文化研究』2　1986）としているが，当調査区ではむしろ13世紀に多く見られる。鎗場，御林古窯B3号窯よりここでいうB類が出土しており14世紀初頭までその生産が行なわれていたことが推測されよう。

3 墨 書 陶 器

墨書陶器とは，土器の体部や底部に文字や記号・絵画等を墨書きしたもので，それ等を読みとることにより当時の人間の意識や，出土遺跡，遺物の性格を知り得る貴重な資料の1つであると言えよう。今回土田遺跡から出土した墨書陶器はわずか32点に過ぎないが，以下その特徴をまとめてみることとする。

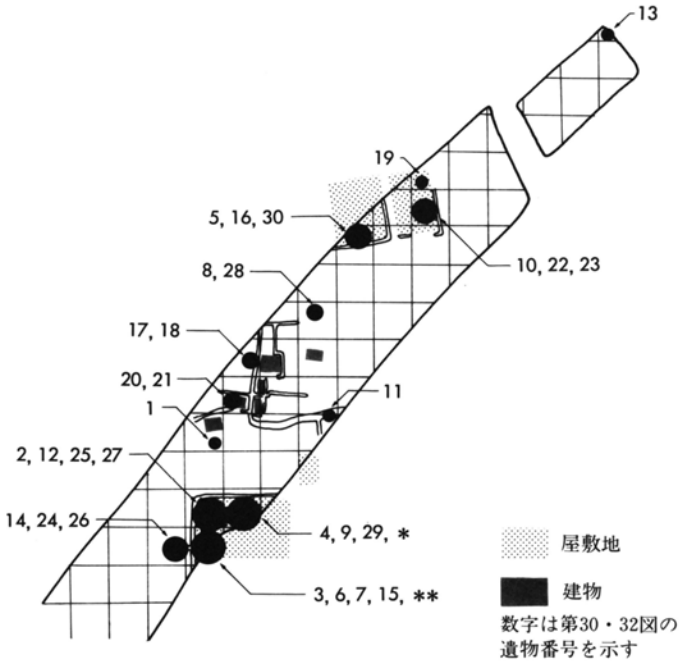
出 土 地 点

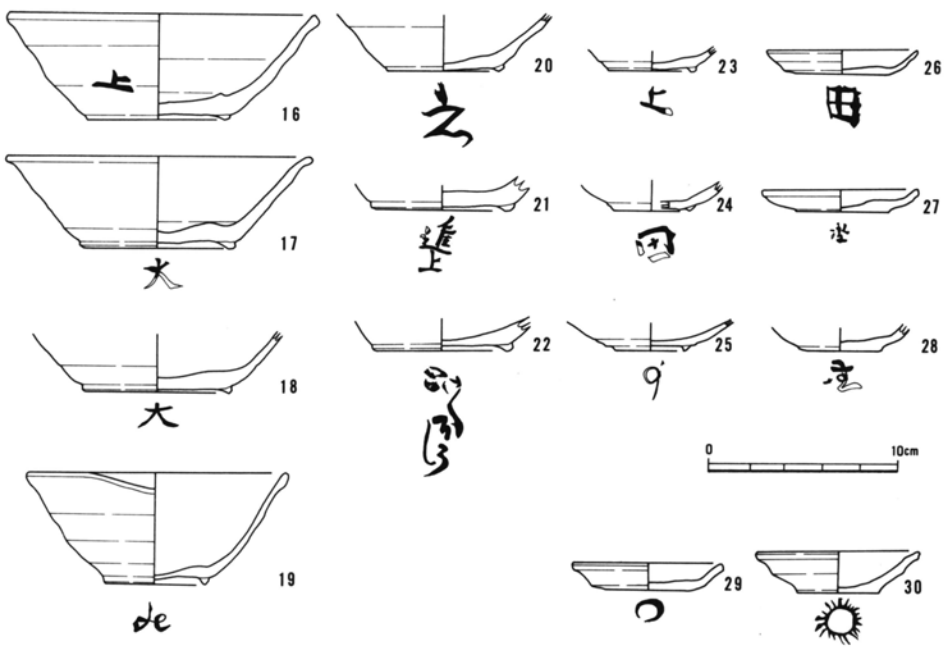
はじめに墨書陶器の出土地点をみてみると，32点のうち溝より10点，井戸より7点，土坑から7点，その他遺構外より8点が出土している。井戸から出土した7点のうち4点がSE20に集中している。これらの出土地点を20m平方単位で落としたものが第32図である。この図を見てもわかるように墨書陶器は主に屋敷地を区画する溝内，およびその屋敷地内から集中して出土している。墨書された陶器の大多数が椀・皿類であり，遠隔地への移動の可能性も少く，こうした屋敷地周辺に集中して出土する事実を考え合わせれば，墨書陶器がその使用者の生活と密着した形で消費され，廃棄されたものと推察されよう。



第31図　数字を表わす墨書陶器

第32図
墨書陶器出土地点





第33図　文字・その他を表わす墨書陶器

形　　態

出土した墨書陶器の形態を分類すると，灰釉系陶器の椀—20点（63.5%），皿—11点（34%），施釉陶器では，灰釉皿（皿A）—1点（3%）のみである。以上の様に，当時の代表的器形と考えられる灰釉系陶器の椀・皿が出土遺物の多数を占めるのに対応して，墨書陶器もその大多数が椀・皿となっている。

部　　位

次に墨書された土器の部位についてみると，32点のうちで31点までが底部外面に墨書されており，1点のみ体部外面に認められる（第33図—16　これには「上」が約120度の間隔を持って2ヶ所記されている)。この様に当遺跡においては底部外面に墨書される点数が圧倒的に多数を占めるわけであるが，こうして底部に書かれることの意味を，単に形態上の特質のみでなく椀•皿の生産から消費，更に廃棄に至る経過の中で把える必要があろう。つまり椀・皿の底部を上向けて識別する場として，少くとも供膳においてはその必要性に欠け，消費者の非使用時における管理・保管形態として考えることが妥当であろう。また生産者より消費者へ椀・皿が流通する過程においても，底部外面への墨書の意味が図られるが，共に墨書の内容と係ってくるため次の内容の所で述べることとする。

内　　容

それでは実際にどの様な内容が墨書され，それ等が持つ意味を具体的に検討していくこととする。

大きく分類して，①数字を表記するもの，②文字を表記するもの，③その他の三種類が考えられる。更に②文字を表記したものは，1文字のものと2文字以上表記したものに区別されよう。

まず数字を表記すると思われる墨書陶器は15点出土しており，全体の約半数を占める。数字は具体的に「一」2点(第31図—2，5)，「二」2点(9，13)，「五」1点(1)，「七」3点(8，10,15)，「十」2点(6，＊)，「廿」3点(4，12,14)，「卌」3点(3，7，11)である。

次に文字を表記する墨書陶器の中で1文字で記されているものは，「大」2点(17，18)，「上」2点(16，23)，「田」2点(24，26)，「之」(20)，「丞」(27)が各々1点，判読不明なものが4点ある(19, 25, 28, ＊＊)，2文字以上で表示されたものには，「進上」1点(21)，判読不明なものが1点（22）ある。

その他の墨書には「○」(29)，「☼」(30)のように文字以外の記号と考えられるものが2点出土している。

墨書陶器の意味を考える場合，その墨書が生産者側で為されたものか消費者側で為されたものかその出土状況からも判然とし得ないのであるが，部位のところでも述べたように

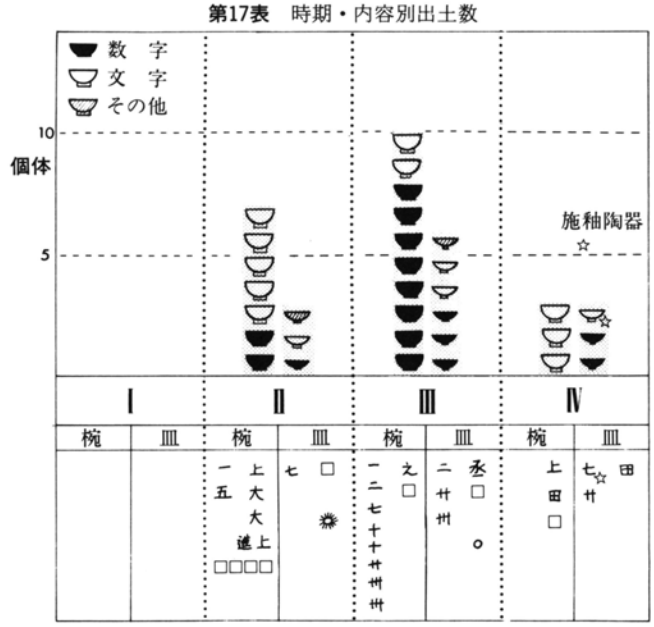
生産から消費に至る流通経路の中で，製品管理上の必要から墨書を施した可能性が特に数字の場合考えられよう。「十」「卄」「卌」といった十を単位にした数が多く出土しているのも単なる偶然ではなく製品をそうした単位ごとに管理し，識別し得る方法として一部の底部への墨書の必要が考えられる。

また消費者側による墨書の可能性もあり、文字も含めて先述の通り非使用時の管理・保管形態として裏がえした状態で他と区別し得る為に墨書を施したものが考えられる。特に文字については，人名，役職名，物の大小，場所の略等々考えられるが出土した文字の範囲においては推測の域を脱し得ない。唯一使用目的を示すと思うものに「進上」が挙げられよう。進上とは差し上げる，奉る意味で，神又は高位者に対して何らかの形をもって献上したことを示すものであり，少くとも日用雑器的性質は持ち得ないであろう。その他の「○」や「☼」も他と識別するべく墨書されたものと考えられるが，その意味は全く不明である。戯書の可能性も考えられなくはない。

時　　期

土田遺跡全体の時期区分と対比すると，土田第Ⅰ期に相当する墨書陶器は出土しておらず，第Ⅱ期が10点，第Ⅲ期が16点，第Ⅳ期が6点とその半数が第Ⅲ期に集中する。土田遺跡全体で遺物の集中する最盛期はⅡ期でありここにずれが認められる。更に墨書された内容を時期別に表すと第17表の通りである。文字を表記した陶器は第Ⅱ～Ⅳ期までほぼ平均して出土しているが数字を表記した陶器はⅢ期に集中している。また美濃系の椀・皿類が第Ⅲ期より出現し始めるが，それに伴い精製の椀・皿への墨書が第Ⅲ期より多く認められる。

第17表　時期・内容別出土数



ま と め

以上土田遺跡出土の墨書陶器の特徴をまとめると，墨書陶器は主に屋敷地周辺より集中して出土し，そのほとんどが灰釉系の椀・皿の底部外面に墨書が施されている。その内容は約半数が数を示すものであり，文字を表記したものは意味解釈が困難なものが多いが，これらは生産から廃棄に至るまでの経過の中で管理上の必要性より墨書された可能性が考えられよう。時期別にみると第Ⅲ期に集中し，土田遺跡の最盛期との間に時期差が認められる。今回は中世土田遺跡出土の墨書陶器についてその事実報告のみに留まったが，今後墨書陶器との共伴遺物の検討，周辺遺跡出土の墨書陶器との比較検討を行い，墨書陶器の示す歴史的意味や，更に墨書陶器を通じての遺跡・遺構の性格の解明が必要となってくるであろう。

第18表　墨書陶器一覧表

遺物番号	釈　文	器種	墨書部位	時期区分	出土地点	分　類
1	五	椀	底部外面	II	SE16	椀B₃類
2	一	〃	〃	III	59E	D₂
3	卅	〃	〃	III	SK67	D₂
4	廿	〃	〃	III	SE20	D₂
5	一	〃	〃	II	SD27	
6	十	〃	〃	III	SD65	
7	卅	〃	〃	III	SD64	
8	七	〃	〃	III	SE10	
9	二	〃	〃	III	SE20	E
*	十	〃	〃	III	SE20	E
10	七	皿	〃	II	56C包含層	B₂
11	卅	〃	〃	III	SD42	C₂
12	廿	〃	〃	III	SD60	C₁
13	二	〃	〃	III	60C	D₁
14	廿	〃	〃	IV	SK62	E
15	七	〃	〃	IV	SD64	施釉陶皿A
16	上	椀	体部外面2ヶ所	II	SD27	C₃
17	大	〃	底部外面	II	SD41	C₂
18	大	〃	〃	II	SX81	
19		〃	〃	III	SE01	E
20	え	〃	〃	III	59BC	
21	進　上	〃	〃	II	SK74	
22		〃	〃	II	56C包含層	
23	上	〃	〃	IV	56C包含層	E
24	田	〃	〃	IV	SK63	F
25		〃	〃	IV	59E	F
26	田	皿	〃	IV	SK62	E
27	巫	〃	〃	III	SK64	D₂
28		〃	〃	II	SK32	
**		〃	〃	III	SD65	E
29	○	皿	〃	III	SE20	D₁
30	※	〃	〃	II	SD27	B₁

4　加　工　円　盤

本調査区内より出土した遺物の中に小型の加工された陶片が多く出土している。これらは陶器片の周囲を円盤状に二次的に加工したものであり，以下これを「加工円盤」と総称しその分析を行う。

分　　類

総数306点の加工円盤を材質・加工技法の2要素を基に分類する[1]。

A類　　灰釉系陶器の椀・皿を素材にしたもので，高台部を使用したA_1と，胴部や高台のない底部を使用したA_2に分かれる。いずれも打製加工である。

B類　　椀・皿類以外の灰釉系陶器を使用したもの。打製加工品。

C類　　施釉陶器を素材にしたもので，さらに製作技法において2つに分けることができる。C_1は打製加工。C_2はさらに側面を研磨するもの。

各出土点数は，A_1が160点（全体の52%），A_2が67点（22%），Bが21点（7%），C_1が48点（16%），C_2が10点（3%）で圧倒的にA類（74%）が多い。B・C類は比較的少量であるが，特にC_2の点数は少ない。

長さと重さ

加工円盤の形状は不定形を呈するものが多くみられ，長軸と短軸が存在する。長軸を基に，小型（17～21mm），中型（22～28mm），大型（29～39mm）の3つに区分することができる。（第34・35図）

全体的には22～28mmの中型品に集中する傾向があり，なかでもB類はすべて中型品である。C_2類は大型品が多く，他と比べて大型化の傾向が認められる。

重量についてみていくと，A_1が平均8.5g，$A_2$6.6g，B8.6g，$C_1$7.4g，$C_2$13.7gとなる。A_1とBは非常に近以しており，全体ではA_1～C_1がまとまり，C_2が他と著しく異なる。

なお島根県冨田川河床遺跡の加工円盤（17世紀）は2～9cmのものがみられ，そのうち5cm（平均38.9g）のものが最も多い。また草戸千軒町遺跡（13～17世紀）では3～5cmのものが最も多く出土している。これらに比べると本遺跡の加工円盤は「小型」である。

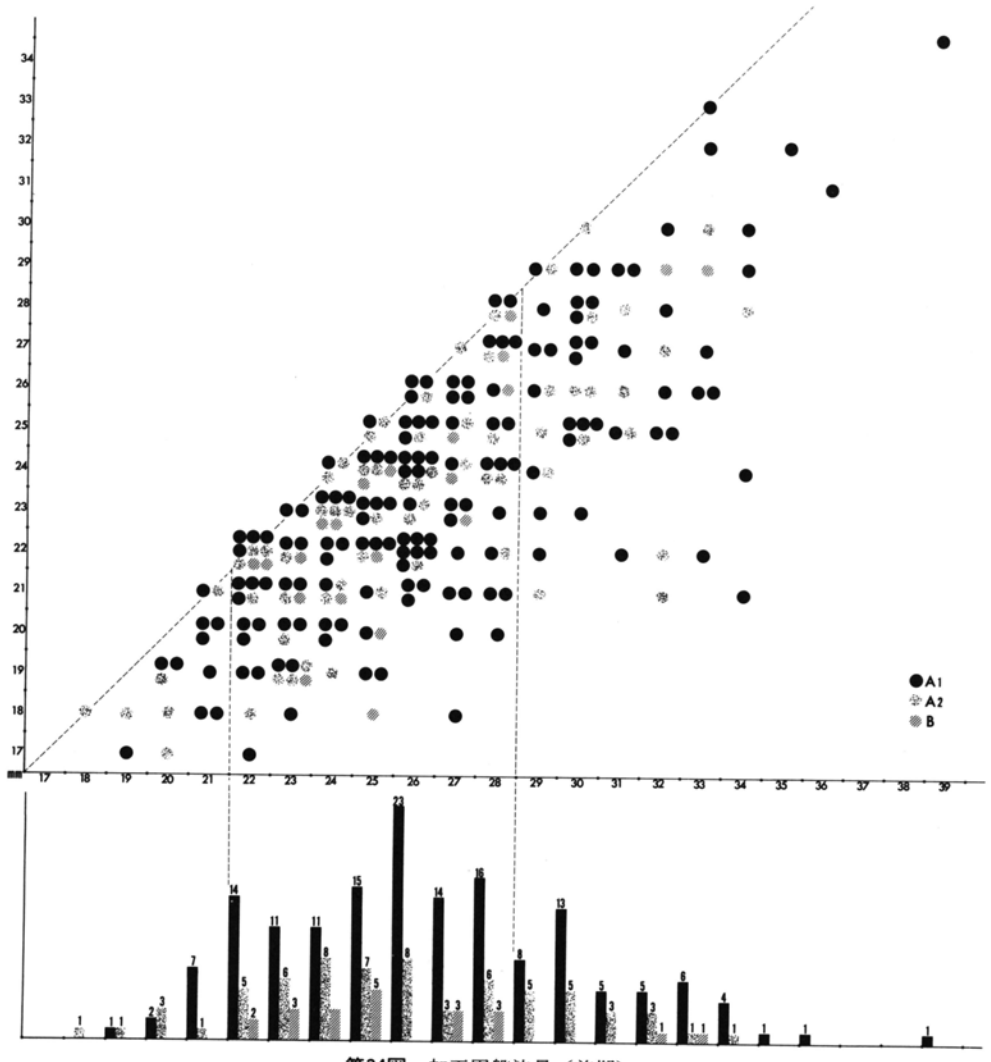
時期的変化

大きく前期と後期の2つに分けて考えることができる。

前期は本遺跡時期区分でいうところの第Ⅰ・Ⅱ期すなわち12・13世紀にあたる。（加工円盤図版番号1～248）

後期は「大窯」以降幕末までの時期。（図版番号249～306）したがって空白の14・15世紀をはさんで前期と後期に分かれることになる。なおこの点については後述する。

前・後期の変化として加工円盤の数の減少化があげられる[2)]が，加えて大型化するという特色がある。この例として摺鉢を素材にしたものをとり上げると，「大窯」製品利用のもの（図版番号249，250，253，258）に比べ，「連房」製品利用のもの（図版番号251，252，254，255，256，257）は明らかに大型化している。



第34図　加工円盤法量（前期）

第35図　加工円盤法量（後期）

出土状況

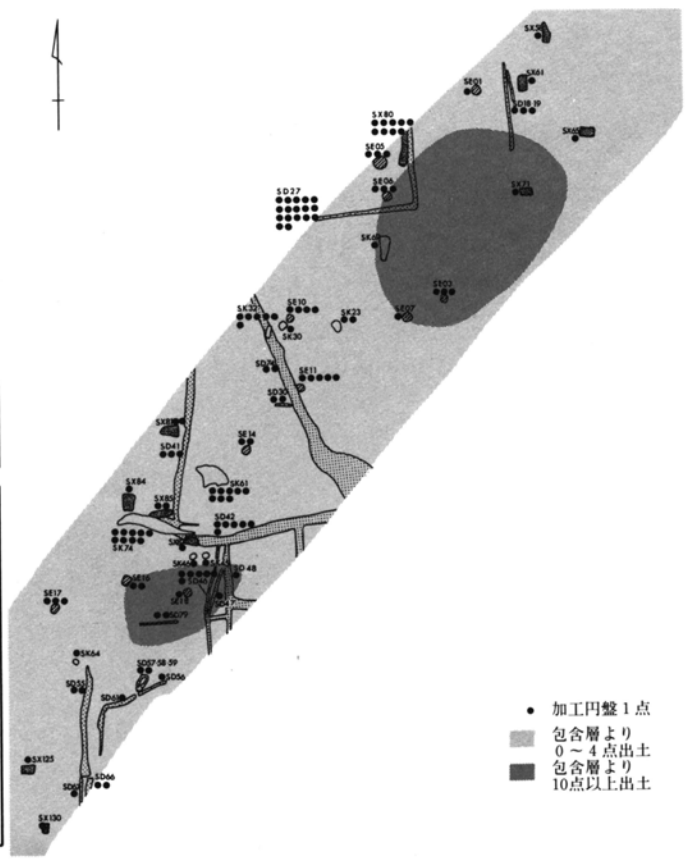
前期（12・13世紀）の加工円盤248点の出土状況をみてみる。

SD27は土田遺跡第Ⅰ・Ⅱ期に所属する屋敷地を区画する溝である。またSD27の内部には第Ⅰ期のSX80，SE05，06などの加工円盤を出土した遺構が存在する。これらの4遺構で合計42点の加工円盤が出土した。これは前期の総数の⅙を占めることになる。またSD27の東側には第Ⅰ・Ⅱ期の大形屋敷地跡と思われる区画があるが（第43図），その包含層中より33点出土している。また同様に，調査区中央のSD42，46付近より，合計22点出土し，さらにその西側に広がるⅡ期建物群（第43図）の包含層中より22点出土している。上記SD27と東側の屋敷地を含めた4地点で合計すると119点になり，これは前期の総数のほぼ½という数になる。

その他の遺構については，4点以上出土する遺構が4ヶ所，それ以外は1～3点と極少量出土しているにすぎない。

SD（溝）		SE（井戸）	
遺構番号	数量	遺構番号	数量
SD18・19	3	SE01	1
SD27	17	SE03	3
SD30	2	SE05	3
SD41	3	SE06	3
SD42	6	SE07	1
SD46	6	SE10	4
SD47	1	SE11	5
SD48	1	SE14	2
SD55	2	SE16	2
SD56	1	SE17	3
SD57・58・59	2	SE18	1
SD61	1		
SD66	2		
SD67	1		
SD74	2		
SD79	2		

SK（土坑）		SX（方形土壙）	
遺構番号	数量	遺構番号	数量
SK23	2	SX58	1
SK30	1	SX61	1
SK32	6	SX65	1
SK45	1	SX71	1
SK46	1	SX80	9
SK61	8	SX81	2
SK64	1	SX84	1
SK69	1	SX85	2
SK74	9	SX87	1
		SX125	1
		SX130	1



第36図　加工円盤分布図（前期）

遺構別の出土状況をみると，溝は全体で79条存在するがそのうち加工円盤を出土する溝は16条でこれは溝全体の20%である。同様に井戸21基のうち11基より出土がみられ52%を占める。土坑74基のうち9基より出土し12%，方形土壙179基のうち11基出土で6%を占める（第36図）。井戸からの出土割合が最も高く，方形土壙からは殆んど出土しない。

前期の加工円盤248点のうち遺構より出土したものは131点であるが，次に遺構別出土点数を比較すると，溝より合計52点，井戸より28点，土坑より30点，方形土壙より21点と溝からの出土点数が最も多い（第36図）。

ま と め

これまで加工円盤の用途説には，呪術具，冥銭，遊具，飛礫（つぶて）説などがある[3]が今だ定説はなく，その本格的な研究はなされていないのが現状である。ここでは上記の分析をもとに土田遺跡の加工円盤の特徴及びその用途を考えまとめとする。

土田遺跡の加工円盤は，素材・形態に特徴がある。素材は灰釉系陶器椀・皿の底部高台部を使用しているものが多くを占める。灰釉系陶器を使用するのはこの地方で普遍的に生産・消費される最も身近な素材であると同時にその硬質性も必要であったためと思われる。また底部を使用するのは胴部と比べ厚みがあること，底部の中でも高台部を使用するのはおそらく打製加工時大きく破損することなく円形に割ることができたためと思われる。一方では，高台部が「投げる」，何かを「結わいつける」などの行為の目的で利用された可能性もある。その大きさは2～3cmのものが多く，他の出土例と比べても比較的小型である。

土田遺跡は第Ⅰ期から第Ⅳ期（12～15世紀）まで遺構・遺物ともに存続しているが，加工円盤は第Ⅰ・Ⅱ期に最も多く出土し，Ⅲ・Ⅳ期には殆んど出土していない。ただⅢ・Ⅳ期に陶製の丸玉である陶丸（図版番号307～321）が出土する。形態的にも製作技法的（加工円盤は二次的加工品，陶丸は製品）にも若干異質であるが，重さ・大きさなど近似する点もあり，何よりも加工円盤の空白期間に入れ変わるように陶丸が出現してくることが興味深い。（第18表）なお土田遺跡とは直接関係がないのであるが15世紀以降（後期）の加工円盤も少量出土している。前期の加工円盤に比べ出土量はかなり少量であり，素材も施釉陶器であるが，さまざまな器種のものが使用されている。特にC_2類は製作技法的にも形態的にも他の類とかなりの差異がみられ，用途の差をあらわしているものと思われる。

次に出土状況から考えてみると，加工円盤は井戸や特定の住居及びその付近で多く出土する。対して方形土壙からは殆んど出土しない。出土しても居住域付近の方形土壙からである。このことから生活の場で多く使用されたものと考えてよいだろう。と同時に墓であるとする方形土壙からは出土が稀であることから冥銭説は否定的と考える[4]。

土田遺跡の加工円盤についてまとめると

1　土田遺跡Ⅰ・Ⅱ期すなわち12・13世紀に多量に製作され以後殆んど使用されない。

2　灰釉系陶器椀・皿を特にその素材として使用する。

3　高台部を利用するものが多くを占める（A_1類）。

4　2～3㎝の大きさをもつものが多い。

5　居住域を中心として出土する。

さて，最も出土したA類についてであるが，その用途として考えられるものに，民衆の中で中世盛んに行なわれた「飛礫（つぶて）」がある。飛礫つまり物を投げるという行為は人間の本能ともいえる行為であるが，古代の日本，特に中世前期までは飛礫の行為が邪気を払う一種の神がもたらす行為として信仰的な意味をもっていたようである。それが中世後期つまり南北朝頃を境にして次第に日常生活から遠ざかり，年中行事等（節分・五月の節句など）の中にとりこまれ今日に至るのである[5]。土田遺跡の加工円盤A類が消失する時期はまさに，この飛礫の転換期にあたり，これらの変容を示す傍証といえるのではないかと思われる。

〔注〕

1）他の分類の例には加工円盤の最大径による分類，材質による分類などがある。
・内田律雄「円盤状土製品」『冨田川』島根県教育委員会　1984。
・小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡出土の円板状土製品」『草戸千軒』№142広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1985。

2）草戸千軒町遺跡の場合，鎌倉時代を中心とする時期が最も多く，鎌倉後半～南北朝，室町中頃～後半と数は減少する。

3）兼康保明「小型円板」『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻　中央公論美術出版　1977。

4）図版番号232，233は同一個体から製作されたもので，未使用のまま方形土壙SX80へ放棄されたと思われ，特異な事例である。

5）中沢厚『つぶて』法政大学出版局　1981。
網野善彦『異形の王権』平凡社　1986。

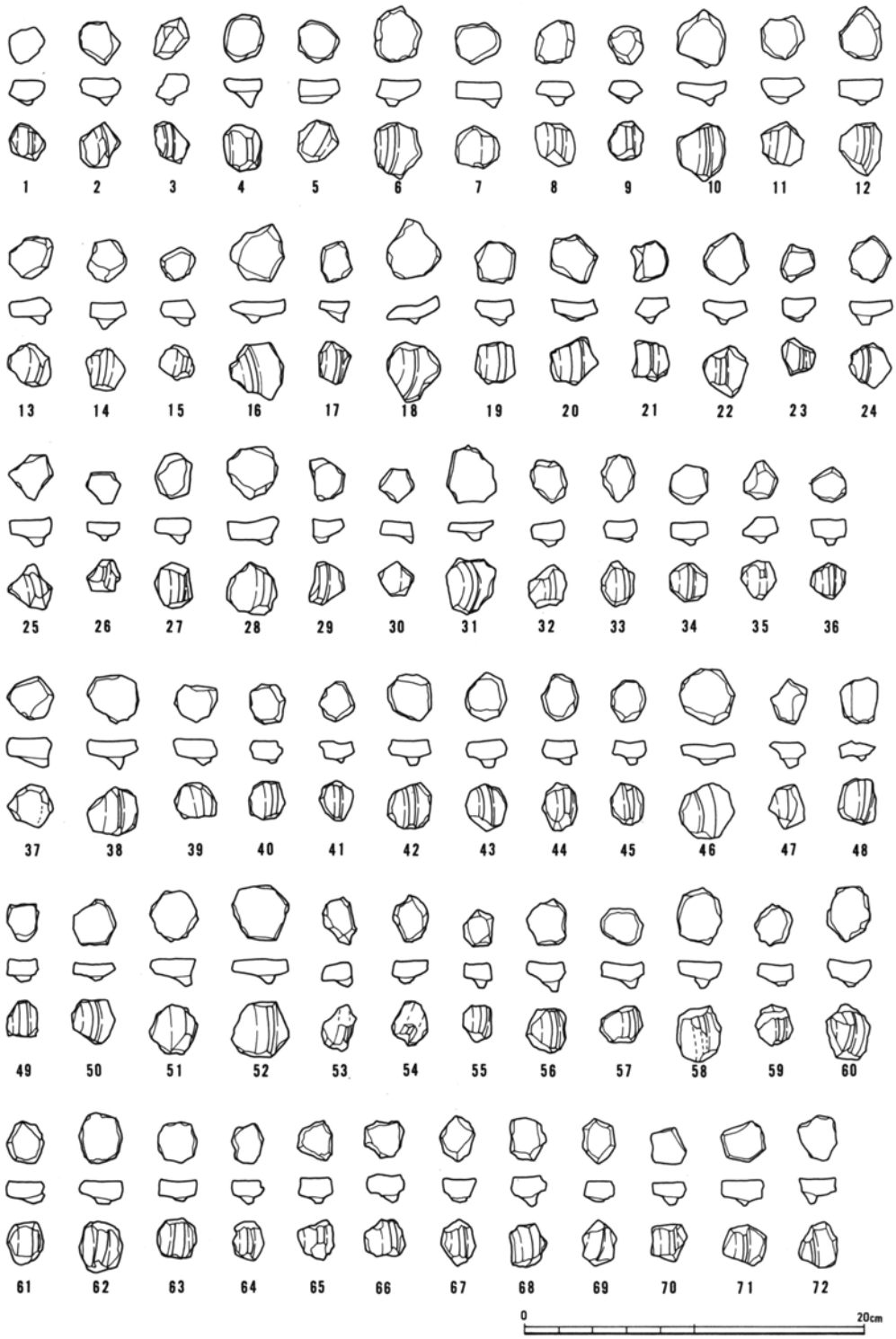
第18表　分類別変化

	A	B	C	陶丸
Ⅰ	■	■		
Ⅱ	■	■		
Ⅲ				■
Ⅳ				■
Ⅴ			■	
Ⅵ			■	
Ⅶ			■	

Ⅰ－土田Ⅰ期　Ⅱ期－土田Ⅱ期
Ⅲ－土田Ⅲ期　Ⅳ－土田Ⅳ期
Ⅴ－15後半～16世紀　Ⅵ－17世紀
Ⅶ－18～19世紀

第19表　加工円盤一覧表 (1)

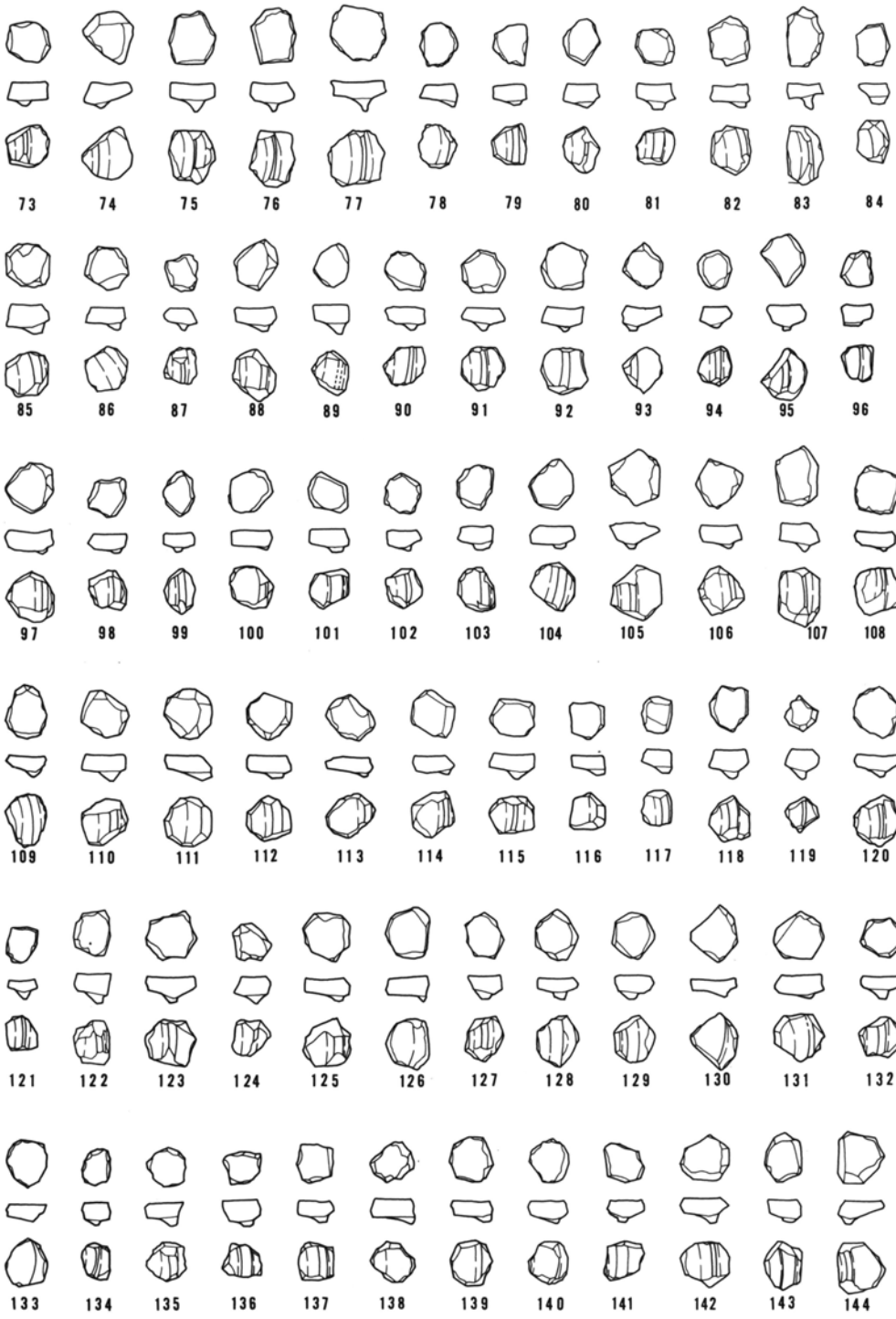
No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考	No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考
1	A_1	22 × 21	6.6	廻間		37	A_1	27 × 26	10.4	56B	
2	A_1	26 × 24	7.7	SD18・19		38	A_1	30 × 29	13.4	56D	
3	A_1	24 × 20	8.5	〃		39	A_1	25 × 22	8.5	〃	
4	A_1	28 × 23	10.1	SE01		40	A_1	22 × 21	7.5	〃	
5	A_1	25 × 24	9.1	SD27		41	A_1	24 × 20	6.0	56C	
6	A_1	32 × 28	12.9	〃		42	A_1	28 × 25	10.4	〃	
7	A_1	26 × 25	8.8	〃		43	A_1	28 × 24	10.0	〃	
8	A_1	25 × 23	7.2	〃		44	A_1	28 × 21	9.3	〃	
9	A_1	23 × 21	5.2	〃		45	A_1	25 × 20	7.5	〃	
10	A_1	34 × 29	11.3	〃		46	A_1	33 × 32	10.4	〃	
11	A_1	26 × 25	9.0	〃		47	A_1	26 × 21	7.8	〃	
12	A_1	32 × 25	11.8	〃		48	A_1	27 × 22	6.3	〃	
13	A_1	25 × 24	8.7	〃		49	A_1	22 × 19	5.8	〃	
14	A_1	25 × 23	7.9	〃		50	A_1	26 × 24	7.0	〃	
15	A_1	21 × 20	5.5	〃		51	A_1	29 × 29	11.6	〃	
16	A_1	35 × 32	10.8	〃		52	A_1	33 × 33	15.4	〃	
17	A_1	25 × 19	5.1	〃		53	A_1	28 × 21	8.6	〃	
18	A_1	36 × 31	11.5	SX80		54	A_1	27 × 21	7.2	〃	
19	A_1	25 × 23	8.9	〃		55	A_1	22 × 17	6.5	〃	
20	A_1	28 × 28	9.1	〃		56	A_1	27 × 24	10.1	56E	
21	A_1	24 × 22	6.9	〃		57	A_1	26 × 21	8.2	〃	
22	A_1	31 × 27	8.8	〃		58	A_1	33 × 26	11.4	〃	
23	A_1	22 × 20	5.7	〃		59	A_1	22 × 22	6.6	〃	
24	A_1	27 × 25	7.5	SZ05西南攪乱		60	A_1	32 × 26	13.8	〃	
25	A_1	27 × 26	8.5	〃		61	A_1	25 × 22	7.6	〃	
26	A_1	20 × 19	3.8	〃		62	A_1	30 × 25	12.1	56	
27	A_1	28 × 22	8.2	SE05		63	A_1	24 × 23	8.6	〃	
28	A_1	31 × 29	13.4	〃		64	A_1	23 × 19	6.4	〃	
29	A_1	26 × 22	6.1	〃		65	A_1	24 × 21	7.8	〃	
30	A_1	21 × 20	4.3	SE07		66	A_1	23 × 22	7.4	〃	
31	A_1	34 × 30	9.1	SE03		67	A_1	27 × 21	7.4	〃	
32	A_1	26 × 22	7.6	〃		68	A_1	25 × 21	9.5	〃	
33	A_1	28 × 20	7.6	〃		69	A_1	27 × 20	6.2	59P	
34	A_1	23 × 22	7.1	SX71		70	A_1	22 × 20	6.1	〃	
35	A_1	23 × 21	5.8	SX65		71	A_1	26 × 25	9.3	〃	
36	A_1	21 × 21	6.1	56A		72	A_1	27 × 23	9.0	〃	



第37図　加工円盤(1)　1/4

第20表　加工円盤一覧表　(2)

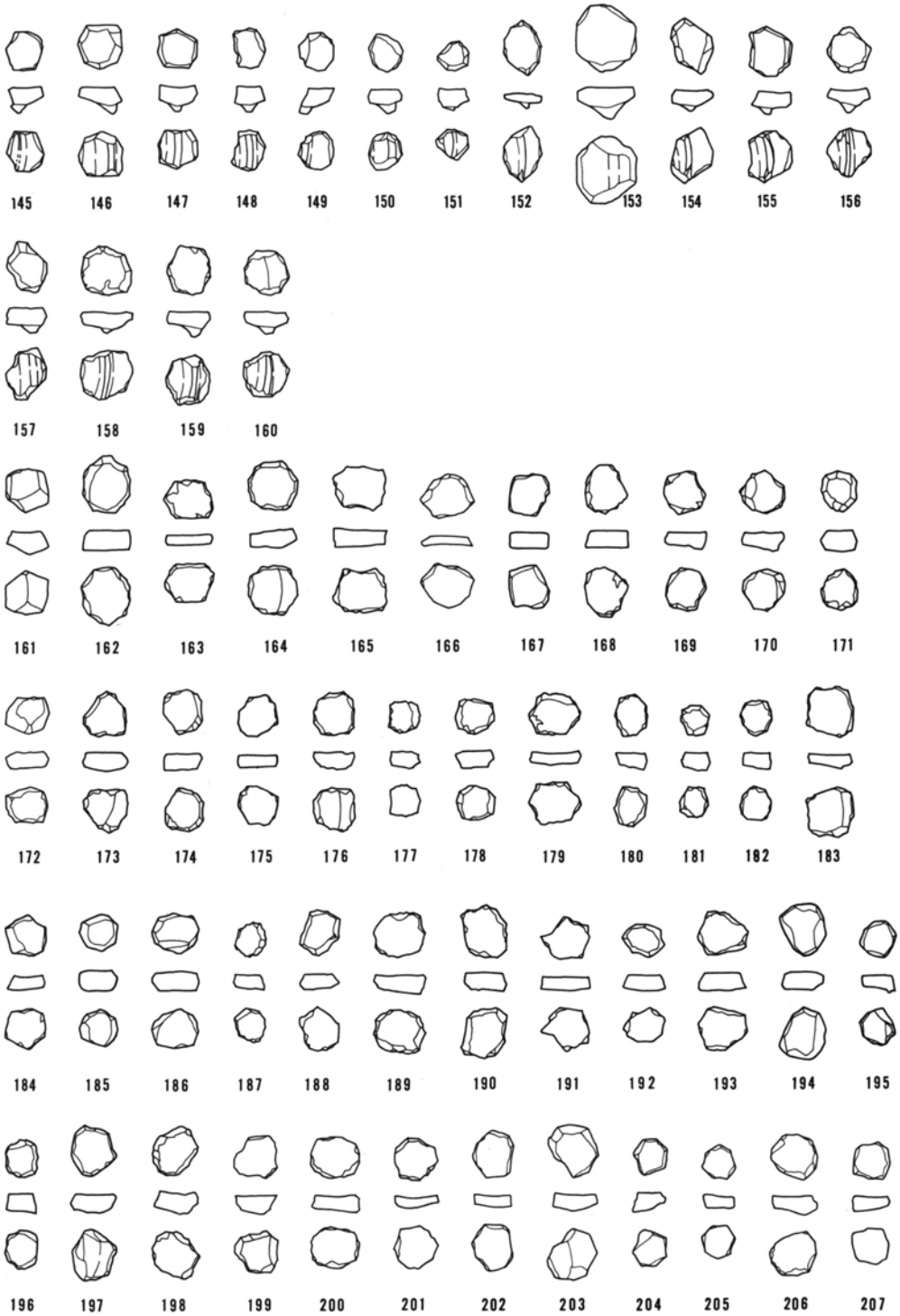
No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考	No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考
73	A_1	25 × 24	9.0	59P		109	A_1	31 × 25	8.4	〃	
74	A_1	31 × 29	(8.6)	〃	半分欠損	110	A_1	28 × 27	8.4	〃	
75	A_1	31 × 22	14.3	〃		111	A_1	29 × 28	10.2	〃	
76	A_1	33 × 26	15.8	〃		112	A_1	27 × 26	8.9	〃	
77	A_1	33 × 27	19.8	〃		113	A_1	29 × 27	7.9	SX84	
78	A_1	25 × 22	6.2	57A新番なし		114	A_1	28 × 25	7.5	SX87	
79	A_1	24 × 20	7.3	SD42		115	A_1	26 × 22	8.2	SX85	
80	A_1	26 × 22	7.0	〃		116	A_1	22 × 22	5.2	〃	
81	A_1	22 × 22	8.2	57AB		117	A_1	21 × 18	4.6	SX81	
82	A_1	29 × 23	10.8	57CD		118	A_1	27 × 23	10.4	SE14	
83	A_1	34 × 21	10.9	SD42		119	A_1	22 × 20	6.3	〃	
84	A_1	25 × 19	5.8	SD30		120	A_1	30 × 27	8.9	59BC	
85	A_1	26 × 25	15.4	SD74		121	A_1	20 × 19	3.8	〃	
86	A_1	26 × 24	7.8	〃		122	A_1	26 × 21	9.7	〃	
87	A_1	21 × 20	5.3	SK30		123	A_1	30 × 28	11.6	SD46	
88	A_1	30 × 25	9.8	SK32		124	A_1	22 × 21	5.8	SD55	
89	A_1	26 × 22	7.7	〃		125	A_1	28 × 28	9.2	〃	
90	A_1	24 × 23	6.7	〃		126	A_1	30 × 25	10.5	SD61	
91	A_1	25 × 25	8.7	SK23		127	A_1	27 × 23	8.0	SD46	
92	A_1	28 × 27	11.4	SE10		128	A_1	29 × 24	8.0	〃	
93	A_1	26 × 23	6.5	〃		129	A_1	28 × 24	7.8	〃	
94	A_1	23 × 20	5.8	SE11		130	A_1	33 ×(27)	(8.2)	〃	製作段階か
95	A_1	(30)×(26)	9.3	〃	製作段階か	131	A_1	30 × 28	9.9	SD48	
96	A_1	22 × 19	6.0	〃		132	A_1	26 × 24	7.8	59D近世遺構	
97	A_1	30 × 28	10.8	59A		133	A_1	28 × 24	6.5	SD79	
98	A_1	22 × 22	6.3	〃		134	A_1	26 × 22	5.6	59D近世遺構	
99	A_1	27 × 18	5.5	〃		135	A_1	23 × 23	7.2	SE16	
100	A_1	26 × 26	6.9	SD41		136	A_1	23 × 19	7.0	〃	
101	A_1	23 × 23	8.1	〃		137	A_1	22 × 21	7.3	59D新番なし	
102	A_1	24 × 22	5.5	SK61		183	A_1	25 × 23	7.9	SE17	
103	A_1	26 × 22	8.8	〃		139	A_1	26 × 24	8.1	59D	
104	A_1	28 × 27	9.5	〃		140	A_1	23 × 20	8.3	〃	
105	A_1	32 × 30	12.8	〃		141	A_1	24 × 23	6.8	〃	
106	A_1	29 × 27	9.6	〃		142	A_1	28 × 26	9.6	〃	
107	A_1	34 × 24	14.3	SK74		143	A_1	29 × 22	9.2	〃	
108	A_1	30 × 27	8.5	〃		144	A_1	30 × 27	10.9	〃	



第38図　加工円盤　(2)　1/4

第21表　加工円盤一覧表　(3)

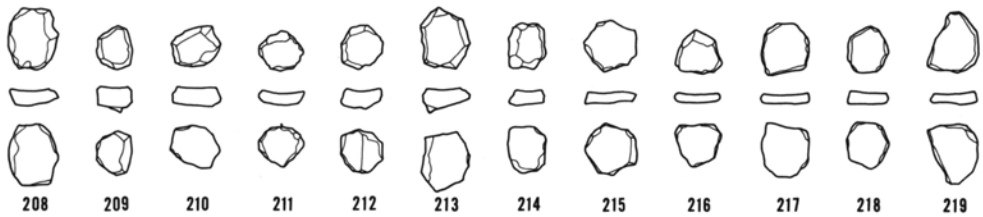
No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考	No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考
145	A_1	24 × 22	7.0	59D		177	A_2	18 × 18	3.9	〃	
146	A_1	26 × 26	9.8	〃		178	A_2	23 × 21	5.4	〃	
147	A_1	24 × 24	8.4	〃		179	A_2	30 × 25	6.3	〃	
148	A_1	23 × 18	7.2	〃		180	A_2	23 × 19	5.2	56	
149	A_1	21 × 18	5.6	〃		181	A_2	20 × 17	4.1	〃	
150	A_1	21 × 19	6.0	〃		182	A_2	20 × 18	42	〃	
151	A_1	19 × 17	3.6	〃		183	A_2	30 × 28	7.7	59P	
152	A_1	33 × 22	5.2	〃		184	A_2	24 × 24	5.3	〃	
153	A_1	39 × 35	23.8	〃		185	A_2	22 × 22	6.4	SD42	
154	A_1	32 × 25	7.6	SD66		186	A_2	26 × 23	7.6	〃	
155	A_1	30 × 25	10.9	〃		187	A_2	19 × 18	4.0	57A新番なし	
156	A_1	27 × 26	7.6	SD67		188	A_2	26 × 24	7.5	57CD	
157	A_1	30 × 23	8.3	59E		189	A_2	29 × 24	9.3	57AB	
158	A_1	30 × 29	11.0	SZ06上層		190	A_2	30 × 26	9.8	SD30上層	
159	A_1	29 × 26	9.6	59G		191	A_2	29 × 26	5.8	SK32	
160	A_1	26 × 26	9.3	59HISX130		192	A_2	24 × 19	4.2	〃	
161	A_2	26 × 26	7.8	60C		193	A_2	29 × 21	8.9	SK23	
162	A_2	34 × 28	12.4	SX58		194	A_2	31 × 28	9.8	SE10	
163	A_2	28 × 22	4.3	SD18・19		195	A_2	22 × 22	4.2	〃	
164	A_2	29 × 29	11.3	SD27		196	A_2	23 × 19	5.5	SE11	
165	A_2	32 × 27	11.1	〃		197	A_2	30 × 26	10.5	〃	
166	A_2	31 × 26	4.1	〃		198	A_2	28 × 27	8.8	59A	
167	A_2	26 × 24	7.6	SX80		199	A_2	25 × 25	7.2	〃	
168	A_2	29 × 25	5.9	SE06		200	A_2	28 × 24	8.9	SK61	
169	A_2	25 × 24	6.9	〃		201	A_2	26 × 24	4.1	〃	
170	A_2	25 × 25	8.9	〃		202	A_2	28 × 24	5.6	〃	
171	A_2	24 × 21	7.3	SK69		203	A_2	30 × 30	8.5	SK74	
172	A_2	25 × 21	6.3	56A		204	A_2	21 × 21	4.2	SK74・SX87	
173	A_2	26 × 25	8.8	56C		205	A_2	20 × 19	3.2	SX81	
174	A_2	26 × 23	7.5	〃		206	A_2	28 × 25	8.4	59BC	
175	A_2	24 × 24	5.0	〃		207	A_2	22 × 21	4.7	〃	
176	A_2	25 × 24	8.0	56E							

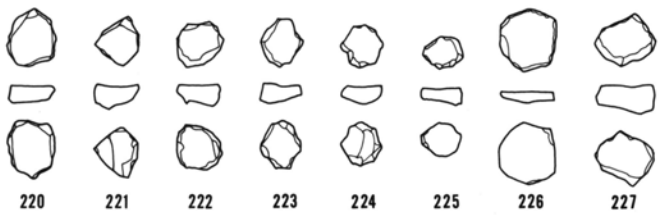


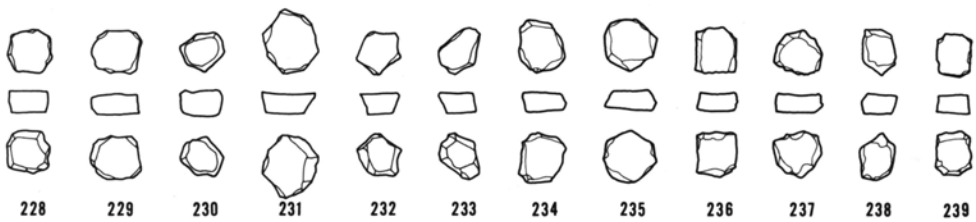
第39図　加工円盤　(3)　1/4

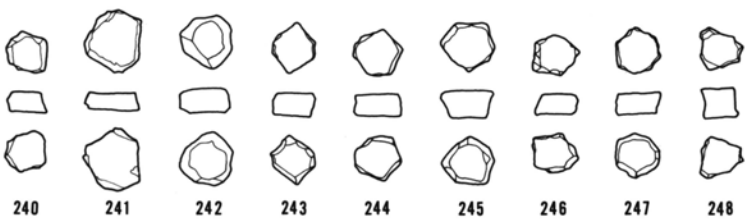
第22表　加工円盤一覧表　(4)

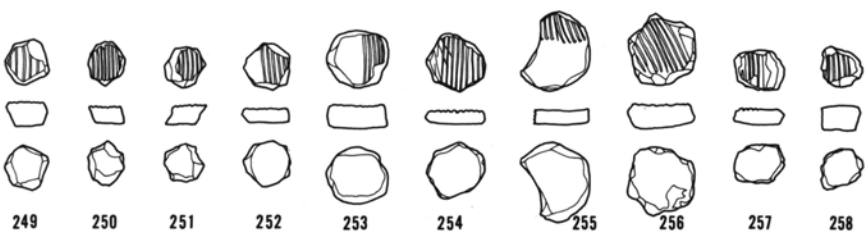
No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考	No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考
208	A_2	32 × 22	8.5	SK46		239	B	23 × 19	6.5	〃	
209	A_2	23 × 19	6.4	SD46		240	B	22 × 22	6.2	SD42	
210	A_2	26 × 22	5.4	SE17		241	B	32 × 29	12.5	57CD	
211	A_2	24 × 21	3.2	〃		242	B	28 × 28	11.0	SK32	
212	A_2	22 × 22	6.2	SE18		243	B	27 × 24	8.2	SD41	
213	A_2	32 × 21	9.1	59D		244	B	25 × 24	8.5	SK74	
214	A_2	23 × 20	4.2	〃		245	B	28 × 26	11.8	SK45	
215	A_2	27 × 27	5.1	〃		246	B	25 × 20	7.3	SD47	
216	A_2	24 × 23	3.0	〃		247	B	24 × 23	8.1	SD79	
217	A_2	27 × 25	5.1	〃		248	B	22 × 22	6.8	59D	
218	A_2	25 × 23	4.3	〃		249	C_1	24 × 24	7.7	60C	
219	A_2	32 ×(27)	(5.5)	SD56	半分欠損	250	C_1	24 × 19	5.3	56	
220	A_2	31 × 25	7.9	SD57・58・59交差		251	C_1	22 × 20	5.1	SD29	
221	A_2	27 × 24	6.2	SD57		252	C_1	25 × 25	5.4	SK74	
222	A_2	23 × 24	7.2	59E近世遺構		253	C_1	32 × 30	16.1	〃	
223	A_2	25 × 22	5.8	SK64		254	C_1	31 × 31	8.7	59D近世遺構	
224	A_2	23 × 22	4.3	59E		255	C_1	42 ×(37)	(13.0)	59D	一部欠損
225	A_2	22 × 18	3.2	〃		256	C_1	38 × 35	19.1	59G	
226	A_2	33 × 30	6.8	59G		257	C_1	26 × 21	5.6	59G	
227	A_2	28 × 28	11.9	SX125		258	C_1	22 × 22	6.7	59C	
228	B	23 × 22	8.6	60C		259	C_1	34 × 33	13.8	56B近世遺構	
229	B	27 × 23	9.5	〃		260	C_1	32 × 27	8.2	56E	
230	B	23 × 21	8.8	SX61		261	C_1	34 × 34	11.1	56C	
231	B	33 × 29	11.9	SD27		262	C_1	25 × 23	4.0	〃	
232	B	24 × 23	6.5	SX80		263	C_1	26 × 24	5.8	59P	
233	B	25 × 22	5.9	〃		264	C_1	29 × 25	5.6	〃	
234	B	27 × 25	9.3	56C		265	C_1	23 × 23	4.5	〃	
235	B	28 × 27	9.0	〃		266	C_1	30 × 22	9.7	59A	
236	B	24 × 21	8.4	〃		267	C_1	24 × 24	5.6	SK74	
237	B	25 × 24	8.7	56E		268	C_1	22 × 22	5.6	59BC	
238	B	25 × 18	6.8	56		269	C_1	25 × 22	3.4	59D近世遺構	

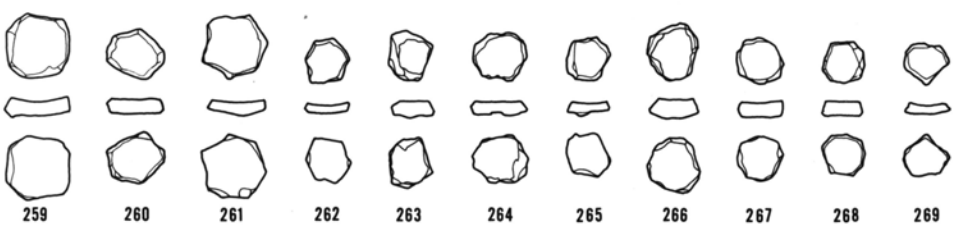








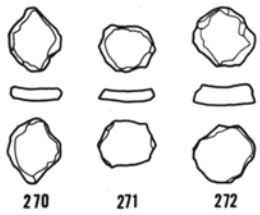


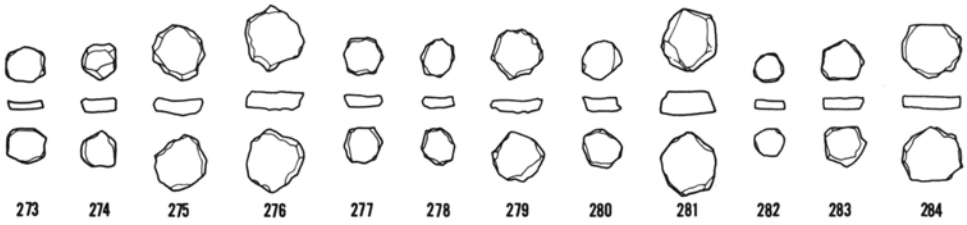


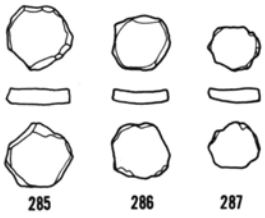
第40図　加工円盤　(4)　1/4

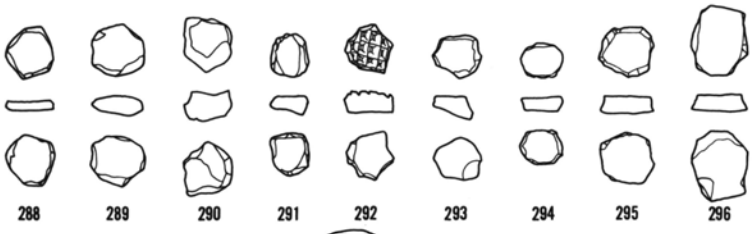
第23表　加工円盤・陶丸一覧表　(5)

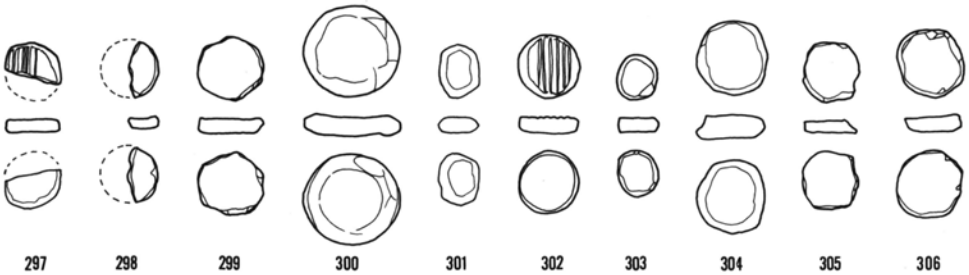
No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考	No.	分類	長軸×短軸 (mm)	重量 (g)	遺構番号	備　考
270	C_1	34 × 28	7.0	59D		296	C_1	36 × 29	11.5	〃	
271	C_1	30 × 25	6.4	〃		297	C_2	30 × 30	(6.5)	56C	半分欠損
272	C_1	33 × 32	13.0	59G		298	C_2	30 × 30	(2.8)	59P	〃
273	C_1	21 × 19	2.6	60C		299	C_2	34 × 30	11.2	57AB	
274	C_1	19 × 18	3.2	〃		300	C_2	51 × 49	29.6	SK74	
275	C_1	29 × 28	7.3	SK69		301	C_2	28 × 22	6.1	59BC	
276	C_1	34 × 30	11.5	56C		302	C_2	33 × 33	11.5	59D近世遺構	
277	C_1	20 × 18	3.7	〃		303	C_2	24 × 22	5.7	〃	
278	C_1	19 × 17	2.5	〃		304	C_2	40 × 36	23.6	SD49	
279	C_1	27 × 26	6.6	57CD		305	C_2	32 × 29	7.9	58A近世遺構	
280	C_1	21 × 21	4.3	SK74		306	C_2	36 × 35	14.2	SD67	
281	C_1	34 × 28	13.3	58A		307	陶丸	径 22	(8.8)	60C	一部欠損
282	C_1	16 × 15	1.7	59D		308	〃	〃 20	8.3	〃	
283	C_1	22 × 21	3.1	〃		309	〃	〃 20	13.1	〃	
284	C_1	32 × 28	7.3	〃		310	〃	〃 20	10.0	SE01	
285	C_1	36 × 34	14.0	〃		311	〃	〃 24	11.9	56C	
286	C_1	31 × 29	7.3	〃		312	〃	〃 21	12.9	SE10	
287	C_1	27 × 24	5.5	59L		313	〃	〃 20	10.2	56調査団	
288	C_1	26 × 24	5.1	SZ05西南攪乱		314	〃	〃 22	8.8	SX90	
289	C_1	29 × 27	7.1	〃		315	〃	〃 21	9.1	57CD	
290	C_1	28 × 25	13.8	〃		316	〃	〃 20	8.8	〃	
291	C_1	23 × 20	4.6	56C		317	〃	〃 22	11.3	SK74	×印の刻印あり
292	C_1	26 × 25	8.2	59A		318	〃	〃 23	9.0	59C	
293	C_1	26 × 23	6.9	SK74・SX87		319	〃	〃 20	8.4	SD55	
294	C_1	22 × 18	4.5	59D		320	〃	〃 23	10.9	SD64	
295	C_1	29 × 26	9.2	〃		321	〃	〃 24	12.9	SK63	

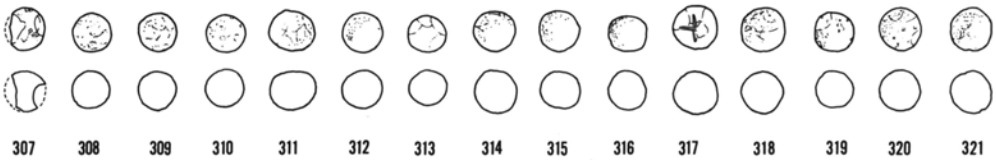












第41図　加工円盤・陶丸　(5)

5　遺構の変遷

本調査区においては，２つの時期にわけて遺構群を考えることができた。ここではこれらＡとＢ期とした時期について各々検討を加えてゆくことにし，土田遺跡全体の動向については第７節であらためて綜合する。

1）　弥生時代末期～古墳時代（Ａ期）の遺構

この時代の遺構としては墳丘墓とそれに付属する土坑群及び溝が存在する。墳丘墓はＡ・Ｂ・Ｃの３群に区分され，方形状を呈するＡ・Ｂ群と円形状を呈するＣ群に分類できた。

Ⅰ期（弥生時代末期）

調査区内ではＡ群とＢ群と２つのグループが存在し，（第42図）その各々の構成を見てみる。Ａ群が墳丘墓６基，土坑３基で，墳丘墓はある特定の溝の中央部に開口部を設定する形状に統一されている。その内 SZ02 はさらに開口部の溝が屈曲し，前方に拡大する形状を呈し，SZ06 は開口部付近で溝幅を拡大する。Ｂ群は現状では３基の墳丘墓より構成され，開口部の有無，その状況に統一性が見られない。規模においては大(13～15m)，中(９～11m)，小(４～５m)型に区分すると，Ａ群では大型２基(SZ05・SZ06)中型４基(SZ01～04)となり，Ｂ群では中型１基（SZ09）小型２基（SZ07・08）となる。ＡとＢ群ではまず周溝の状況，次に規模において明確な差が認められる。また出土遺物からも(第13図)相対的にＡ群の方が器種及び量において豊さを保っており，ＡとＢ群とは包摂関係をとるものと推測される。

Ａ群について詳細に見てゆくと，まず全体の配置が孤状を呈し，中央に広場的な空間を設定すると同時に土坑が用けられている。大型墳と中型墳に大別され，中型墳は SZ01・02 と SZ03・04 と２分される。それは配置関係からも明白だが，開口部の位置，及び遺物において推定できる。(前者が広口壺と短頸壺をほぼ均等に使用しているのに比べ，後者は量の多さと各種器種を使用している。)短頸壺を見てみると，SZ01・SZ03がＢ類，SZ02とSZ04がＡ類を出土し，おそらくＢ類からＡ類の使用へ変化していくものと推測したい。広口壺Ａは大型墳にその使用が限定され，広口壺ＡとＣではその使用方法に歴然とした意味が付加されていたものと思われる。開口部の屈曲と拡大はその発展段階説[1]より，より新しい様相を表わすものと考えられる。以上をまとめてみると，Ａ群はその内部に３つのまとまりが推定でき，各々２段階の変遷を経て，Ａ群という墓域が形成されていることになる。(第42図）前段階から後段階へは第１に規模の拡大，第２に開口部の拡大，変化が生じたことになる。

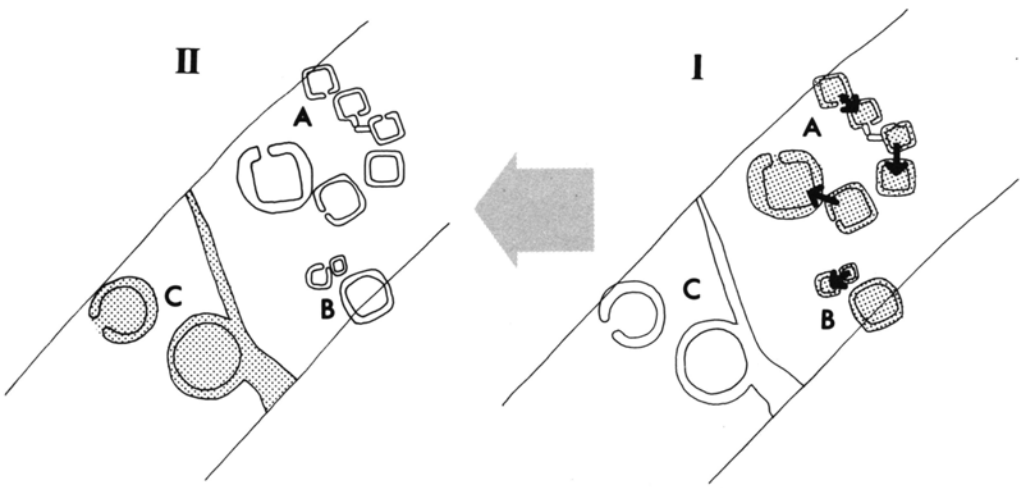
次にB群ではまずSZ07とSZ08の関係が注目される。第1に両者とも小型墳である。第2に直口壺Aはこれらの小型墳にのみ使用されている。直口壺Aの形状[2]よりSZ07→SZ08への移行を推定できよう。すると規模の拡大というA群で見た原則がここにもあてはまることになる。

以上を綜合すると，A群とB群との関係及びA群内部での大型・中型墳の差異が存在し，これらはある集団内部での階層的関係を表示するものと考えられる。そしてそれは出土遺物の器種に明確に反映する関係が同時に存在したことになる。

II期（古墳時代後期）

溝SD30により区画された状況でSZ10・SZ11が存在する。規模は径18～19mであり，SZ11は開口部が一ヶ所に見られる。出土遺物はSZ10で須恵器提瓶・瑞・短頸壺が見られ，東海地方須恵器編年[3]でII期後半に所属するものと考えられよう。提瓶は豊田大塚古墳[4]と近似するが，口頸部の沈線はSZ10ではすでに欠損し，全体としてその次の段階のものと考えられる。瑞は形状が若干異なるものの塩竈神社古墳[5]のものとほぼ同時期のものであろう。凡そ陶邑田辺編年でTK10に併行するようである。SZ11より出土した杯も同様にII期の中に含まれるものであり，C群の成立は6世紀中葉を中心とすると考えて大過ないであろう。

以上I期は弥生時代末期の「欠山期」を中心に成立した墓域であり，II期は須恵器TK10型式を中心とする。するとその間凡そ2世紀半のひらきが存在することになる。C群の在り方は明らかにA・B群を意識し，その外縁部（微高地外縁）に区域を設定し，墓域を確保している。この状況は古墳時代を通じて当地が一つの墓域として設定され，それを維持



第42図　A期遺構変遷図

してきた集団を想定しなければなるまい。その集団とはいかなるものかについては，なお周辺の調査をまたねばなるまい。

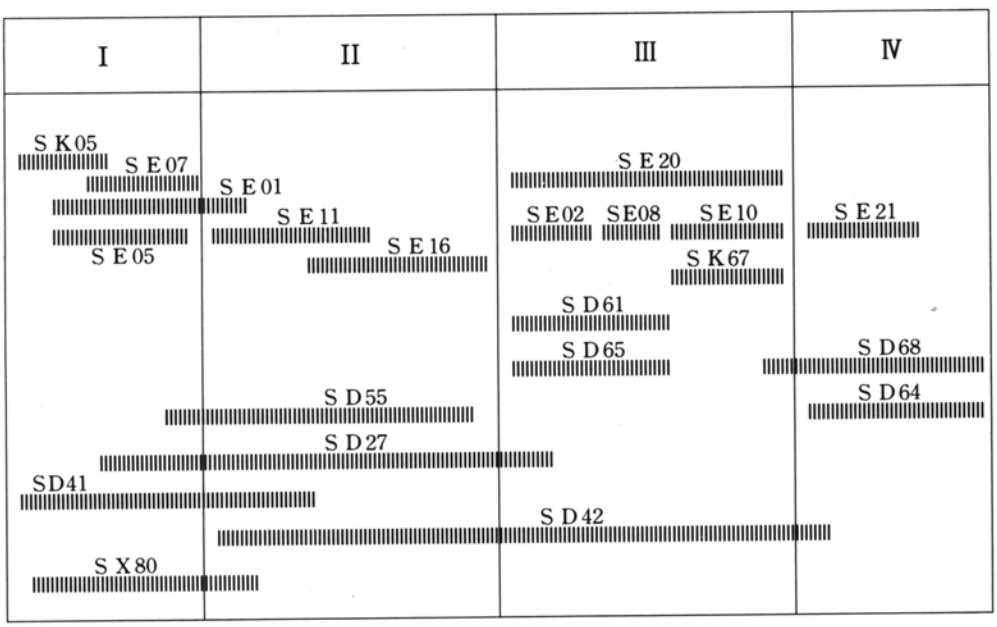
2） 平安時代末期～室町時代の遺構（B期）

遺構の種類としては，溝・井戸・土坑（壙）・建物・柵等がある。その内溝と井戸に遺物の出土が集中している。前述したように後世の削平整地のため，遺構として検出しえたものは，掘削の深い溝・井戸が中心とならざるをえなかった。ここでは溝・井戸を中心に遺構の変遷を復原し，また特色的な在り方を示す土壙（SX）については次項でまとめて取り上げる。

投棄された遺物より，溝の掘削・存続・廃棄・埋没時期を考えることは困難であり，かつその遺構の使用年代を推定するのは危険が伴う。そこでここでは遺物によるⅠ～Ⅳ期の区分を基に，遺構全体の構成とその変遷を類推する中で，大きな流れを把握することにつとめた。また建物等については削平をうけ，その存在が不安定であるが，溝・井戸・土器の投棄場所を中心に推定を試みた。以下井戸・区画する溝とその空間・建物・道・土壙の集中する空間の各要素を基本に，Ⅰ～Ⅳ期の変遷を復原する。ほぼ遺物によるⅠ～Ⅳ期の時期区分と一致するものと考える。

なお遺物からみた遺構の存続期間については第24表にまとめておいた。

第24表 主要遺構存続期間



第Ⅰ期（12世紀　平安時代末）

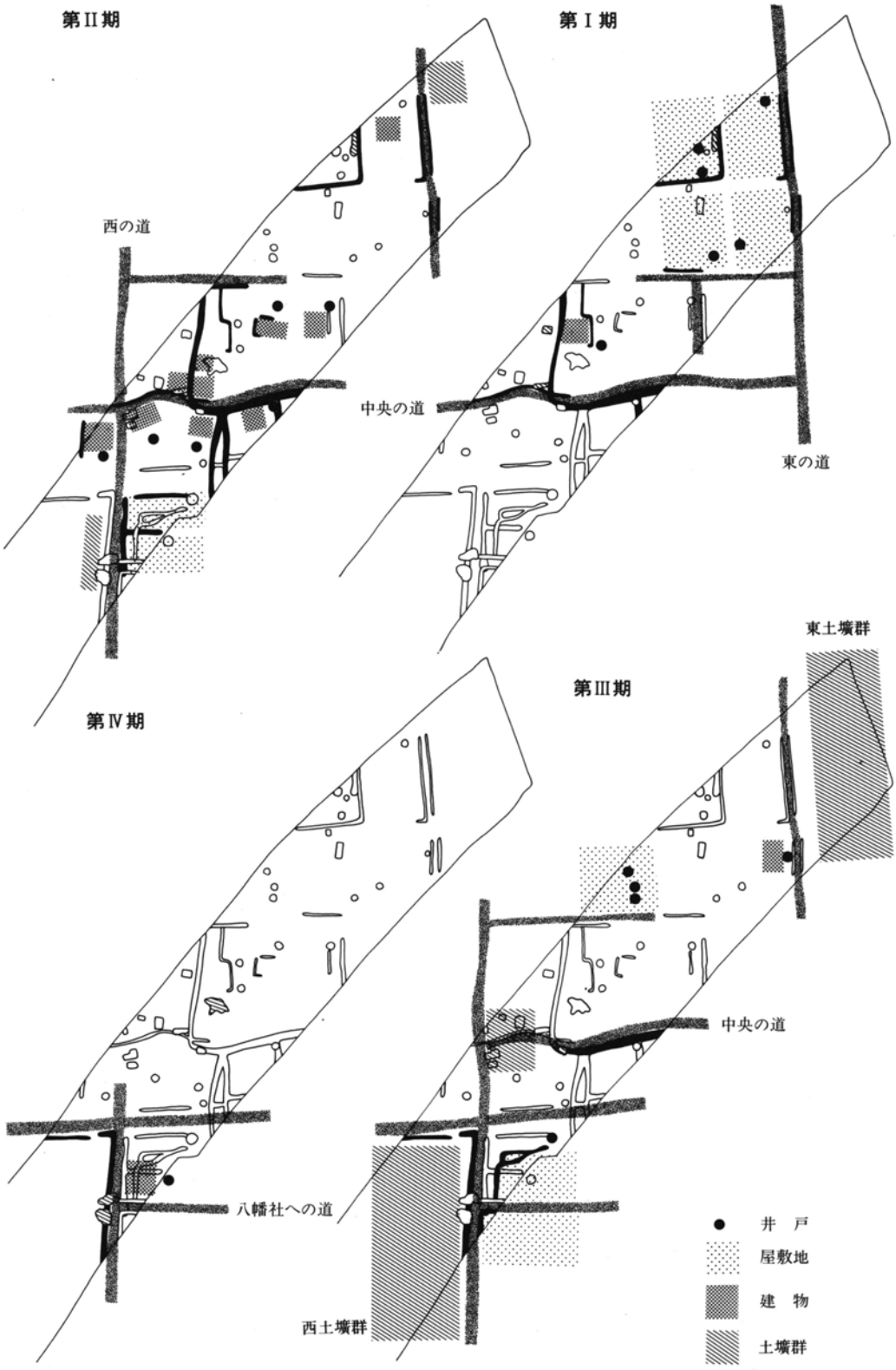
土田遺跡本調査区において遺構が掘削され始めた時期であり，ほぼ北側の遺構群を中心に人々が居住し始めたと考えられる。「東の道」とは土田遺跡が立地する自然提防状の高まりの端に沿って中ば自然発生的に存在した「道」と推察され，この道を基軸に大規模な長方形区画（30×40m）が設定された。（SD27・SD20）そしてその一方の隅に井戸が設けられ，同様に区画内にSX80のような土壙(SX)が存在した可能性が考えられる。それは「中央の道」に近接するSD35とSE14により建物の存在が推定できる場において，その西側にSX81が存在することからも理解されよう。なお「中央の道」も前述したように自然発生的に生まれた蛇行する「道」と考えられる。第Ⅰ期は長方形の大規模区画とそれに付属する井戸・土壙（SX）を基本として，整然と居住域を設定していた。

第Ⅱ期（12世紀末～13世紀　鎌倉時代）

「東の道」沿いの大規模区画は，しだいに意味をなくし，SD20，SD27には多量の遺物が投棄される。これらとは対象的に「中央の道」沿いには井戸・建物群が推定でき，道にそって家々が軒を連ねていたものと思われる。自然堤防の西端には「西の道」が存在し，道沿いの調査区南端には大規模な区画が営まれ始める。（15×35m），さらに注目すべき出来事は，北と南端に一定の土壙（SX）群が集中して営まれ始めたことである。これはⅠ期と比べると，区画内に存在していた土壙（SX）が，土壙自体の集中化をともなって特定の「場」を設定しはじめていることを物語る。Ⅱ期とは「中央の道」沿いの建物群と，調査区南端の大区画の成立，そして土壙の集中化に特色づけられる。

第Ⅲ期（13世紀末～14世紀　鎌倉時代末～南北朝時代）

「中央の道」に沿って掘削されたSD42より北上するSD41は，Ⅱ期後半にはすでに廃棄され，Ⅱ期で活発な活動が見られた「中央の道」沿いの建物群は消失し，変ってその地にやや大型の土壙(SX)群が営まれた。調査区南の区画は，内部的に変遷をたどりながら，SD56，SD61という特徴的な溝を掘削するとともに，SD68が出現する。SD68は調査区南西側に集中する土壙（SX）群を画する溝であり，同時に「東の道」調査区南西の土壙群が成立する。同様な土壙（SX）の集中が「西の道」調査区北東側で成立し，東西2つの大きな土壙群集中地区が出現した。調査区南端での遺構の在り方は，第1に大区画の存在，第2に西土壙群の成立という異様な場を形作り，特殊遺物（第16図）の出土から宗教関係の建物の可能性が考えられるかもしれない。「八幡社への道」[6]は土田の本郷からこの特異な場へ向かう主要道路として位置づけられていく。



第43図　B期遺構変遷図

第IV期（14世紀末～15世紀　室町時代）

調査区ではほとんどの遺構が，その使用を停止し，わずかにSD68・SD64を中心に井戸・建物の存在が推測されるにすぎない。東・西両土壙群はすでに空間的に飽和状態になり，その区画維持自体が不可能な状況を呈し，変って大型土坑SK62・SK63が掘削された。

その後当地は畑地荒地に変貌していったものと思われる。

以上の変遷を改めてまとめてみると，I期は北側の区画群，大規模区画を中心とする整然とした屋敷地が存在した。II期になると，その存在が消失し，「中央の道」沿いに小規模な建物群が連立する。そして南端には新たに大規模な区画がつくられ，土壙（SX）がしだいに特定の場へ集中しはじめる。III期になると人々の動きが南端の大区画に集中し，東西の土壙（SX）群の成立と合まって，特異な空間を形成する。

遺構の変遷において注目される事項をまとめておく。

1．整然とした大区画の配置は12世紀に成立する。2．「道」・区画等の基本的配置は自然地形を利用し，これに規制される。3．土壙（SX）は区画内から一定の場へ，そして集中するという変遷を歩む。4．「建物」は，たえず荒地へ任意に設定し，一定の場に長期間留まることはない。

以上の諸点から特に興味深い問題として2つの点があげられよう。第1の点は土壙(SX)の在り方である。土壙の設定場所の変遷を居住との関係で捉え直してみると，まず最初は居住空間の一部に設けられていたものが，生活領域の「外」へ近接して営まれる方向に変化する。そしてやがて，生活とはかけはなれた特殊な場へ追いやられていく。この変化は何を意味するものであろうか。第2の点は「土地」の問題である。たえず任意の場へ建物を設定し，同一場所に留まることはない（土地所有権の不安定）という状況は，土地所有という意味において注目されよう。これはこの地に居住した住民の階層的問題なのであろうか。ところで上記の一般的傾向の中にあって，唯一例外的な場が認められる。それは調査区南端の区画であり，長期間の居住とともに，西土壙群と何らかの関係が想定できる。調査区全体がIII期以降南の区画を中心に人々の動向が認められるのであり，当地がしだいに特殊な場として位置づけられてゆくことが推定できる。それは日常生活と遊離した場の出現と，その思想的背景の確立を意味する。遺構の変遷はII～III期に大きく変化し，その時代は鎌倉末～南北朝の動乱の時代に相当するものと思われ，同時に土器における画期と基本的に一致を見る。

6　方　形　土　壙

方形土壙179基について分析を行なう。

規　　定

第II章で述べたように，古代末～中世期に所属することは明らかであり，これら一連の土壙には共通する特色が認められる。それは大きく３つの要素から成り立っている。

第１の要素　遺構群の在り方に求められる。図版２～５を一見するとすぐ判明できることは，まず群集して土壙が築かれている点である。その大部分は図版２と前節で問題にした西と東の土壙群である。それ以外の場所においても認められようが，全体としてやはり居住区外（西・東の道以外）に営まれることは明白である。群集するとは，換言すれば特定の空間を設定するということにもなろう。

次に各土壙の特色として，全体に南北・東西という方位が意識されている点である。第44図から明らかなように，土壙の主軸が南北・東西に集中する。ただ南北方向では15度の方位ぶれが見られ，東西方向では東側にのみ10度のぶれが認められる。地区別では図版２の北端付近が西へ５～10度[7]の傾きをもち，SD20に区画される周辺では東へ５～10度の傾きをもつ。SD20に区画される周辺では東へ５～10度の傾きを持つものが集中する。おおむね，住居域を規定する基本軸に強く影響されていることが窺れようが，この点を踏えても方向性の保有は認められよう。なお南北方向に主軸を置くものと東西方向に置くものの比は１：0.8の割合となり，若干南北方向に長軸を置くものが多くを占める。

以上第１の要素である在り方（関係）において，「群集性」と「方向性」という２つの特色が見い出された。

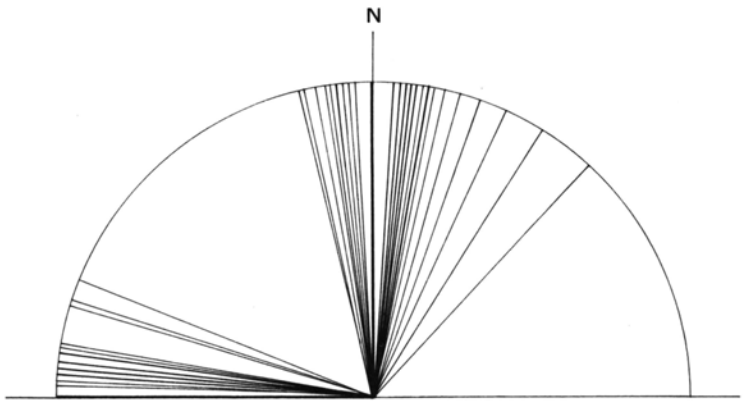
第２の要素　各々の土壙の形状に見られる特色として，平面形は隅丸の長方形を呈し（第９図）しかも第45図のように軸指数が1.0～0.17まであり，多くは短軸と長軸をもつ。そして軸指数0.5，つまり短軸と長軸の比が１：２の長方形を中心とする，相似形を有している。今一つ興味深いのは埋土の状況である。ほとんどブロック状の粘土塊を斑入する地山撹乱土で埋めつくされ，一般の層位堆積を示すものは存在し

ない。すなわち比較的短時間に「埋戻し」行為が伴う土壙といってよい。「掘削」→「内容物納入」→「埋戻し」が連続する土壙である。第2の要素である土壙自体の状況（存在）からプランに「長方形を基本とする相似形」をもち，「埋戻し作業が連続する」遺構という特色を指摘できる。

第3の要素

「内容物」について。現状ではその内容について言及しえる資料を持ち合せていない。断面観察においても内部の施設を考えさせる状況を見い出しえていない[8]。しかも「遺物」の出土がきわめて少なく，ほとんど存在しないと言ってもよい状況である。内部施設の問題と出土遺物に関しては否定的である。

以上まとめてみると，第1の要素（関係）において群集性と方向性を保有し，第2の要素（存在）において大きさに一定の規格をもち，掘削・内容物納入・埋戻し作業が連続する状況が見られる。第3の要素（内容物）では無構造・無遺物という特色を見い出しえた。これらの特色をもつ土坑を一括して「方形土壙」として綜合する。



第44図　長軸の方位

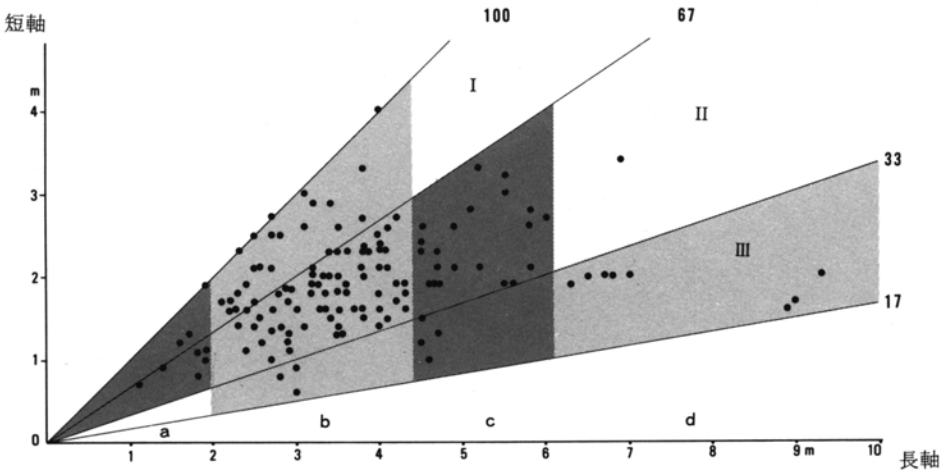
分　　類

平面形状の２つの要素を基に分類を行う。（第45図）まず長軸と短軸の比率である軸指数をもとに，1.0～0.67をⅠ類。0.67～0.33までをⅡ類。0.33～0.17をⅢ類とする。次に大きさを問題にし，相似形という特色から長軸の規模により４つに区分する。長軸２ｍ末満をａ類（小型），２～4.5m末満をｂ類（中型），4.5～６ｍまでをｃ類（大型），６ｍ以上をｄ類（超大型）とする。以上の２つの要素を組合せて９グループに区分した。（第45図）II_b 類が最も多く（48％）次に I_b 類（18％）II_c 類（15％）となる。この３つの類で全体の約８割を占める。

Ⅰ類　　正方形に近似するプランをもつもので，その大部分が長軸２～3.5mの間にある。なかでも長軸，短軸が2.5×２ｍの形状に集中する。大型が存在せず，ほぼ中型でもその内やや小規模なものが多い。

Ⅱ類　　長軸・短軸が２：１になる方形のプランをもつものが多い。その中心は長軸2.5～４ｍにあり，その内2.7mと3.6m付近に集中する傾向が認められる。また4.7m付近にも一つのまとまりが存在しそうである。

Ⅲ類　　長軸と短軸が３：１末満の長細い形状のもので特に興味深い現象が認められる。まず規模として小型のものは存在せず，4.5m以上の大型が８割を占める。分布に著しい偏りが見られ，４ヶ所に集中する。長軸でいけば2.8m，4.6m，6.5m，９ｍ付近に集中する。これらはある一定の規格とその相似を意味するものであろう。



第45図　規模分布と分類

配　　置

上記した第1の要素（関係）で群集性を指摘できた。その群集性とは2つの意味をもっているのであり，各種遺構群全体の中での土壙群の群集という点と，その内部における特定のまとまりという点である。

群集性

当調査区では，4つの土壙群のまとまりが認められる。(第46図)北から図版2に見られる第Ⅰ群，「西の道」沿いの第Ⅱ群，「東の道」とSD68に区画される第Ⅲ群，そして「中央の道」沿いに展開する第Ⅳ群である。

第Ⅰ群は，大まかに東西と南北の土壙帯ともいうべきまとまりが存在する。土壙の分類でいう II_b 類が主体を占め，b類，つまり中型規模の土壙に限定される。調査区北隅の一群は方位がずれ，むしろ廻間遺跡[9]のものと一つのまとまりが想定できよう。

第Ⅱ群は南北に土壙帯をもち，北辺では III_d 類他は II_c 類が主体をなし，全体に大規模な土壙が集中する。なおSX77～79はおそらく第5節で試みた屋敷地内土壙に相当するものと思われ，第Ⅱ群から除外する。

第Ⅲ群はⅠ類，すなわち正方形に近似するものが比較的目立つ。またⅢ類の超大型土壙も点在する。土壙帯の存在はみられず，むしろ大規模な方形の単位が指摘できる。

第Ⅳ群はむしろⅠ類，Ⅲ類の存在が注目され，一般形態とした II_b 類はほとんど用いられていない。また大型の土壙が比較的多い。

方形単位

土壙群の配置の中で興味深いのは，土壙のまとまりの中である種の空白域が存在する点である。特に方形の区画を設定するかのように空白域が東西，南北に長く存在している状況が窺える。土壙群の第Ⅲ群において顕著で，第Ⅰ群の中でも東西の土壙帯に見られる。おおむね25m×25mの方形単位，あるいは25m×15mの単位が存在するようである。

重複

3～6基の重複する土壙群から形成される一つのまとまりを意味する。土壙群の第Ⅰ群では3ヶ所以上，第Ⅱ群で1ヶ所，第Ⅲ群で3ヶ所以上，第Ⅳ群で1ヶ所見られる。ほぼ方形単位を設定する場所を中心に存在するという一つの傾向が認められよう。

重複区の特色をまとめておくと1．重複関係から類推される掘削時

期は２～５回。２．一掘削時期に２基あるいは３基の土壙が設けられる場合が見られる。３．途中に大型の土壙を掘削する場合がある。４．最終段階はほぼ II_b 類，中型の土壙である。５．小型の土壙が重複区の周囲に展開することが多い。

配置における特色をまとめてみると以下のようになる。

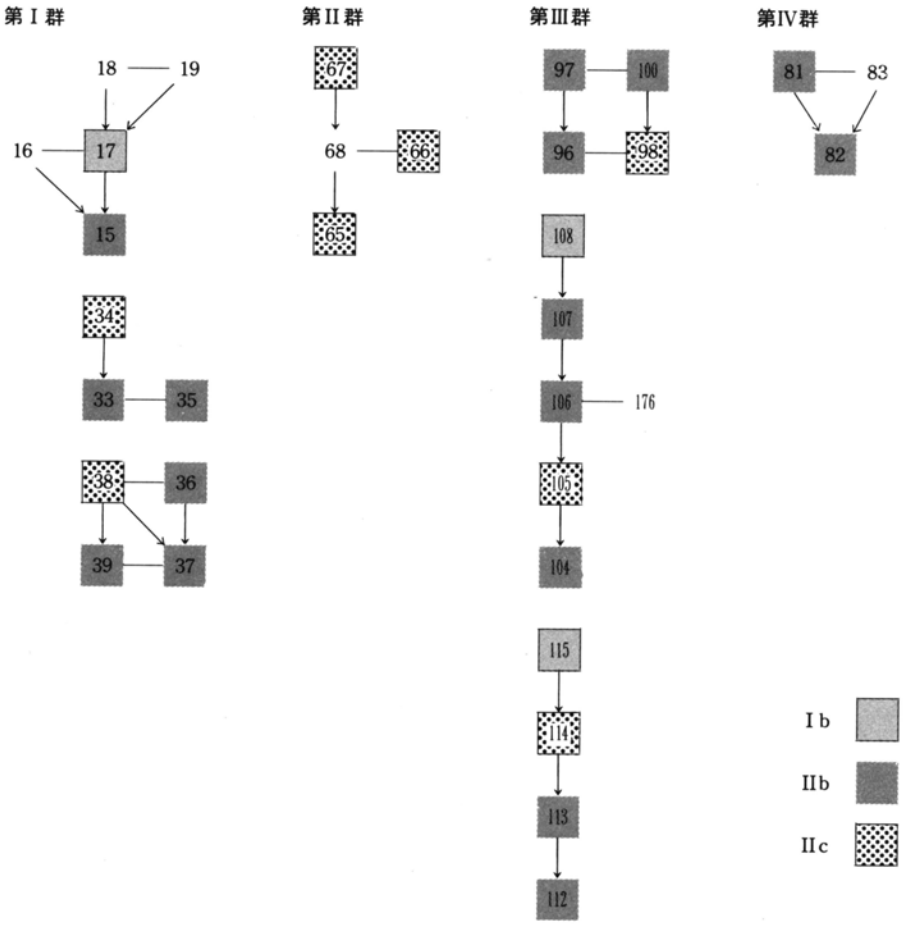
１．集落構造として土壙が集中する場所が存在する。（第Ⅰ～Ⅳ群）

２．第Ⅰ群と第Ⅲ群には内部に小単位が見られる。（方形単位）

３．第Ⅱ群と第Ⅳ群は比較的大規模な土壙（同様な規模，相似形のもの）が集中する。

４．方形単位は重複区を中心に形成されている可能性がみられる。

第25表　土壙の重複関係（重複区）



小　　結

第5節による遺構の変遷で見てきたように，土壙（SX）の集中は第II期から開始され，第III期に最盛期を向える。これらの遺構の動向及び上記した分析結果を加え方形土壙をまとめてみることにする。なお遺物の出土が少ない土壙であるが，その中でも時期の決定できるものについて第26表にまとめておいた。

土壙の遺構配置の在り方から4つの段階に区分できる。

第1段階　屋敷地の内部に土壙が設けられる段階。この屋敷内土壙は例えばSX80 のようにL字状に掘削された溝に近接する場合が認められ，同様なものに SD20 により区画される，SX78，79 が存在する。いずれも，屋敷地の一方隅に偏って営まれる。また建物に近接する形では SX81 ～ 83 が存在する。SX81 ～ 83 あるいは SX80 のように整然として重複する（重複区）土壙が見られることは注目すべきであり，少なくとも両者3回の掘削が認められた。

第2段階　土壙の集中が開始されるが，今だ住居地に近接して営まれる状況を呈する。土壙群第II及びIII群が出現しはじめるが，多くは住居地に著しく近接する。

第3段階　土壙群の群集地区が設定され，日常的空間から離脱する。

第I群は方形単位を基本に土壙群が展開し，第II群は大規模な土壙が「西の道」からやや間隔を置き，南北の土壙帯を形成する。第III群は，SD68，SD69 が掘削され，視覚化された特殊区域が出現する。また第I群と同じく方形単位を基本にしだいに南方へ拡散する。第3段階では土壙群の周囲に建物群が存在せず，一搬居住域と確実に分離する。

第4段階　土壙群による各区画が飽和状態になり，さらに外側に拡散するとともに，第III群には SK62，SK63 が掘削され，「埋戻し」作業を前提とした土壙製作そのものへの矛盾が表面化してゆくものと考える。

第26表　方形土壙出土遺物

遺　構	椀	皿	その他	時　期	遺　構	椀	皿	その他	時　期
SX85	2	2	加工円盤2	I	SX55	1	2		III
SX80	6	3	壺2 中国陶磁1 土師鍋1 加工円盤1	I～II	SX06	1	1		III
					SX159	1			III
SX81	1	3	土師皿1 加工円盤2	II前	SX21	1			IV
SX90	1		陶丸1	II末	SX44			土師鍋1	IV

以上土壙は居住空間の一部として存在した段階（第１，２段階）からそれらの集合が居住域と対峙する場として位置づけられ，やがて日常生活とはまったく異なる次元へ追いやられていった（第３，４段階）段階へと変遷してゆくものと推察される。第２段階と第３段階の間に画期を設定できる。その時期は遺物による編年作業から鎌倉末～南北朝の動乱期に相当する。

ところでこれらの土壙の内容物及び機能を説明することは困難であるが，第１段階でのSX80の遺物，及び石の集積（17頁）あるいは遺構の配置から推定すると，「人」「その他の動物」の埋葬空間，場であった可能性が高い。すると「埋戻し」への連続はこの埋葬，廃棄に基づく行動と理解とされよう。このように土壙を位置づけていくと，土壙群（Ⅰ～Ⅳ群）方形単位，重複区は以下のような各々の意味合いをもってくる。各土壙群は一つの集落内行政区分，あるいは集落単位の「墓域」「廃棄空間」を意味している可能性が考えられる。方形単位は，その内の血縁関係を基にした集団を表示するものであるかもしれない。すると重複区はこれら同族内有力世帯の墓所を意味してくる。重複区の掘削関係は多くは２時期の重複関係が認められる。すると基本は２世代となるが，しかし第Ⅲ群での重複区は４～５世代が推定できるのであり，この地区が他の土壙群と異なり特別な意味を持っていたことが推測できよう。

方形土壙を中世期を中心とする墓と規定すると，土壙の配置・重複関係を基本に，集団内部の構成員に言及できる資料を得たことになり，また土壙の群集化は「墓」に対する人々の基本的な考え方，思想背景の変化がそこから読みとれるのである。

〔注〕

1）田中新史「市原市神門四号墳の出現とその系譜」（『古代』第63号1976）
当地域では中央に開口部を設定する墳丘墓はＳＫ１４（図版10）出土遺物の段階（欠山期）から広範囲に見られるようになる。

2）直口壺Ａ（図版10）の㉘と㉔は体部最大径の位置と底部の状況から㉔がより新しい様相をもつものと理解できよう。

3）『須恵器展』愛知県陶磁資料館1982。

4）『豊田大塚古墳発掘調査報告書』豊田市教育委員会　1966。

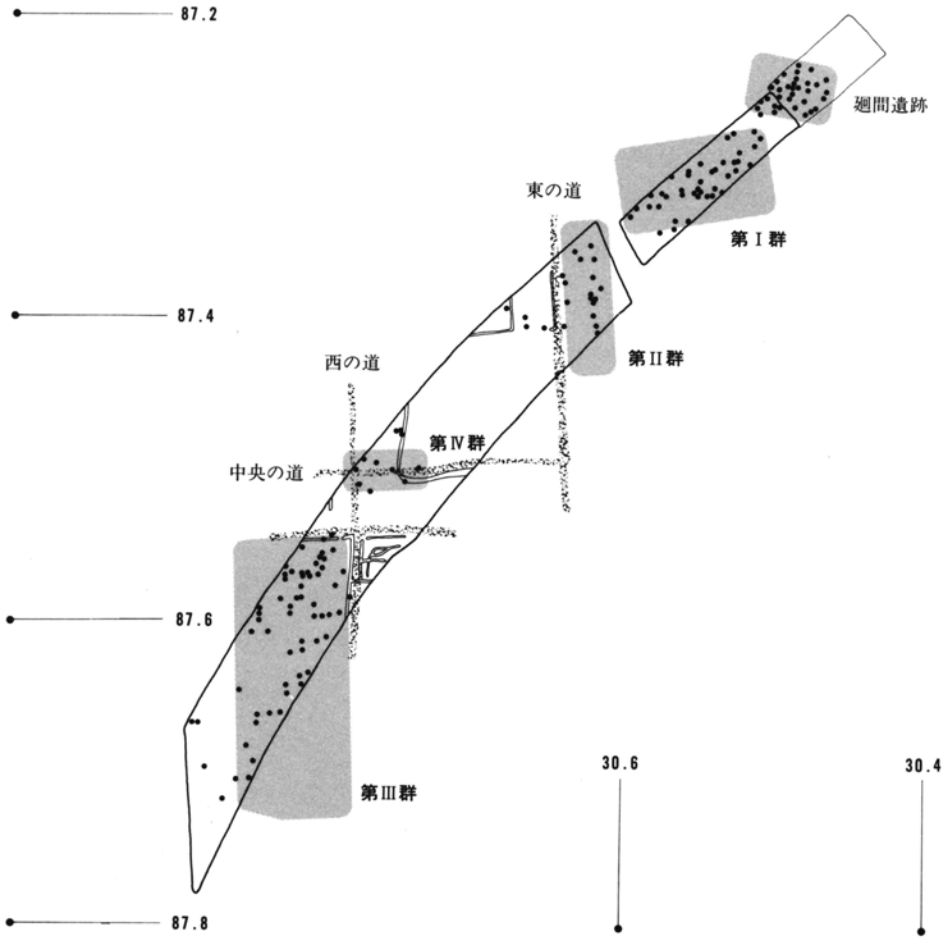
5）『新編一宮市史』資料３　1963。

6）現代の「土田」本郷は調査区西側の五条川自然堤防上に位置し，その北端に源頼朝ゆかりの「八幡社」が存在する。この八幡社の社前の道を東進すると「八幡社への道」に至る。

7）廻間遺跡で検出した土壙群と連続するものと思われる。

8）SX81では最下部に遺物と石の集積が存在し注目される。（図版30）（第Ⅱ章）
しかし第Ⅳ章で見てきたようにリン・カルシウム分析では良好な結果を得ていない。

9）「土田・廻間遺跡」（『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1986）



第46図　土壙分布

7　まとめにかえて

1）　画　　期

遺物から見た画期

出土遺物の器種構成及びその比率をまず見てみると，（第27表）土師器では皿・鍋類に明白な変化が認められた。皿では第III期をもって胎土変化（輝石・角閃石の量比の増大）し，またロクロ成形品D・E類が消失する。鍋類では基本的な形態である鍋Aが第Ⅰ～III期に見られ，第III期後半で急速にその使用が停止する。変わって鍋B・Cという新しいカタチがIII・IV期に登場する。また煮沸具全体に粗製から精製への変化が見られ，その萌芽的現象ともいえる胎土変化（雲母の量比が増加する半精製化）が第III期をもって開始される。なお完全な精製土器（胎土変化第3段階）の出現は第IV期，凡そ15世紀をまたねばならない。以上土師器の総合的（器種構成・技法・胎土）変換は第II期と第III期の間に存在する。

次に灰釉系陶器についてであるが，まず基本器種，椀・皿の場合，明らかに椀はA～C類という形態からD類へと大きく変化しており，E類の搬入を加えて第III期をもって画期を想定できた。口縁部による分類では第Ⅰ～II期まで存在した各種の器形は殆んど姿を消し，その内の C_3 類を母体として口縁端肥厚するD類が出現してくるのであり，椀形態の規範化が進行する。皿類では第Ⅰ～II期に「皿の傾向変化」が認められるものの，皿C類の登場は特徴的である。口縁部分類で第II期にB類は多様化するのであり，その中で B_1 類を母体として開始されてくる口縁端部肥厚，幅広い面をもち，底部が大きく，鋭く屈曲した短い口縁をもつC類への移行は注目せねばならない。椀と同様に一つのカタチへの規範化は第III期をもって出現し，加えてD類が搬入されてくる。椀・皿ともカタチの多様化から規格化（口縁肥厚志向）へ向かうのであって，精製品の登場も考慮すれば，第III期をもって一つの画期と考えることに異論はない。

その他鉢は鉢Aが椀・皿同様に第III期をもって口縁肥厚・体部直線化（B_2）を志向し，鉢Bは第III期をもって登場してくる。壺Aはほぼ第III期より口縁端部の面の拡張化が著しくなり，後半ではN字口縁に変化する。壺Bは第III期以降その姿を消す。釜も同様に第III期に残存するも，大部分は第II期に所属する。

施釉陶器は第III期をもって搬入され始め，第IV期にはその量を増加する。中国製陶磁器は第III期以降殆んど見られなくなる。加工円盤 A_1 類（灰釉系陶器椀・皿を素材としその高台部を使用する）は第Ⅰ・II期にほぼ限定される使用を見せ，変わって第III期以降陶丸が出現する。

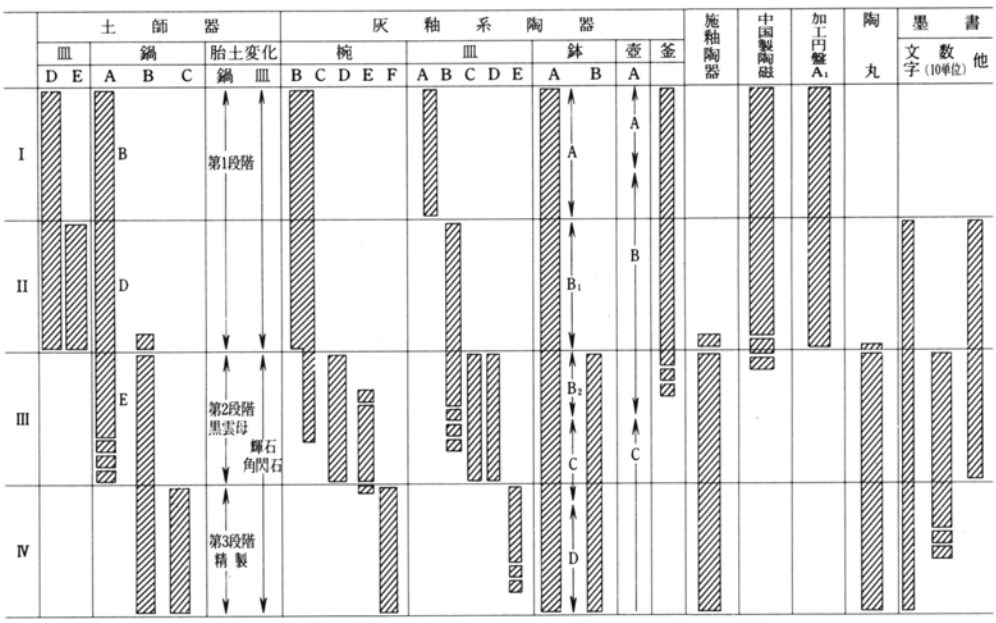
以上を総合すると土田遺跡の遺物は第II期と第III期の間，13世紀末葉に大きな画期が存在する。

消費地としての土田遺跡

土田遺跡第Ⅰ・II期に所属する製品は，その多くが知多古窯跡群で生産されたものと考えられる[2]。つまり常滑窯の一方的流入に特色づけられる時期である。ところが第III期になるとこれが一変し，瀬戸窯を中心とする製品に置きかわる。例えば椀C類は瀬戸窯産であり，藤澤編年の第6・7・8型式に所属するものである[3]。常滑窯製品の安定的流入から突如瀬戸窯製品の一方的流入に変化したと理解してよいであろう。その他第III期以降搬入する精製品は「美濃系均質手山茶椀」と称される一群の遺物であり，皿類の産地同定も同様な変化を見通すことができた。遺物の画期とした第II期と第III期では，その生産地での大変動をも反映している。

常滑窯ではほぼ14世紀になると，椀・皿類の生産を停止し，壺類を中心とする中・大型容器の限定生産に転化することが知られている[4]。一方瀬戸窯では第3～5型式までほぼ椀・皿専業生産体制が続き，第6型式以降器壁の粗雑化が著しくなり，無釉・施釉併焼窯が見られ，第8型式になると「山茶椀専業」と「施釉陶器専業」に2分されるという[5]。第6・7型式は土田第III期に所属する椀であり，他の灰釉系陶器，土師器との共伴から13世紀末～14世紀に中心をおくものと考えられる。瀬戸地域での椀・皿製品の生産には古窯数から類推して第3・4型式と第6・7型式に増加が見られ，特に後者の段階を中心にその

第27表　器種構成表



生産の隆盛が考えられるのではなかろうか[6]。すると土田遺跡でみられる生産地・流通の転換は，基本的には生産地での生産体制の変動と呼応する現象と考えられるのである。第III期といえば鎌倉時代末～南北朝の動乱期に相当し，その間に需給関係が大きく変化したことになると，その背景には「鎌倉」「京都」という支配構造の2極化とその変動が類推され，生産地での窯業経営の変動を考えねばならない。

因に墨書陶器に見られる10を単位とする「数を表示する記号」は第III期以降に表現されはじめる。これは貨幣経済の浸透（13世紀後葉以降）を示すものと考えることもできようが，流通配布手段の変化をしめす現象としても興味深いものといえよう。

遺構から見た画期

第4節「遺構の変遷」で見てきたように，第II期と第III期の間に画期を設定することができた。それは方形土壙の群集化による特定空間の設定（第3段階）に象徴される。また調査区内部で一般居住地が殆んど見られなくなる。

画期の意味するもの

遺物から，また遺構から，そのいずれにおいても第II期～第III期の間に最大の画期を設定できた。この画期は器種構成・技法・胎土に大きな変化をもたらし，それは生産地での変動と直接結びつく動きでもあった。また方形土壙の存り方から集落構造自体の変動を想定した。これらの歴史的変動の背景を見通す手掛りとして以下の2つの現象を上げておこう。まず井戸の廃棄層の存在と方形土壙の群集化。次に加工円盤 A_1 類の消長。前者の土壙の群集化は居住地との分離，そして遊離という図式で進行する。井戸廃棄層は第II期と第III期の間で消失し，その中で思想的背景の変化を類推できよう。後者の加工円盤の突然ともいえる第III期での消失は，それが「つぶて」というきわめて風俗的現象と解する限り，その消長は人間の内面的問題と深くかかわりをもつものと思われ，そこに大きな変化を推定できる。方形土壙の群集化に見られる居住区との分離・遊離は，廃棄・死における日常空間とのかかわりを表現するものと考えられ，そこに加工円盤の意味を考慮すると，非日常的なレベルが急速に居住地その空間から喪失してゆく過程をこれらは表現しているものと考えることができる。

南北朝の動乱を境に思想・風俗が一大画期をむかえるという指摘[7]がある。土田遺跡の画期はまさにこれらの日常性の変動と呼応する動きとして，改めて捉え直すことができるものと考える。

2） 湿原の再開発

土田遺跡の溝の掘削は12世紀前葉に位置づけられる。L字状に屈曲する大溝，あるいは溝によって区画される居住区の存在は，古代末期，湿原を舞台に再び活発化する開発の幕あけである。五条川を狭んで東側に展開する自然堤防上では清洲町朝日西遺跡にみられるようにL字状に屈曲する大溝SD09の掘削と，その内部の建物群が突如出現する[8]。朝日西遺跡の開発はSK13[9]出土遺物から明らかなように11世紀末葉の時期と考えられる。その他稲沢市国府跡大宮地区SK131（美濃窯虎渓山1号窯式）[10]の存在，また11～13世紀の溝が多く検出されており，三宅川，五条川の自然堤防上での開発の一端をこれらを通じ概観することができよう。ほぼ11世紀後葉を境に，人々が活発に活躍し始める様子を窺うことができ，その地に定着し，大溝を掘削，居住区を設定する動きは普遍的な動向として理解できるのかもしれない。それは凡そ11世紀末～12世紀にかけての時期と考えられ，まさに中世期への胎動といえる。

ところで溝の掘削については，今一つ活発化する時期が見られる。例えば一宮市山中遺跡[12]，甚目寺町阿弥陀寺遺跡[13]，同森南遺跡[14]等であり，これらは土田第III期に相当するもので，美濃，瀬戸系椀・皿類の搬入に特色づけられる動きである。13世紀末～14世紀初頭にかけて，再び大溝の掘削と居住区の設定が認められる時期のある点は留意する必要がある。また土田遺跡で見られた方形土壙の集中は，甚目寺町大渕遺跡[15]清洲町朝日遺跡[16]でも認められるのであり，土田遺跡第III期での普遍的な現象として捉え直すことができよう[7]。

さて11世紀末葉といえば，濃尾平野においてまず神宮領としての所謂寄進地系荘園の増加が指摘されており，「御厨」「御薗」[18]の存在が各所に見られる。さらに富田荘が公認の荘園となり，鎌倉街道沿いには多くの人々の往来の足跡が認められるのもこの時期を境にしてである。また五条川の自然堤防が現在と同様な状況になったのも古代末期とされ[19]，自然環境の安定化も加わって11世紀後葉以降，湿原の関発は再び歴史的命題となっていったものと推定し，土田遺跡の出現はまさにこの延長に位置づけられるものと考える。

土田遺跡第III期の画期は，遺構の変化もさることながら，生活する人々の内面的状況での変動を強く主張することができた。13世紀末一遍上人の甚目寺観音での踊念仏に象徴づけられるように，人々がこの時期，新しい思想，新しい体制（枠組）を求めて漂泊することが窺われ，旧来の集落の解体，新しい村の出現，人々の拡散がさかんに行なわれたのではなかろうか。新しい村での溝の掘削はこれらの現象と呼応するものといえよう。

五条川水系中・下流域における再開発は，古代末（11世紀末葉～12世紀）期と中世，鎌倉末期（13世紀末葉～14世紀）の2回に大きな動向を見い出すことができ，土田遺跡の出現は，前者に相当し，土田遺跡第III期の画期は後者によるところの影響と考える。

〔注〕

1）朝日西遺跡においては13世紀以降「非ロクロ成形」のみが盛行するとしている。SD25は実測図を見る限り土田第II期に所属し皿の変化は土田遺跡の状況と大差ないものと考える。
佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」。(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。

2）常滑窯製品については中野晴久氏より御教示をうけ，同時に実見する機会をえた。

3）藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」(『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982)。
瀬戸窯製品については藤澤氏より御教示をいただいた。

4）中野晴久「知多古窯址群における山茶椀の研究」(『研究紀要Ⅰ』常滑市民俗資料館 1983)。

5）注3）に同じ。

6）注3）に同じ。

7）網野善彦『異形の王権』イメージ・リーディング叢書 1986。

8）遠藤才文「尾張中世遺構の分析視角」(『中世尾張の遺構と遺物』第23回愛知考古学談話会資料 1984)。
「朝日西遺跡 II」(『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター 1985)。
SD09は土田第Ⅰ～II期に比定でき，第III期には埋没している。

9）注1）に同じ。土師器鍋Aの B_1 類が共伴する。なお他に単発的な遺構として11世紀前半まで遡る資料も見られる。

10）『尾張国府跡発掘調査報告書』Ⅴ稲沢市文化財調査報告XVIII 1983。

11）注10）に同じ。

12）『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市文化財調査報告8 1982。

13）「阿弥陀寺遺跡」(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。

14）長島広「甚目寺町森南遺跡について」(『中世尾張の遺構と遺物』第23回愛知考古学談話会資料 1984)。
遺物については長島氏より御教示。

15）池本正明「大渕遺跡に見る中世集落の一形態」(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。

16）七原恵史「中世土壙」(『朝日遺跡』1982)。

17）土葬墓とすれば「地下式壙」の成立時期13^{c}後半～14^{c}という年代と，現象面的には一致する動きかもしれない。江崎武「中世地下式壙の研究」(『古代探叢II』1985)。

18）上村喜久子「一宮地方の荘園と尾張国衛領」(『新編一宮市史』本文編上 1977) p.373～380。

19）井関弘太郎「一宮の地形と地質」(『新編一宮市史』本文編上 1977)。p.26・p.27・p.32

別　　表

主要遺構出土遺物計測値一覧

弥生土器

番号	口径	最大径	器高	分類
1	160	260		広口 A
2	190	270	300	〃 A
3	130	280	290	〃 B
4	170	300	290	〃 B
5	130	270		短頸 B
6	160	280	310	〃 C
7	140	230		〃 B
8	180	330	350	広口 B
9	150	280	300	短頸 A
10		300		〃 B
11	150	280		〃 C
12	160	270	290	広口 C
13	130			〃 C
14	150	240	230	〃 C
15	150	260	250	〃 C
16		300		〃 C
17		270		広口
21	120	140	180	直口 A
22	250		250	高杯 A
23	180	230		甕
24	90	110	140	直口 A
28	150	180	260	直口 A

土器・陶器

番号	口径	器高	底径	分類
48	170	49	84	椀 B_1
51	85	27	46	皿 A_2
52	95	28	60	皿 A_1
53	100	29	54	皿 A_2
54	93	30	46	皿 A_2
55	172	51	80	椀 C_1
56	170	50	86	椀 C_1
57	180	54	90	椀 C_1
58	160	43	80	椀 C_1
59	173	51	82	椀 B_1
60	168	55	76	椀 B_3
61	168	53	88	椀 B_2
68	96	27	50	皿 A_2
69	300	120	130	鉢A—A
70	310			鍋A—B_2
104	172	50	79	椀 B_1
105	162	46	76	椀 C_2
106	168	44	85	椀 C_1
107	166	49	80	椀 C_1
110	106	28	54	皿 A_1
111	88	25	48	皿 A_2
112	86	26	50	皿 A_2
113	84	19	50	土師皿D
131	160	51	78	椀 B_3
132	160	48	76	椀 B_2
133	155	52	73	椀 B_3
134	163	49	85	椀 B_3
135	174	55	82	椀 C_3
136	155	53	50	椀 C_2
137	156	51	75	椀 B_2
138	160	48	60	椀 C_3
139	158	50	80	椀 B_3
140	161	51	77	椀 B_3
141	88	25	50	皿 B_3
142	80	22	40	皿 B_1
143	85	26	36	皿 B_1
144	84	23	42	皿 B_1
145	79	22	47	皿 B_3
146	80	23	37	皿 B_1
147	82	20	46	皿 B_2
148	76	19	40	皿 B_1
149	80	21	46	皿 B_2
150	74	19	38	皿 B_1
151	76	18	37	皿 B_1
172	139	51	58	椀 D_1
175	144	53	60	椀 D_1
176	142	49	51	椀 D_1
177	144	53	56	椀 D_1
178	78	19	46	皿 C_1
179	81	21	43	皿 B_1
180	80	14	51	皿 C_1
181	80	17	57	皿 C_1
182	82	16	48	皿 D_2
189	148	53	66	椀 C_3
190	156	54	60	椀 C_3
191	157	55	73	椀 C_3
194	156	59	71	椀 C_3
195	160	52	72	椀 C_2
197	150	44	66	椀 B_1
198	150	55	66	椀 B_3
199	146	55	65	椀 B_3
200	144	52	52	椀 C_3
201	154	53	68	椀 B_3
202	152	53	70	椀 B_3
206	82	23	38	皿 B_2
207	81	22	44	皿 B_2
208	84	18	42	皿 B_2
216	140	51	60	椀 D_2
217	142	50	58	椀 D_2
219	140	55	50	椀 D_2
220	133	60	57	椀 D_2
221	132	50	58	椀 C_3
226	138	58	49	椀 E
227	140	54	52	椀 E
228	140	61	52	椀 E
229	123	47	47	椀 E
232	280			鍋A—D
233	300			鉢A—B_2
234	84	15	48	皿 C_1
235	84	18	48	皿 C_1
236	80	12	55	皿 C_1
237	76	13	52	皿 C_1
238	82	15	52	皿 C_1
239	78	14	48	皿 B_1
240	84	17	50	皿 C_1
241	77	19	45	皿 C_1
242	78	17	44	皿 C_1
244	86	19	48	皿 D_1
245	80	14	48	皿 C_1
246	84	19	48	皿 C_1
247	80	20	35	皿 B_1
249	71	21	42	皿 B_1
250	80	14	44	皿 D_1
251	80	17	40	皿 D_1
279	145	56	55	椀 E
280	150	55	58	椀 E
281	132	46+	56	椀 D_2
285	78	21	48	皿 B_3
286	82			皿 C_1
287	82	18	42	皿 B_2
289	82	13	56	皿 D_2
290	270			鍋A—E
291	330			鉢A—C
292	320			鉢B
304	145	61	62	椀 D_2
305	144	53	64	椀 D_1
306	142	60	60	椀 D_2

番号	口径	器高	底径	分　類
308	86	10	60	皿　D_1
309	148	51	57	椀　D_2
310	142	48	55	椀　D_2
311	128	49	53	椀　D_2
312	145	47	59	椀　C_3
313	146	56	55	椀　C_3
316	78	17	44	皿　C_1
317	74	15	50	皿　C_1
327	126	24	30	椀　F_2
330	122	36	38	椀　F_1
331	123	34	38	椀　F_1
332	123	42	44	椀　F_1
333	76	9	50	皿　E
334	82	9	60	皿　E
345	310			鉢A—D
346	350			鉢B
348	120	36	45	椀　F_2
349	122	35	44	椀　F_1
350	145	56	72	椀　C_3
351	151	55	68	椀　D_1
355	150	59	70	椀　C_3
356	150	51	76	椀　C_3
357	154	58	70	椀　C_2
358	145	51	62	椀　B_2
359	145	50	74	椀　C_2
360	153	51	65	椀　C_1
361	145	53	68	椀　C_3
362	164	56	74	椀　C_3
363	70	27	35	皿　B_2
364	76	27	35	皿　B_2
365	70	18	40	皿　B_1
366	80	14	46	皿　C_1
367	81	15	48	皿　C_1
368	82	16	40	皿　B_2
369	81	11	50	皿　D_2
370	81	19	46	皿　C_1
371	78	17	42	皿　B_2
372	82	20	44	皿　B_2
373	85	20	46	皿　B_2
375	98	31	50	皿　A_2
376	85	24	42	皿　B_2
377	80	18	44	土師皿D
387	156	50	75	椀　C_1

番号	口径	器高	底径	分　類
388	146	44	66	椀　C_2
390	145	50	65	椀　B_3
392	143	53	62	椀　B_3
393	142	48	57	椀　D_1
394	86	22	44	皿　B_1
395	92	21	49	皿　B_1
396	75	17	40	皿　B_1
397	83	20	45	皿　C_1
403	154	24	100	土師皿A
414	162	51	80	椀　A
415	168	50	72	椀　A
416	166	52	74	椀　B_1
417	162	52	73	椀　B_2
419	164	53	69	椀　B_2
420	160	47	66	椀　B_2
421	159	52	69	椀　B_2
422	167	47	75	椀　B_2
424	158	51	78	椀　B_3
425	160	51	70	椀　B_3
426	160	53	78	椀　B_3
427	158	47	80	椀　B_3
428	157	47	78	椀　B_1
429	162	44	80	椀　B_3
430	152	47	70	椀　B_3
434	166	50	78	椀　C_2
435	166	52	82	椀　C_2
436	160	55	78	椀　C_2
437	160	48	78	椀　C_2
440	150	51	69	椀　C_3
441	167	51	74	椀　C_3
442	162	51	84	椀　C_3
444	94	28	45	皿　A_1
445	96	26	55	皿　A_1
446	94	28	45	皿　A_1
447	90	23	42	皿　B_2
448	80	20	42	皿　B_2
449	83	24	38	皿　B_1
450	84	21	39	皿　B_2
451	90	21	44	皿　B_2
459	164	51	76	椀　B_1
460	153	48	70	椀　B_3
461	154	53	80	椀　B_3
465	167	52	76	椀　C_2

番号	口径	器高	底径	分　類
466	158	46	68	椀　C_2
469	150	51	74	椀　C_3
470	143	53	63	椀　C_3
471	148	51	66	椀　C_3
472	140	57	56	椀　D_2
473	138	48	58	椀　D_1
474	144	50	62	椀　D_2
479	154	55	70	椀　D_1
480	133	52	56	椀　D_1
481	137	54	61	椀　D_1
482	140	55	62	椀　D_2
483	140	61	64	椀　D_1
484	136	52	67	椀　D_2
495	94	24	52	皿　B_2
496	84	20	44	皿　B_1
497	80	19	41	皿　B_2
498	86	21	40	皿　B_1
499	86	21	48	皿　B_2
500	80	15	46	皿　B_2
501	85	20	48	皿　B_1
504	83	15	55	皿　C_2
507	82	28	48	皿　C_1
509	79	14	40	皿　D_2
510	78	17	45	皿　C_2
511	80	16	39	皿　C_1
512	86	16	48	皿　C_1
513	85	21	48	皿　C_1
514	81	21	42	皿　C_1
515	84	20	50	皿　C_1
516	82	17	59	皿　C_2
518	86	20	42	皿　B_2
519	82	17	49	皿　B_1
520	73	20	39	皿　B_1
521	85	17	44	皿　B_2
522	85	20	51	皿　B_2
523	74	23	38	皿　B_1
526	74	16	43	皿　C_2
527	80	14	50	皿　C_2
528	100	18	52	
529	270			鉢A—E
530	133	23	83	土師皿B
534	330			鉢A—B_2
535	350			鉢A—B_2

主要遺構計測値一覧

ＳＺ（墳丘墓）

番号	調査地区別・遺構番号	出土遺物	番号	調査地区別・遺構番号	出土遺物
1	56B　ＳＤ002・ＳＤ003・ＳＤ009	壺2	7	59A　ＳＺ04	壺1
2	56E　ＳＤ011・ＳＤ012・ＳＤ013	壺3	8	59A　ＳＺ03	壺2
3	56D　ＳＤ030 59E　ＳＤ010・ＳＤ018	壺4	9	56G　ＳＺ01	壺1
4	56D　ＳＤ031・ＳＤ032	壺7・甕1	10	59A　ＳＺ01 59BC　ＳＺ01	提瓶・鼈・短頸壺 高杯・杯身
5	56E　ＳＤ017	壺3・高杯1	11	57D　M28・30 59BC　ＳＺ02	須恵器・杯身
6	56E　ＳＤ020 57C　M19・M20 59A　ＳＺ02	壺1			

ＳＫ（土坑）

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深・(m)	時期	番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深（m）	時期
1	60D　ＳＫ10			40	59BC　ＳＫ06	2.6・(1.8以上)・0.20	
2	56C　ＳＫ023	1.8・1.6・0.84	II～III	41	59BC　ＳＫ08	2.1・2.1・0.15	
3	59P　ＳＫ02	2.2・1.6・0.33		42	59BC　ＳＫ10	1.2・1.0・0.25	
4	59P　ＳＫ01	1.0・1.0・0.03		43	59BC　ＳＫ11	1.2・1.2・0.40	
5	56B　ＳＫ003	2.4・2.3・0.47	I	44	59BC　ＳＫ09	1.3・1.3・0.40	II
6	56E　ＳＸ005	3.6・2.2・0.33		45	60農道　ＳＫ03	2.0・2.0・0.50	III
7	56E　ＳＫ017	1.2・2.1以上・0.36	II	46	60農道　ＳＫ02	1.8・1.7・0.47	III
8	56B　ＳＫ005	1.1・1.1・0.20	II	47	59D　ＳＫ04	(1.5以上)・0.9・0.20	II
9	56E　ＳＫ016	2.1・2.0・0.25	II	48	59D　ＳＫ12	1.6・1.5・0.35	I
10	56E　ＳＫ018	2.2・(2.2)・0.18	II	49	59D　ＳＥ02	2.2・2.0・0.36	
11	56E　ＳＫ015	(1.2)・0.6・0.05		50	59D　ＳＫ03	2.8・1.5・0.25	
12	56E　ＳＫ010	1.4・1.4・0.38		51	59D　ＳＫ07	1.5・1.2・0.11	
13	56E　番号なし	2.5・1.6・0.05		52	59D　ＳＤ07	2.7・0.9・0.08	
14	56E　ＳＫ012	(2.6以上)・0.8・0.10	弥生土器	53	59D　ＳＫ17	1.8・1.8・0.40	
15	56E　ＳＫ008	2.1・2.0・0.50		54	59D　ＳＫ05	1.4・1.4・0.40	
16	56E　ＳＫ009	1.9・1.9・0.36		55	59D　ＳＫ11	1.4・1.3・0.48	
17	56E　ＳＫ011	1.6・1.4・0.27		56	59D　ＳＥ04	1.7・1.6・0.25	
18	56E　ＳＫ019	1.6・1.5・0.23		57	59D　ＳＫ01	2.1・1.8・0.50	II
19	59P　ＳＫ10	1.7・0.8・0.20		58	59D　ＳＫ09	2.3・(1.5以上)・0.70	I～II
20	59P　ＳＫ11	1.2・1.2・0.21		59	57B　M9	1.8・1.8・0.10	
21	59P　ＳＫ12	1.5・0.7・0.13		60	57B　M15	6.0・6.0・0.40	II～III
22	59A　ＳＫ18	1.8・1.7・0.40		61	59BC　ＳＫ01	9.6・5.5・0.70	II～IV
23	59A　ＳＫ07	3.5・2.8・0.14	III	62	59HI　ＳＫ31	(8.0以上)・4・0.60	IV
24	59A　ＳＸ01	0.7・0.7・0.50	I～II	63	59HI　ＳＫ06	6.2・5.5・1.00	IV
25	57C　P9	2.7・1.7・0.20	II～III	64	59E　ＳＫ10	1.9・1.4・0.15	IV
26	57C　P6	0.6・0.6・0.10	II	65	59E　ＳＫ09	1.5・1.1・0.32	II
27	57C　P10	1.4・1.4・0.10	II	66	59E　ＳＫ01	1.2・0.8・0.20	II
28	59A　ＳＫ12	3.4・2.5・0.10	III	67	59E　ＳＤ04	1.4・(1.3以上)・0.20	III
29	59A　ＳＫ06	4.8・2.9・0.20	III	68	57調査団ＳＫ06	3.18・1.62・0.11	
30	59A　ＳＫ02	2.3・(1.9以上)・0.07		69	56E　ＳＸ004	7.5・2.7・0.10	
31	59A　ＳＫ03	2.5・1.3・0.18	III	70	60農道　ＳＤ01	3・(2.3以上)・0.20	
32	59A　ＳＫ04	3.1・1.5・0.95	III	71	57A　M2		弥生土器
33	59A　ＳＫ17　57C　M24 57D　M25	8.0・4.0・0.40	須恵器	72	56E　ＳＤ016		弥生土器
34	56D　ＳＤ033		須恵器	73	59D　ＳＫ13	1.3・1.2・0.63	
35	59A　ＳＫ10	1.6・1.6・0.17		74	59BC　ＳＫ02	24・3・0.57	IV
36	59A　ＳＫ11	1.1・0.8・0.20		75	56C　ＳＫ020		II
37	59A　ＳＫ01	(2.8以上)・1.9・0.05	II	76	60農道　ＳＫ05	(2)　0.11	須恵器
38	57A　P5	2.2・2.2・0.40		77	59D　ＳＫ07	1.4・1.2・0.11	須恵器
39	57A　M8	(3.6)・(3.6)・0.80					

ＳＥ（井戸）

番号	調査地区別遺構番号	長・短・深（m）	時　期	番号	調査地区別遺構番号	長・短・深（m）	時　期
1	56A　ＳＥ001・60E　ＳＥ01	2.4 ・2.4 1	Ⅰ～Ⅱ	12	59A　ＳＫ14	2.7 ・2.3 ・0.6	Ⅰ～Ⅱ
2	59P　ＳＥ01	1.6 ・1.6 ・1	Ⅱ～Ⅲ	13	59ＢＣ　ＳＥ02	2.0 ・2.8 ・	—
3	56D　ＳＥ06	2.5 ・2.5 ・0.75	Ⅰ	14	59ＢＣ　ＳＥ01	2.4 ・2.4 ・	Ⅰ
4	56B　ＳＥ002	1.8 ・1.6 ・1.5	Ⅱ～Ⅲ	15	Ｓ56調査団Ⅱ　ＳＥ02	2.8 ・2.8 ・1.5	Ⅲ
5	56B　ＳＥ003（ＳＸ001）	3.5 ・3.5 ・0.8	Ⅰ	16	59D　ＳＫ02	2.5 ・3.0 ・	Ⅱ
6	56E　ＳＥ004（ＳＸ003）	2.7 ・2.7 ・1.5	Ⅱ	17	59D　ＳＥ01	2.4 ・2.7 ・	—
7	56E　ＳＥ005	3.3 ・3.0 ・0.65	Ⅰ	18	59D　ＳＥ05	2.4 ・2.3 ・1.4	Ⅰ～Ⅱ
8	57C　Ｐ11	2.8 ・2.8 ・0.6	Ⅲ	19	59D　ＳＥ03	1.4 ・1.6 ・1.1	—
9	59A　ＳＫ05	3.3 ・2.3 ・0.6	Ⅲ	20	Ｓ56調査団Ⅱ　ＳＥ01	4.8 ・4.8 ・1.5	Ⅲ
10	59A　ＳＫ13	2.5 ・2.2 ・1.2	Ⅲ	21	Ｓ56調査団Ⅱ　調査区外	不　明	Ⅳ
11	59A　ＳＥ01	5.3 ・4.0 ・0.7	Ⅱ				

ＳＤ（溝）

番号	調査地区別・遺構番号	時　期	番号	調査地区別・遺構番号	時　期	番号	調査地区別・遺構番号	時　期
1	61　ＳＤ01		28	調査団		55	59E　ＳＤ05	Ⅰ～Ⅱ
2	61　ＳＤ02		29	59A　ＳＤ08	—	56	59E　ＳＤ10	Ⅱ～Ⅲ
3	61　ＳＤ03		30	59A　ＳＤ02	須恵器	57	59E　ＳＤ16	—
4	61　ＳＤ04		31	57A　Ｍ3	—	58	59E　ＳＤ15	Ⅲ
5	61　ＳＤ05		32	59A　ＳＤ06	—	59	59E　ＳＤ14	Ⅲ
6	61　ＳＤ06		33	59A　ＳＤ04	—	60	59E　ＳＤ12	Ⅲ
7	61　ＳＤ07		34	57D　Ｍ26 59ＢＣ　ＳＰ13	Ⅱ～Ⅲ	61	59E　ＳＤ08	Ⅲ
8	61　ＳＤ08		35	57D　Ｍ 59ＢＣ　ＳＤ03	Ⅰ～Ⅱ	62	59E　ＳＤ07	Ⅱ
9	61　ＳＤ09		36	59ＢＣ　ＳＤ09	—	63	59E　ＳＤ19	—
10	61　ＳＤ10		37	59ＢＣ　ＳＤ20	—	64	59E　ＳＤ03	Ⅳ
11	61　ＳＤ11		38	59ＢＣ　ＳＤ02　ＳＤ11	Ⅱ	65	59E　ＳＤ02	Ⅲ
12	61　ＳＤ12		39	59ＢＣ　ＳＤ06	—	66	59E　ＳＤ01	Ⅲ～Ⅳ
13	61　ＳＤ13		40	59ＢＣ　ＳＤ05	—	67	59E　ＳＤ17	Ⅲ
14	61　ＳＤ14		41	59ＢＣ　ＳＤ01	Ⅰ～Ⅱ	68	59F　ＳＤ03 59ＨＩ　ＳＤ02	Ⅲ～Ⅳ
15	61　ＳＤ15		42	57A　Ｍ7　59A　ＳＤ01 59ＢＣ　ＳＤ10	Ⅰ～Ⅲ	69	59F　ＳＤ01	—
16	61　ＳＤ16		43	59ＢＣ　ＳＤ08	—	70	59ＨＩ　ＳＤ01	—
17	56C　ＳＤ028	—	44	59ＢＣ　ＳＤ04	—	71	59Ｊ　ＳＤ04	—
18	60E　ＳＤ01		45	57D　Ｍ33	Ⅲ	72	59Ｊ　ＳＤ03	—
19	56C　ＳＤ023 60E　ＳＤ02	—	46	59D　ＳＤ02 60現道　ＳＤ02	Ⅱ～Ⅲ	73	59Ｊ　ＳＤ01	—
20	56C　ＳＤ022 60E　ＳＤ06	Ⅰ～Ⅲ	47	59D　ＳＤ06 60現道　ＳＤ03	Ⅱ～Ⅲ	74	59A　ＳＤ03	
21	56C　ＳＤ27	—	48	59D　ＳＤ03	Ⅱ～Ⅲ	75	59A　ＳＤ10	—
22	56C　ＳＤ25	—	49	56調査団 59D　ＳＫ16	—	76	59A　ＳＤ11	—
23	59P　ＳＤ05		50	56　調査団		77	59ＢＣ　ＳＤ15	—
24	59P　ＳＤ03		51	58A　ＳＤ01	Ⅱ	78	59D　ＳＤ05	
25	56D　番号なし		52	57B　Ｍ11	—	79	59D　ＳＤ09	—
26	56D　〃		53	57B　Ｍ12	Ⅱ			
27	56B　ＳＤ001　ＳＤ005 56E　ＳＤ001　ＳＤ005	Ⅰ～Ⅲ	54	59E　ＳＤ18	Ⅱ～Ⅲ			

ＳＸ（土壙）

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深（m）	分　類	番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深（m）	分　類
1	61　ＳＫ01	4.1・2.6・0.51	Ⅱb	46	60Ｃ　ＳＫ08	(65以上)・1.8・1.00	Ⅱc
2	61　ＳＫ02	(1.4)・1.4・0.25	Ⅰa	47	60Ｃ　ＳＫ02	4.0・2.1・1.25	Ⅱb
3	61　ＳＫ06	(3)・1.8・0.50	Ⅱb	48	60Ｃ　ＳＫ11	2.9・1.3・0.40	Ⅱb
4	61　ＳＫ07	4.6・1.9・0.51	Ⅱc	49	60Ｄ　ＳＫ12	(3.0)・3.0・0.65	Ⅰb
5	61　ＳＫ08	3.6・2.1・0.53	Ⅱb	50	60Ｄ　ＳＫ11	(3.0)・2.9・0.69	Ⅰb
6	61　ＳＫ03	3.2・1.4・0.30	Ⅱb	51	60Ｄ　ＳＫ13	4.9・(1.5)・0.62	Ⅱc
7	61　ＳＫ09	(3)・1.7・0.30	Ⅱb	52	60Ｄ　ＳＫ15	3.8・1.5・0.56	Ⅱb
8	61　ＳＫ04	(3以上)・1.5・0.48	Ⅱb	53	60Ｄ　ＳＫ14	1.8・0.8・0.10	Ⅱa
9	61　ＳＫ13	(3)・1.9・0.37	Ⅱb	54	60Ｃ　ＳＫ01	3.6・1.9・1.00	Ⅱb
10	61　ＳＫ14	5.2・2.8・0.49	Ⅱc	55	60Ｅ　ＳＫ02	8.9・1.6・0.77	Ⅲd
11	61　ＳＫ15	3.5・2.3・0.52	Ⅱb	56	60Ｅ　ＳＫ04	6.8・2.0・0.85	Ⅲd
12	61　ＳＫ18	3.2・2.9・0.67	Ⅰb	57	60Ｅ　ＳＫ05	6.9・3.4・1.00	Ⅱd
13	61　ＳＫ11	2.9・1.1・0.55	Ⅱb	58	59Ｏ　ＳＫ01 60Ｅ　ＳＫ03	6.5・2.0・0.52	Ⅲd
14	61　ＳＫ12	2.4・1.1・0.31	Ⅱb	59	60Ｅ　ＳＫ06	2.3・1.8・0.49	Ⅰb
15	61　ＳＫ24	3.8・2.3・0.44	Ⅱb	60	60Ｅ　ＳＫ07	4.7・2.1・0.62	Ⅱc
16	61　ＳＫ23	—・2.0・0.22		61	60Ｅ　ＳＫ09	4.9・2.6・0.61	Ⅱc
17	61　ＳＫ25	3.8・3.3・0.82	Ⅰb	62	60Ｅ　ＳＫ08	(2.6以上)・1.6・0.23	Ⅱb
18	61　ＳＫ26	—・2.8・0.46		63	60Ｅ　ＳＫ10	5.8・2.1・0.73	Ⅱc
19	61　ＳＫ27	3.0・0.6・0.27	Ⅲb	64	60Ｅ　ＳＫ12	(7.6以上)・2.3・0.62	Ⅲd
20	61　ＳＫ28	3.0・0.9・0.18	Ⅲb	65	56Ｃ　ＳＸ011	4.5・2.4・0.85	Ⅱc
21	61　ＳＫ29	3.5・1.1・0.29	Ⅱb	66	56Ｃ　ＳＸ011	4.6・1.9・0.66	Ⅱc
22	61　ＳＫ22	2.8・0.8・0.26	Ⅲb	67	56Ｃ　ＳＸ011	5.6・1.9・0.50	Ⅱc
23	61　ＳＫ21	3.5・1.3・0.42	Ⅱb	68	56Ｃ　ＳＸ011	—・—・0.54	
24	61　ＳＫ30	4.9・2.1・0.37	Ⅱc	69	56Ｃ　ＳＸ010	2.2・1.6・0.61	Ⅰb
25	61　ＳＫ16	3.4・1.5・0.47	Ⅱb	70	56Ｃ　ＳＸ009	5.8・2.6・0.60	Ⅱc
26	61　ＳＫ35	(3.5以上)・1.7・0.65	Ⅱb	71	56Ｃ　ＳＸ008	3.8・2.3・1.00	Ⅱb
27	61　ＳＫ32	(3.5以上)・2.0・0.40	Ⅱb	72	59Ｐ　ＳＫ06	(4.5)	Ⅱc
28	60Ｃ　ＳＫ12	3.5・1.3・0.70	Ⅱb	73	59Ｐ　ＳＫ07	(4.5)	Ⅱc
29	60Ｄ　ＳＫ02	(3以上)・2.0・0.67	Ⅱb	74	59Ｐ　ＳＫ08 56Ｆ　ＳＸ016	(4.5)・2.6・0.60	Ⅱc
30	60Ｃ　ＳＫ10	4.1・1.5・0.69	Ⅱb	75	56Ｆ　ＳＸ017		
31	60Ｃ　ＳＫ05	3.2・1.8・0.70	Ⅱb	76	56Ｃ　ＳＸ006	2.6・1.5・0.60	Ⅱb
32	60Ｃ　ＳＫ06	1.9・1.0・0.37	Ⅱa	77	56Ｃ　ＳＸ007	1.7・1.3・0.47	Ⅰa
33	60Ｄ　ＳＫ03	4.3・1.6・0.67	Ⅱb	78	56Ｄ　番号なし	2.1・1.7・0.47	Ⅰb
34	60Ｄ　ＳＫ04	6.0・2.7・0.78	Ⅱc	79	56Ｄ　ＳＸ014	2.9・1.7・0.10	Ⅱb
35	60Ｄ　ＳＫ05	4.0・1.6・0.10	Ⅱb	80	56Ｂ　ＳＤ009	(9.0以上)・1.7・0.9/0.68	Ⅲd
36	60Ｄ　ＳＫ06	3.5・1.4・0.63	Ⅱb	81	57Ｄ　Ｍ31 59ＢＣ　ＳＫ15	(4.0以上)・3.0・0.60	Ⅱc
37	60Ｄ　ＳＫ07	3.6・1.8・0.65	Ⅱb	82	59ＢＣ　ＳＫ19	3.8・1.6・0.60	Ⅱb
38	60Ｄ　ＳＫ08	5.2・2.1・0.59	Ⅱc	83	59ＢＣ　ＳＫ16	4.6・1.0・0.53	Ⅲc
39	60Ｄ　ＳＫ01	4.2・2.7・0.50	Ⅱb	84	59ＢＣ　ＳＫ03	5.2・3.3・0.63	Ⅱc
40	60Ｃ　ＳＫ13	4.1・2.1・1.00	Ⅱb	85	59ＢＣ　ＳＫ12	7.0・2.0・0.43	Ⅲd
41	60Ｃ　ＳＫ14 60Ｄ　ＳＰ09	3.8・2.0・1.00	Ⅱb	86	59ＢＣ　ＳＫ14	2.5・(2)・0.30	Ⅰb
42	60Ｃ　ＳＫ07	(3.2以上)・1.6・0.70	Ⅱb	87	59ＢＣ　ＳＫ04	3.5・2.6・0.60	Ⅰb
43	60Ｃ　ＳＫ04	2.8・1.8・0.57	Ⅱb	88	59ＢＣ　ＳＫ07	3.5・1.6・0.55	Ⅱb
44	60Ｃ　ＳＫ03	2.5・1.7・1.00	Ⅱb	89	57Ｄ　Ｐ18	3.1・2.6・0.50	Ⅰb
45	60Ｃ　ＳＫ09	4.2・1.7・0.80	Ⅱb	90	57Ｄ　Ｐ19	(3.9以上)・2.9・0.60	Ⅰb

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深（m）	分　類
91	59BC　SK05	(6.0以上)・—・(0.3以上)	
92	60農道　SK01	4.3・(1.8)・0.30	IIb
93	59F　SK33	2.5・2.5・0.20	Ib
94	59F　SK10	2.7・2.7・0.50	Ib
95	59F　SK7	4.5・1.5・0.31	IIc
96	59F　SK5	2.4・1.6・0.49	IIb
97	59F　SK20	2.7・1.6・0.62	IIb
98	59F　SK23	5.5・3.0・0.50	IIc
99	59F　SK11	2.9・1.2・0.30	IIb
100	59F　SK25	3.2・1.9・0.42	IIb
101	58A SK06 59F SK17	5.5・1.9・0.40	IIc
102	59F　SK13	3.8・2.7・0.40	Ib
103	59F　SK16	3.8・2.3・0.37	IIb
104	59F　SK28	3.3・1.8・0.40	IIb
105	59F　SK29	5.5・3.2・0.40	IIc
106	59F　SK27	3.7・2.1・0.73	IIb
107	59F　SK26	(4)・2.5・0.30	IIb
108	59F　SK25	(2.5)・2.4・0.30	Ib
109	59F　SK30	3.4・2.8・0.60	Ib
110	58A　SK07	—・—・0.40	
111	58A　SK10		
112	58A　SK14	4.0・2.5・0.60	IIb
113	58A　SK15	2.7・1.0・0.60	IIb
114	58A　SK16	4.7・2.3・0.60	IIc
115	58A　SK17	2.5・2.1・0.60	Ib
116	59G　SK08	2.2・1.6・0.60	Ib
117	59G　SK09	3.1・3.0・0.40	Ib
118	59G　SK06	3.3・1.6・0.40	IIb
119	59G　SK05	3.0・1.6・0.70	IIb
120	59G　SK10	2.9・1.8・0.60	IIb
121	59G　SK11	3.2・1.9・0.50	IIb
122	59F　SK21	—・2.6・0.80	
123	59F SK09 59HI SK03	5.8・2.8・0.40	IIc
124	59HI　SK34	—・1.8・0.30	
125	59HI　SK07	4.0・2.3・0.30	IIb
126	59HI　SK42		
127	59HI　SK09	4.5・2.3・0.60	IIc
128	59HI　SK12	3.3・1.6・0.78	IIb
129	59HI　SK36	—・1.9・0.26	
130	59HI　SK37	2.5・2.1・0.31	Ib
131	59HI　SK10	4.0・4.0・0.80	Ib
132	59HI　SK11	3.2・2.1・0.40	IIb
133	59HI　SK13	3.2・2.0・0.60	IIb
134	59G　SK07	4.0・2.3・0.40	IIb
135	59HI　SK15	2.7・2.5・0.30	Ib

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深（m）	分　類
136	59HI　SK15	2.8・1.4・0.60	IIb
137	59G SK12 59HI SK16	(3)・1.8・0.60	IIb
138	59HI　SK17	2.8・2.5・0.10	Ib
139	59HI　SK18	6.7・2.0・0.55	IIId
140	59HI　SK20	3.3・2.0・0.50	IIb
141	59HI　SK21	3.7・1.6・0.40	IIb
142	59HI　SK22	(5)・2.6・0.50	IIc
143	59HI　SK29	(5)・2.5・0.30	IIc
144	59HI　SK24	1.8・1.1・0.30	IIa
145	58B　SK01	(3.6)・(1.8)・0.40	IIb
146	58B　SP02	4.0・1.8・0.80	IIb
147	58B　SK03	(2.1)・1.4・0.80	IIb
148	59J　SK06	4.7・(1.8)・0.26	IIc
149	58B　SK04	3.5・1.8・0.40	IIb
150	59J　SK02	4.7・1.9・0.58	IIc
151	59J　SK01	4.2・1.9・0.55	IIb
152	59J　SK08	(2.5)・1.6・0.28	IIb
153	59J　SP07	9.3・2.0・0.31	IIId
154	59K　SK07	2.9・1.8・0.40	IIb
155	59K　SK06	2.3・1.4・0.50	IIb
156	59K　SK05	4.5・1.2・0.50	IIIc
157	59K　SK04	2.3・2.3・0.34	Ib
158	59K　SK03	6.3・1.9・0.60	IIId
159	58C　SK03	2.4・1.9・0.40	Ib
160	58C　SK02	(1.6)・1.4・0.30	Ia
161	59K　SK02	—・1.9・0.50	
162	59K　SK01	3.6・2.3・0.70	IIb
163	59K　SK08	—・2.0・0.60	
164	59K　SK01	(4.0)・(2.3)・0.30	IIb
165	59K　SK09	4.3・1.8・0.60	IIb
166	59K　SK10	3.3・2.0・0.60	IIb
167	59L　SK01	3.5・2.0・0.60	IIb
168	58A　SK11	4.5・2.6・0.60	IIc
169	58A　SK03	1.4・0.9・0.10	IIa
170	59HI　SK02	4.7・(1.3)・0.12	IIIc
171	59F　SK32	2.7・2.1・0.40	Ib
172	58A　SK04	2.5・1.4・0.20	IIb
173	58A　SK05	1.6・1.2・0.50	Ia
174	58A　SK08	1.9・1.9・0.50	Ia
175	58A　SK09	2.2・1.7・0.70	Ib
176	59F　SK15	1.9・1.1・0.35	IIa
177	欠番		
178	59HI　SK40	2.6・1.2・0.25	IIb
179	59HI　SK26	(4.0)・1.4・0.20	IIb
180	59K　SK07	1.1・(0.7)・0.15	IIa

図　版

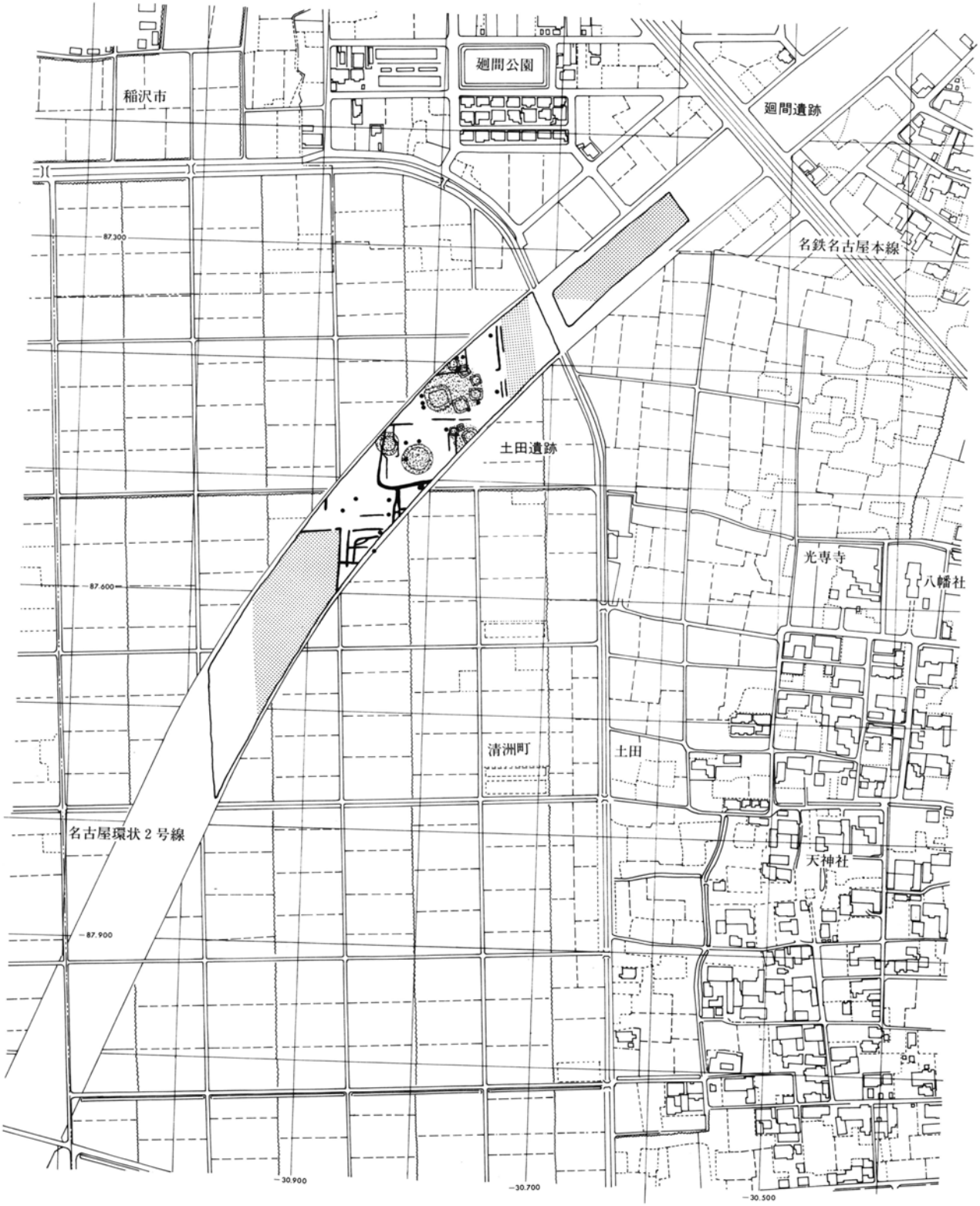
遺　構　図　　1：1000

遺物実測図　　1：4

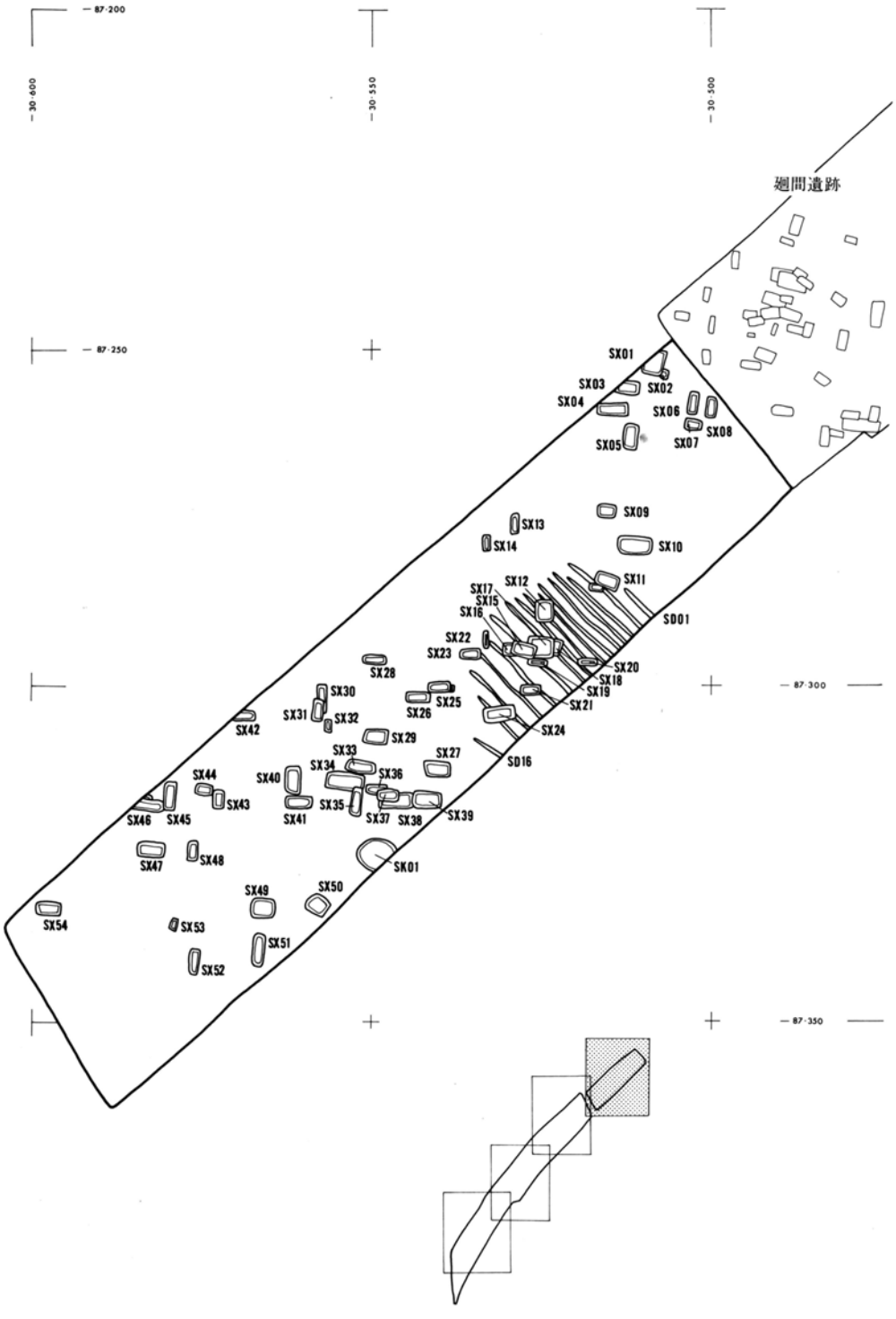
遺物写真　　弥生土器1：5

灰釉系陶器1：3

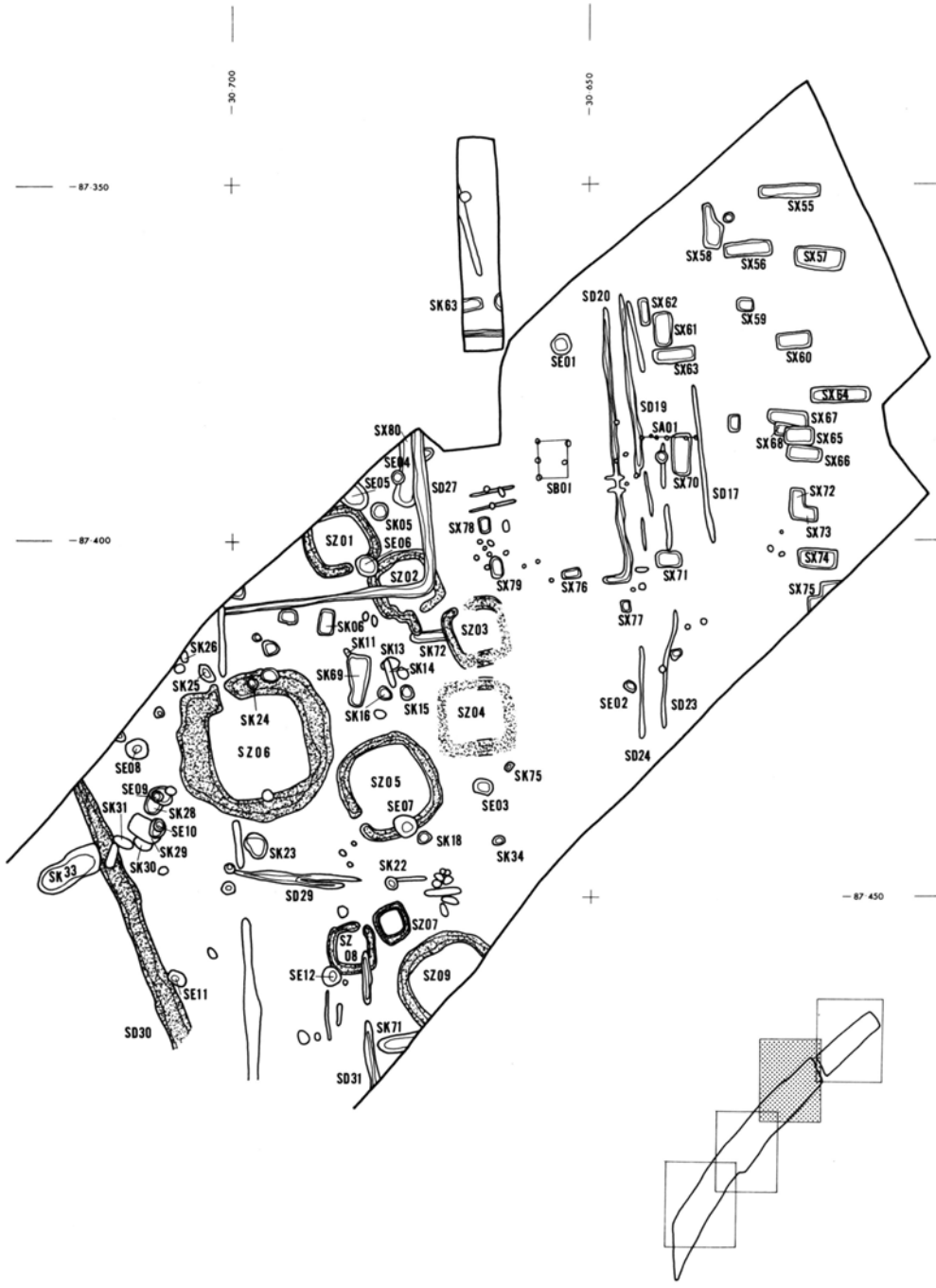
図版１　主要遺構と周辺地図



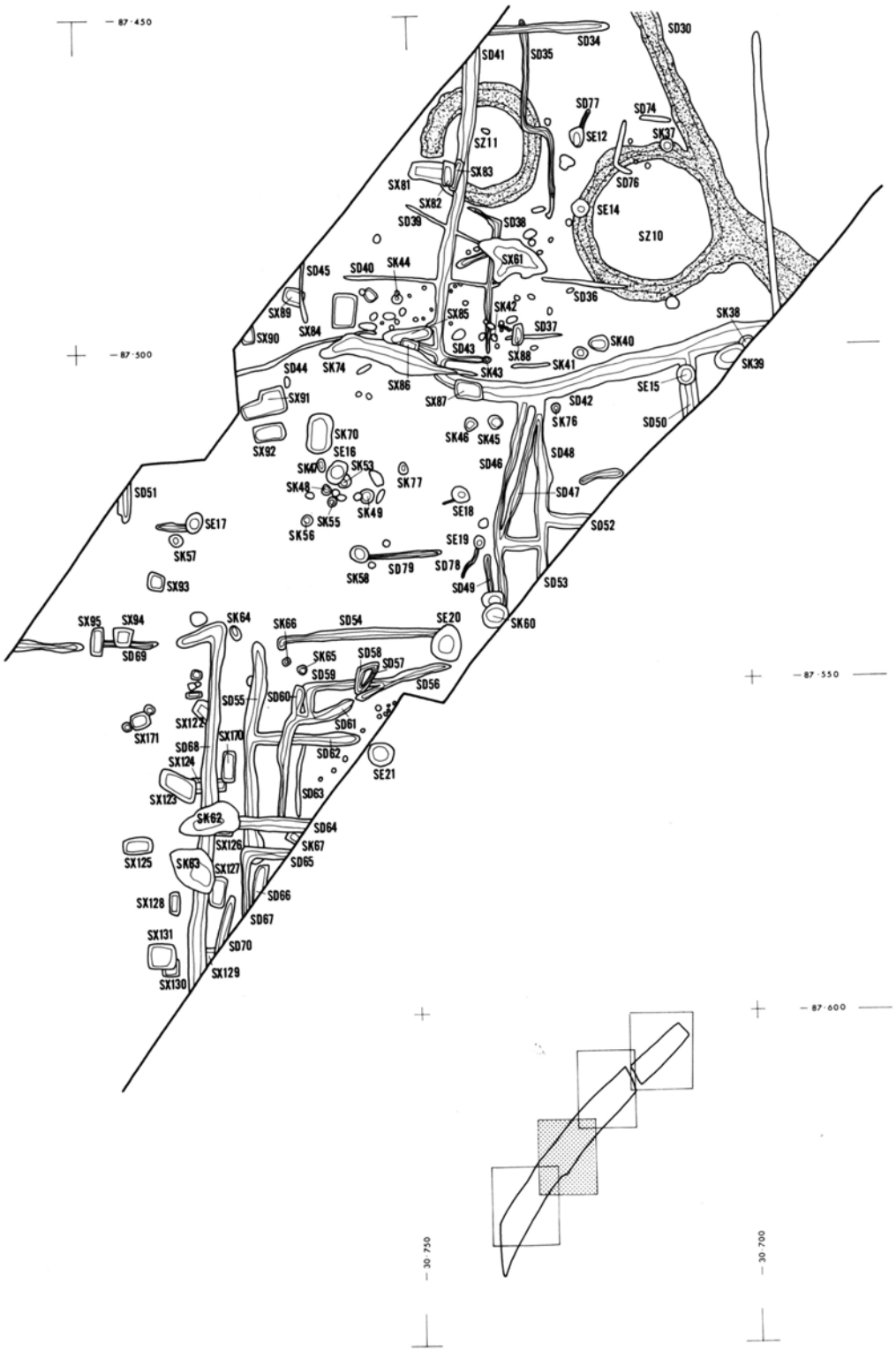
図版2　遺　構　図（1）


87·200
87·250
87·300
87·350
30·600
30·550
30·500
廻間遺跡
SX01
SX02
SX03
SX04
SX05
SX06
SX07
SX08
SX09
SX10
SX11
SX12
SX13
SX14
SX15
SX16
SX17
SX18
SX19
SX20
SX21
SX22
SX23
SX24
SX25
SX26
SX27
SX28
SX29
SX30
SX31
SX32
SX33
SX34
SX35
SX36
SX37
SX38
SX39
SX40
SX41
SX42
SX43
SX44
SX45
SX46
SX47
SX48
SX49
SX50
SX51
SX52
SX53
SX54
SD01
SD16
SK01

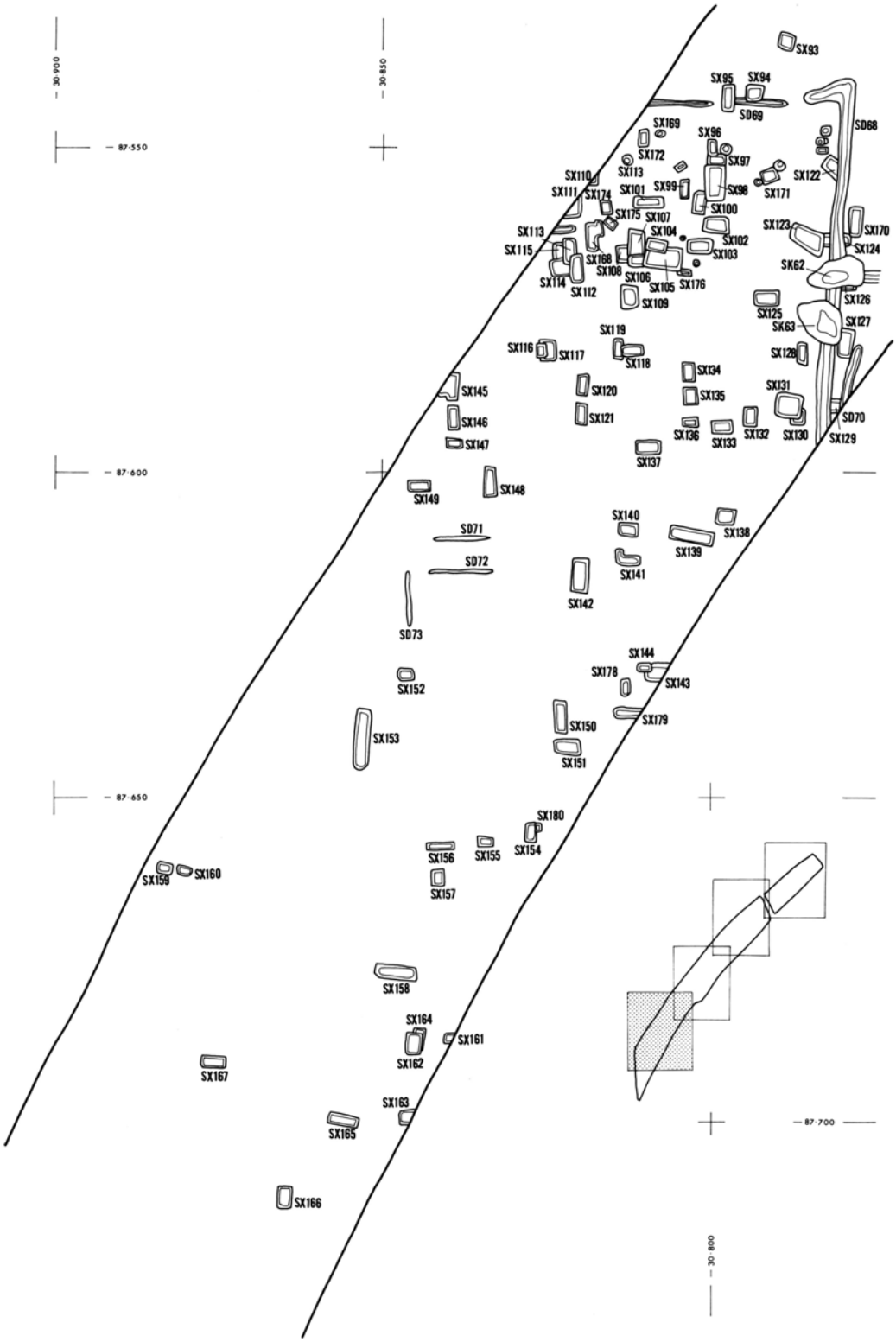
図版3　遺　構　図（2）


-30 700
-30 650
-30 600
-87 350
-87 400
-87 450
SK63
SX55
SX58
SX56
SX57
SD20
SX62
SX61
SX59
SE01
SX63
SX60
SX64
SD19
SX67
SA01
SX68
SX65
SX66
SX80
SE04
SE05
SD27
SB01
SX70
SD17
SX72
SK05
SX78
SE06
SZ01
SX73
SX74
SZ02
SX79
SX76
SX71
SX75
SX77
SK06
SZ03
SK26
SK11
SK13
SK72
SK14
SK69
SK25
SK24
SK16
SK15
SZ04
SE02
SD23
SD24
SZ06
SZ05
SK75
SE08
SE09
SE07
SE03
SK31
SK28
SK18
SE10
SK34
SK29
SK23
SK22
SK33
SK30
SD29
SZ07
SZ
08
SE12
SZ09
SE11
SK71
SD30
SD31

図版4　遺　構　図（3）

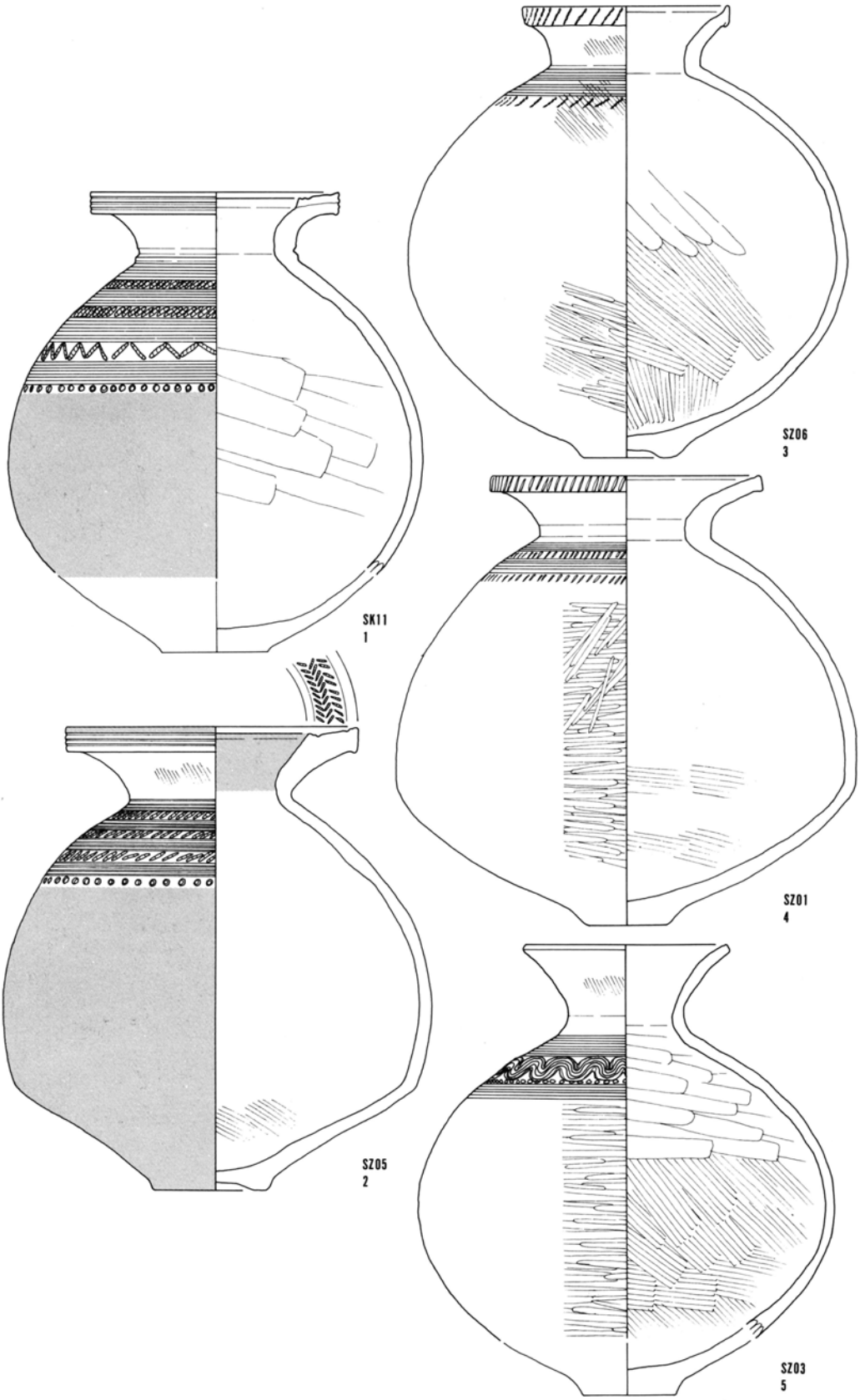

－87·450
－87·500
－87·550
－87·600
－30·750
－30·700
SD30
SD34
SD41
SD35
SD77
SD74
SE12
SK37
SZ11
SX83
SX81
SD76
SX82
SE14
SD39
SD38
SZ10
SX61
SD45
SD40
SK44
SD36
SX89
SX85
SK42
SK38
SX84
SD37
SX90
SD43
SK40
SX88
SK41
SD44
SK74
SK43
SE15
SX86
SX91
SX87
SD42
SK76
SD50
SK70
SK46
SK45
SX92
SE16
SD48
SD46
SK47
SK53
SK77
SD51
SK48
SD47
SK49
SE18
SE17
SK55
SD52
SK56
SE19
SK57
SD79
SD78
SD49
SD53
SX93
SK58
SK60
SX95
SX94
SK64
SK66
SD54
SE20
SD69
SK65
SD58
SD57
SD59
SD56
SD55
SD60
SX122
SD61
SX171
SX170
SD68
SD62
SX124
SE21
SX123
SD63
SK62
SD64
SX126
SK67
SX125
SK63
SX127
SD65
SD66
SX128
SD67
SX131
SD70
SX129
SX130

図版5　遺　構　図（4）

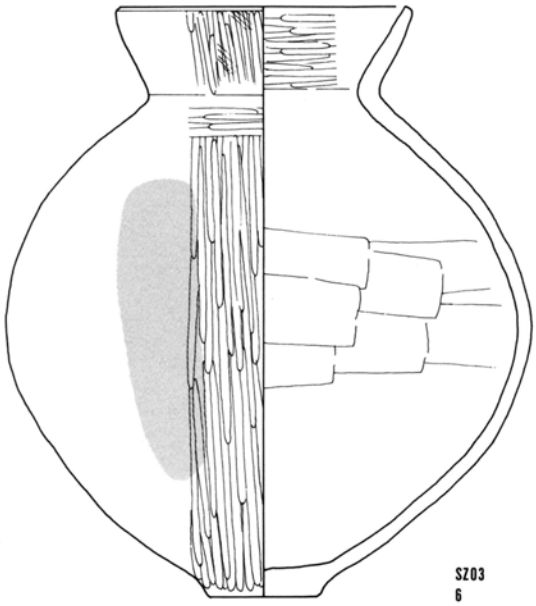

-30·900
-30·850
-87·550
-87·600
-87·650
-87·700
-30·800
SX93
SX95
SX94
SD69
SD68
SX169
SX96
SX172
SX97
SX110
SX113
SX122
SX111
SX174
SX101
SX99
SX98
SX171
SX175
SX107
SX100
SX113
SX104
SX123
SX170
SX115
SX102
SX124
SX168
SX103
SK62
SX108
SX106
SX176
SX114
SX112
SX105
SX126
SX109
SX125
SX127
SX119
SK63
SX116
SX117
SX118
SX128
SX134
SX145
SX120
SX135
SX131
SX146
SX121
SX136
SX133
SX132
SX130
SD70
SX147
SX129
SX137
SX149
SX148
SX140
SX138
SD71
SX139
SD72
SX141
SX142
SD73
SX144
SX178
SX143
SX152
SX150
SX179
SX153
SX151
SX180
SX156
SX155
SX154
SX159
SX160
SX157
SX158
SX164
SX161
SX162
SX167
SX163
SX165
SX166

遺物実測図

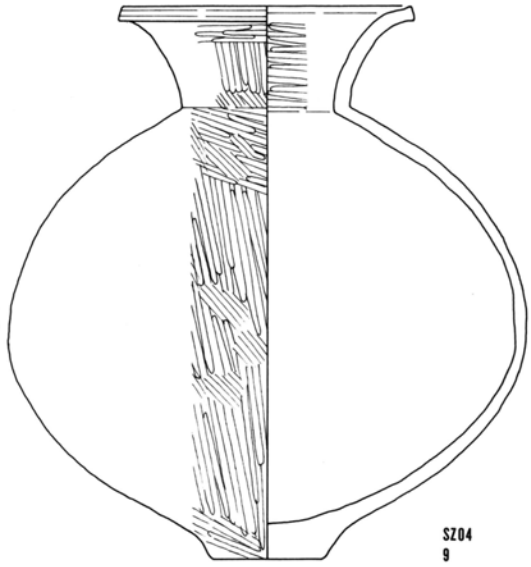
図版6　実　測　図（1）



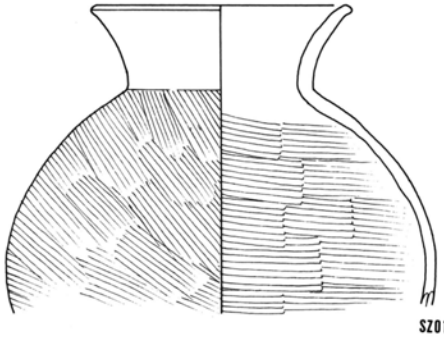
図版7　実　測　図（2）



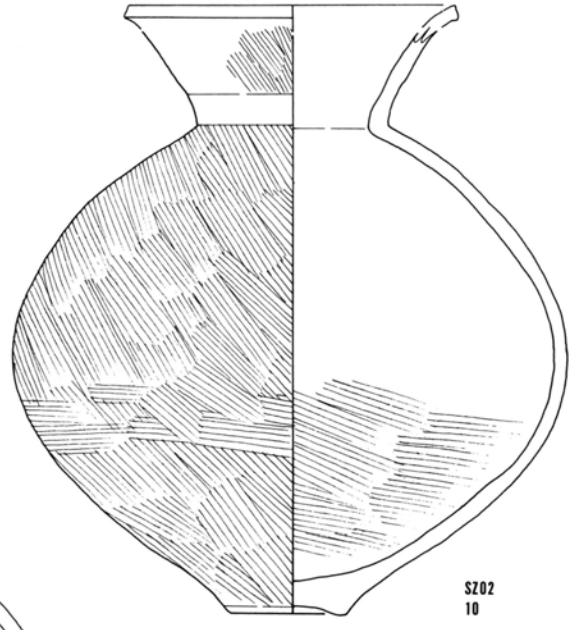
SZ03
6



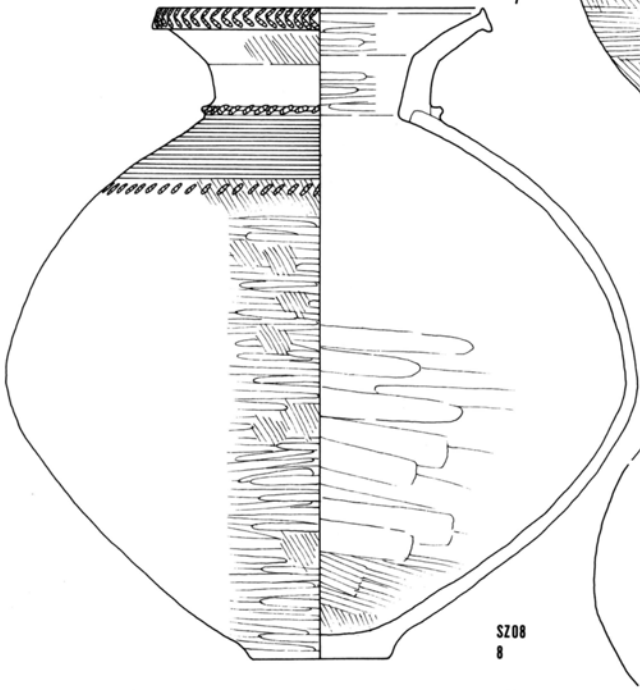
SZ04
9



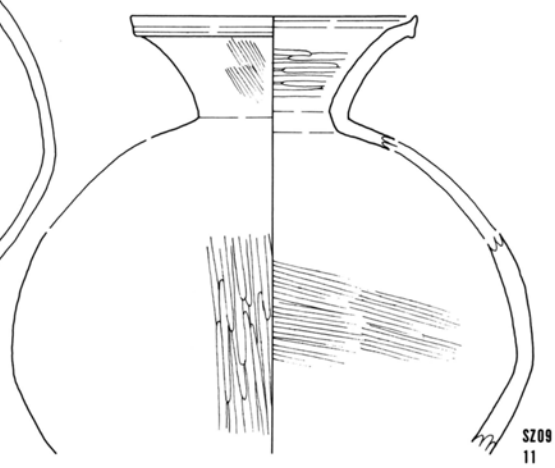
SZ01
7



SZ02
10



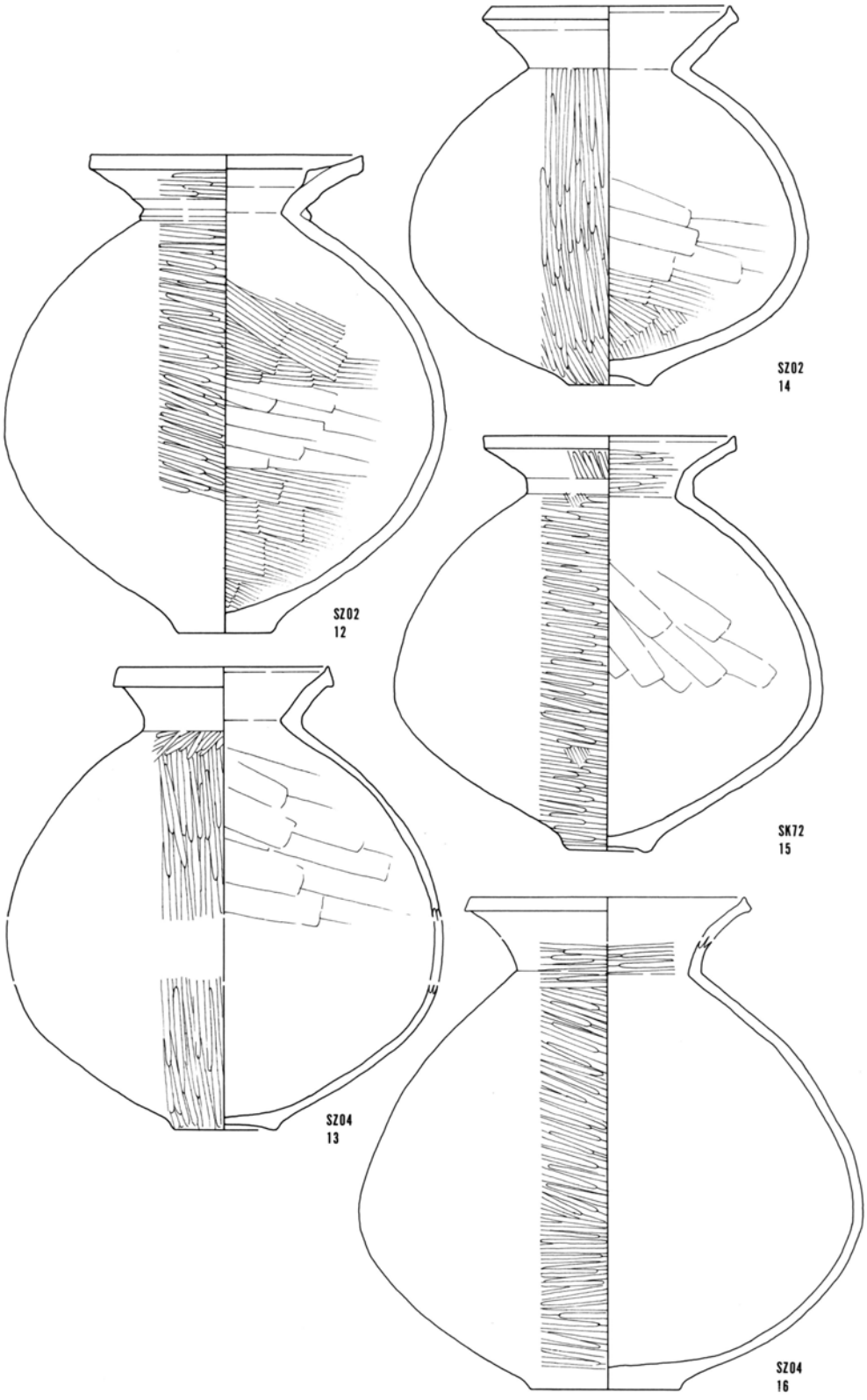
SZ08
8



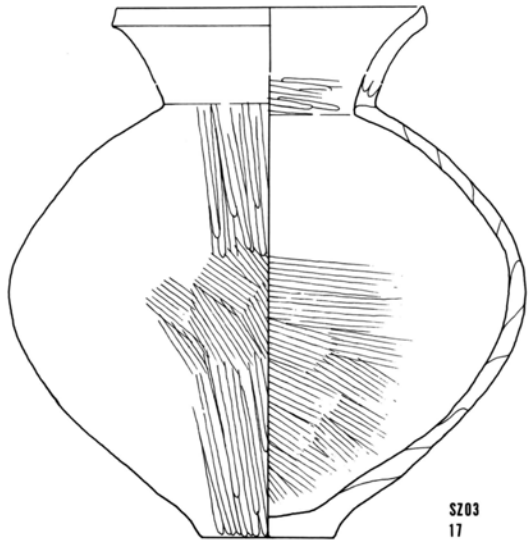
SZ09
11

0　20cm

図版8　実　測　図（3）

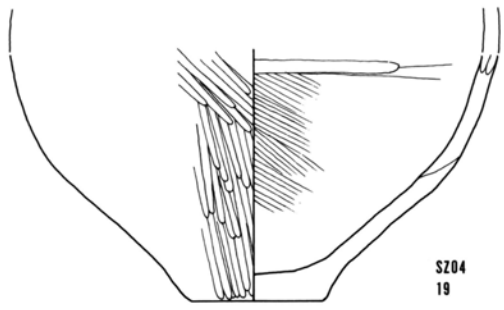


図版9　実　測　図（4）

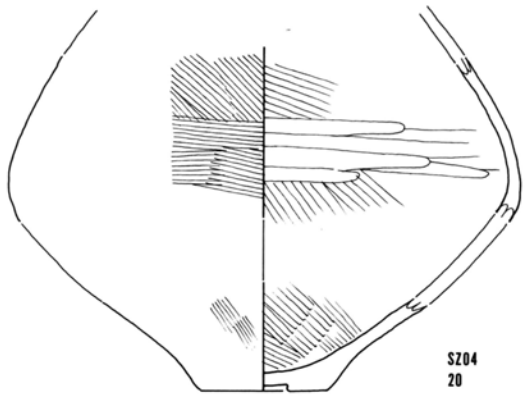


SZ03
17

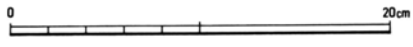
SZ03
18



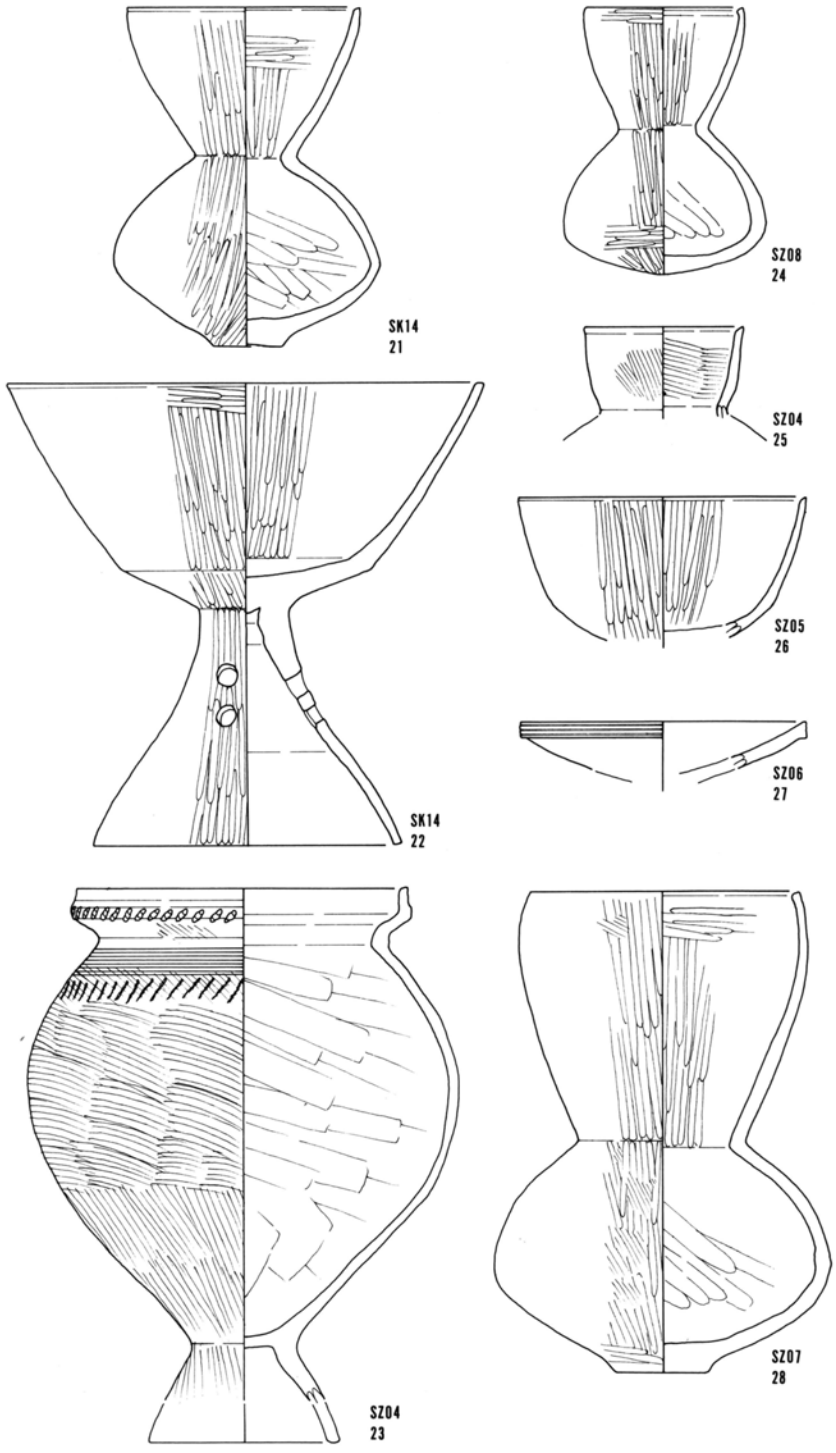
SZ04
19



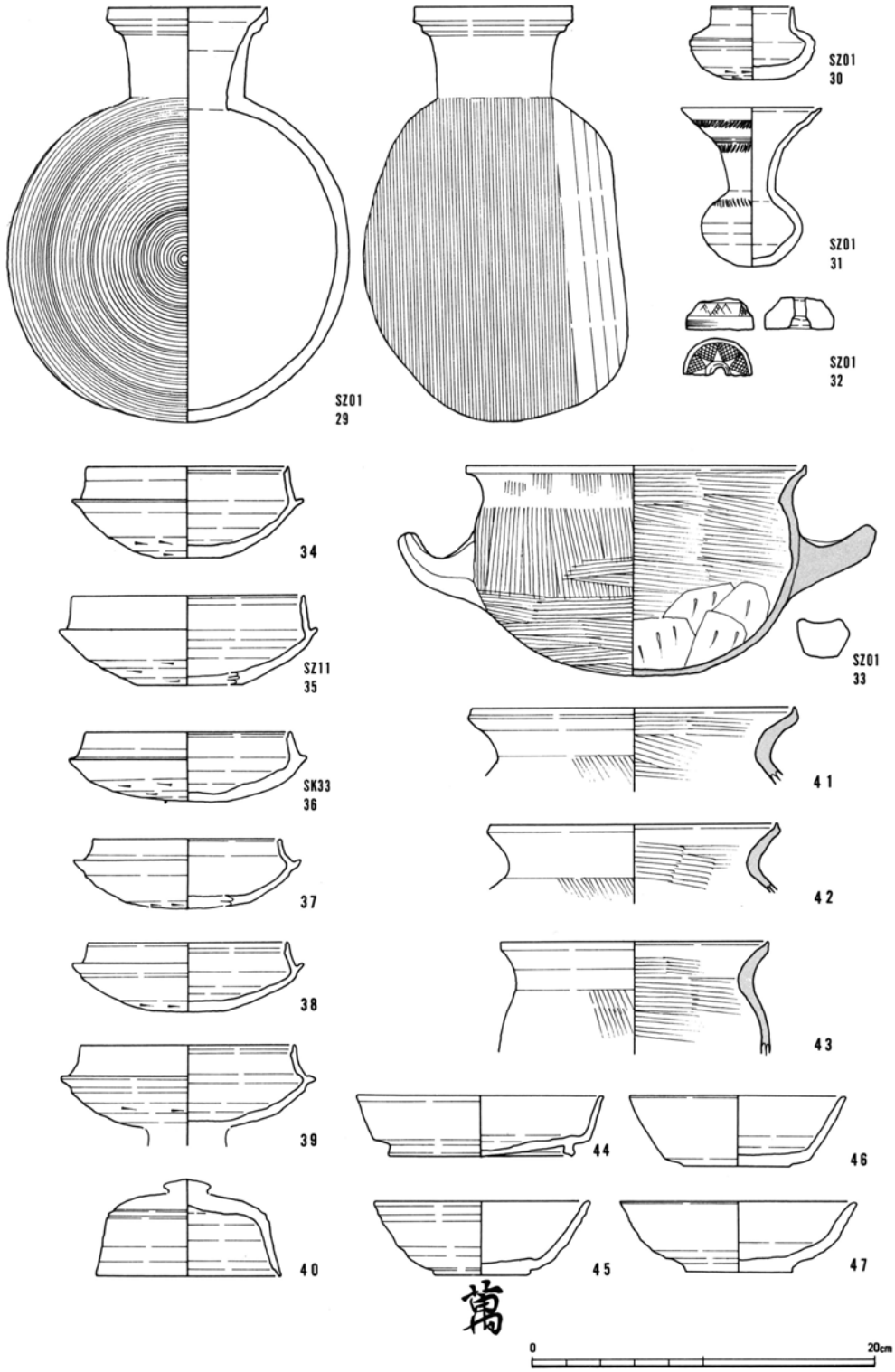
SZ04
20



図版10　実　測　図（5）

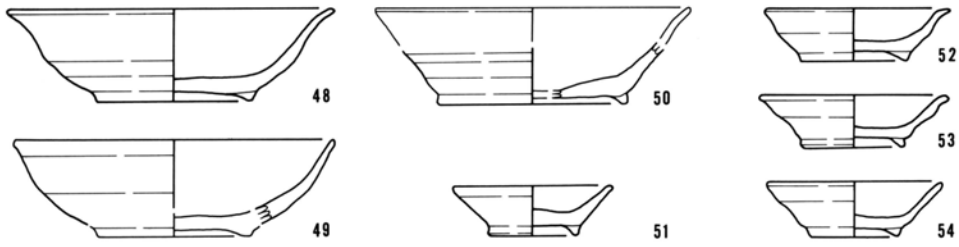


図版11　実　測　図（6）

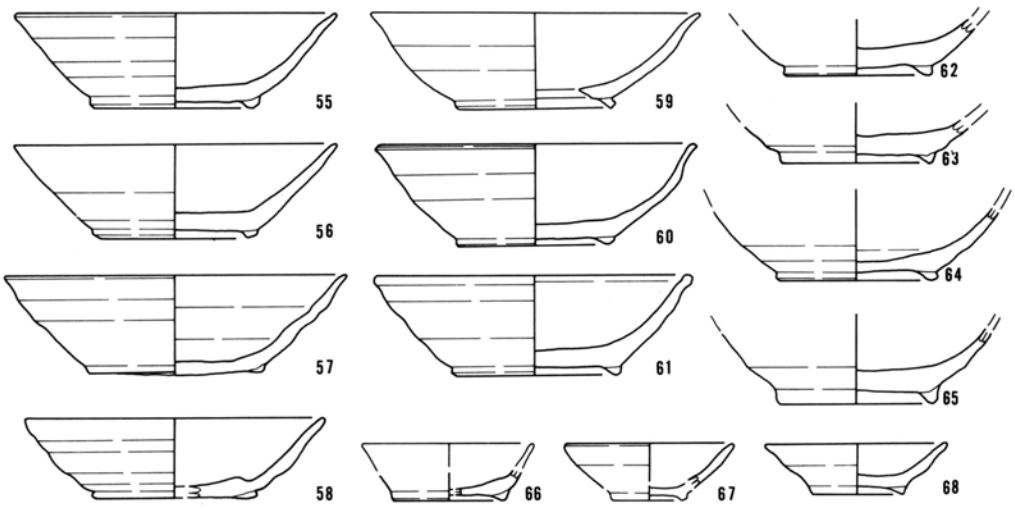

SZ01
29
SZ01
30
SZ01
31
SZ01
32
34
SZ11
35
SZ01
33
SK33
36
41
37
42
38
43
39
44
46
40
45
47
萬
0
20cm

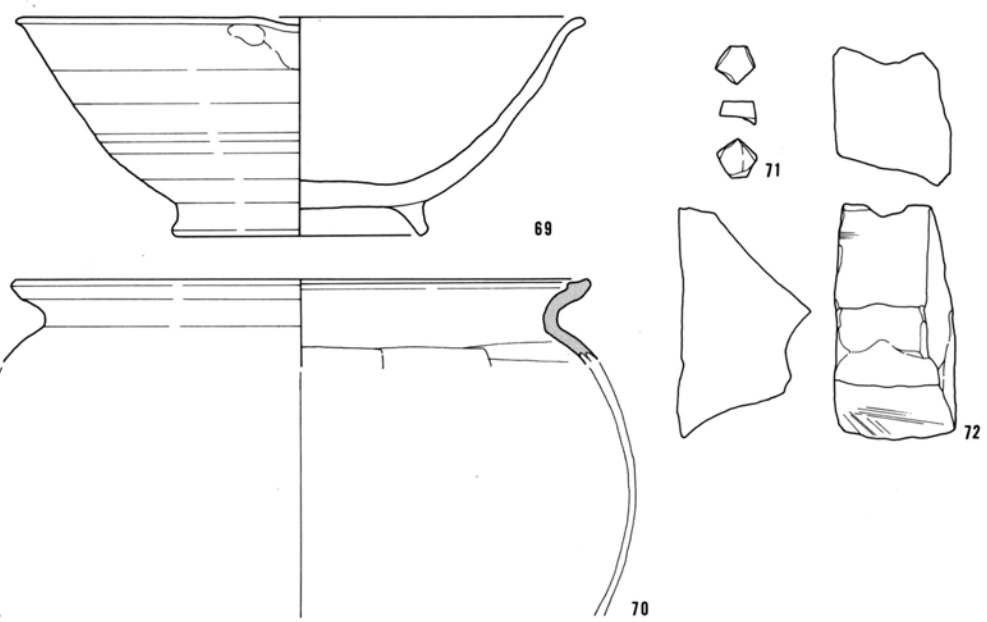
図版12　実　測　図（7）

SK05

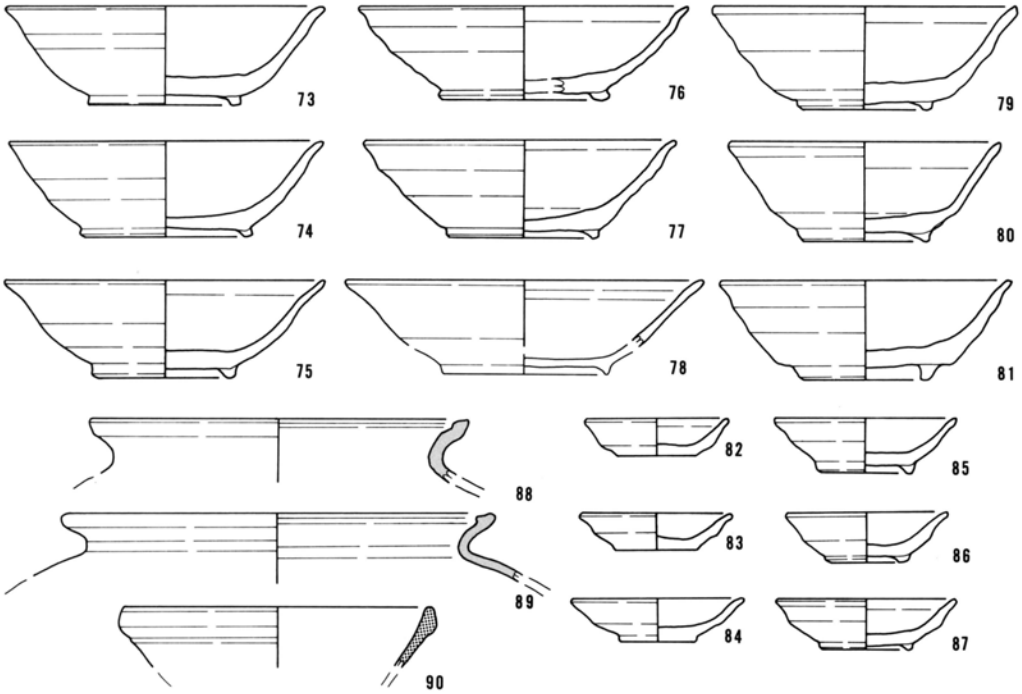


SE07

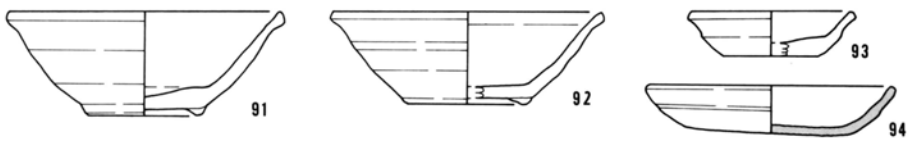




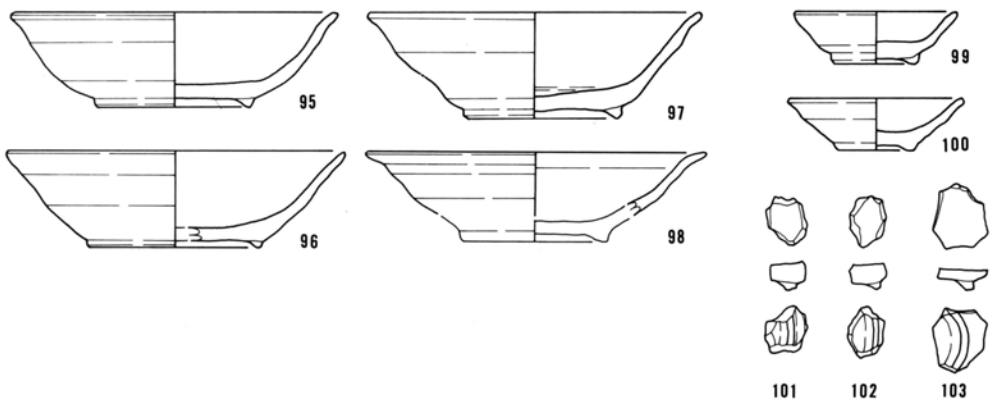
SE01



SE02

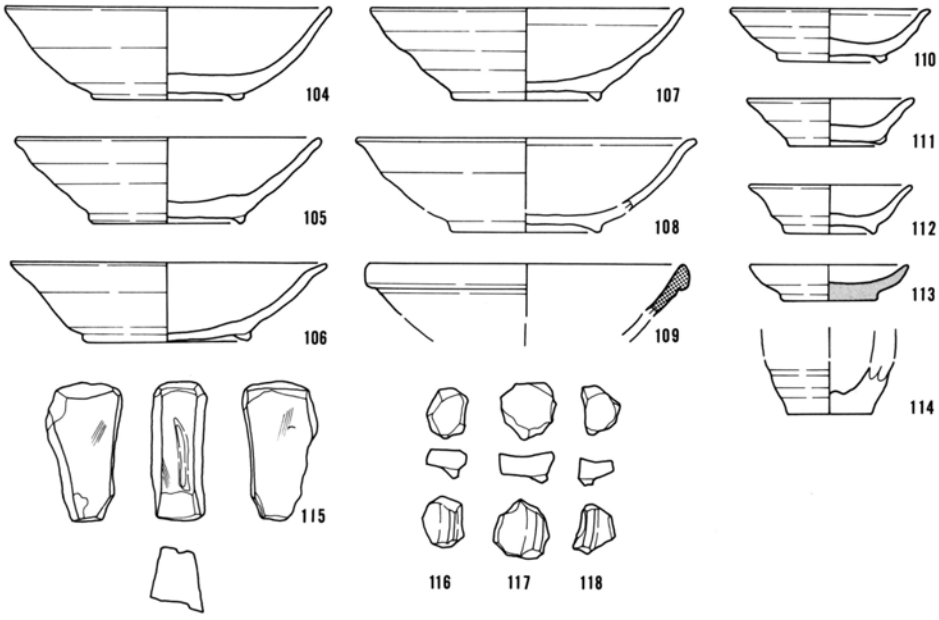


SE03

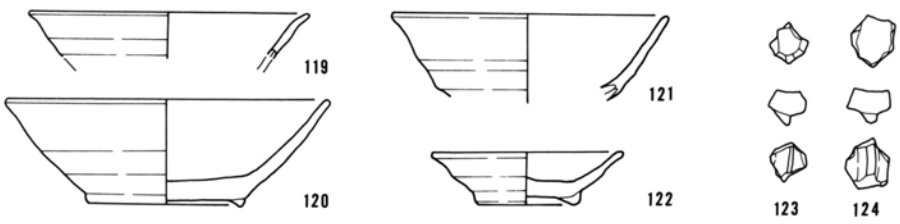


図版14　実　測　図（9）

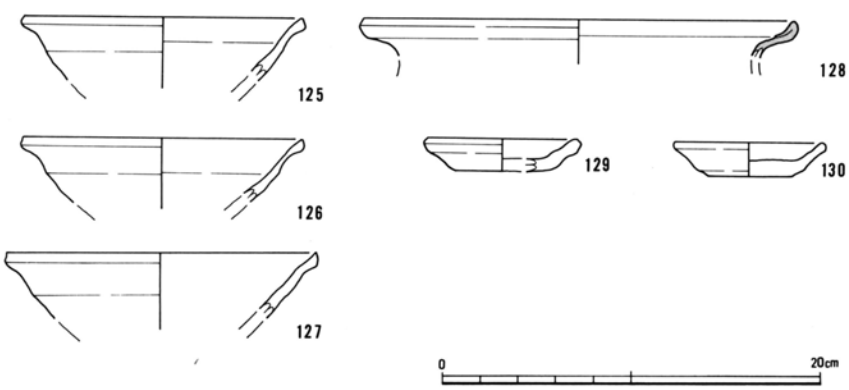
SE05



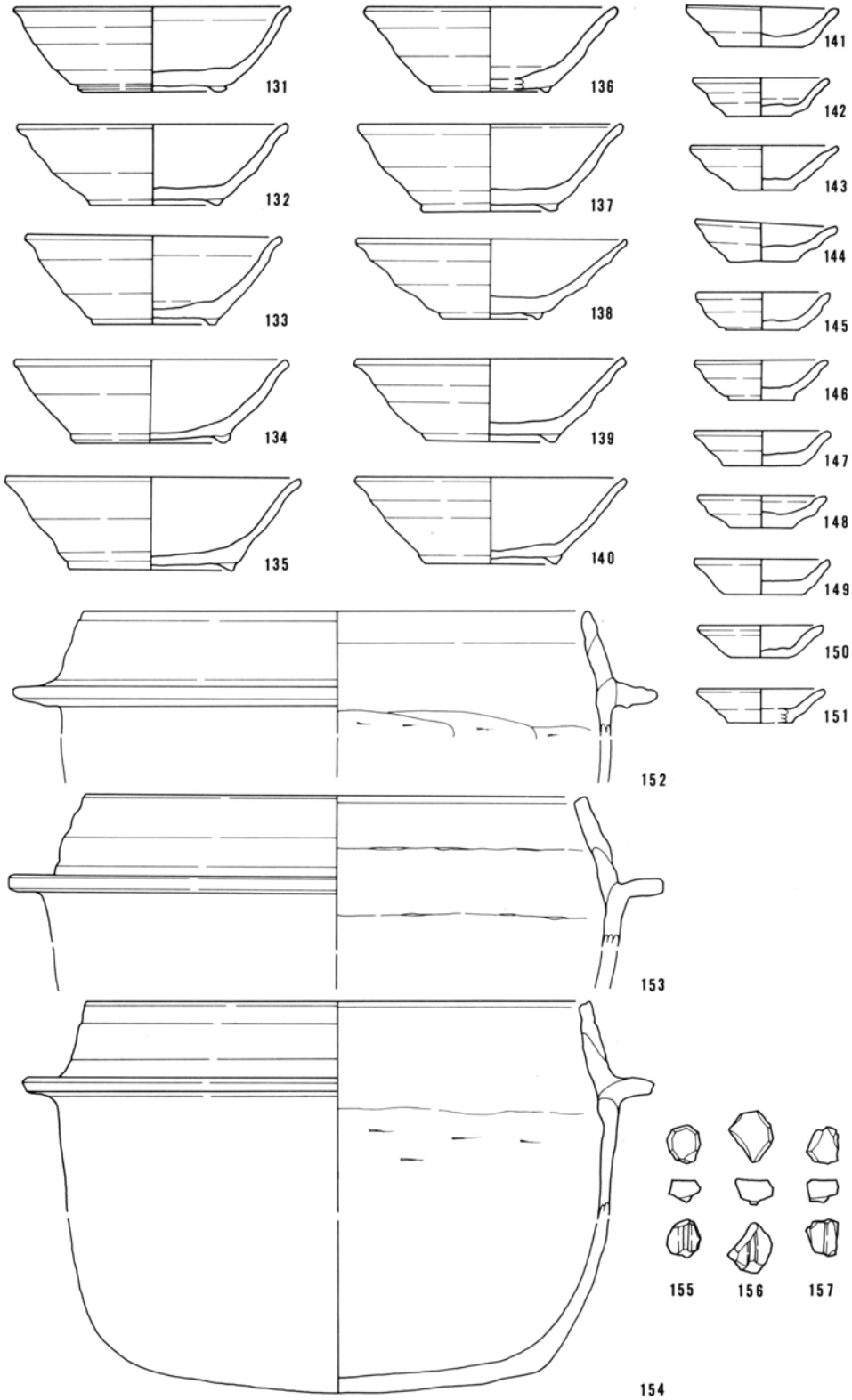
SE14



SE08

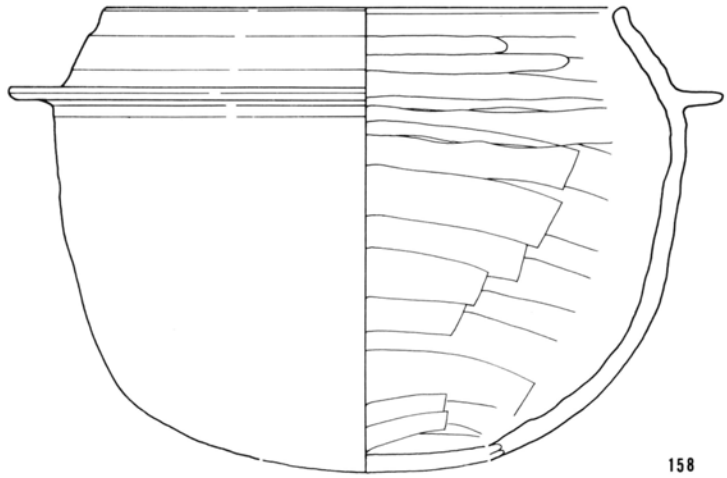


SE11


131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157

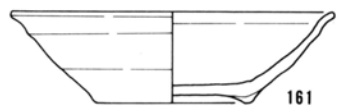
図版16　実　測　図（11）

ＳＫ２４

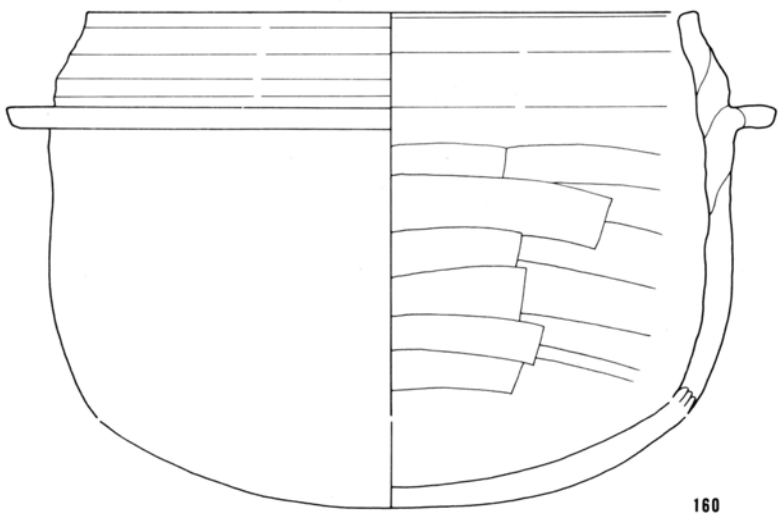


158

159

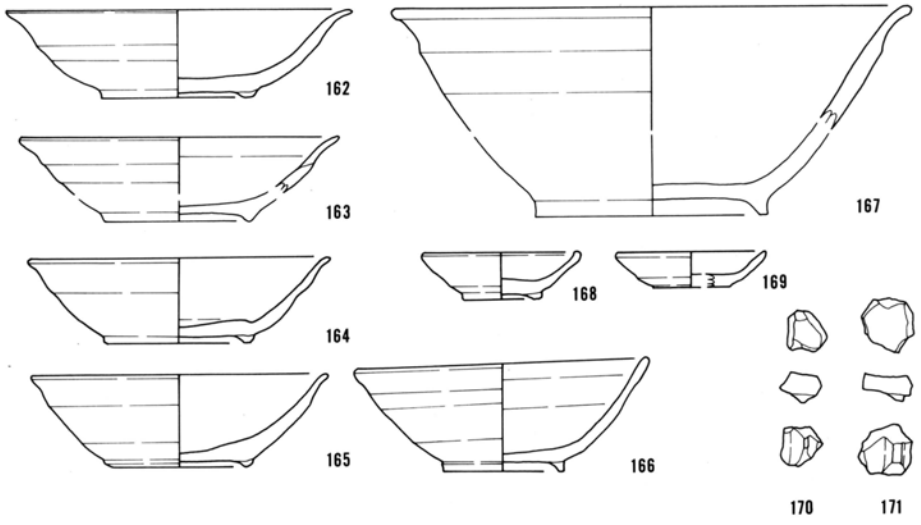


161

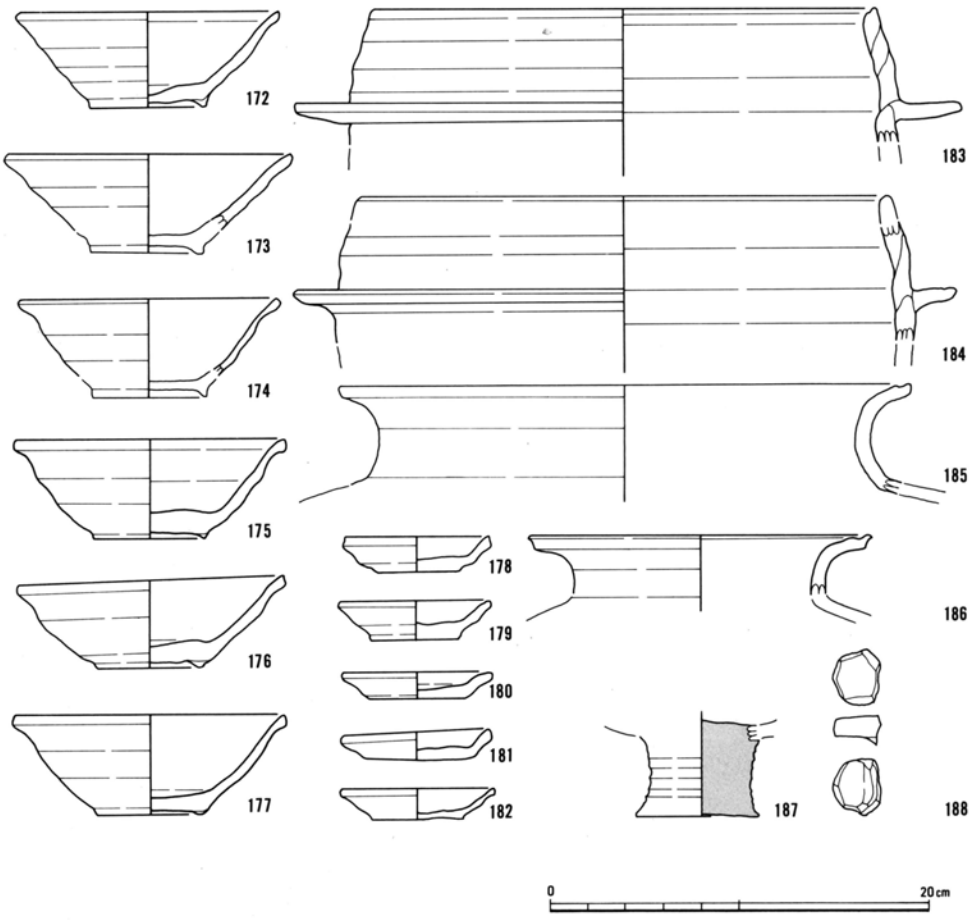


160

SD55

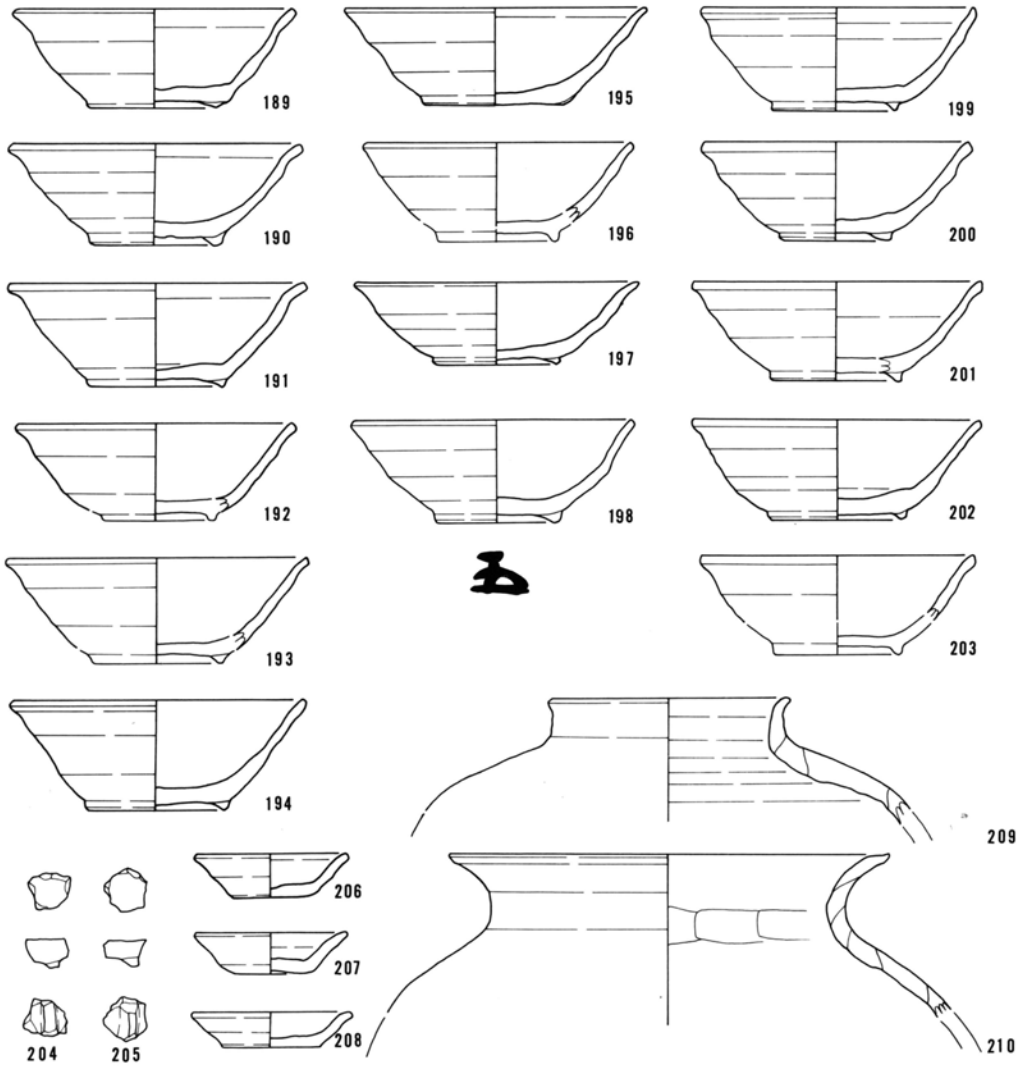

162
163
164
165
166
167
168
169
170
171

SD61

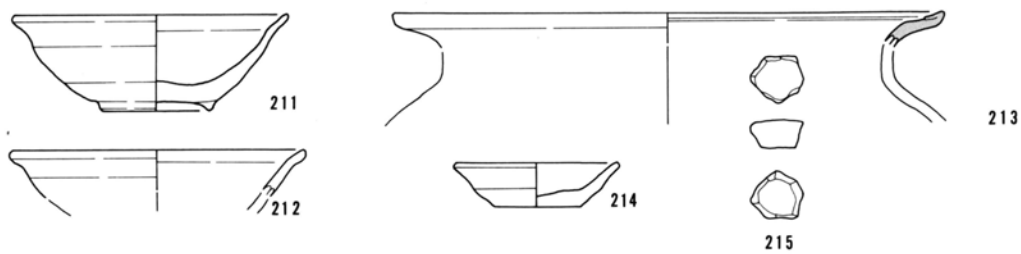

172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
0
20cm

図版18　実　測　図（13）

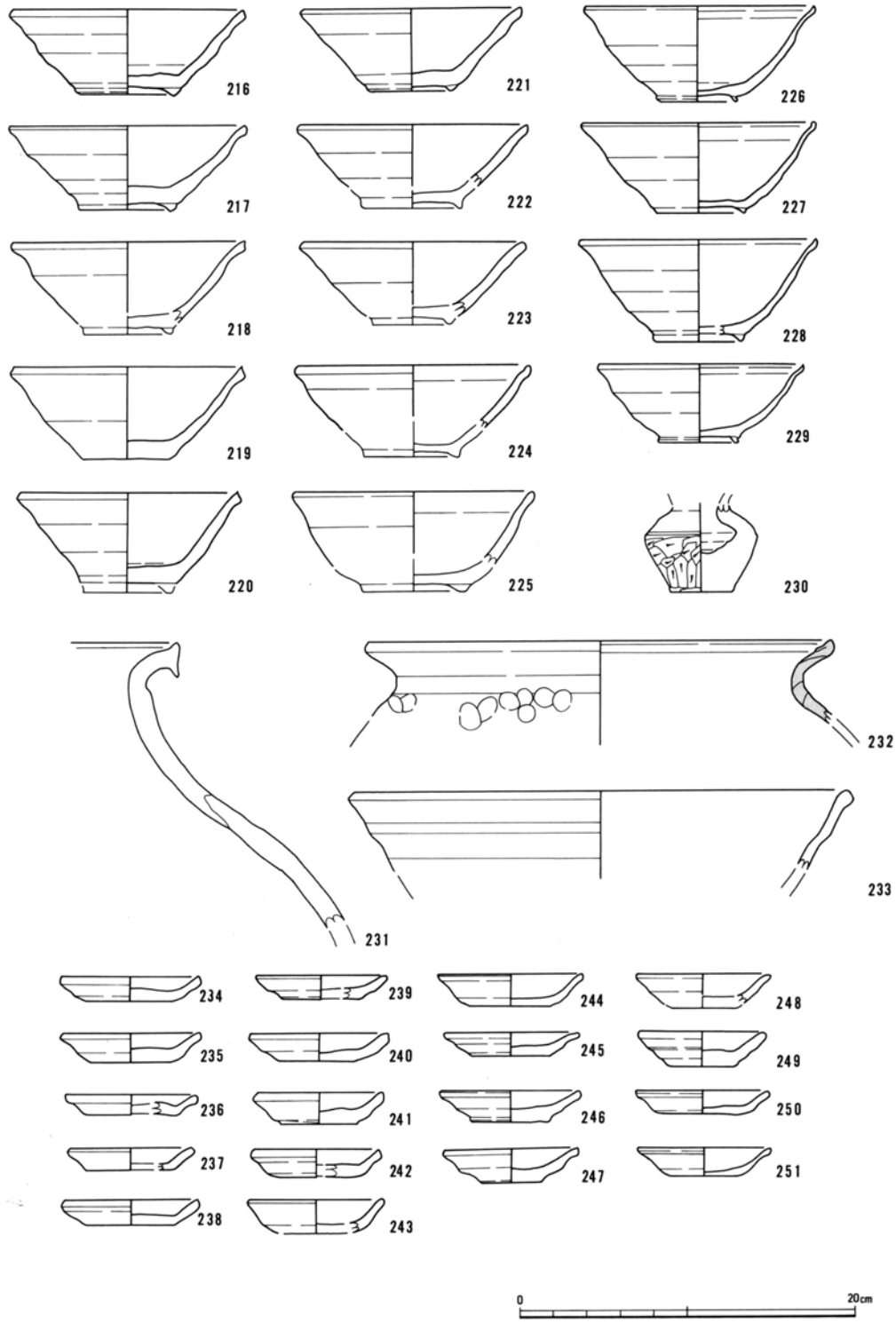
SE16



SK45

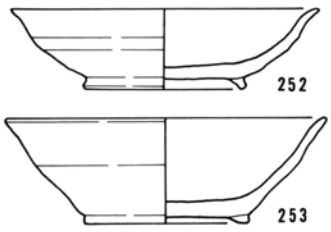


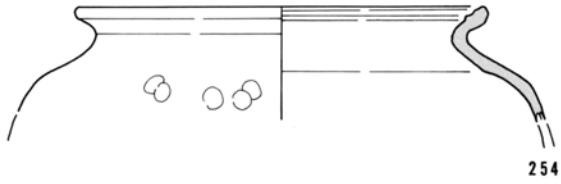
SE20


216
221
226
217
222
227
218
223
228
219
224
229
220
225
230
231
232
233
234
239
244
248
235
240
245
249
236
241
246
250
237
242
247
251
238
243
0
20cm

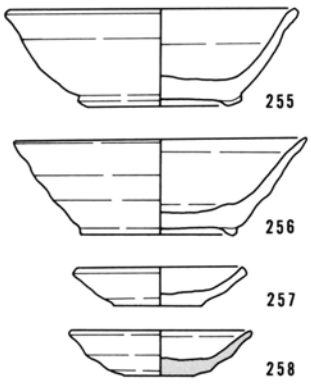
図版20　実　測　図（15）

SE12

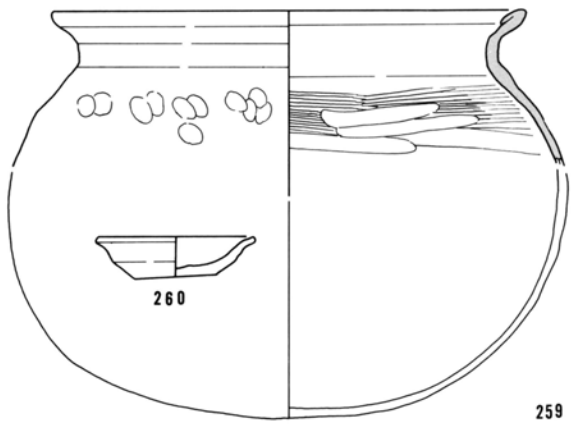




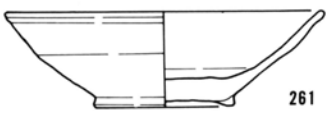
SB01

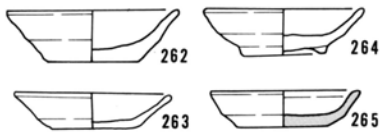


SK75

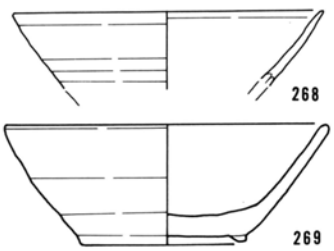


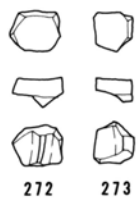
SX81



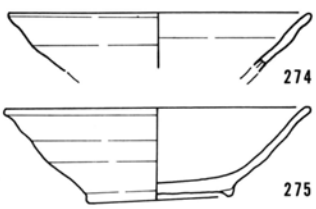


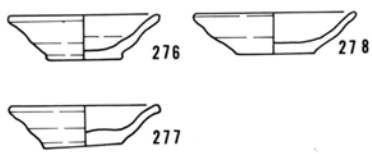
SX85



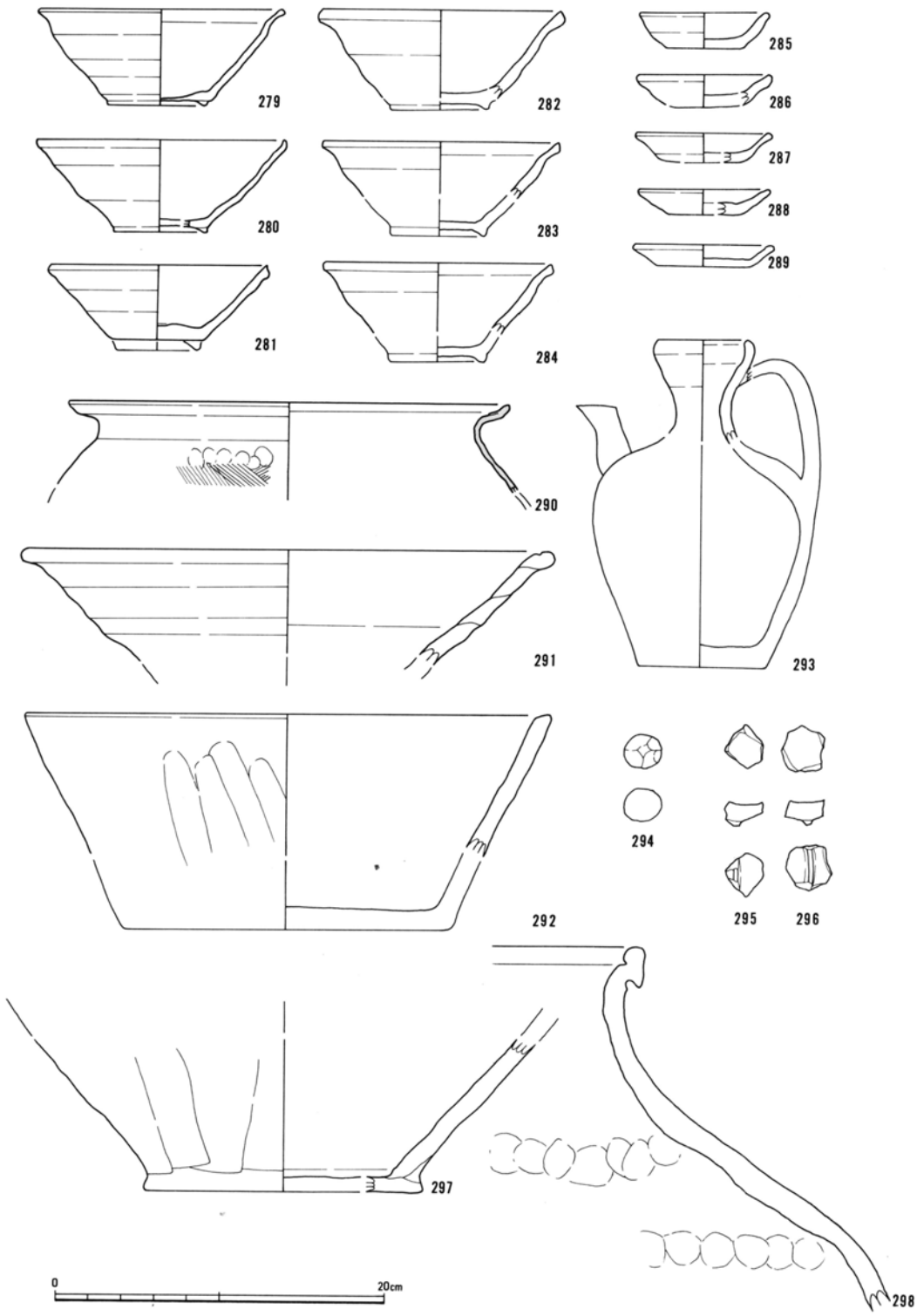


SK44



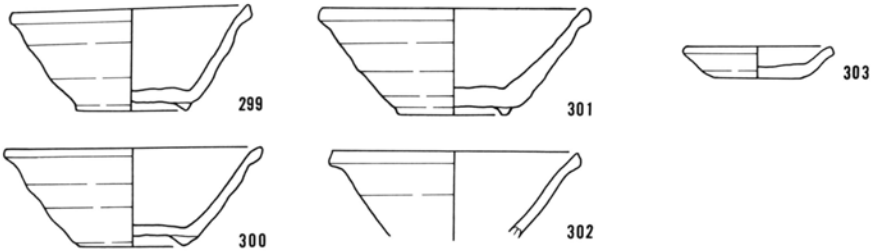


SE10

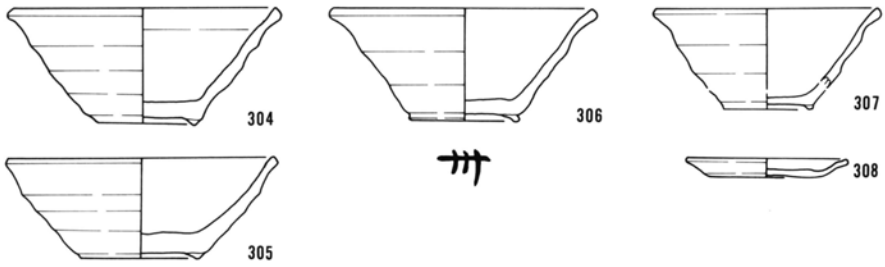

279
282
285
286
287
288
289
280
283
281
284
290
293
291
294
295
296
292
297
298
0
20cm

図版22　実　測　図（17）

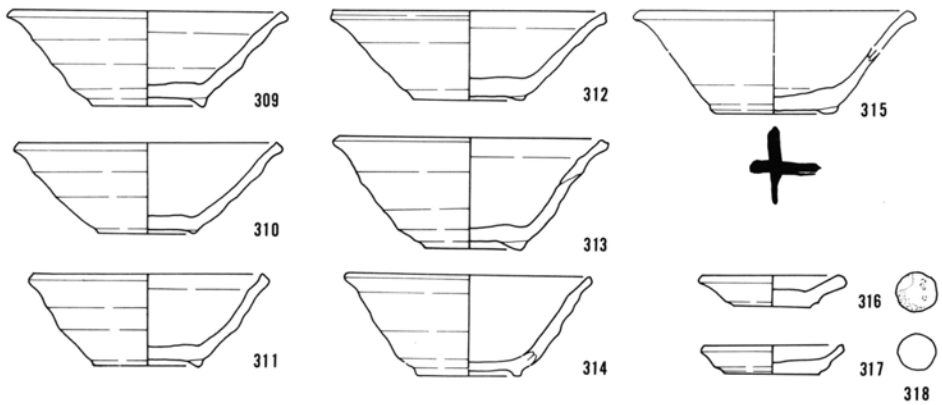
SK31



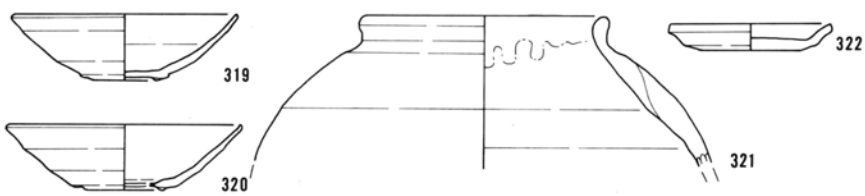
SK67



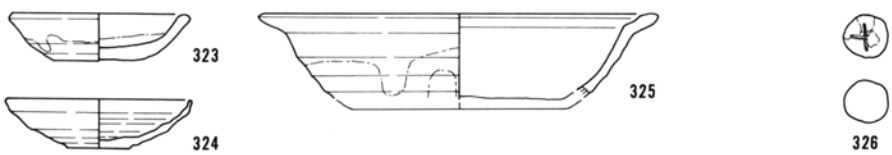
SD65



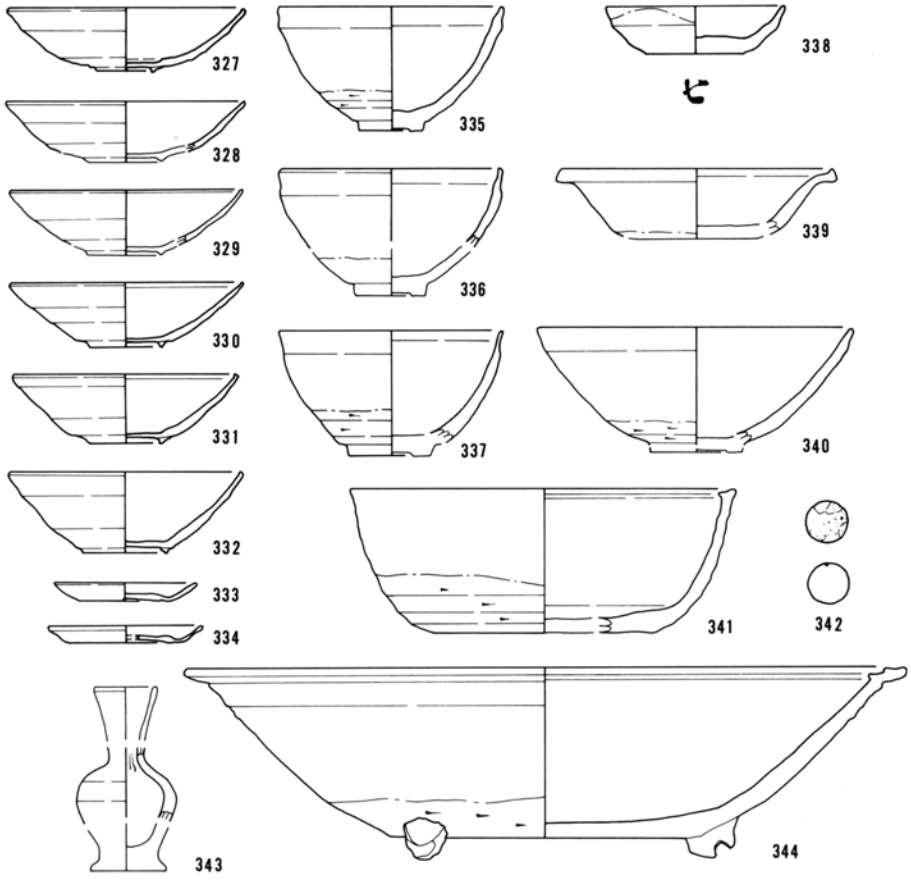
SD68



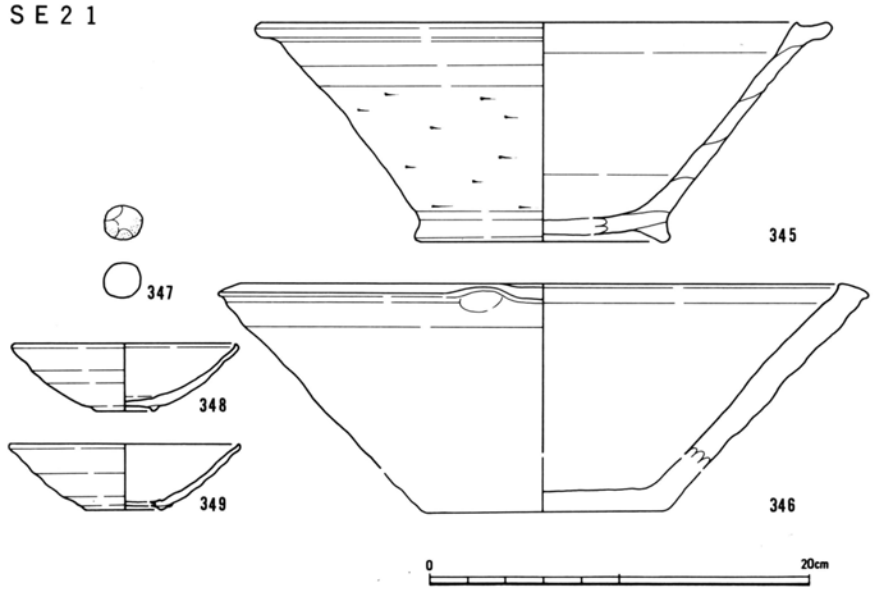
SK63



SD64

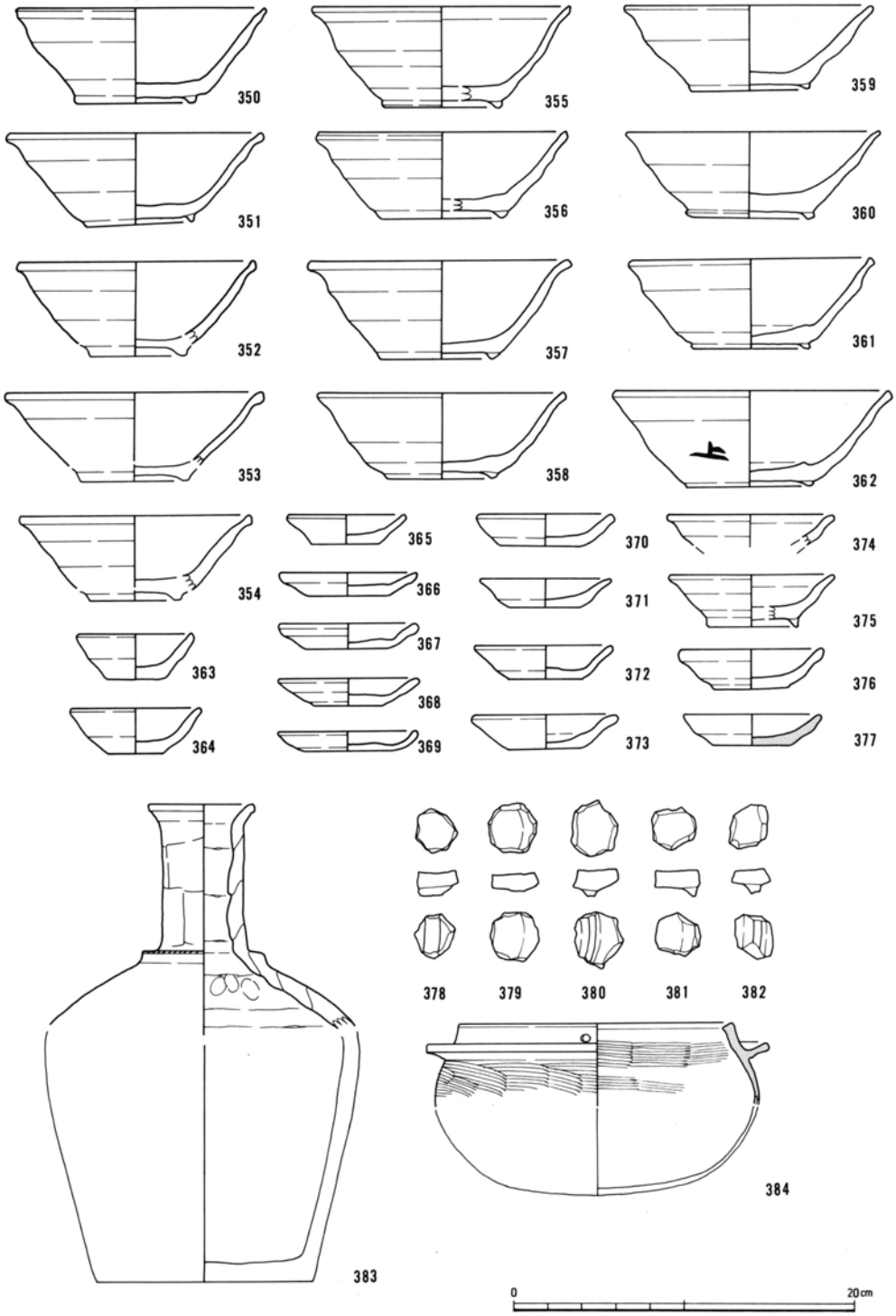

327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344

SE21

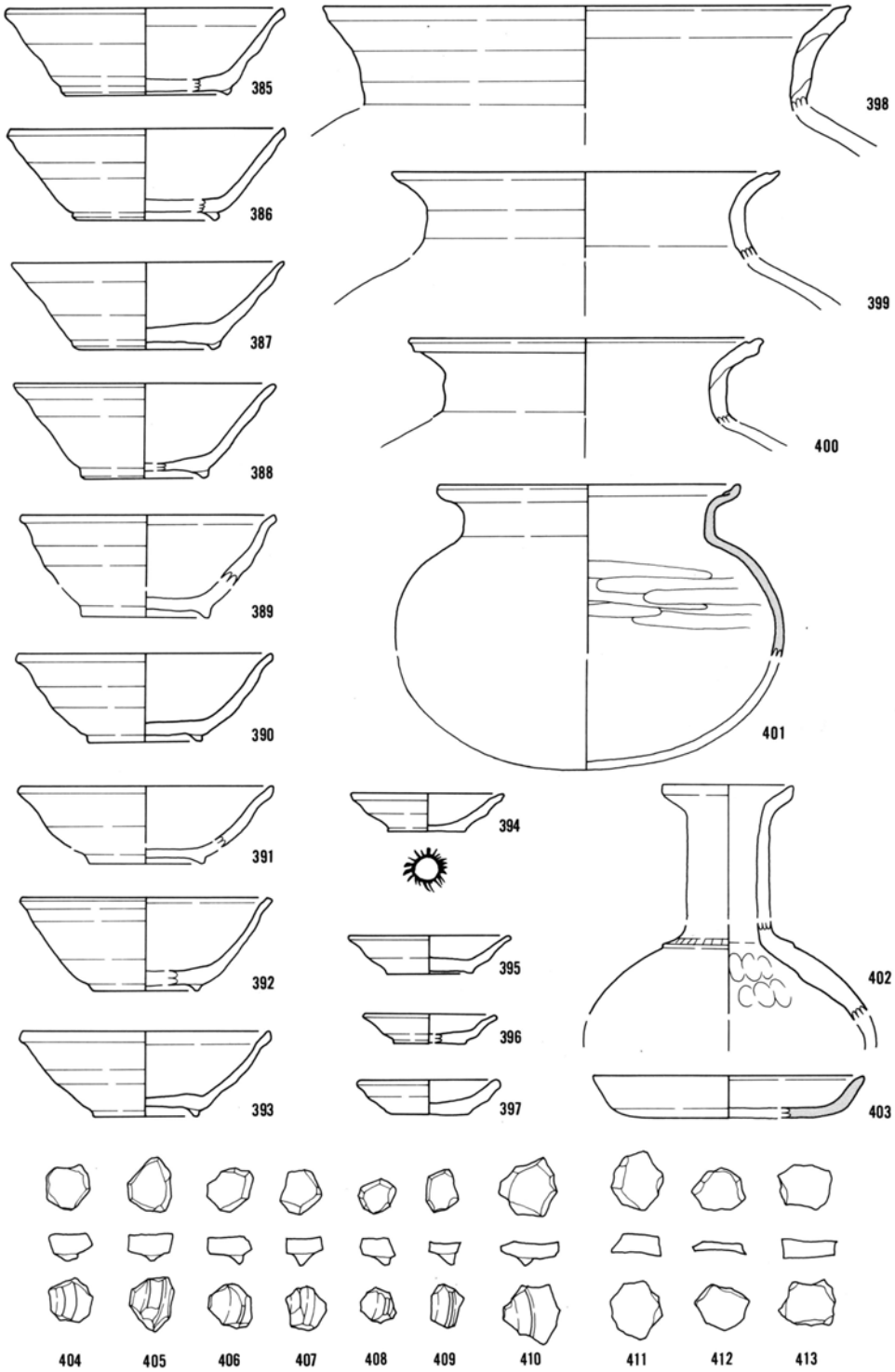

345
346
347
348
349
0
20cm

図版24　実　測　図（19）

ＳＤ２７　南北溝

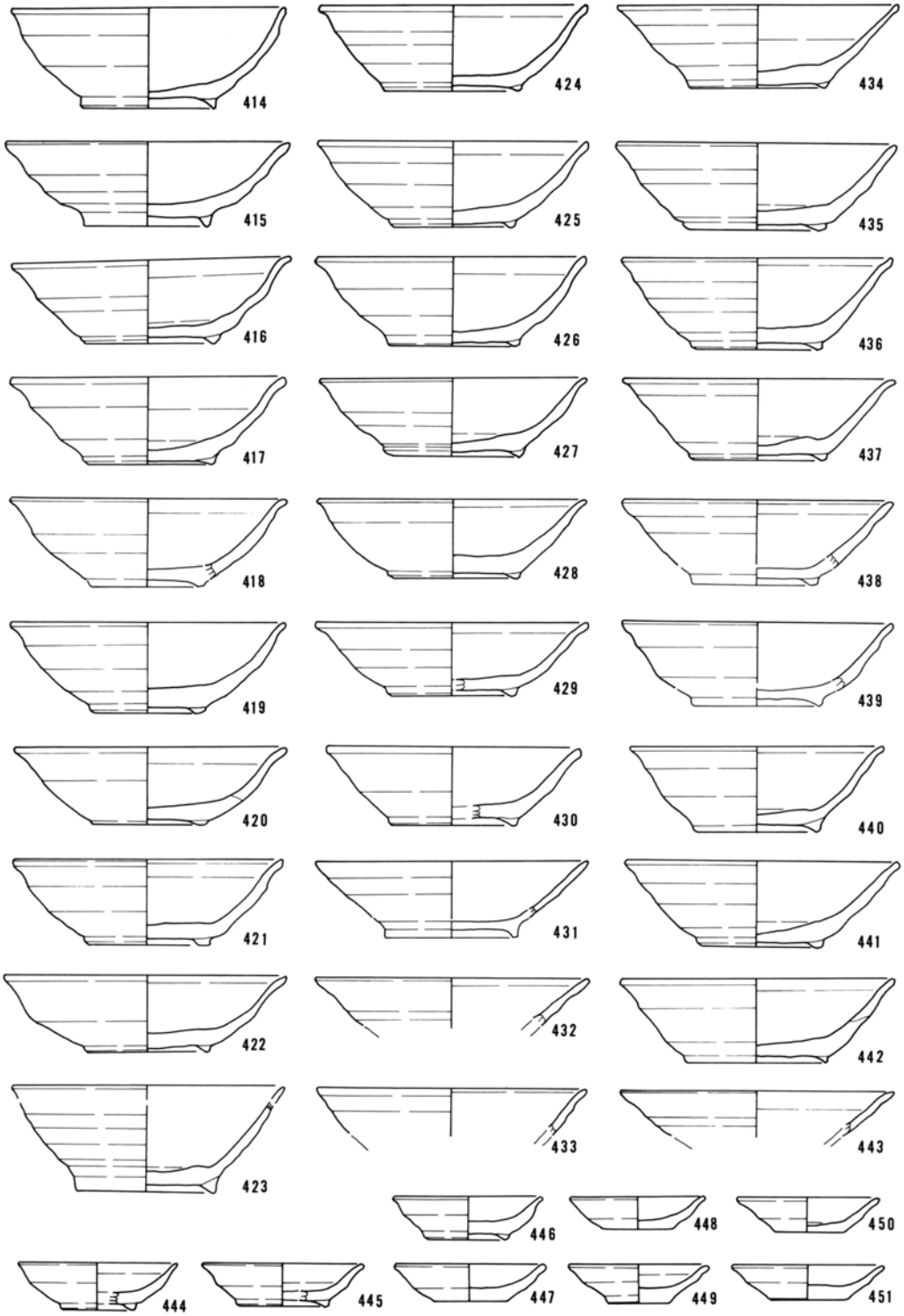


ＳＤ２７　東西溝

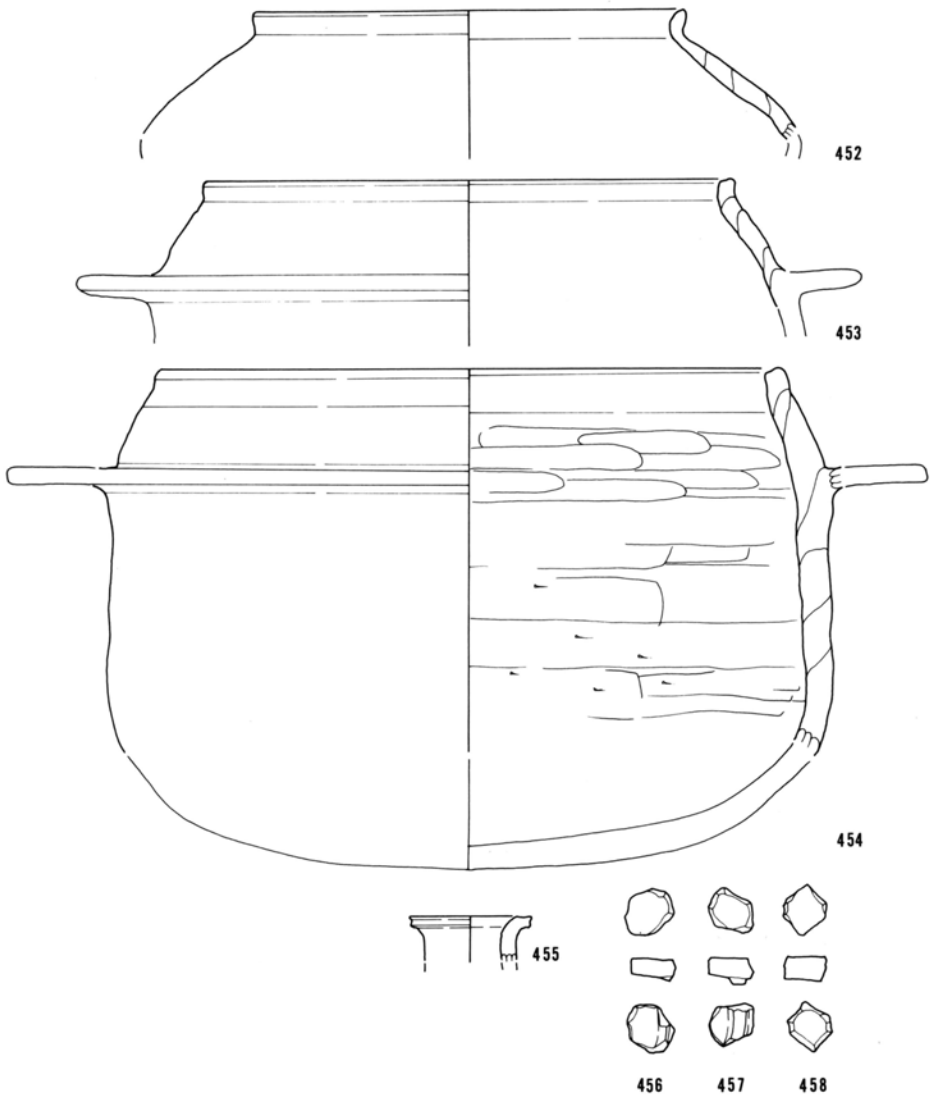

385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413

図版26　実　測　図（21）

ＳＤ４１

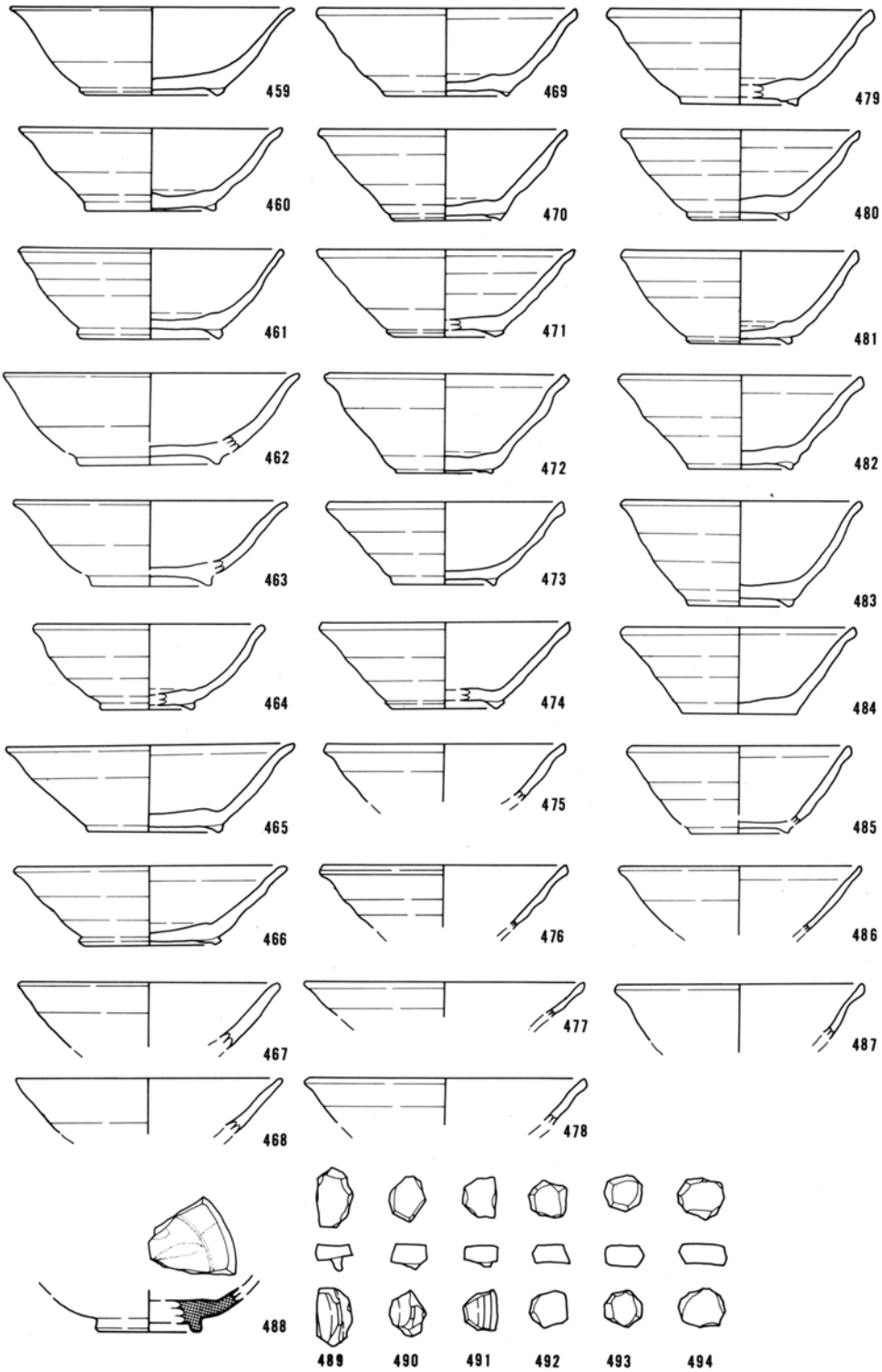


SD41

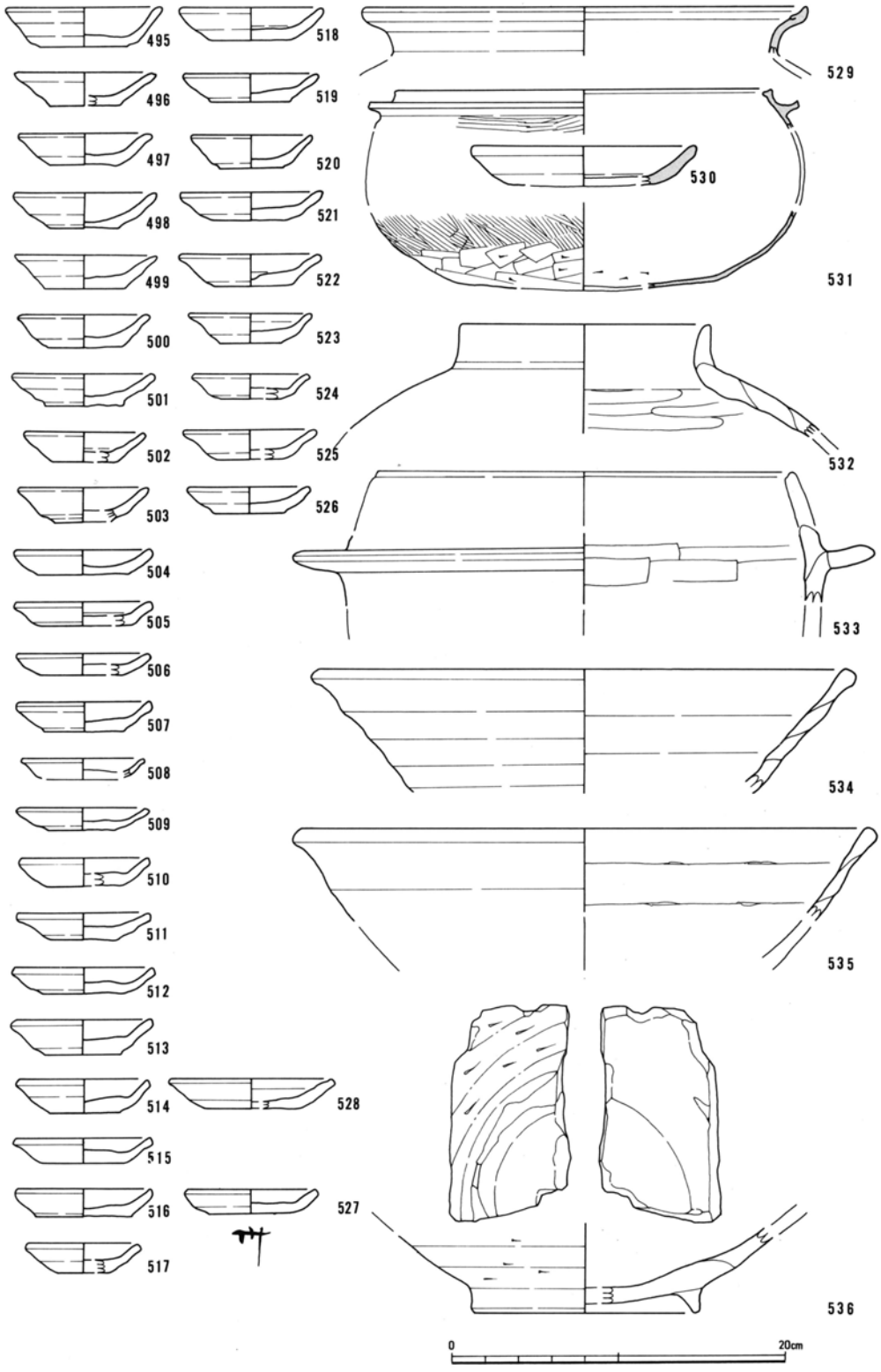


図版28　実　測　図（23）

ＳＤ４２

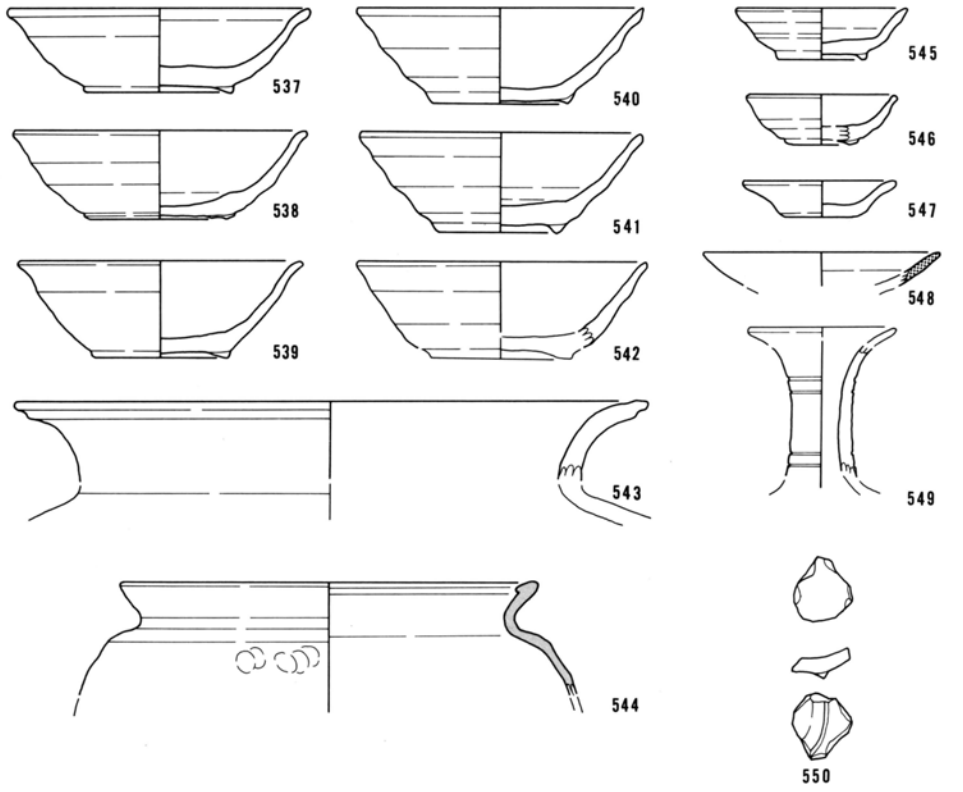


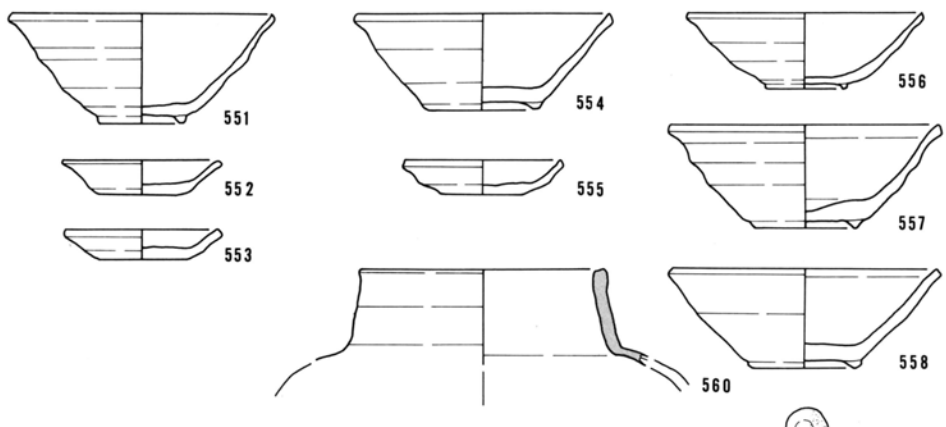
SD42


495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
0
20cm

図版30　実　測　図（25）

SX80





SX55－551～553
SX06－554・555
SX21－556
SX159－557
SX90－558・559
SX44－560

図版31　土田遺跡主要器種変遷図

図版32　61 調 査 区

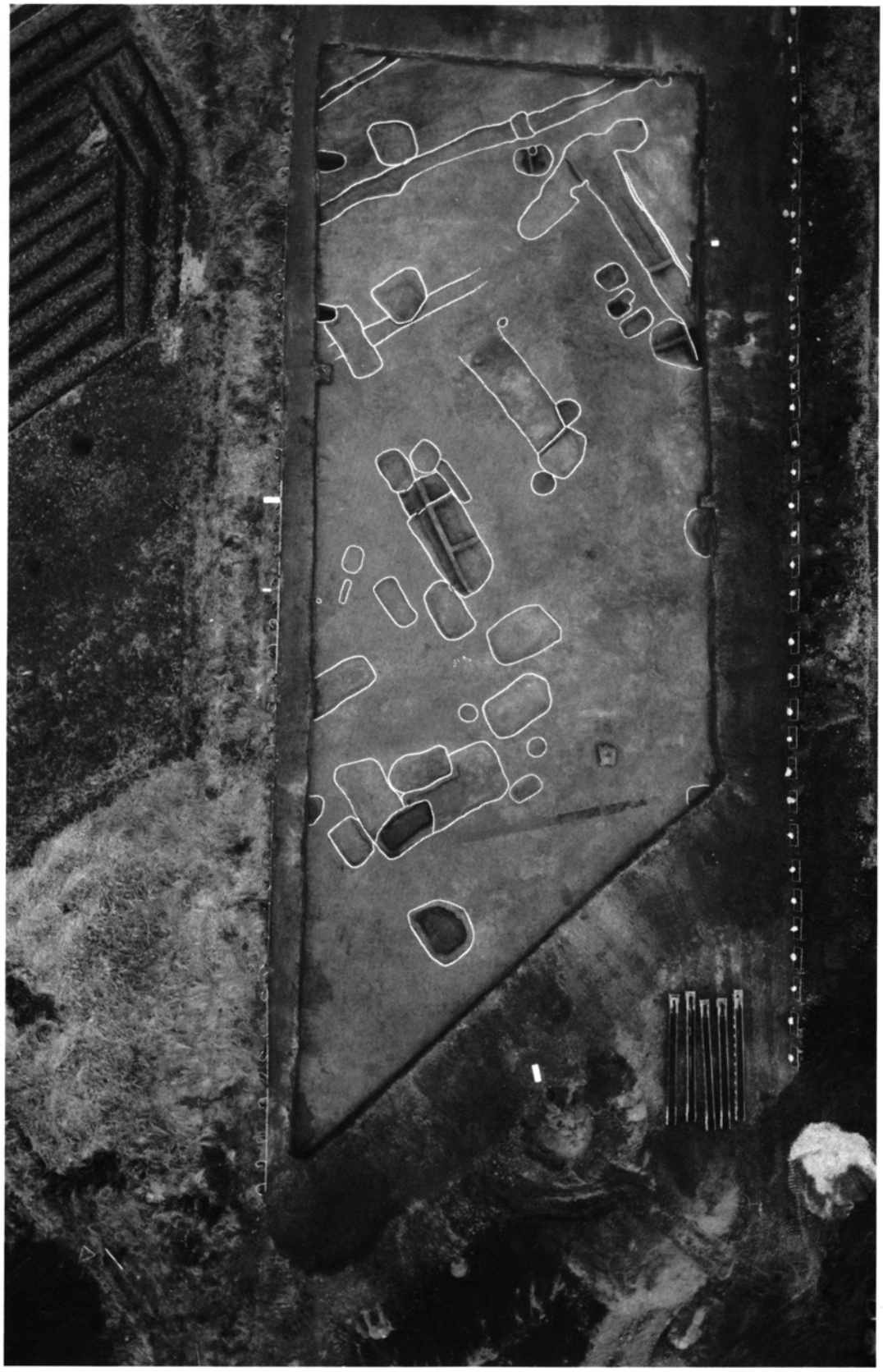
図版33　60C・60E区

図版34　59　A　区

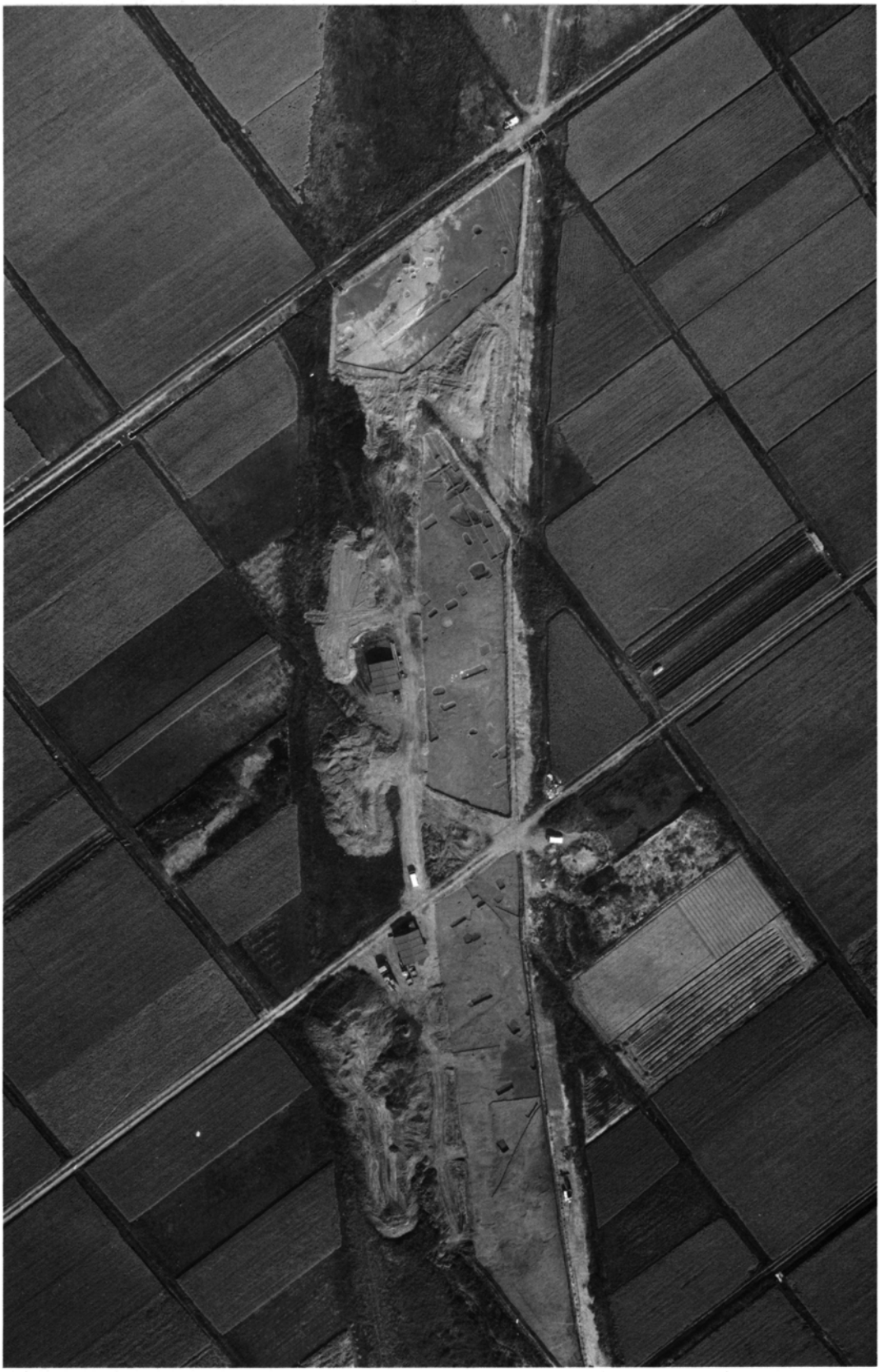
図版35　59B・C区

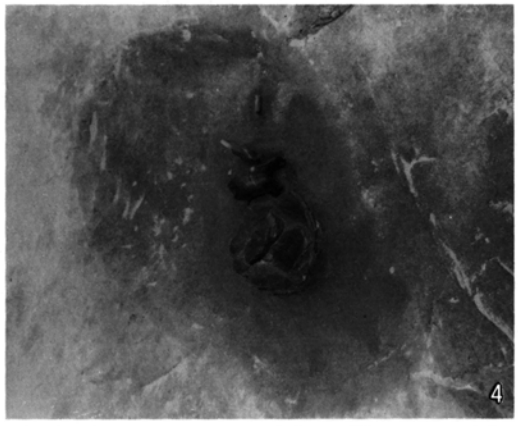
図版36　59　E　区

図版37　59　F　区



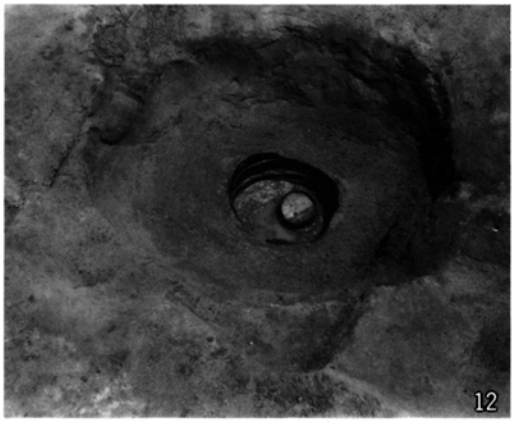
図版38　59D・59HI—59K区



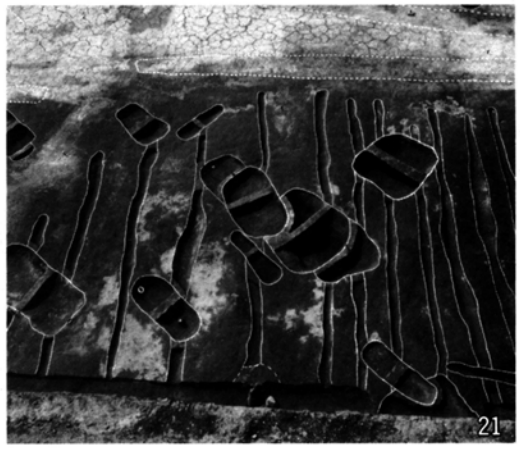


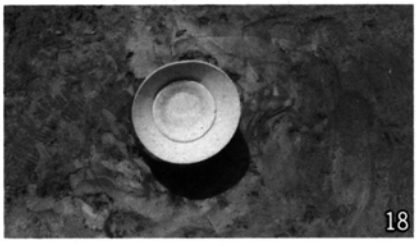
1　ＳＺ０５　　3　ＳＺ０８南溝　　5　ＳＺ０７・ＳＺ０８　　7　提瓶-29(ＳＺ１０)
2　ＳＺ０２・ＳＤ２７　　4　ＳＫ１１　　6　ＳＺ０７南溝　　8　ＳＺ０１東溝

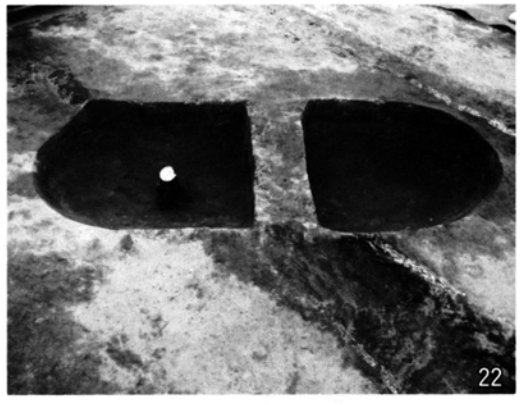
図版40　井　　戸



9　SE11
10　SE02
11　SE06
12　SE10
13　SE19
14　SE06
15　SE06

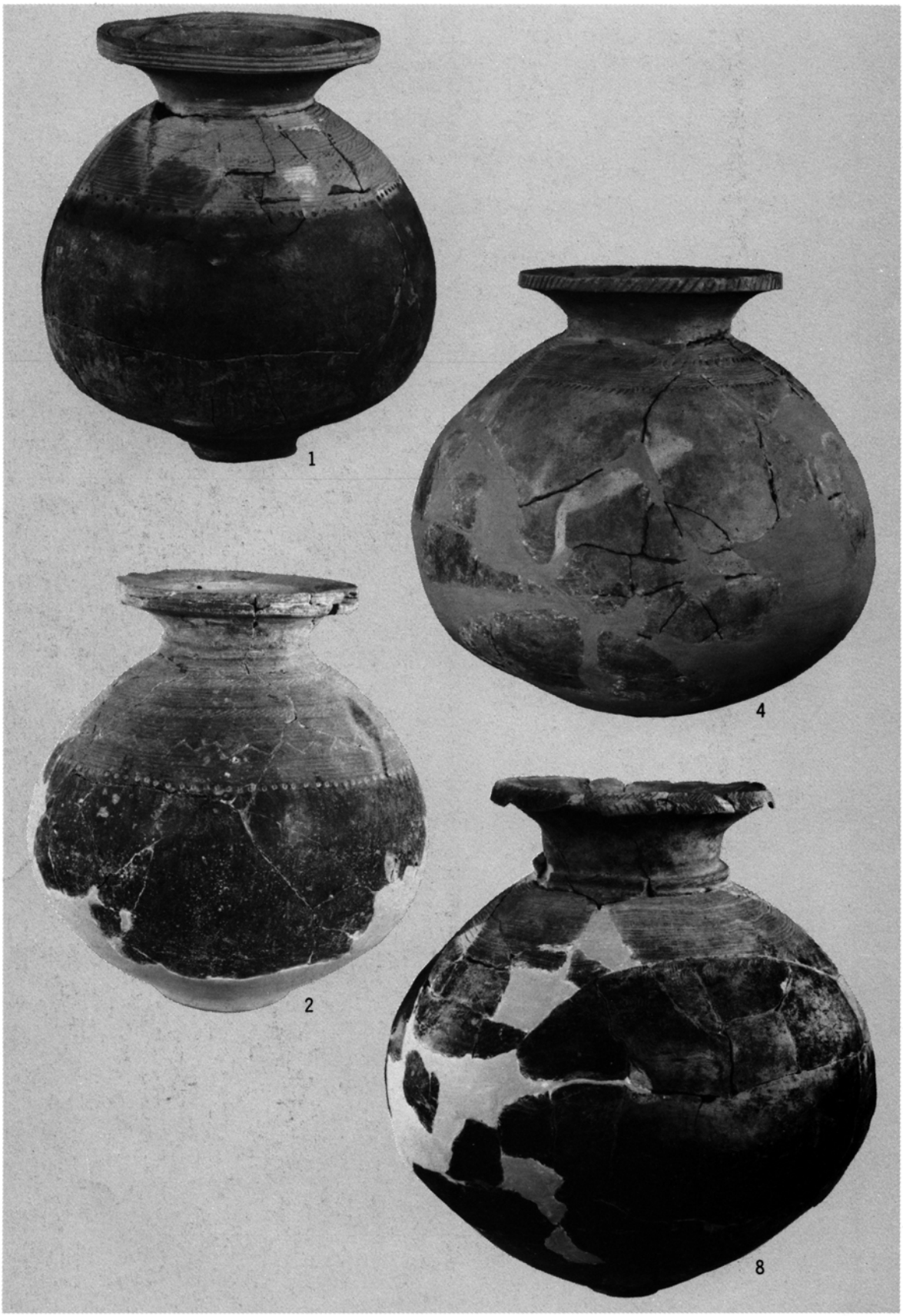


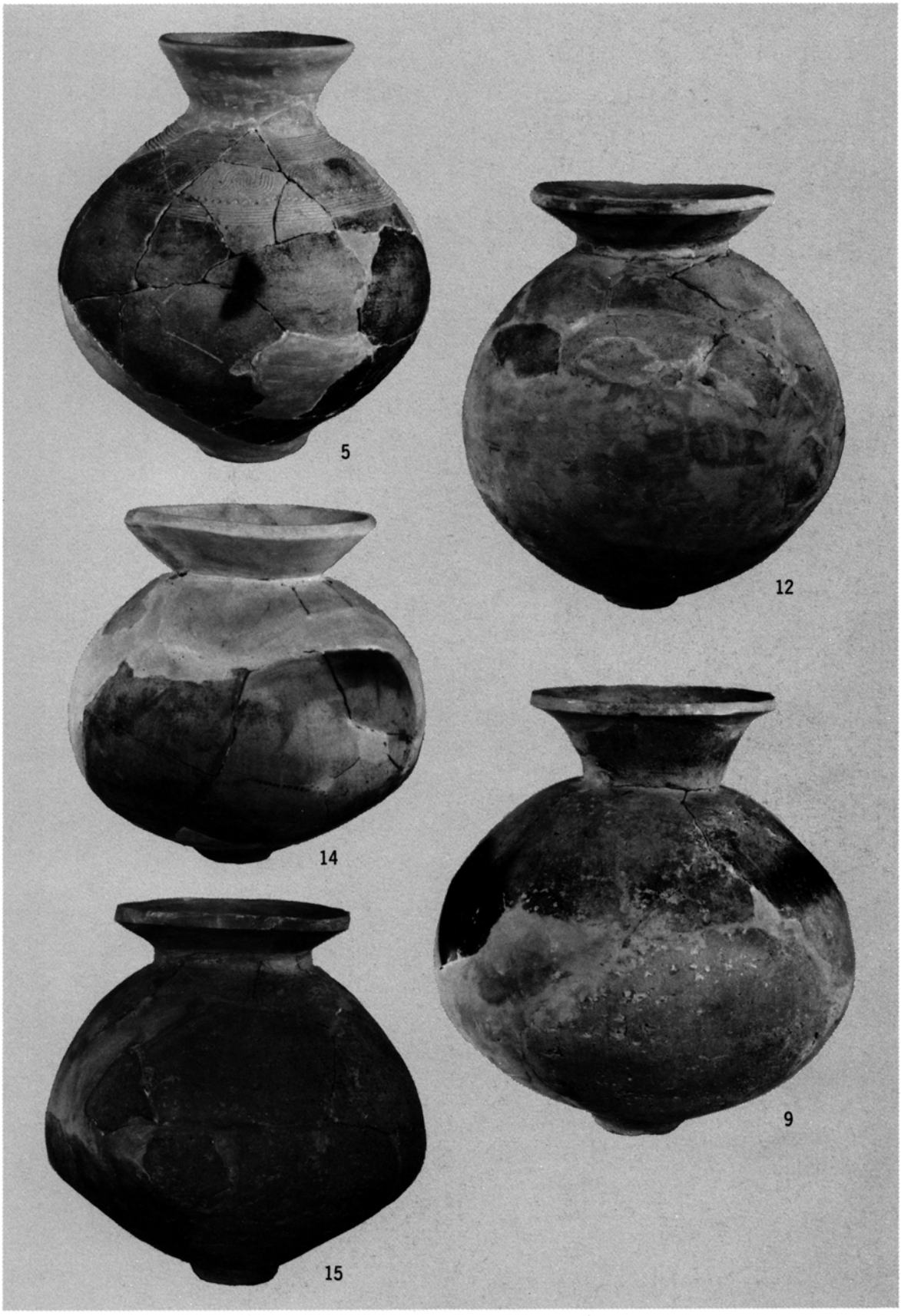




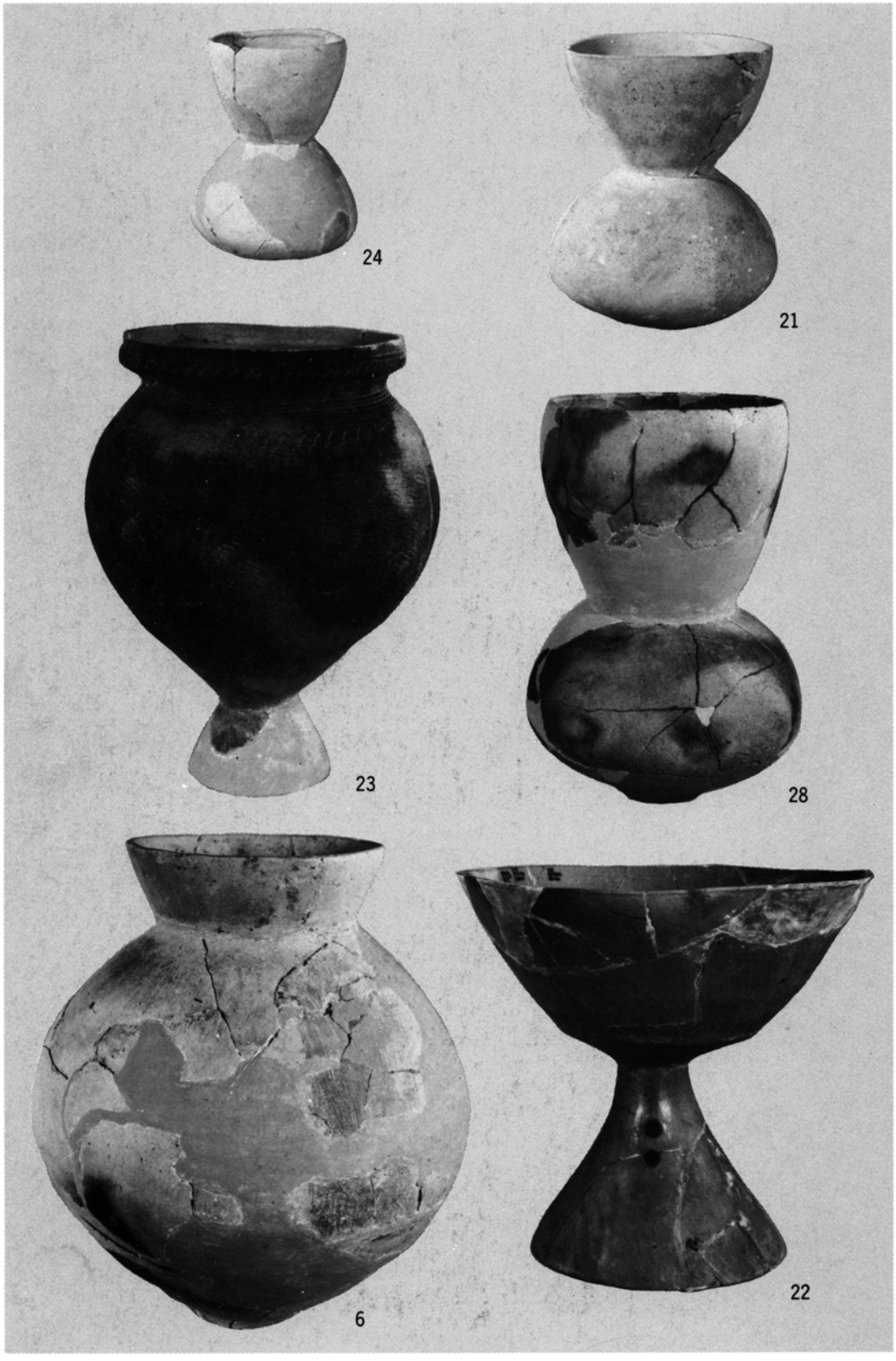
16　ＳＤ２７・ＳＸ８０　20　56Ｃ区(北から)
17　ＳＸ８０遺物集積　21　61調査区(南東から)
18　ＳＸ５５　22　ＳＸ２１
19　ＳＸ２８　23　ＳＸ３３～３８

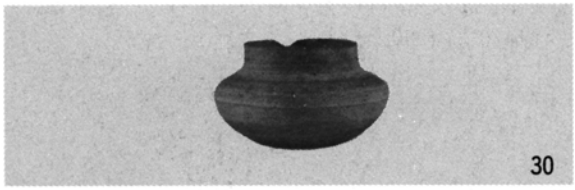
図版42　弥生土器（1）

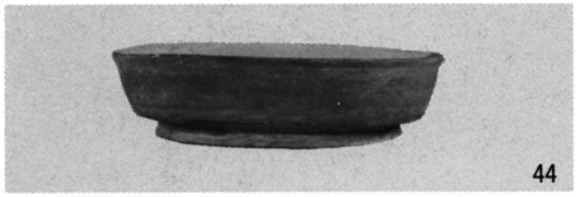


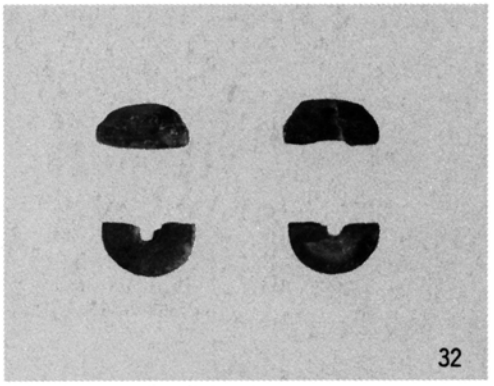

5
12
14
9
15

図版44　弥生土器（3）




30

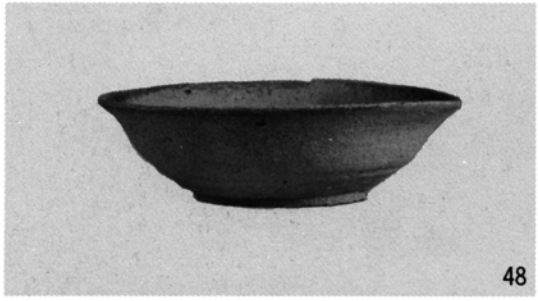

44

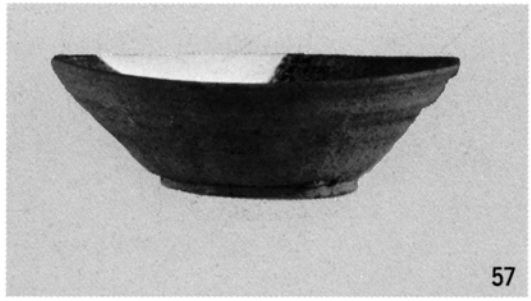

32

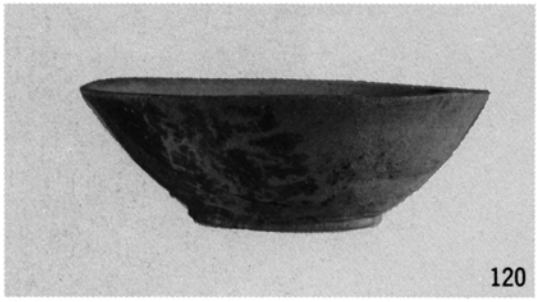
158

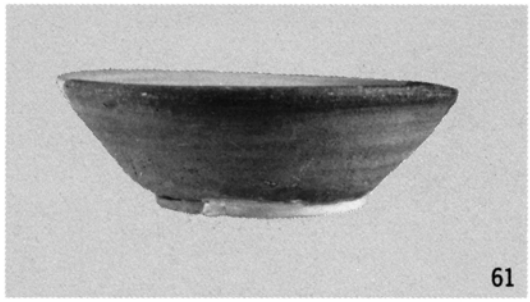
160

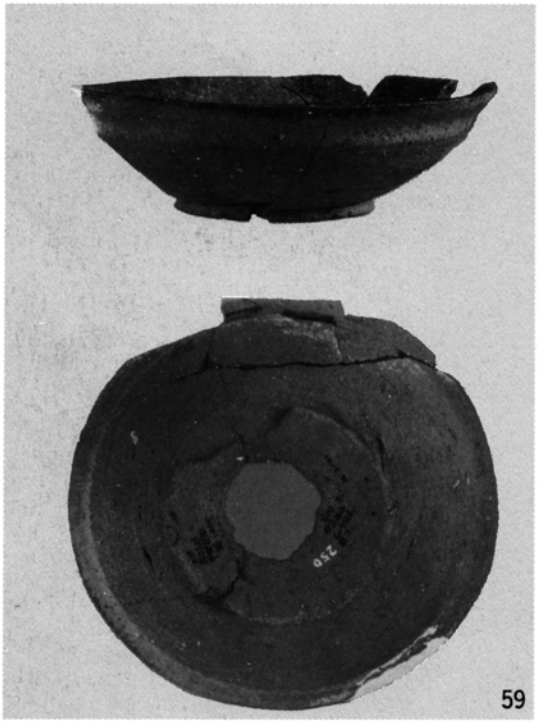
図版46　灰釉系陶器（１）

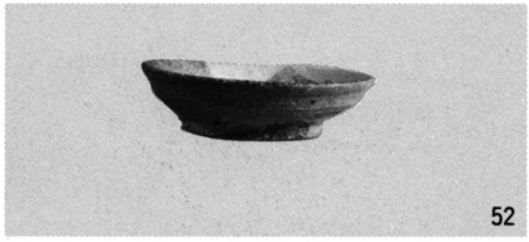

48

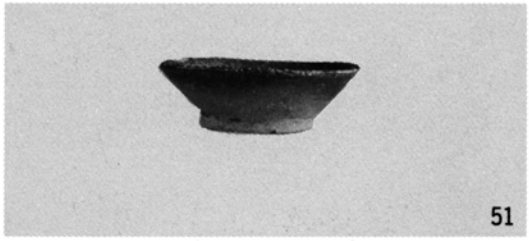

57


120

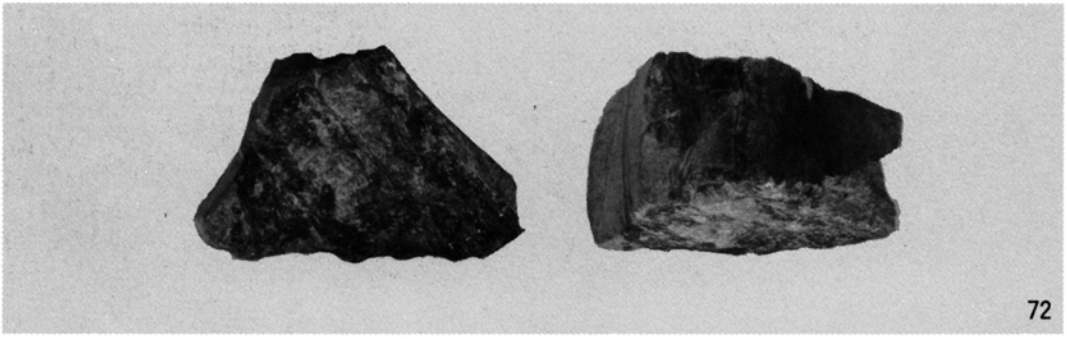

61

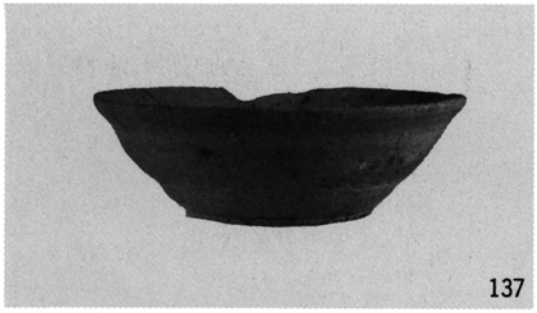

59

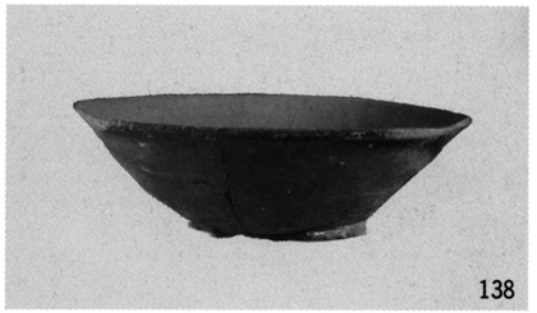

52

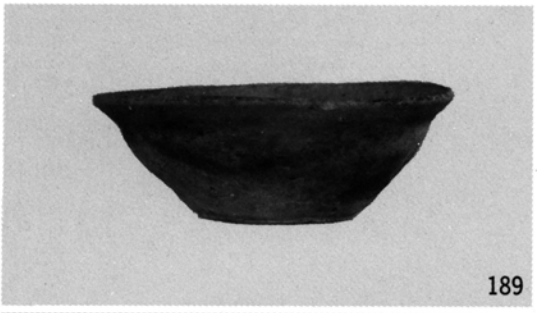

51

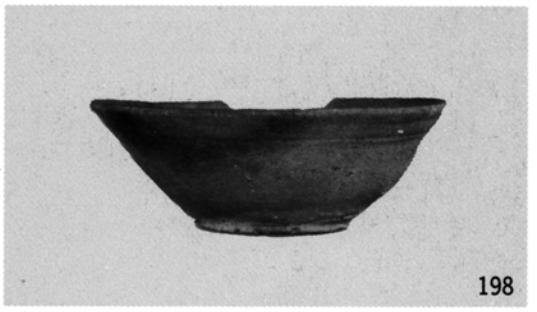
122


72

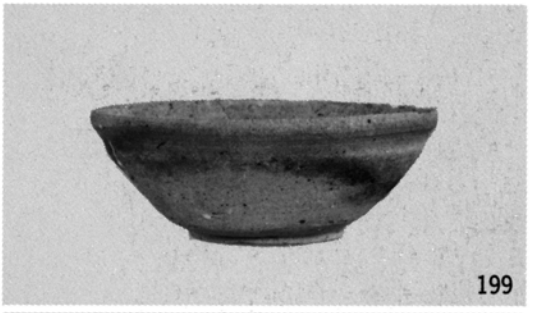

137


138


189

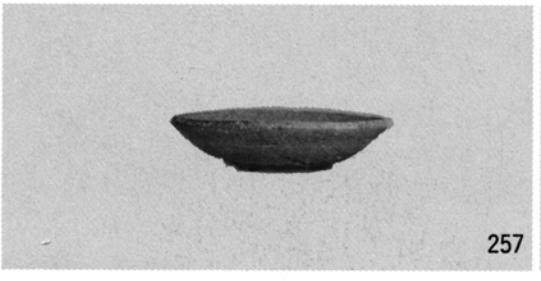

198

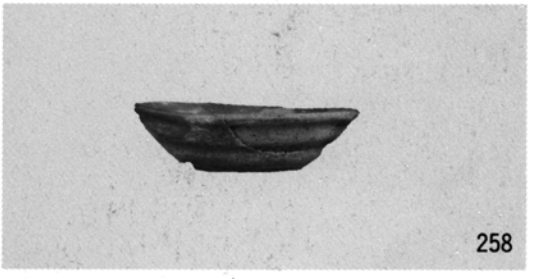
191


199

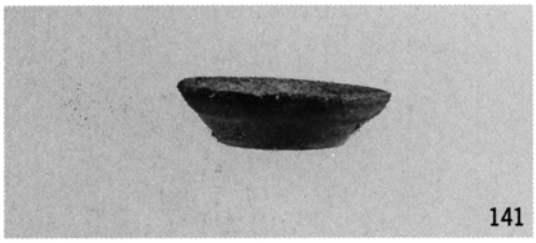
195

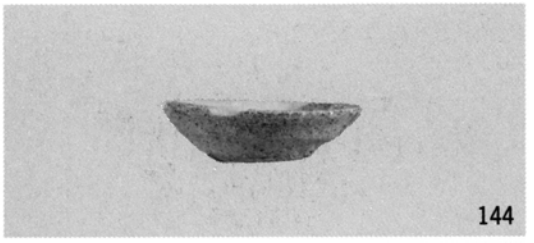
202

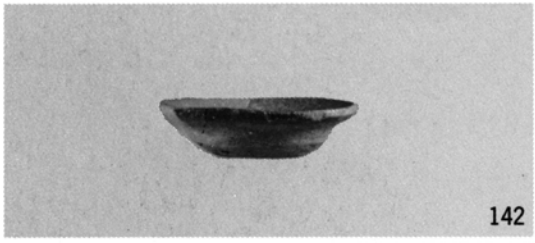

257

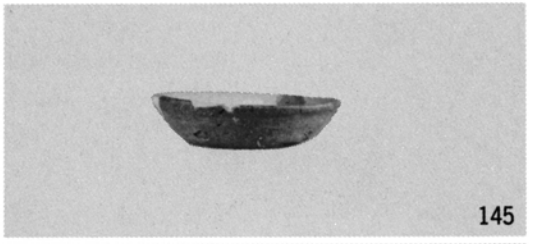

258

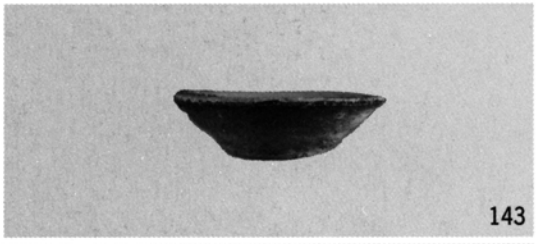
図版48　灰釉系陶器(３)・土師器

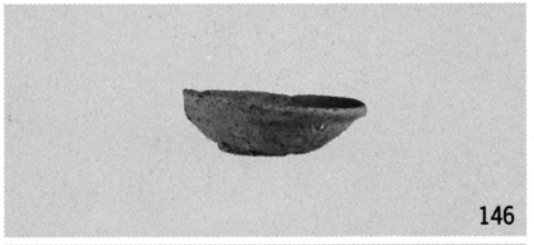

141

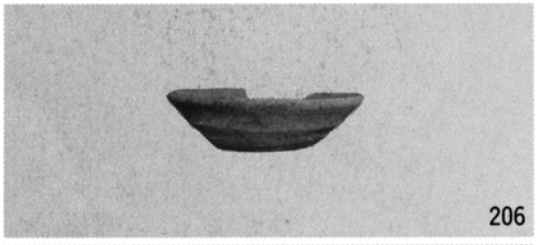

144

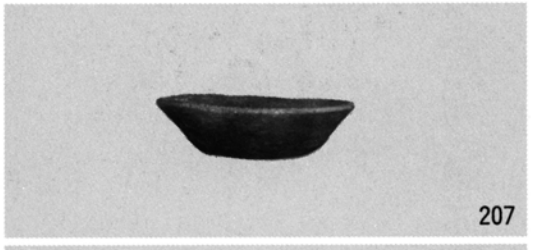

142

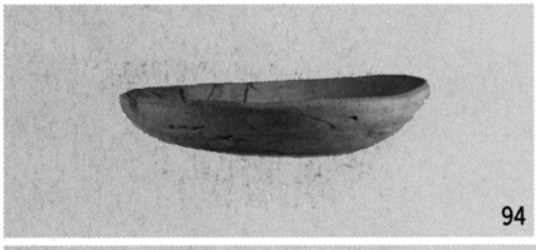

145

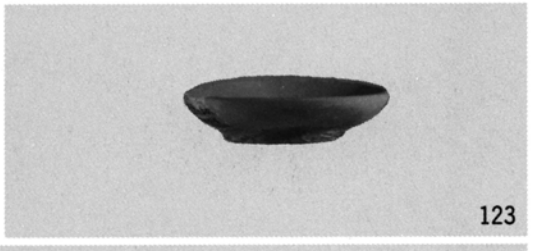

143


146


206

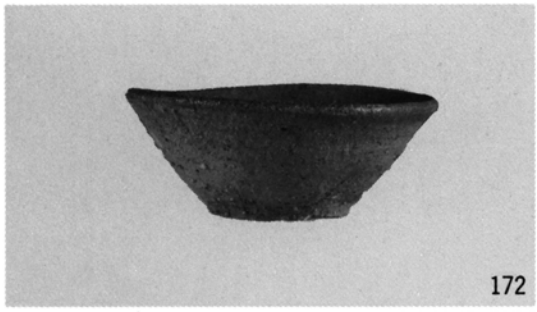

207

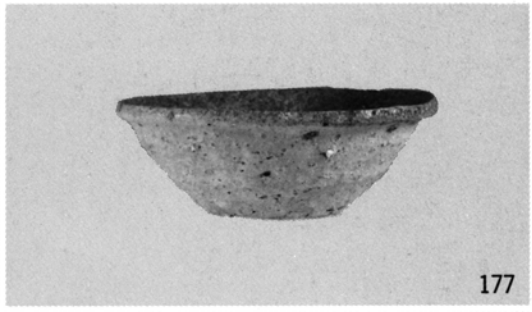

94

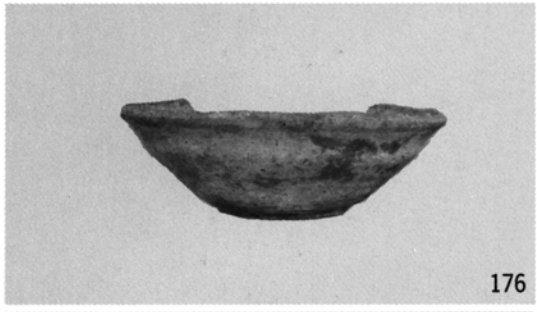

123

232

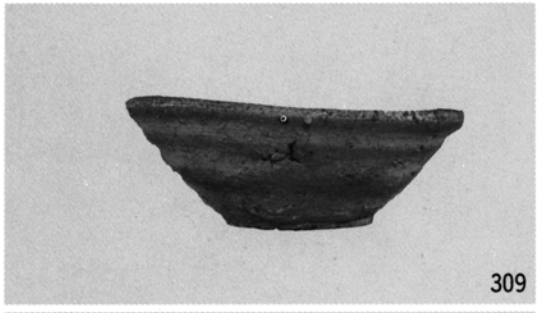
290


172

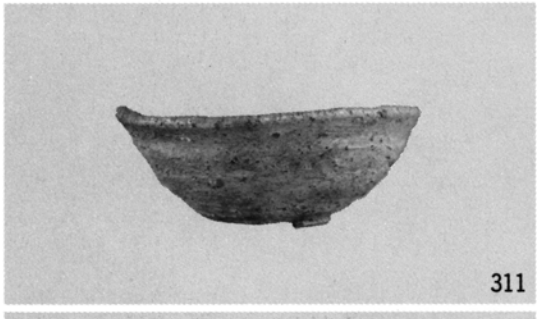

177


176

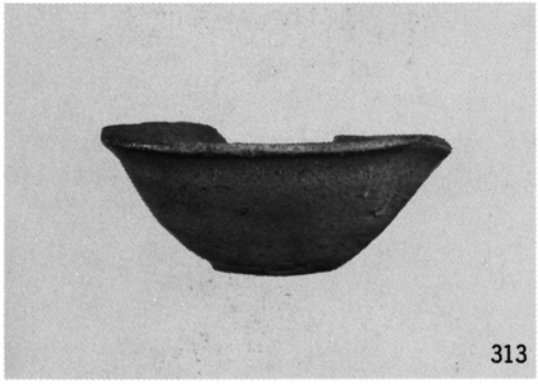
279


309

229

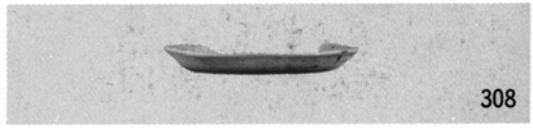

311

304

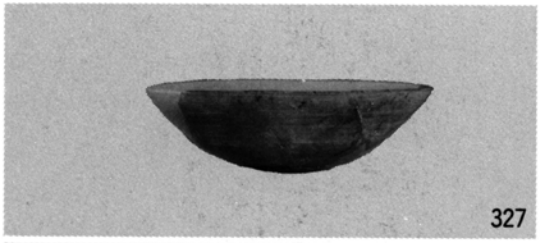

313

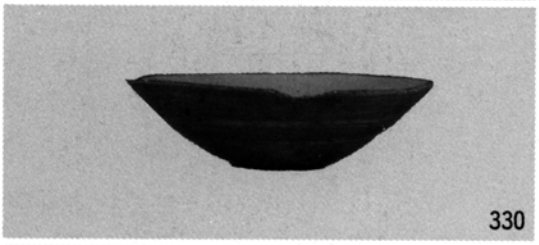
180

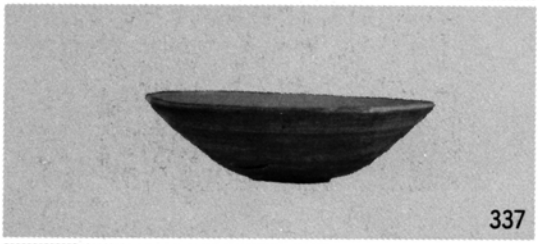
181

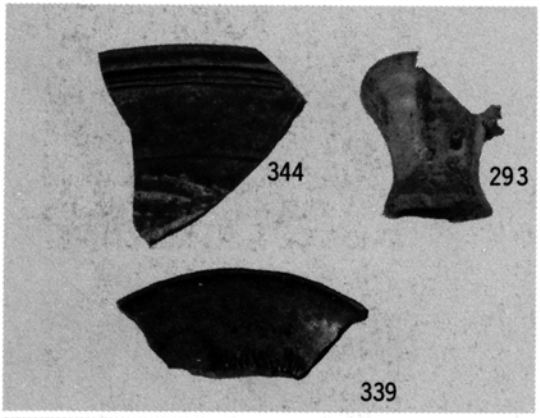

308

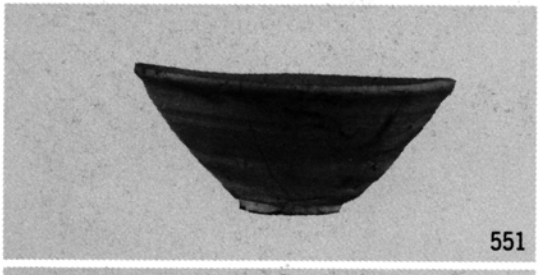
図版50　灰釉系陶器(5)・施釉陶器

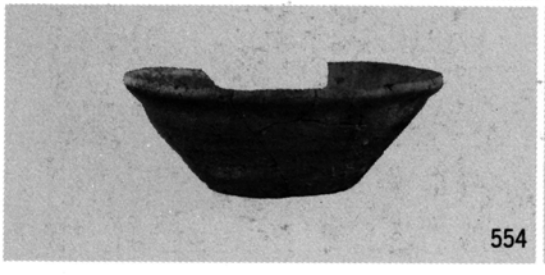

327


330

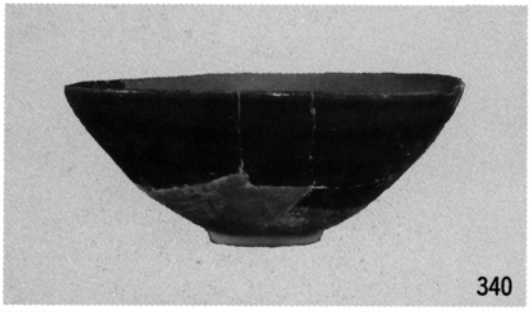

337

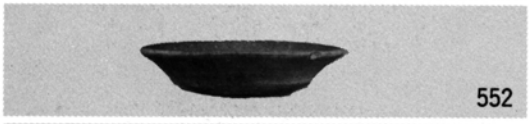

344
293
339


551

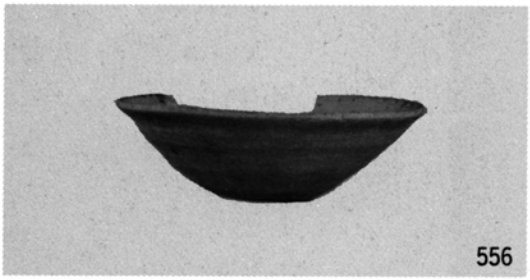

554

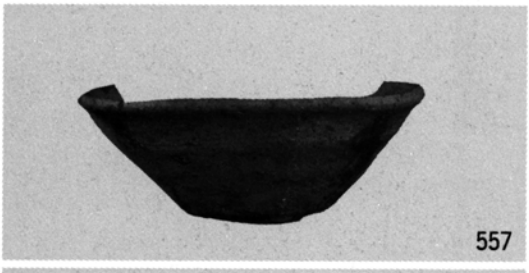
335

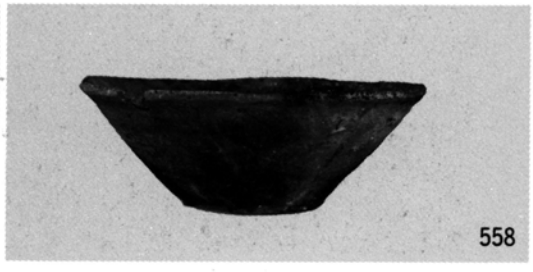

340

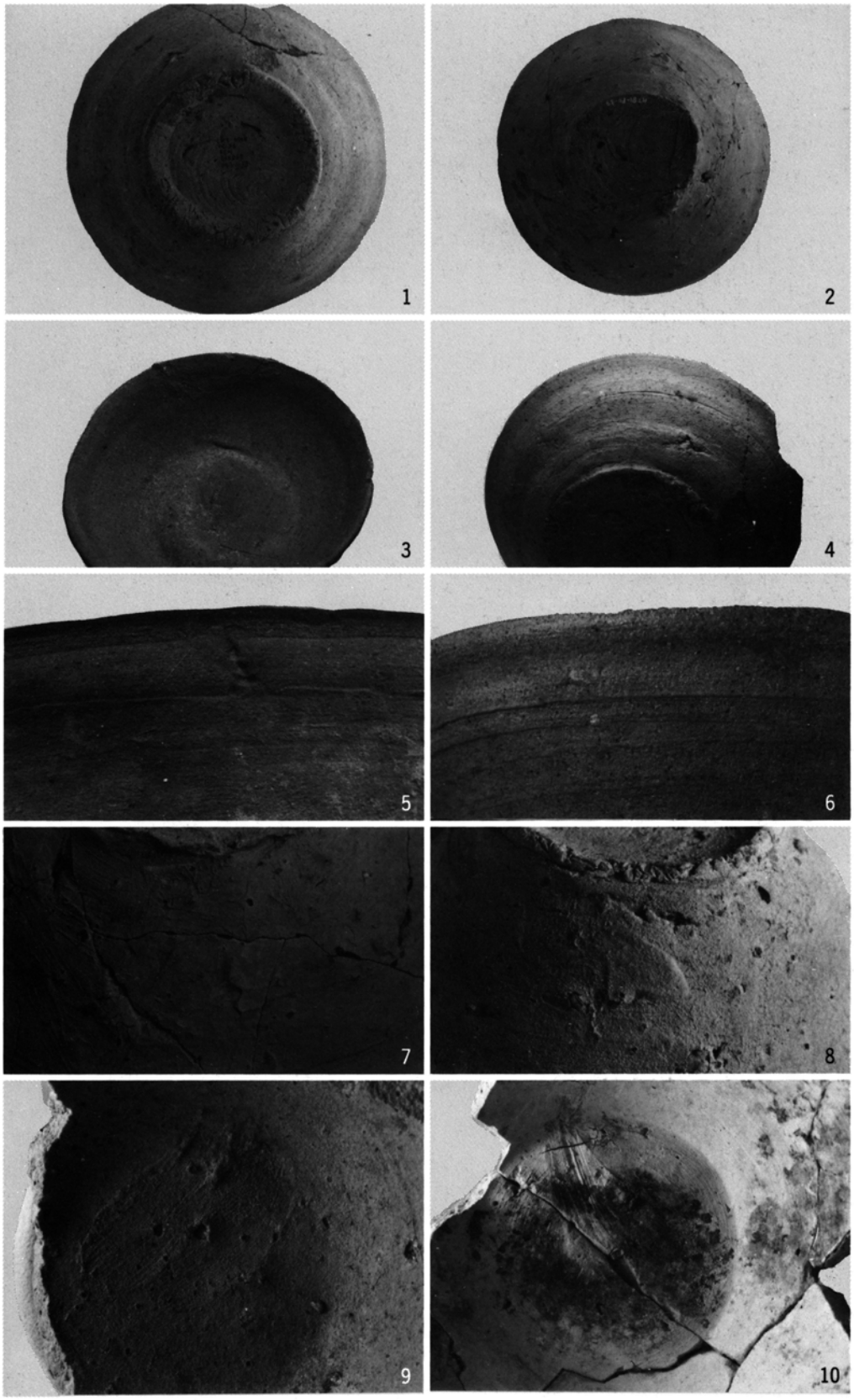

552

555


556

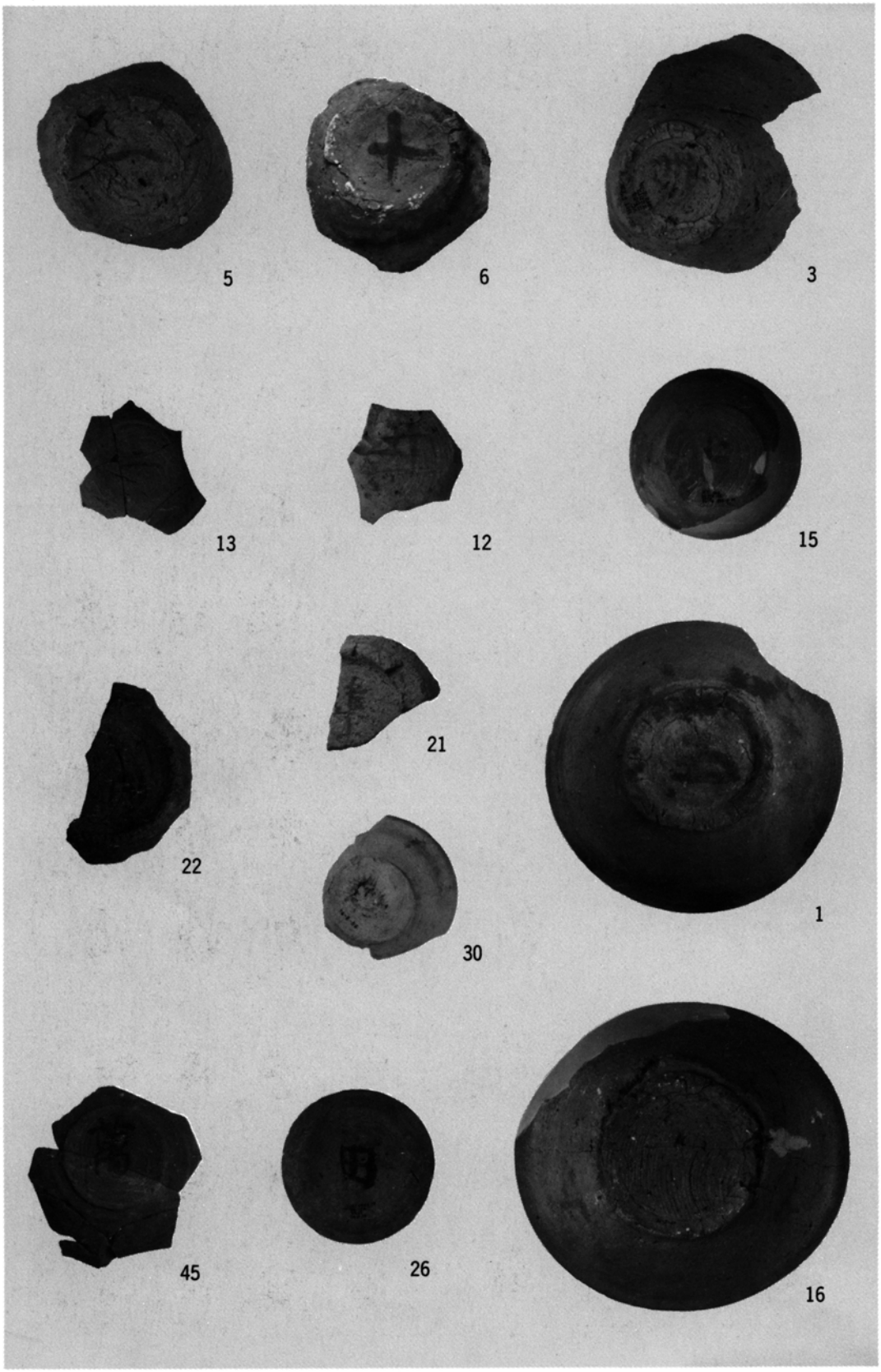

557


558

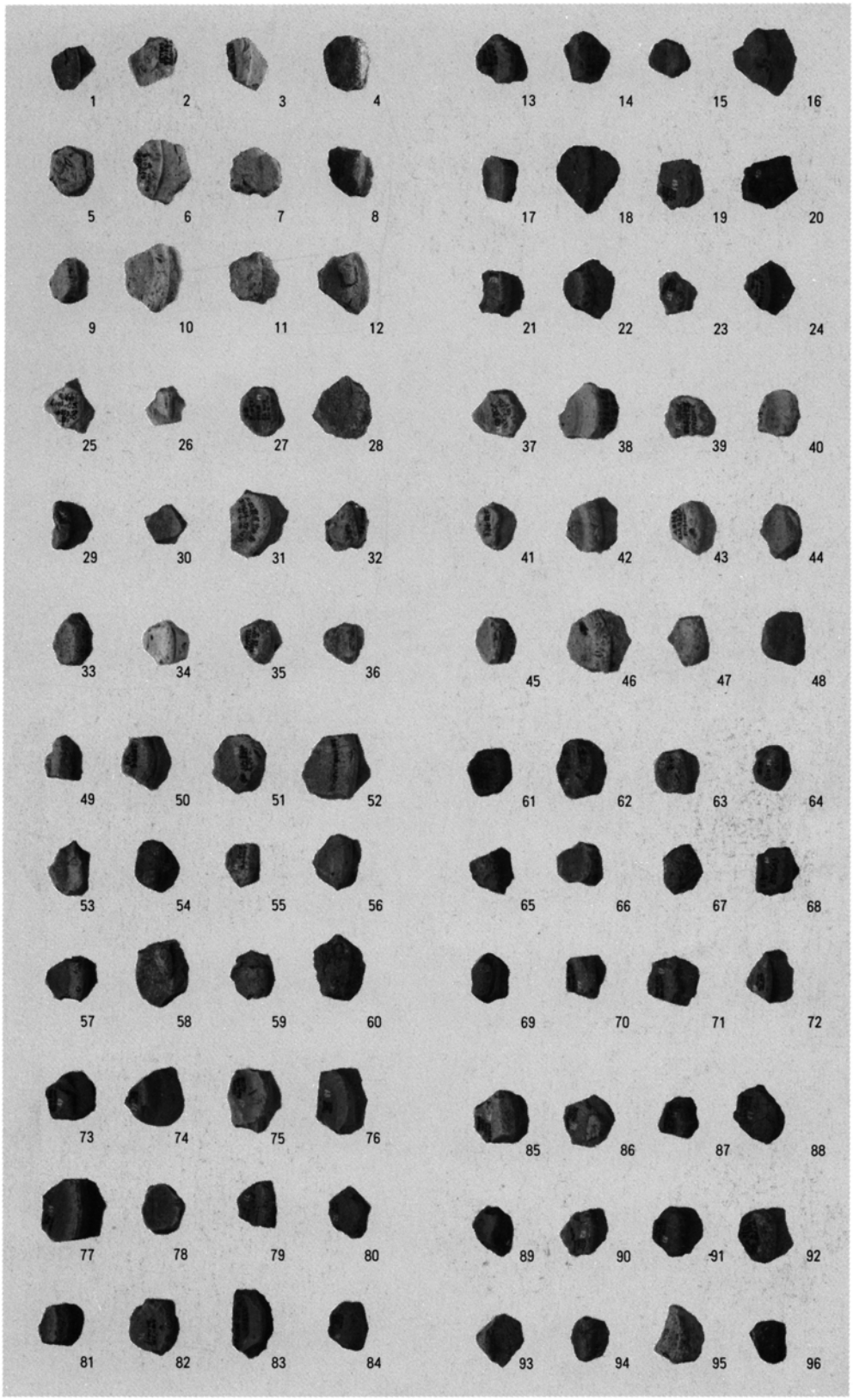


1　底部刻痕（137）　3　口縁部補修　5・6　ヨコナデ　9・10　指頭調整
2　高台剝落（220）　4　粘土紐積み上げ痕　7・8　泥漿化

図版52　墨書陶器

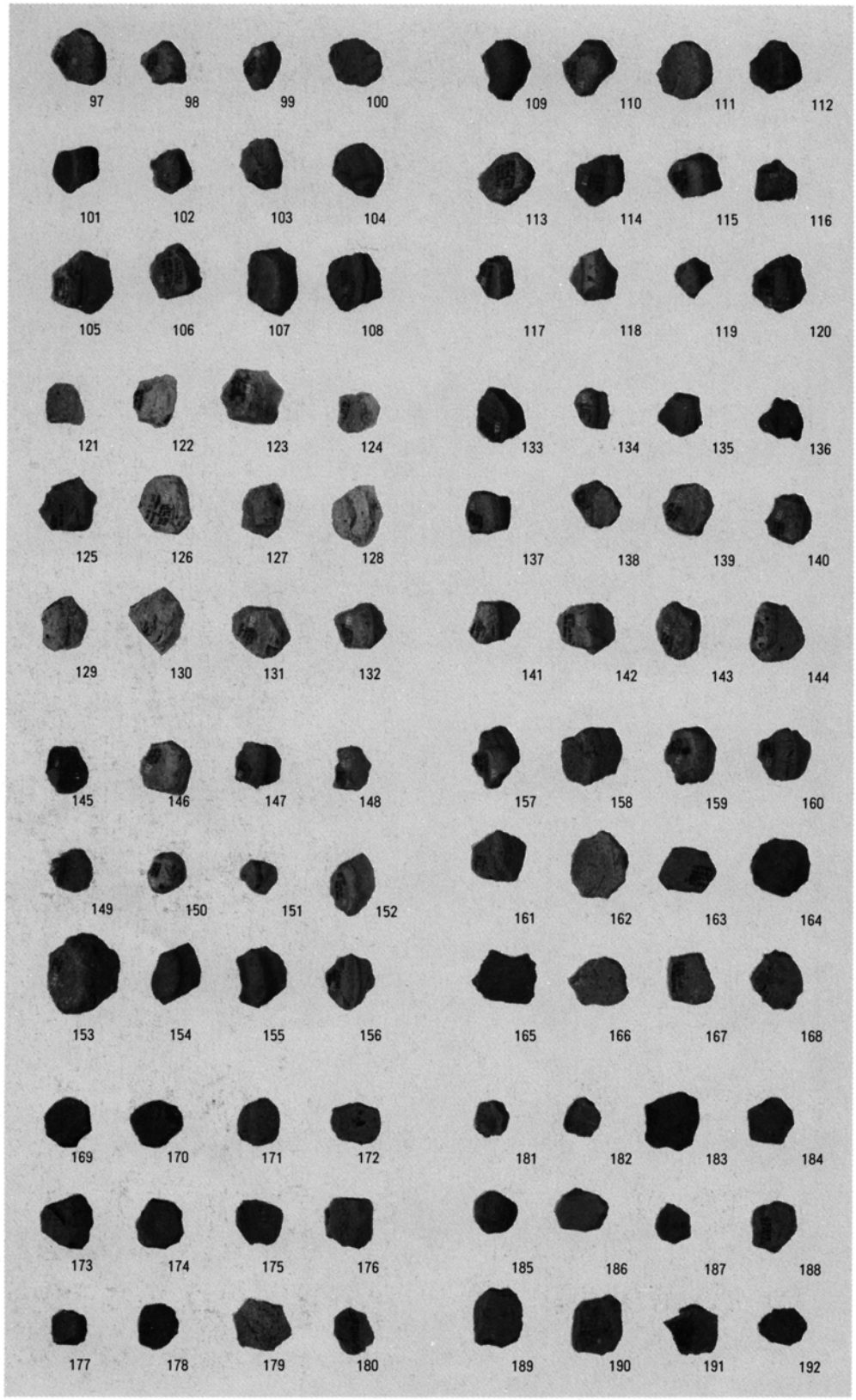


45（図版11）以外第31・33図（72・73頁）の番号を参照

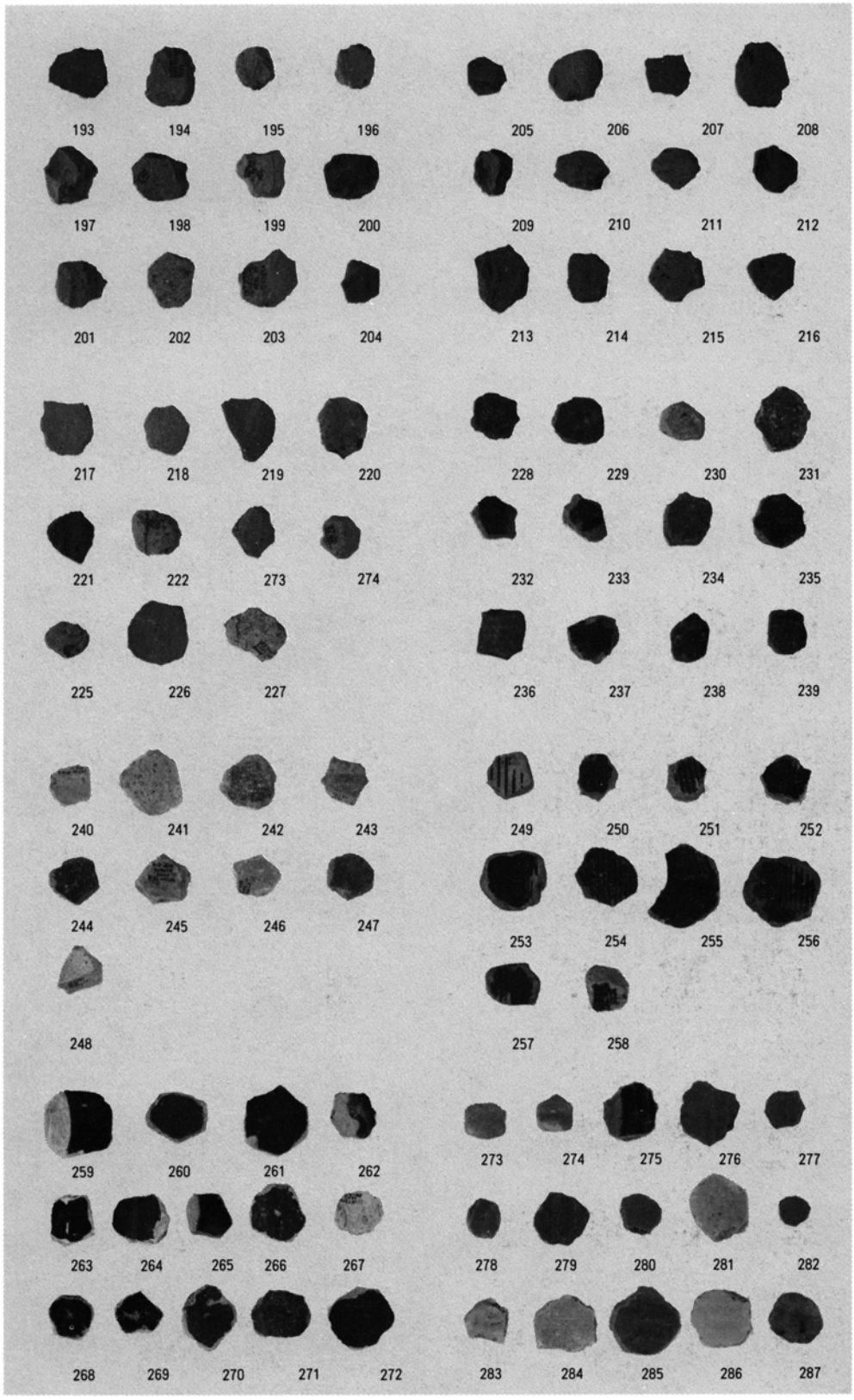

1
2
3
4
13
14
15
16
5
6
7
8
17
18
19
20
9
10
11
12
21
22
23
24
25
26
27
28
37
38
39
40
29
30
31
32
41
42
43
44
33
34
35
36
45
46
47
48
49
50
51
52
61
62
63
64
53
54
55
56
65
66
67
68
57
58
59
60
69
70
71
72
73
74
75
76
85
86
87
88
77
78
79
80
89
90
91
92
81
82
83
84
93
94
95
96

A₁　1～96

図版54　加工円盤（2）

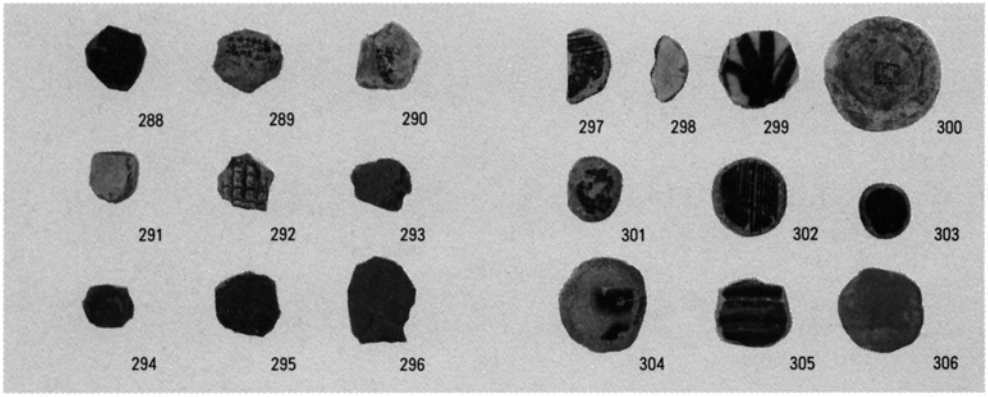


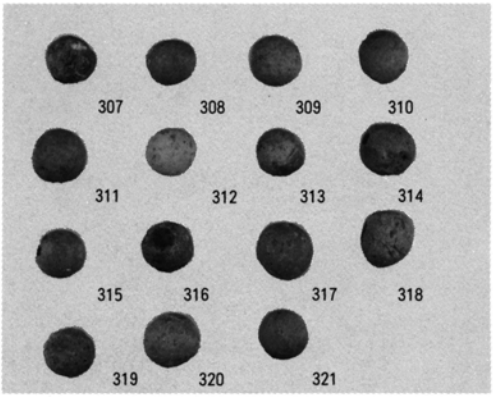
$A_1$97～160　$A_2$161～192

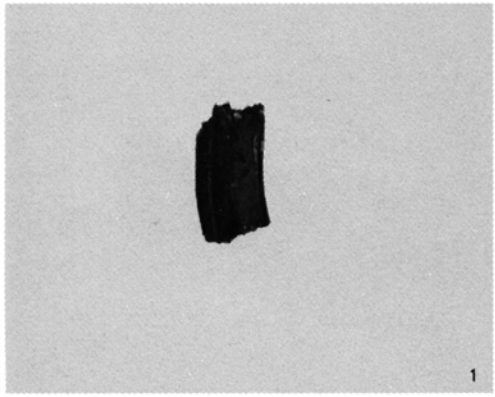


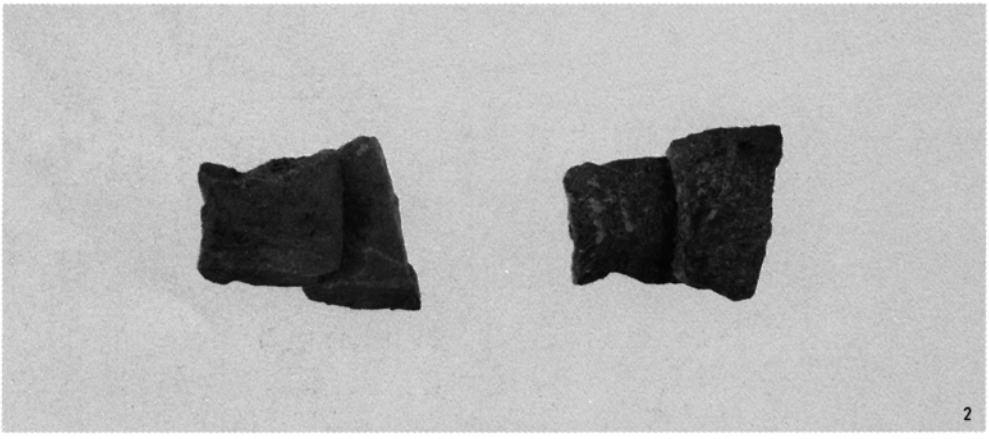
$A_2$193～227　B228～248　$C_1$249～287

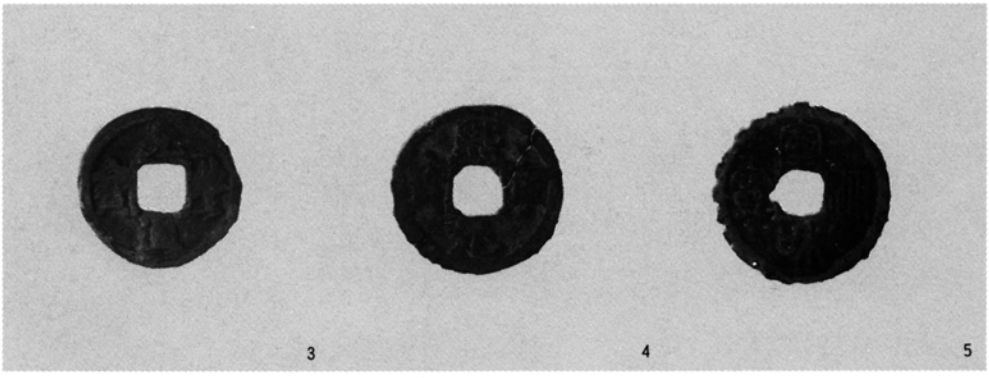
図版56　加工円盤（4）・その他の遺物











$C_1$288～296　　陶丸　307～321　　1　馬歯（59P区）　　3～5　銭貨（1：1）

$C_2$297～306　　2　玉縁付丸瓦

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

土　田　遺　跡

1987年3月31日

編　集
発　行　　財団法人
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　　西濃印刷株式会社